第三種郵便物認可

女學世界

第二巻第十四號

口繪




三井呉服店
東京日本橋駿河町
大阪高麗橋三丁目
東京電話本局 特五二五、一二一七 一八六〇、二二二二
大阪電話東 特四七三 一六五〇
新柄流行の反物品々階上階下にのこらず陳列し尚休息室をも取設け候間ゆる〳〵御遊覧奉願上候
地方よりの御注文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送可仕候尚注文案内書も有之候

女學世界 第貳卷第拾四號 目次



二八水は
肌を白くきめをよくし
●にきび●あせも●ひ
び●すべて肌のあれ、
おしろい下に用ゐて尤
もよし又芳香馥郁とし
て貴嬢紳士の愛すべき佳品なり
登録商標
花王石鹸
12
本品縮圖
中瓶一本拾五錢
花王石鹸
品質善良と衛生に經濟を旨として製煉したる佳品なり
東京日本橋區馬喰町二丁目
發賣本舖
長瀬富郎
（電話特浪花三番）

小春



武内桂舟氏筆

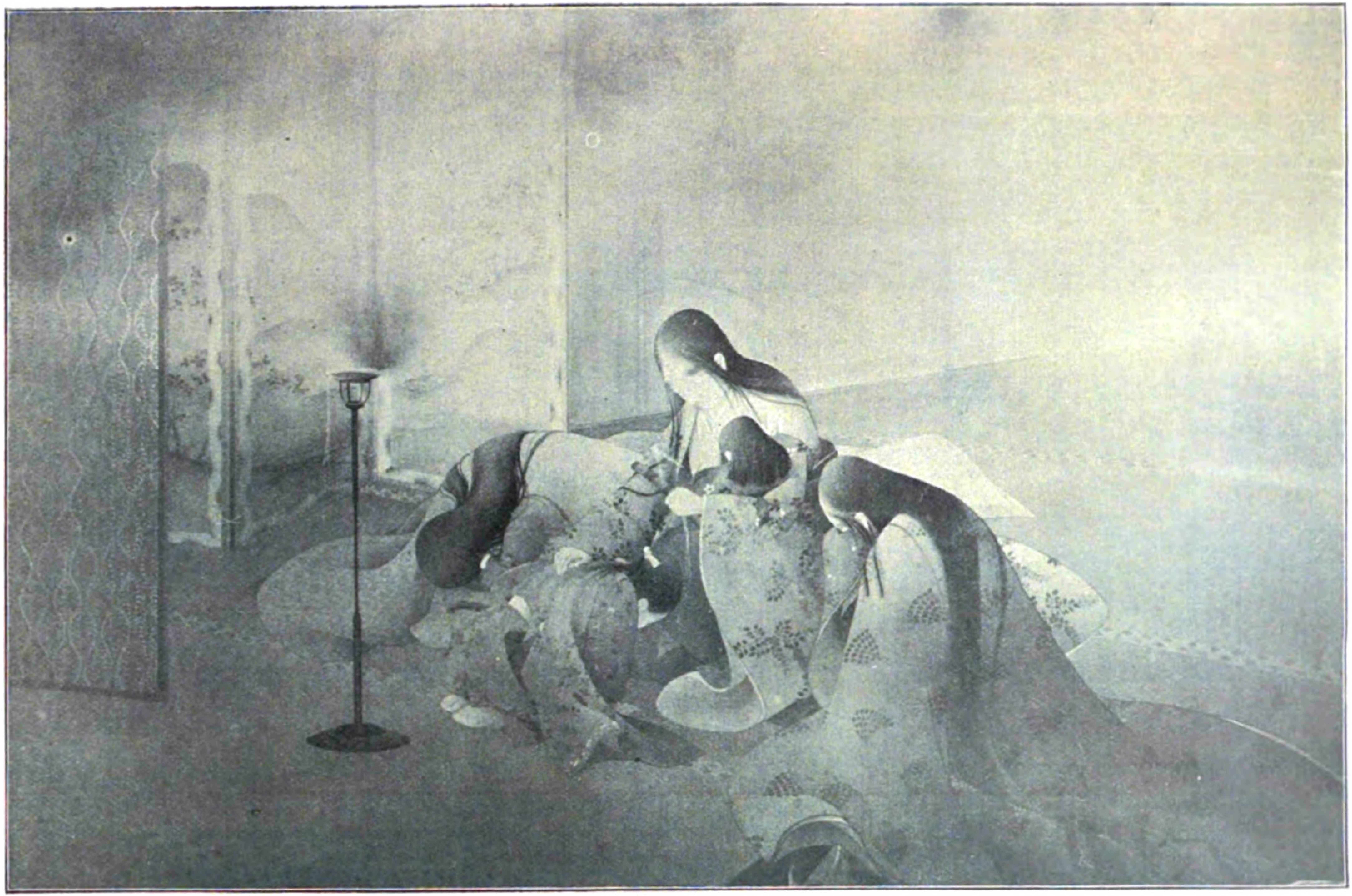
小川一眞製

家鶏



川端玉章翁筆

落城



尾竹竹坡氏筆

細川忠興夫人自刃の圖

雉



小林呉嶠氏筆

見よ　金科玉條　見よ

文學士 大町桂月先生著

續學生訓

（製本既成）

全壹册
洋裝上製袖珍
紙二百五十頁
正價廿五錢
郵稅四錢

青年學生諸子の友となりて、學藝上、實行上、鄕導し、忠告し、訓戒するもの、學生訓是なり、續學生訓出でゝ、更に一の益友增したり、言ふ所氣が利きて穩當、文趣味ありて雄健、一讀たゞ終り易きを惜む、苟も志ある者の机上、この書を缺くべからず。

文學士 大町桂月君著
●學生訓（六版）
●全壹册洋裝上製袖珍美本
●正價金貳拾錢郵稅四錢

管學應君著
●成功要錄
●全壹册四六判上製金字入
●正價金拾八錢郵稅金四錢

文學士 大町桂月君著
●道德實踐法
●全壹册洋裝菊判並製
●正價金貳拾錢郵稅金四錢

管學應君著
●言行要錄
●全壹册第六版上製金字入
●正價金三拾錢郵稅金六錢

（甲の一）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

婚禮つのくみ

下田歌子先生外諸大家序文題辭口繪圖式數多
●禮節家關葦雄先生閱武居碩三先生著
●當世婚姻一切の事を記す
風に 價金八拾五錢郵稅金六錢
●發賣元 東京市神田區表神保町 東京堂●

送呈

理學應用光線學上の一大發明により撮影せるパノラマ寫眞五百有餘種の目錄表並に特許商會台則御一報次第贈呈

弊店發賣の自働パノラマ覗鏡は附添人を要せずして自働的に日々五十錢乃至二圓の收入を得詳細は御照會あれ

特許商會

東京日本橋區鎧橋際
電話 浪花 二番

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵劵封入にて御照會あれ

安房國瀧村千倉
川名助次郎

最新特許
安全かみそり



此剃刀は携帶に便利使用に安全特に小供の頭を剃るに至極妙也御愛購の程願上候

定價一圓
送料二錢

◎類似品あり○○○○○○○○三劍商店賣品に御注意(革砥及刷毛付)

發賣元 東京日本橋區本石町一丁目 三劍商會

毎月二回十日發行

秀才文壇

毎號名家の雄篇と秀才名媛の傑作は全篇に充滿し興趣津々たり
毎號寫眞口繪數葉入
定價一冊拾錢六冊前金五十七錢郵稅一冊一錢宛郵劵代用諸す一割增
賣捌 東京堂外全國書店

東京小石川指ヶ谷町百卅三
文光堂發行

(甲の二)

外交變遷事情

櫻癡 福地源一郎先生稿

長崎三百年間

（製本既成）

全壹冊 洋裝 紙數三百餘頁● 正價金四拾五錢 郵税金六錢

（甲の四）

本書目次

●長崎市の由來●南蠻船渡來●天主教傳道幷に秀吉公が之を禁止せられたる事情●徳川家康公の對外所置●家康公の貿易奬勵●家康公の禁教事由●鎖國斷行の事情●鎖國令以前に於ける長崎●元祿以來貿易歳額遞減の事情●外國事件攘斥令●對外方針異動の事情●幕閣依遞彷徨の事情●條約締結の概略●長崎往時組織其他數十項

長崎は歐洲文明を日本に輸入したる最先の門戶にして又實に絶へず外國文明を輸入する通路なりき。長崎出身にして特に幕末外交の局に當りて文書に鞅掌せる福地櫻痴先生其歷吏を編し歐洲文明輸入の次第變遷を叙したるものを本書とす其有益にして多くの趣味に富む事知るべし玆に概目を掲けて讀書社會に之を推薦す請ふ愛讀あれ

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

暹羅國王と其王后



暹羅國王チユラロオンコルン一世及王后殿下

伊太利王の宮殿



伊太利國ヴェニス府に在る國君の宮殿

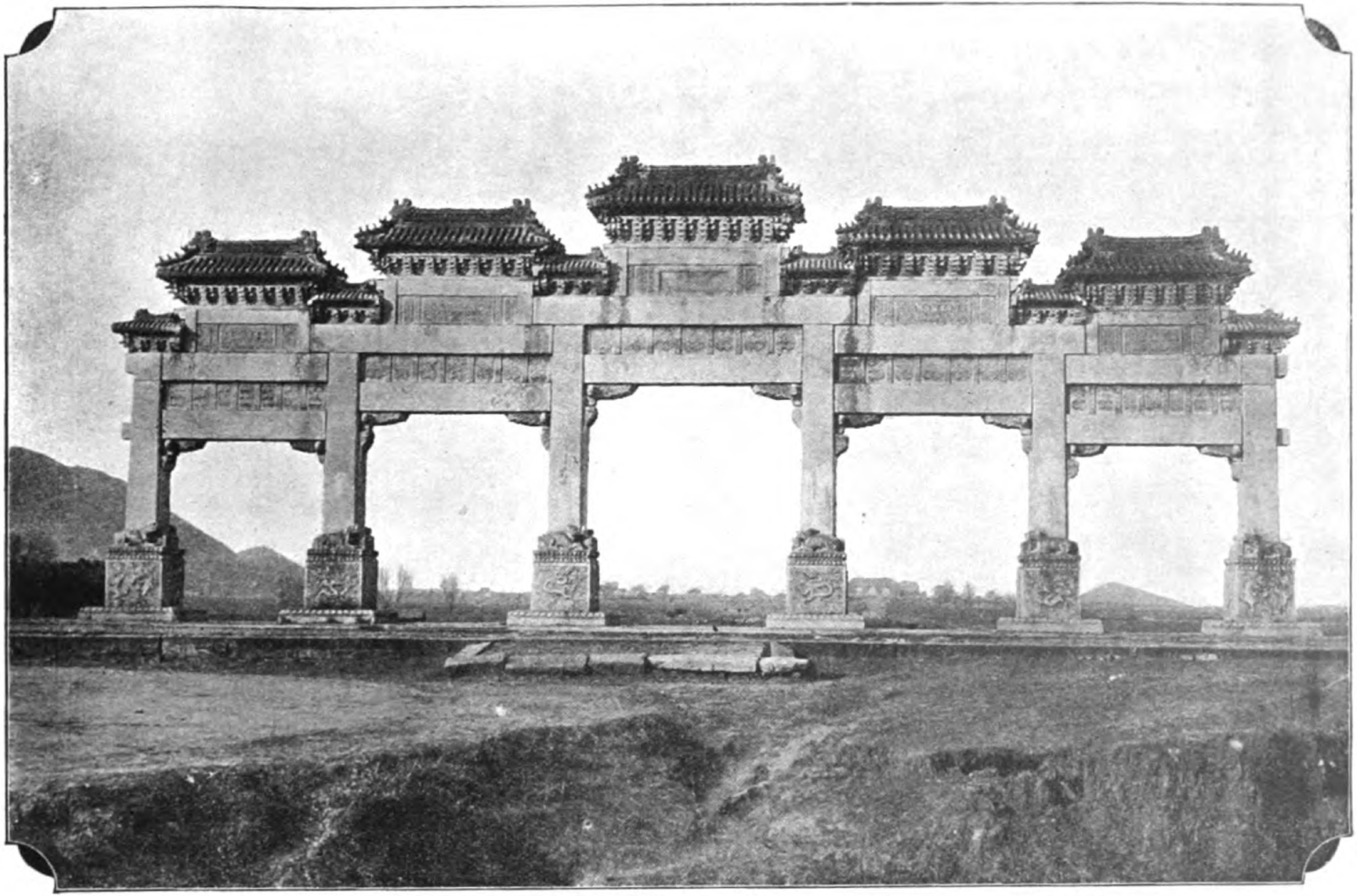
伊藤侯爵の一家



西夫人　西源四郎氏　末松男爵

侯爵夫人　伊藤侯爵　末松夫人

明朝の遺跡



明朝十三陵第一の牌樓（清國南京の郊外に在り）

中學世界增刊

珠星璧月

十一月廿日發行
正價 金貳拾錢
郵稅 金貳錢

口繪

寫眞版は例によりて當代知名の士の肖像內外の風景風俗等何れも最新の撮影に係るものにして一具其境に入り其人に接する感あり殊に印刷の精巧細緻なるは特色中の特色とも云ふべし

是れ去る九月以來江湖に募りたる懸賞文の披露なり本書の定期增刊が如何に多趣味にして多益なるかは愛讀者諸氏の已に知悉せらるゝ所、種目は、小說、論文、抒情文、叙事文、書簡文、英文新体詩、漢詩、和歌、俳句にして、當撰の文に皆知名大家の撰評に係り、直ちに作文の摸範となすに足るものあり、綿上更に花を添ふ附錄には左の諸編を集む

附錄

- 王陽明……國犀東君
- トルストイ伯傳……長谷川誠也君
- 寺坂吉右衛門……三宅青軒君
- 上海毛赤布……上田黑潮君
- 歷史の半面……鷹野止水君

(乙の一)

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

奏効確實
器械不要

●簡易複寫インキ

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械藥品等を要せず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに同一の文書圖書數十百枚を印刷し得べし○即ち此インキを以て書したる原稿より直接他の白紙へ字痕を透徹する者にして一枚の原稿より凡十枚を寫し一瓶のインキにて原稿百數十枚を作り複寫壹萬餘枚を得る者なり（使用法說明書を附す）

◉本品は既に諸官衙及郡區町村役場等の御用品たり

●定價 ニオンス 堅裝罐入 送料共 金四拾錢 郵券壹割增●

發賣元 東京神田區末廣町三十八番地 中村屋商店

●繪畫通信教授

規則郵券貳錢─東京麻布區飯倉四ノ四 木田寬栗

肉筆手本を用ひ新式獨特の方法を以て叮寧親切に敎ゆ

治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵券三錢封入申込者に無代施本致すべし

東京下谷上根岸町百十一
（電話本局二三二五九番）

藥學得業士 金澤巖

轉居

─◉─

麻布區箪笥町五番地
博文館員 宮川大壽

畏モ毎號皇太子殿下●上覽ヲ賜

總裁二條公爵 編輯長中村文學士
議長本多男爵 會務長篠田法學士

青年議會

議員七萬餘人支部百九十ヶ所七月十日第五期一號發行す入會金十錢會費一ヶ月九錢六ヶ月五拾錢●見本郵券十錢●規則書進呈

東京神田千代田町 電話本局二五七一 青年議會

無代進呈

書籍。雜誌。發賣目錄。一冊 郵券貳錢送付あれ

東京市神田區錦町二丁目 勉强堂書店

●ぜんそく患者に告ぐ

多年の重病も奇藥を發見忽ちにして根治せり依て弘く同病者を救濟せんと欲す往復端書にて御照會次第詳報す

播州明石西片端
登記商號 横山事 柏木

（乙の三）

女學世界増刊

冬木立（ふゆこだち）

十一月十五日發行
正價金貳拾錢
郵税金貳錢

口繪

寫眞銅版は當代知名の才媛名婦の肖像各地女學校の眞景及内外の風景風俗は勿論坂正臣多田親愛兩先生の書野口小蘋女史の畫等何れも有益多趣味ならざるはなし

▲小説　▲和歌　▲新体詩　▲抒情文　▲叙事文　▲消息文

歌は心の花なり、文章は思想の錦なり、うるはしかるべき婦人にして其の心に花のかざりなく、思想に錦のよそほひなかりせば、如何ばかりもの足らぬ心地さるべき、昭代教育の發展に伴ふて、女子の文藝は著るしく其歩を進めぬ、茲に女學世界の才媛詞藻は今又更に其定期増刊を發刊せんとす「冬木立」即ち是なり、さればうるはしき心の花のいみじき思想の錦が我才媛詞壇を飾りて千紫萬紅の美は送迎に其遑もなからんめり

附錄

- ●獨逸家庭談……稻澤ゐい子女史
- ●今昔物語……鈴木げん子女史
- ●藻鹽草（隨筆）鹽井福子女史
- ●秋のすさび（隨筆）藤の屋女史
- ●上野動物園……木村小舟君
- ●秋の旅（紀行）村松清蔭君
- ●農民生活……有本楓水君
- ●山茶花（小說）堀田新泉君

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（其の四）

清國北京城内の市街



暹羅の風俗



暹羅國中流社會婦人會食之圖

（世界一週旅行者 中村直吉氏寄贈）

同胞



佛國名優



椿姫に扮せる佛蘭西の女俳優マダムヅウゼ嬢

英學新報社新刊書類

THE ADVENTURES OF BARON MUNCHAUSEN

エー、シー、ハーツホーン
津田梅子女史共著

英文 法螺先生

全壹冊

袖珍顛美本　正價金貳拾錢　郵稅四錢

荒唐無稽の放談珍說を縱橫にして而も甚だ無邪氣なるもの、マンチョーゼン男爵の滑稽冒險譚に及へもの無からん。即ち其奇談中の最奇なるものを撰し、平易なる英文に書き改め、讀者をして抱腹絕倒せしめ、勉學の勞を慰せんとす。文は津田梅子、及ハーツホーンに成り、挿畫は佛國大家ドレーの作を摸寫し、表紙畫は、ハーツホーンの筆に成る。其印刷釘裝に於て優美なる一珍書。

RECORDS OF DARING AND HEROISM

英學新報社編輯部校訂詳註

英文 勇士の紀念

全壹冊

袖珍美製本　正價金貳拾錢　郵稅四錢

題して「勇士の紀念」と云ふ其如何に雄膽壯快事を語り出づべきや、それ斯篇收むる處の一開拓者が南洋一蠻島に食人種の犧牲となり・悲劇・海將子ルソンを斃したる一海兵の實驗記獅子馴致者の王たる一少年の經歷及び文豪スコットの友人たる一勇士が亞非利加の山林に獅子を狩獵するの奇談等皆附するに詳註を以てす、英學生之を讀んで文を學びまた以て其壯烈事に奮起せん。

A WAR CORRESPONDENT

ジームス、クリールマン氏著
櫻井彥一郎君詳註

英文 從軍記者

全壹冊

袖珍美製本　正價金貳拾錢　郵稅四錢

米國紐育ジョーナルの記者クリールマン從軍記者として辣腕機智に至りては蓋し古今獨步と稱すべし、本書は彼の新著（橫行濶步錄）中平壤戰爭米西戰爭及びマニラに婦人新聞記者と通信の遲速を競ひたる快聞の三篇を摘出して詳細なる註譯を施したるもの、一たび之を繙くに於て血湧き骨鳴るの槪ありまた以て敏捷たる米國新聞記者の面目を髣髴たらしむ。

THE ADVENTURES OF THE MOUNTAIN CLIMBERS

英學新報社編輯部校訂詳註

英文 高山探險

全壹冊

袖珍美製本　正價金貳拾錢　郵稅四錢

天地創造の奇を鍾めて之を山嶽の險となし俗人漫に蹈破する勿らしむ、然るに險を征して之を役する人智人力の偉なる亦驚くべきに非ずや本書收むる處或はアルフスに或は印度洋中に或は南洋島上に險奇を蹂躙したるもの及び那威王手記の岩山に羊を狩る事實談等探奇冒險の快事讀者をして高山の靈神と接するの槪あらしむるもの。

發賣元　東京日本橋區本町　博文館　東京神田表神保町　東京堂

（丙の一）

最も高評ある
最も正確なる
最も便利なる
最も經驗ある

博文館 當用日記 懷中日記 發賣廣告

（十月中旬製本出來）

明治三十六年 當用日記

●紙數　中形大形共各五百五十餘頁　小形五百三十餘頁

小形（菊判半截）上製（舶來洋紙總クロース金字入）　●正價金三拾錢　郵税八錢

中形（四六判）上製（舶來洋紙總クロース金字入）　●正價金三拾五錢　郵税拾錢

中形（四六判）特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）　●正價金五拾錢　郵税拾二錢

大形（菊判）上製（舶來洋紙總クロース金字入）　●正價金五拾錢　郵税拾四錢

大形（菊判）特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）　●正價金六拾五錢　郵税拾四錢

特色！

用紙　何レモ海外製紙會社ヘ特ニ注文漉製セシ特別上等紙ヲ用ユ

印刷　秀英舍ガ新規鑄造セシ活字ヲ以テ注意印刷ス頗ル鮮明ナリ

製本　弊館ガ特ニ歐洲ヨリ輸入セシ新機械ヲ以テ堅牢美麗ニ製本ス

趣向　（當用日記）日々欄ニハ過去同月日ノ重要歷史、七曜、支干等ヲ錄シ天氣、寒暖、受信、發信等ヲ記入スベキ欄ヲ設ケ、普通記入部ニハ細罫ヲ附シ秩序アル記錄タラシムルニ適セリ」附錄トシテハ紙數十二頁の補遺金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、最新重要

明治三十六年

懐中日記

並製（船來洋紙クロース表紙金文字入紙數三百頁）　●正價金拾貳錢　郵税四錢

特製（船來洋紙頗美本總クロース金文字入紙數三百頁）　●正價金拾八錢　郵税四錢

體裁

統計及日常必須ノ諸規則ヲ網羅セリ（懐中日記）毎月ノ初ニ當月ノ行事、食品月令、遊覽案內、陰暦氣節等ヲ掲ケ日々欄ニ過去同月日ノ歴史、七曜、支干、天氣、寒暖ヲ記スル等當用日記ノ如ク、卷末ニハ金錢出納簿アリ又日常有用ノ事項諸税則及最新重要ノ統計表ヲ附セリ

弊館出版の懐中、當用日記の正確堅牢にして實用に適するは玆に喋々の要なし今回用紙印刷體裁製本に至るまで尚一層の改善を加へ懐中日記は本年更に新工夫を凝し縱長に製裝して携帶に便し又當用日記は舊に倍して一層優美に裝釘し尚趣向の改良を加へて記入の便を計り小形外の四種には農學博士横井時敬君の農家年中行事及中央氣象臺技師和田雄治君の調査に成る全國氣候一斑を掲け尚ほ最新の統計及座右必需の重要諸規則は漏らさず收めて網羅せり之を舊年の日記に比すれば材料愈よ豊富記事愈よ精確にして江湖坊間の日記と同視すべからざるや論なし請ふ續々御愛購あらんことを

●賣捌所は全國各地（書籍雜誌店及紙類文具店等）到る處にあり

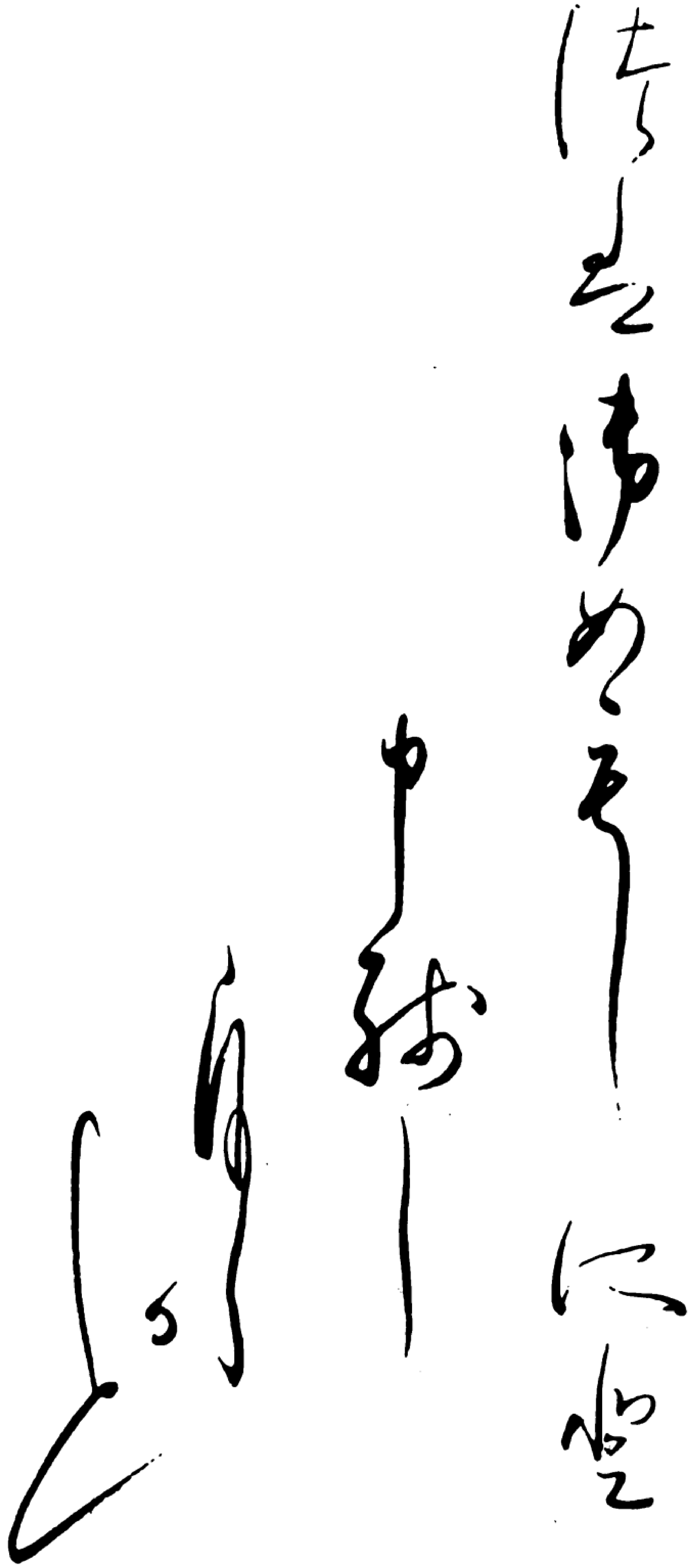
●取次望みの方は種類部數等御申込次第精々御便利に御相談可仕候

東京日本橋區本町三丁目　博文館

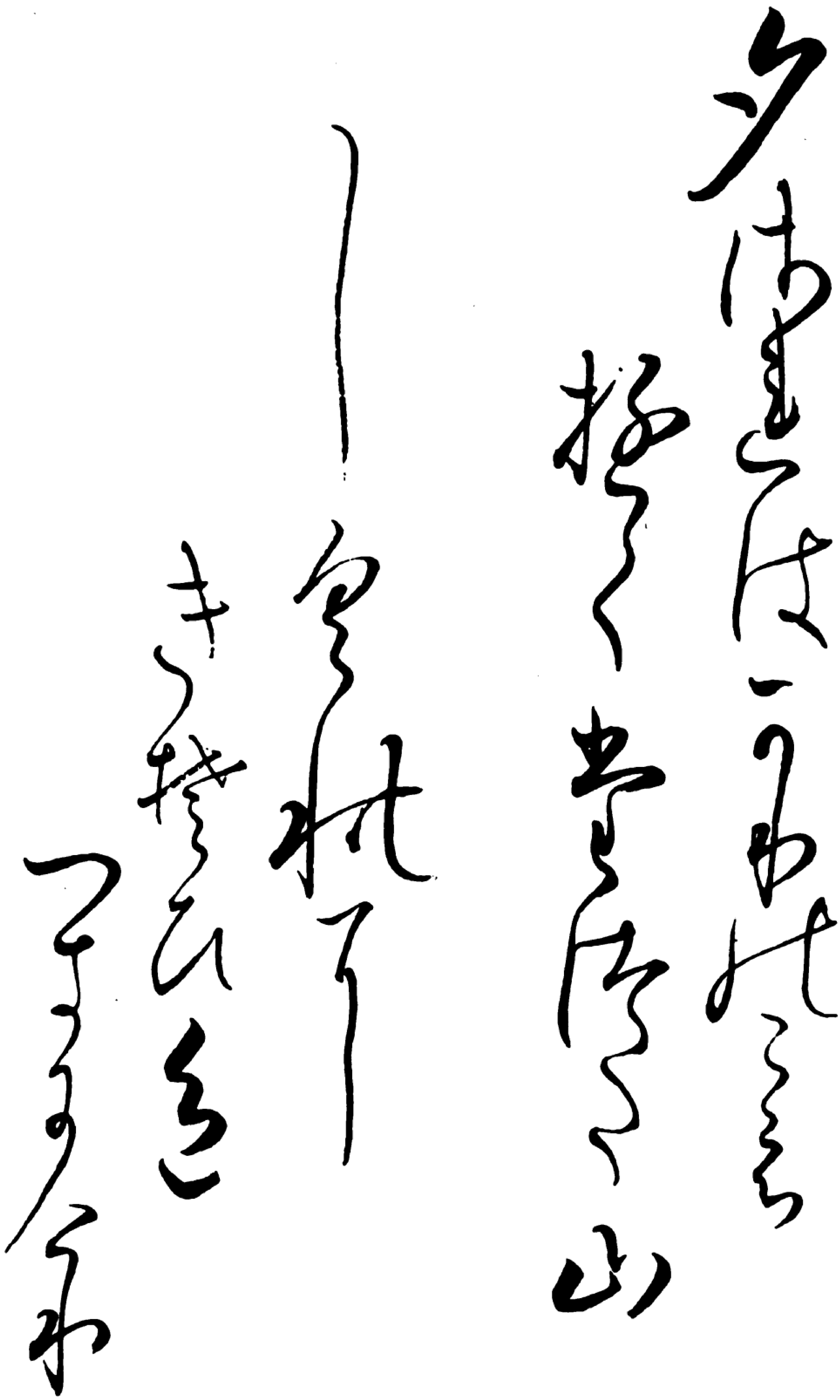
（丙の三）

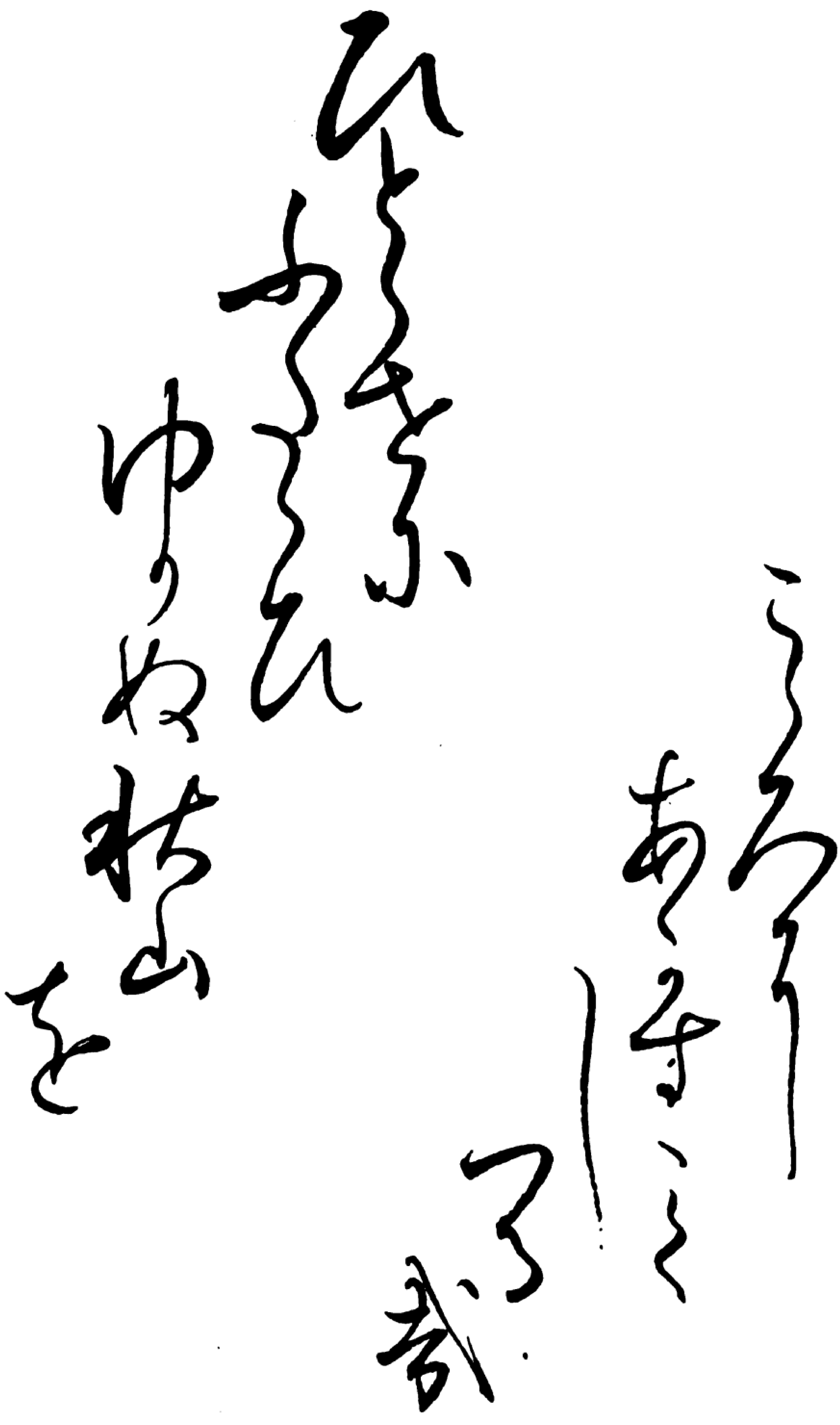
多田親愛先生筆

此度清教寺堂の修復
を加へられ昨日ハ清燈麗
この新しきまて招待
下され誠に有難存候
悉く是ハ傳へかへくよろ



坂正臣先生筆

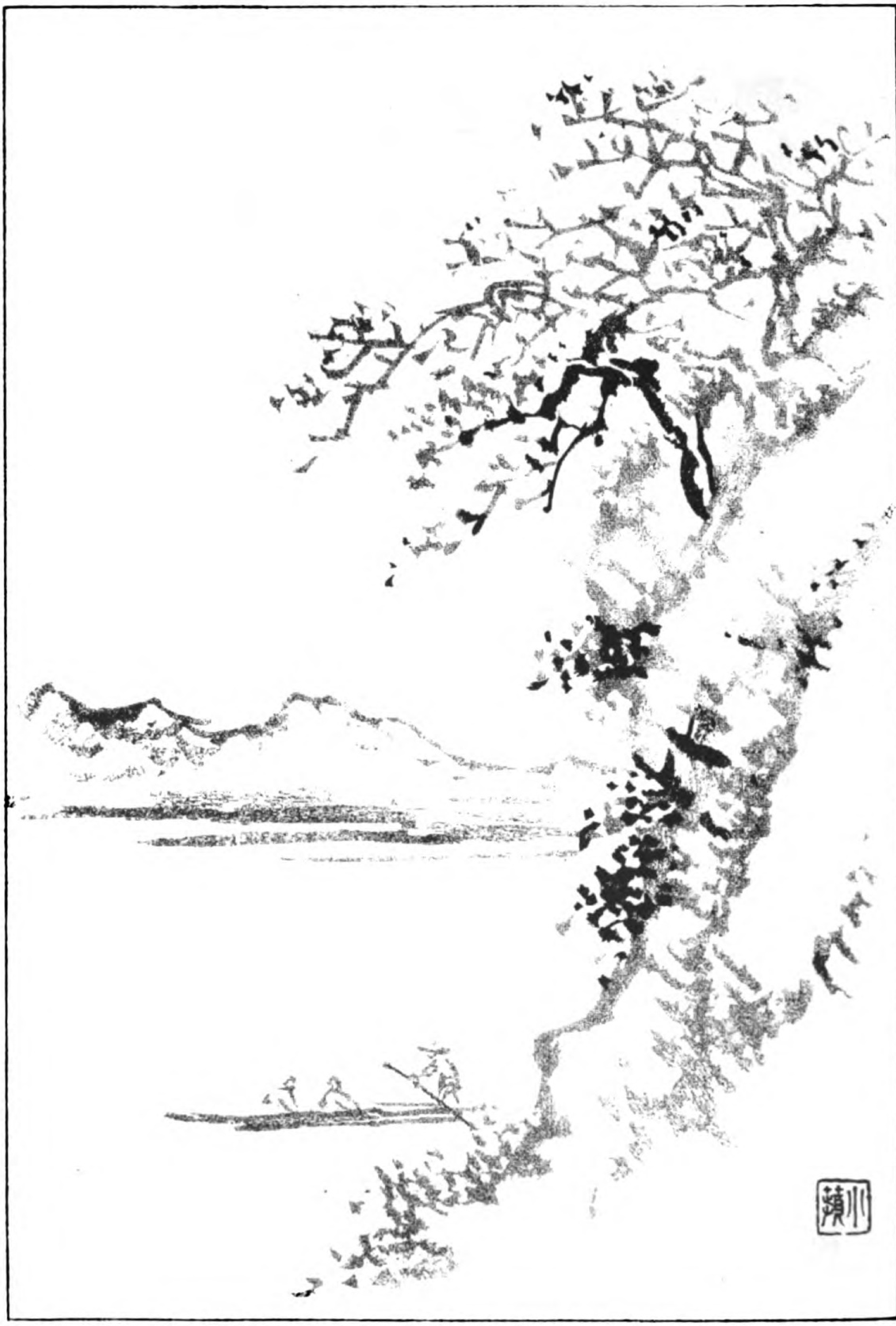




坂正臣先生筆

秋江清趣

野口小蘋女史筆



茶の花

野口小蘋女史筆



溪澗楓樹



陶淵明

野口小蘋女史筆



珂北先生序
虚々子跋

夢判斷

附夢占法

夢博士
血達磨著

▲天之部
▲地之部
▲草木之部
▲禽獸虫魚之部
▲人事之部
▲飲食物之部

▲蟲類之部
▲建物及住處之部
▲家具及日用品の部
▲文武用具之部
▲婦人用品之部
▲鬼神仙佛之部
▲雜之部

血達磨は俗物なり、故に夢に迷ふこと三十年、煩悶して、古今東西の夢判斷を集め、又自ら易法に由て、夢占を案ず、時に變哲學的夢理を說く、其愚其痴誰も及ふものあらん、語に曰く痴人說夢と君子學人それ此書を繙く可らず、

博文館編輯局編纂　（日用百科全書第四拾五編）

●易占及骨相法

正價金貳拾錢
郵稅金六錢

社會の人事は恰も波瀾の起伏するか如く、定則なくして自ら定則ありて存せり、易占は此理を推して而して人間運命の秘密を闡くもの、骨相學の如きは精神生理の原因よりして論證明確亦疑を容るへきものならす、本書此二說を明示して正に人間運命の指導者たらんとす乞ふ自ら占はれよ

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（丁の一）





第貳卷

第拾四號

家を修むるの要訣

生活は萬事よろしく手輕なるべし、繁文縟禮は政府の煩らひを爲し、虚禮虚式は社會の煩らひと爲り、勝手元の繁雜なるは家事經濟の煩らひとなるべし。傳へ聞く故獨逸國の皇太后ヴヰクトリヤ陛下は平素手づから皇子たちの襯衣を縫はせ、手つから朝夕の烹炊を鹽梅せられ手つから箒とりて窓の塵を掃はせたまひけり、内臣侍婢どもは太后のあまりに御手輕なる御擧動ありけるを見奉りて御諫言申上げしも御取上けなかりしとぞこれぞ剛健にして堅實なる、獨逸皇室の家風を造りて今やホーヘンゾルレンの家の威望は獨逸國力の發達と共に宇内に瞻仰さるゝに至りぬ。光榮尊貴萬乘の御家庭にして然り况んや庶人に於てをや、質樸にして簡單なるは家を治むるの最好方便と知るべし



奇特なる英國の一老女
（日本には水兵の母なきか）

報効義會長　郡司成忠

自ら任ずるに『日本水兵の母』を以てして、十年一日の如く我軍艦商船の倫敦に來る每に、非常の好意を盡さるゝミスマークレン孃の名は、豫てより耳にする處なるが、今回軍艦淺間の士官某氏の報ずる處によれば、孃は英國皇帝戴冠式參列に回航せし我が艦隊を迎へん爲め、先般プレモスに來り居れり、孃が六十九歳の老軀は尙ほ矍鑠として頗る元氣よく、滿面喜悅の色を現はしつゝ、淺間艦乘組一同に接せられしが孃は實に燃ゆるが如き熱誠と慈母がその愛兒に於けるが如き愛情を以てせられき。

マークレン孃は夙に耶蘇敎を奉じ神學を修め、曾て傳道師として日本に來り、多年の間敎法のために盡瘁せられし人なり終生單獨を以て自ら持し。今や年老いて身は鶴の如く瘦せたるにも拘らず、其海上生活をなせる者に對して懷抱せらるゝ慈愛の情念は、溫乎として玉の如く、靄然として春の如きものあるなり。

抑ゝ海を以て立國の基となせる大英國の婦人として、皆斯くあるべき事ながら孃の如きは實に卓絕せる海國の代表者といふに足るべし孃の家は元と富裕なる資產家なりしが十數年間日本海員歡迎のために其資產を用ひ盡して而かも其の念頭には一毫も追惜の念なく、晏然として自ら慰め自ら娛しめり。苟しくも日本の海員たるものにして之を知らば孃に對して謝するに辭なか

るべく而かも豈唯海員のみならんや

爾來孃は日本軍艦の多くが倫敦テームス河畔に入津するもの多きを以て、遂にその居を此所に移し、以て絶東新進國の海員を接待するを以て無上の快樂となし、無上の名譽とし又是を以て我が天職と信ずるもの丶如く日本艦船のテームス河畔に向つて入津し來るを望見して、これを迎ふるの情恰かも我が兒孫が遠國の旅より歸り來るを待つもの丶如く、人情既に此の如くなるを以て、孃が居宅の室内裝飾は日本風となし、我が至尊の御眞影を掲げ奉り、我が國旗我が軍艦旗を飾り置かる丶が如き、其用意の周到、其情緒の濃密なる、眞に愛慕の至りといふべし、蓋し孃や自ら任するに、「日本水兵の母」たるを以てするその平素の志に負かずといふべし。英國に於ては、か丶る特志家を遇するに尤も厚き習慣なるを以て、孃の名聲は今や全英國に鳴渡れると同時に其社會全般より付與せられたる特權もまた極めて大なるものあり、されば孃の欲するところは、率ね社會に容られ孃の意の如くならざるものなきの態あり、孃が我が海員を各地に案内せらる丶時は、その滊車賃の割引をなさしめ、或はロンドンなる有力なる紳商と約して、我が海員の嗜好に適せる物品を、極めて廉價に購ひ得るやうに計られ、或は地方の地主富豪家に向て日本の水兵の歡待を請求し、必要なる事柄に就ては種々照會の勞を取らる丶など、奔走至らざるなし而かも孃の照會を受けしものも亦至大の名譽光榮として、直ちに之に應ずるは平素孃の德望の大なるを知るに足るべし又英國々民に於ても是の如き善良なる意志を有せる特志家に對して、尊敬を致すの大なる又感ずべきの美風といふべし。

身を軍籍に置きて艨艟に起居する者、固より鐵心石膓を以て自ら許すといへども、而も吾が海員等の天涯萬里の外にありて、此の如き慈愛深き母に接す、其感激や

蓋し深厚醇烈ならずんばあらず。孃の外英國に於ては猶日本水兵の母を以て任ぜらるゝ、ウヰストン孃あり嗚呼我が先進國たる英國に於てはこの如し而して我が日本に於ては如何、偉大なる愛國の精神を女性の本能的に發揮して「我が日本水兵の母」を以て自任する一婦人無きか、また英國水兵の母たるを以て自任する一婦人なきか、英國も海國なり我が日本もまた海國なり、蓋し今後に於て我が日本淑女の中より、幾多のウヰストン孃を出し、マークレン孃を出すに至らん事は、予の深く信じて疑はざるところなり。（完）

良品は決して蹉跌せず
良妻は決して不平を鳴さす

主婦と言文一致（四）

成女學校幹事　嘉悅孝子

（二）

世の中で、夫婦の愛よりも、父母に對しての情よりも、金銀珠玉の寶庫よりも、更に更に一層可愛い子供が、學校より制帽勇ましく被つて、走り歸つて、

「母樣、只今……」と云ふ其優しい調子は、如何ばかり愛らしいものでせう。微笑の頰に紅を湛へて居る色彩と配合して遂に相抱いて、不識不知の間に接吻でもしたく感ぜられるではありませんか。しかも其「母樣、只今」が如何にも子供らしき故にこそ、子供らしいのであります。が、もし現代の子供が試みに平安朝の言語を使用して、

「母君、今まかり侍りぬ」と云ふと假定せば、果して我子として愛情を除く事なしと云ふ事が出來ませうか。

恐らく生意氣て、我子ながらもこにくらしくなるのであらうと云ふ事は信じて疑はれない事、事玆に至つては其愛の泉の紅の笑凹も、何の甲斐もなくなるので御座います。

しからば子供は子供らしい言葉を要し、大人は大人らしく、女は女らしい言葉を使はねばならぬと云ふ事が、明瞭でありませう。若し然らずして生半可な漢語、外國語及び平安朝語を使ふ人ありとせば、其人は如何ばかりもの わびしく、交り憎く親しみ惡くなると云ふ事は言ふまでもない事であります。

言語の根底は其時代の思想にあると云ふ事が眞理であるとすれば、其思想を書き表す文、又其時代語に依らねばならぬ事は、明々白々なる事であります。於、此、言文一致體文章は明治時代の文章とならねばならぬ所以は自から多辯を要する迄もありますまい。

以上申したる通りであるとすれば、今更言文一致の要を說くまでもありません。もし以上の所說によつてでも倘ほ言文一致を排斥するものがあるとすれば、敢て其方にお尋ね申す。あなた方は先に引證したる兒童に「母樣只今」と挨拶されたる時、「汝は何故にかかる卑俗なる言語を使ふか。以後は、母君今まかり侍りぬ」とこそ言へ」と言はれるのであるか。果してかくの如き無愛想な狂氣じみたる言を以て我愛兒に接するの勇氣を持ちたるかと。

（三）

家庭教育の聲漸く高く、兒童養育の法、愈々研究されつつある今日の現象は、甚だ喜ばしい次第で御座います。かくして追々家庭改善の實も擧り、社會改善の好果も收め得られる事と信じます。が、私は先づ言文一致の實行を以て家庭改善の一助とするもので御座います。言文一致の實行と云ふ事は、必ずしも書くと云ふ上よりばかりでなく、讀むと云ふ上よりも甚だ必要であり

ます。

小學校の教科は言文一致の方針に依ると云ふ事が、全國聯合教育會に於て議決してより以來、承れば小學校の國語教育方針は、口語を以てする事となつて居るとの事、私は此が學校ばかりでなく、家庭に於いても是非ともさうでなからねばならぬと信じます。

家庭教育に要する教材、兒童をして學科の餘暇に讀ましむべき讀物、總て此等の物は悉く口語を基本とせる言文一致體の文章に依らねばなりませぬ。彼の漣山人のお伽噺が如何に兒童の腦中に印象せられつゝあるかを知らば、其言文一致か如何ばかり勢力あるをも知るに足るので御座います。若しも其文體が普通文もしくは擬古文であつたならば、可憐の子供は、此等の純潔なる讀物を去つて、忽ちにして父母の目を盜んで、不潔なる淫猥なる小說に走るより外はありますまい。

言文一致體とは云へ、對話する場合と、書き表した場合とは自ら相違するので御座います。對話の場合にはアクセントを以て其不完全な言ひ方を補ふ事が出來ますが、書き表した場合にはアクセントなき故に、自ら用語の明瞭なるを要するのでありますが如く、話方の練習として、書いた讀物を讀ましめると云ふが兒童の言語を正確ならしめる上に非常な効能があります。

かくして家庭に於ける言語練習の材を得、學校に行つては、教師の授業の下に、方言を矯正され得る樣にならば、自然正確なる日本語を得るに至る所以であらうと思ひます。

既に純粹、溫雅にして正確なる言語を得たる一家庭に於ける兒童の智識の發展は言ふまでもなく母たる人の慈言と相まつて、玆に春風駘蕩たる一小國を形造り、ひいては一國一天下に及ぶ普及の度の迅速なる事を確信致します。

（四）

源語も枕も結構です。私も愛讀して居ります。が、私は只純文學の研究物として、實用的の文と別たねばならぬと思ひます。純文學的の文章と、實用的の文章とを混同してしまつて、言文一致に不賛成しつゝある人もあるそうですが、これらは、春は花に醉ひ、秋は月に浮かれて、風の音につけ、虫の音につけて、涙を流したと云ふ平安朝のかよわき婦人によつて作られたる即ち源語枕を守り本尊にして居らるゝ方々ではありますまいか辭句の秀麗なるを崇拜するの結果、先述の八百屋の注文書までも源語もしくは、枕の文脉を眞似ねば其用を足す事能はざるものゝ如く心得て居らつしやるお方もあるとか。

藝術の美は決して實用のものと相一致する事は出來ません。かりそめにても斯の如き事あらば、それは藝術に對して、甚だ侮辱を加へたるものと云はねばなりません。藝術は神聖なり。人は此を何處迄も神としてみとめねばなりません。いやしくも道具視する事の甚だ誤れる事は云ふまでもない事でありませう。

世の言文一致を否認せられるお方は、果して探幽の錦繪巻を以てお芋を包む風呂敷とするの勇氣を持つて居らつしやいますか。徒に古文の躰を以て實用的に使用せられむとする事は、蓋し此と大差なき所以かと思はれます。

(をはり)

心愉快なれば終日歩み
若し不快なれば一里にして止む

女性の亞米利加

文學士　堀田璋左右

現時の女子教育に大缺點の存在せるは、何人も能く認むる所ならん、然れども吾人は嘗て云へり、女子の生意氣、女子の外國崇拜、是等は憂ふるに足らずと、蓋し他日其よく成功の時期あるを豫想したればなり、然るに

仔細に觀察するに別に一事の決して看過す可らざるものあるを認め得るは、果して吾人の誤なるか、非か、少しく論ずる所あらん、

先づ吾人の云はんと欲する所は、女性の本體を失へる事是なり、新紙報ずらく、大阪の高等女學校に於て、有餘の生徒に對して、『女子たるを好むや、將た男子たるを好むや』の一問題を以てしたるに、女子たるを欲するもの百十七人にして、下田歌子氏の如き女丈夫的の婦人を理想とし、男子たるを欲するもの百二十八人にして、福島少將の如き名譽的の男子を理想とするものなりしと云ふ、尋常小學程度にてはいざ知らず、高等女學程度の生徒が此の如き理想を懷くとは、吾人聞て轉た痛嘆に堪えざるなり、淑德ある婦人、男子より敬慕さるる婦人、將來の賢母などの名譽は何が故に沒却されたるか、是等は敎化さるゝ者の罪に非ずして、實に敎育の任に當るものゝ罪と謂はざる可らず、

近來の女子敎育は模範を米國に執る、從來の輸入も亦然り、婦人をして婦人らしからしめざるに至るは、即ち亞米利加仕込なり、女子が男子たるを望むもの多きに至るは、其感化に依ると極めて多きなり、女子敎育の上に於て『女子は如何に敎育さるゝか、男子と同樣にか』と云ふは攷究す可きの大問題なり、而して我國其根本の定まらざるが故に、其唱導さるゝは區々なれど、亞米利加風の『男子と同樣に敎育さるゝ』と云ふ點に多くの感化を受けつゝあるは、尤も憂ふ可き事なり、由來亞米利加婦人の模範とす可らざる、我邦に於てのみならず、歐洲に於ても然り、吾人は凡ての防禦手段を盡さゞる可らず、

匿名の一記者、アングロサクソンの女性に關して、痛快なる一評論をブラクウード發兌の一雜誌上に試みたり記者は恰も古の豫言者エレミヤの如き口吻を以て、浮誇虛飾に狂せる現社會の陋風を痛罵し、之を以て主と

して唯物論の罪に歸せり、實に今日の社會は、澎湃たる唯物論の波に棹すものにして、近代の懷疑と猶太人の勢力とは、之に與かりて最も力あるものとせられたり、記者は現社會の女性を以て感情をすら僞るものとして非難し、更に思へらく、彼等の望む所は高價にして容易に求む可らず、彼等の愛する所は必竟爵位と權勢とのみ、浮誇虛飾の競爭は、漸次彼等をして自然の風致を損するに至らしめ、傲慢不遜の態度は、旣に彼等をして善良なる風習を凡て壞るに至らしめぬ、而して此流行病は多く亞米利加より來れるものなりと。

英吉利人をして漸次拜金宗の宗徒たらしめ、日々奢侈贅澤に流れしめ、流行に向ひて走ると狂するが如くならしめ、社會をして沒趣味ならしめ、容儀と制裁とをして、蕩然地を掃ふに至らしめたる亞米利加的勢力は、恐らくは世人の想像するよりも、强且つ大なるものなるべし、亞米利加流の女性は、現に英吉利の社會に於て、益々恐る可き勢力を蓄へつゝあり、彼女は萬有成立の意匠に就ては懷疑的なり、彼女の活動の根元は、心靈よりも寧ろ頭蓋にあり、彼女は最早社會の胡蝶にあらず、妖魔にもあらず、單に名譽心を以て蔽はれたる俗氣滿腹の一生物のみ、彼女は其快樂の爲めに何事をも爲し、社交の如きも、彼女に在りては、彼女自身の利益を擴張する手段に外ならざるが如し、是れ實に亞米利加女性社會の眞相なり、

かゝる女性と結んで家庭を作らんは、如何に笑ふべきとなるぞ、時代の影響は普遍にして欺く可らざるものなり、亞米利加流の女性は凡て同一摸型によりて鑄造せられ、一は恰も他の復寫の如きものとなり了りぬ、見よ渠等は言合せたらんが如く、服裝に於て同一なり、對話の方法に於て同一なり、彼等は生活に於て同一理想を有せり、現世の幸福を求むるとに於て、自己の利益を計るとに於て一致せり、彼等の浮誇虛飾に狂するや、英

吉利に於て、名望家の斡旋に成れる宴會よりも、更に盛大なる宴會を開いて足れりとせず、其感化の及ぶ所、遂に虛榮に醉へる倫敦の美人をして汲々として彼等に倣はしむるに至れり、故に簡單に云へば、吾人は至る所、惡魔と共に在るものにして、此惡魔中尤も天分の惡きものは、亞米利加の女性なりと云ふことを得べし、

以上は記者が言の大畧なり、其云ふや英國に於ける女性に就てなり、然りと雖も之れ英國に限るにあらず、歐洲に於て頻りに勢力を及ぼしつゝあるもの、延て我邦亦大に感化を受く、識者豈に之を等閑に附して可ならんや　吾人は切に敎育家に望む、かゝる亞米利加婦人の唱ふる主義を、我敎育に注入すると無らんを、吾人は奮て將來の婦人問題を研究して、以て良妻賢母の輩出に力を盡さんとす、はたして世の同意を得るや否や、

朋友間の交際は恰も植物の如し
盡く之に水を注がざるべからず

家庭時言

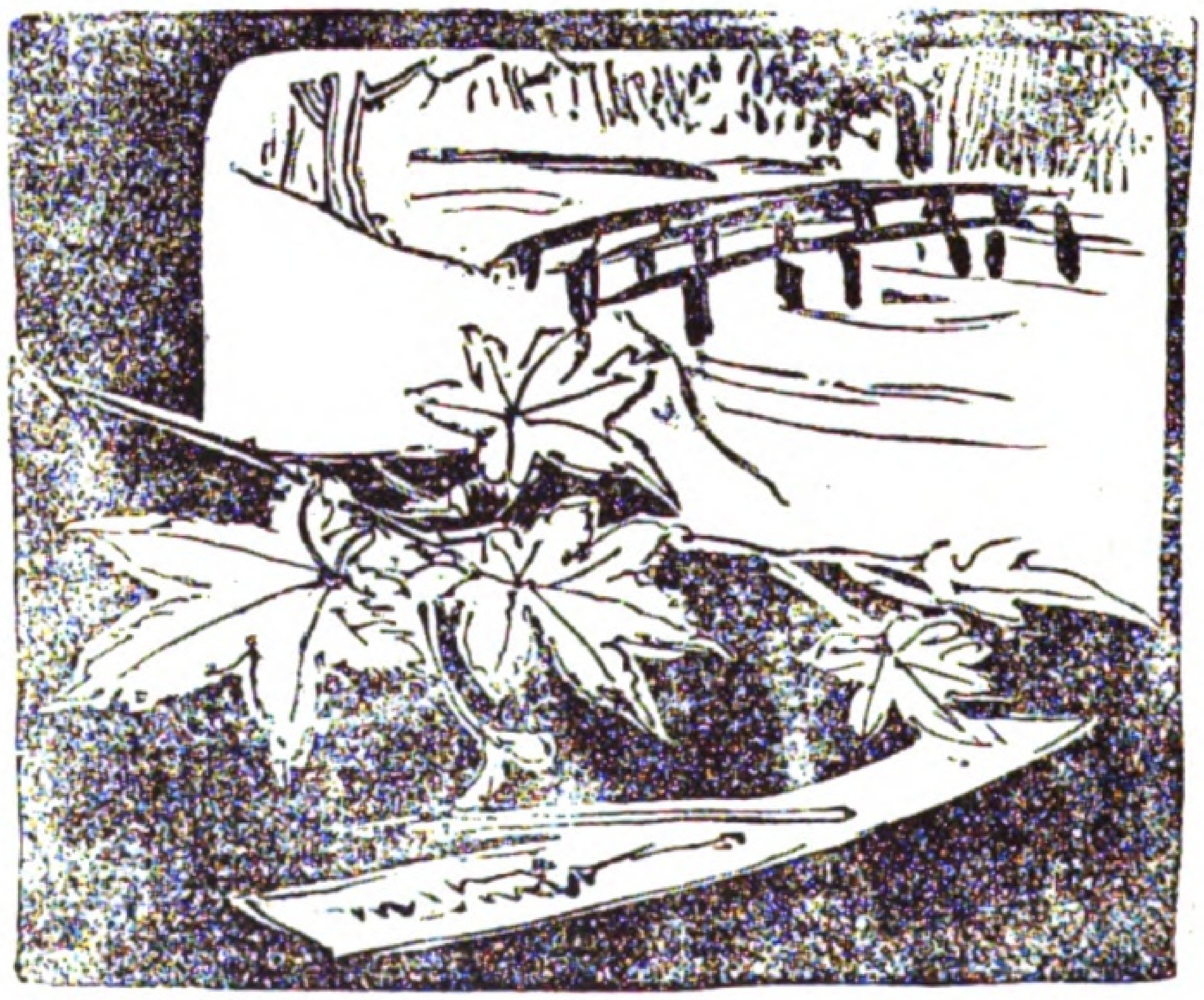
文學士　大町桂月

所謂紳士の閨門

今の紳士の閨門ほど亂れたるはなし。貴顯もしくは富豪にして、妾なきもの、果して幾人ある乎。藝者買ひをなさゞるもの、果して幾人ある乎。下りて、下女に手をつけざるもの、果して幾人ある乎。貴婦人にありても役者買ひをなすもの少なからずと聞く。

餘計なお世話か知らねど、世の婦人に告げむ。卿等の良人、品行よしとて、心許し給ふこと莫れ。その品行よきは、金なきを以て也。もし財產がゆたかにならば、世の風に化せられて、藝者買ひをするもの多かるべき也。妾を置くものも少なからざるべき也。今の世、貧乏なるが、結局、夫婦間の幸福也。貧乏の中に、なほ借金しても

道樂するやうな良人にては、到底夫婦間の幸福は得られざるべし。それも細君の方にて、めかけ手かけは男の働とさばけたらば、あまり苦情もなく、風波もなかるべけれど、みだりに燒餅やかば、良人は家に居るが面白くなくなるべく、從つて道樂がます／＼つのるべし。良人が道樂する中にも、如何にも細君が氣にくはず細君が或は横着なる振舞をなし、或は野卑なる仕打をなし、氣も情も相合はずして、家にあるが不愉快なるより、やけの氣味になれるもあるべし。かゝる良人の仕方、よしとにはあらねど、細君も亦惡し。自から顧みて、良人と情味相合ふやうにつとめざるべからず。されど、燒けぼつくりに、火つき易しとかや、學生時代の道樂の味忘れ難く、ことさら酒に本能的情慾抑へ難くなりて、宴會には、必ず二次會に出掛くるやうになるもの多し。世に浮氣なる良人をもちたる細君こそ氣の毒なれ。親はむすこの道樂をさまで惡しとは思はず。妻てもくゝりつけなば、自然道樂もやまらむとて、こゝに夫婦が出來たり。道樂したる者は、必ず女の顏の美なるを喜ぶものなるが、幸にもその妻美也。こゝに於て、道樂もぱつたり止まり、やれうれしやと、親が胸なで下す間もなく、佛の顏も三度とやら、はじめの程こそ、美しき細君に滿足したれ、根が浮氣もの、常に美味を食ひながら、隣りの雜炊が旨き自然の人情、おそくて二三年、はやくて一年、自からは謹む考なるも、細君が產前產後の三四個月は、殊に危き時なるぞかし。



世の細君に、惡智惠つけるやうなれど、この際よく〳〵注意し給ふべき也。夜おそく歸りて、ことさらに細君の機嫌とらむとする樣子見えなば、疑念の矢を放ち給へ、中らずとも、遠からざるべき也。如何に男の働なればとて、細君の苦しみをよそに、浮氣するは、餘りに動物的也。女の肩をもつわけにはあらねど、さりとは、同情なく、女を馬鹿にするも、亦甚しからずや。

要するに、男子の浮氣より、閨門が亂るゝ也。今の紳士は、餘りに本能的也。たしなみ無き也。肉體の快樂を知りて、精神の快樂を知らず。茶屋酒の味を解して、家庭團欒の味を解せず。途上、夫婦づれにて、樂しげに步くものよりも、むしろこそ〳〵と妖婦づれてゆくもの多し。餘りに殺風景の世の中なる哉。

金との結婚

古は、人と人と結婚したりき。今は人と金と結婚するこそ、うたてけれ。

娘をやらむとする者曰く、財產ある乎、無き乎。月給多き乎、少き乎と。誰れも貧乏人の家にやりて、可愛き娘に苦勞させたくなきは、自然の人情。吾人とてもわざ〳〵貧乏人へやれと云ふものに非ず。されど財產は雲の如し。今日有るかと思へば、明日は忽ちなくなることあり。今は月給多きも、いつ免職になるかもわからざる也。試に一考せよ。金あれば、立派な家に住へる也。よき着物が着られる也、贅澤も出來る也、下女下男も使へる也。そこで生活はまづ安樂なるが如くなれども、夫婦間の幸福は、金で買はれるものにあらず。良人にして不人情なる人なれば、玉の臺に住まふも、なほ針の席に坐するが如き也。酷薄なる人なれば美衣をまとひ、佳肴に飽くも、なほ荊を負ふが如き也、蠟を嚙むが如き也。

子を夫婦間の鎹といふは、抑も末也、夫婦間の鎹となるものは、愛情也、褌百貫のその人となりを愛する事也。その愛は、富によりて增さず、貧によりて減ぜず、

地にありては連理の枝、天にありては比翼の鳥と思ひ込みてこそ、茲に夫婦間の幸福は得らるれ。金によりて成り立ちたる夫婦は、金なくなれば、愛情自から冷せざるを得ず。金あるも、情味に於て衝突すれば、夫婦もなほ呉越の思をなす也。美服をつけて、馬車に乗れる貴婦人、よそ目には仕合に見ゆれど、何ぞ知らむ、胸に涕涙を湛ふるものあるとを。こゝに至りて金に嫁したるの非をさとるも、既に遅し。去らむとすれば、愛子あり。われ去らば、此子が可愛想なりとて、去るにも去られず。はじめは金が鎹となりて結びつけられ、終に子が鎹となりて、離れむとするを止めらる。子が鎹となれる夫婦仲ほど世に憐れなるものは無し。



金と結婚するは、女のみならで、男もまたわざ／＼富家と縁組むものあり、持參金の多きを望むものあり。所謂閨閥によりて、金も出來、地位も出來て、一時はそれにて滿足すべけれど、喉元すぎて、あつさを忘る。細君抑れて少しても氣隨な事すれば、金の威光かと腹たゝしく、はじめの難有味は忽ち失せて、今では鼻につくやうになり、家庭に、風波絶えず、風波起らずとも、家庭は常に陰雲にとざゝるべし。愚かや、今更誰をか恨むべき。これ金と結婚したる自然の結果也。

賢にして情あつきもの、これ良人として選ぶべく、また細君として選ぶべし。かくて意氣相投じたる夫婦ならば、愛情長へに温かるべく、長

へに幸福なるべし。今地位ひくゝとも、やがて高まらむ。今收入少なくとも、やがて多くならむ。よしや一生地位ひくゝ、收入少なくとも、情に於て和合すれば、夫、婦を愛し、婦、夫を敬し、手なべさげて、苦しき生活を營むが中にも何となく樂しく月日が送らるゝもの也。世上の婦人、富豪に嫁し、金屋に住まひ、美服をつくるを、女子の仕合と思ふは、愚も亦甚し。貧家に嫁し、貧乏世帶のやりくりして、芝居も見るとあたはざるを女子の不仕合と思ふは、とんでもなき了簡違ぞかし。

贈　物

贈物は、志を表するもの也。之を贈る者は、身分に應じて、其志を表すべし。あまりにけちな事をするも非なれば、あまりに張りすぎるも、亦非也。之をうくるものは、其志を受くべし。決して其物の如何を問ふべからず。

　さもしき哉、世上の俗人、下らぬもの貰へば、こんなものをと、顔をしかめ、よきもの貰へば、これはこれはと喜ぶ。さりとは、お察しなきも、亦甚しからずや。如何に利己主義の俗人の常なりとは云へ、少しは思つても見給へ。よきもの貰つて、それで自分は快きかは知らねど、之を贈りたるもの、もし貧しきものならば、如何ばかり苦しき思をなしたりけむ。それを思へば、却つて氣の毒にこそ思はるれ、つゆうれしき思はせざるべき筈也。

　東京にて、婦人が訪問するには、必ず土産物をもちゆくが例也。この風は、必ずしも惡しとにはあらず。されど、あまり之に拘泥すれば、つひ／＼御無沙汰がちにならむ。たゞ身分相應といふとを、お互ひに了解したきものにこそ。

　こゝに可笑しきは、一つの土産物が、諸方に廻りゆくと也。はじめは、甲わざ／＼買ひて、乙に贈る。乙は、丁度仕合也。金を出さずに濟むとて、それを丙におくる。

丙より丁、丁より戊とわたりゆき、時にはまた甲にまひもどる滑稽もなしとせず。それも腐らぬものならばよけれど、くさり易きものは、その巡回の途にてくさるとよあらむ。贈物は、折角の志故、特別の場合を除くの外は、自家にて之をうけ納むべし。之をもち廻はるは、よき風俗と云ふべからず。思つても見給へ、牛込に住む人が、浅草の菓子屋の貼紙ある菓子折をもちて、麹町に住む人の許にもちゆくも、一見直ちにこれはもらひ物だなと知りて、あまり難有くは思はさるべし。中には、如才なく、はじめよりうちあけて貰ひ物ですが、差し上げますと云つてしまへば、それで濟むやうなもの丶、かくては虛禮となりはてゝ、何等の難有味なかるべき也。



贈物にて、面白く思はるゝは、よかれ惡かれ、土地特有の産物、もしくは自から作りたる瓜や茄子の類也。賄賂的の意味をふくめるものは、決して貰ふべからず。

饗應

日本にては、客と家族一同と晩餐を共にするの風習なし。通例は、客と主人とのみさしむかひになり、家族は之にあづからず。これ習慣にもよれど、またその饗應に物がかゝれば也。唯其れ饗應に金を要す、故に客と之をわかつのみにて、家族をしてあづからしむるに由なき也。

饗應も、身分相應といふことを主とすべし。其主とする所は、志にありて、物にあらず。主人にこゝろし、細君も愛想よく心から喜んで御馳走すれば、何はなくとも、快く食はるゝもの也。殊に日本の上戸は、酒と漬物とあれば、先づそれで十分也。多くの御馳走あるを要せず。然るに下

戸の細君之を解せず、それては御馳走にならずとて、大騒して、こて〳〵とならべたつ。それも富貴の家ならばよし。貧乏世帶には、さぞ苦しからむと思へば、たゞ氣の毒になりて、折角の御馳走もうまくは喉に通らざる也。又如何に饗應あるも、主人が鹿爪らしき顔をなし、細君かふくれた顔をなし居れば何となく面白くなくして、快くは醉へざる也。尤も早くおつかへす積ならば、その方がよかるべけれど、さりとは社交の意を失へるものならずや。それほどいやならば、はじめより饗應せざる方がよき也。

客によりて、あまり甚しく御馳走のわけへだてをなすは、よくなき事也。又はじめて來訪せし時には、思ひ切つて御馳走をなし、その次よりは俄に粗末な御馳走するも、あまり好ましからぬ事也。饗應は客も、主人も共に氣持をよくするを旨とせざるべからず。食物の多きを以てよく御馳走したと思ひ、又好遇せられたと思ふ陋習は、吾人の取らざる所也。

一家の祝祭

誕生を祝ふ也、先祖祭をする也、上巳もしくは端午を祝ふ也、一家として特有の祝祭あらざるはなし。かゝる祝祭あれば、親戚知己を招くか例也。これ蓋し古人が親戚相會するの機を得せしめむとて、祝祭をなしはじめたるもの乎。

かゝる祝祭に、妄りに多く金を費して、御馳走を多くするは、祝祭の本意に非ず。御馳走は多からずとも成るべく多く親類を呼びあつむべし。世には、費用の多きをいとひて、親類は招かで、たゞ一家のみにて、祝祭をするものも少なからず。それも極貧乏ならばいたし方なけれど、相當の收入あるものは、外の事は節約しても、かゝる場合には、多く親類を招きて、交情をあたゝむるやうにしたきもの也。



獨逸の婦人とこども

羽仁もと子

▲獨逸からお歸りになつた某氏の話に、西洋の子供はなか〳〵惡戯でとても日本の子供の比ではないが、併し至つて素直です、日本の子供はどうも我儘なやうに思ひます云々」と

▲彼國では男女ともまだ短い着物を着て居る、十四五の年配までは、兩親、兄弟、親しき人々は勿論ですが、子供や女中までも大抵名を呼んで少しも敬語など用ゐないのです。一躰身分に關はらず、子供には凡て年長者を尊敬するやうに躾けてありますので、傅てでもなんでも年上の者の前には頭が上らぬといふ風がある若樣、お孃樣て、乳母などの云ふことをきかぬどころか、折々は母親てさへ、子供の我儘を制する事が出來ないといふ事は幼兒敎育のために考ふべきとであらうと思ひます。

▲母親と子供の間の親しいのは、東西とも同樣でありますが、父親などは西洋の方が却て日本の父親よりも子供に親しいかと思はれる、併し一寸見たところでは、母親ですらも、子供をあまり搆えつけないと云ふやうに見ゆるのです。それは何ぜかといふと、兩親が子供の上に持つて居る權威といふものは非常なもので、無暗に子供をチヤホヤするやうな事は決してない。友人などが訪ねて來ると、子供を見せるために一寸客間に連れて來るといふやうなこともありますが、又直に連れ去つて仕舞ひます。日本のやうに客のまへにすゝめる菓子をやつたり、いつまでもそこに坐らせて。彼是するといふやうな事は決してありません。

▲獨逸の婦人は家持が上手だとは、よく申すとですが、

實によく働きます。若い夫婦の新世帶て、人手のない所などに、子供が生れたといふても、それが爲に家内の亂雜を來すなどいふやうなとは、ありません運動時間には外に連れ出しますが、間の時は乳のみ子を入れる箱にいれて置いて、玩具などをあてがつて、その側に母親が一生懸命仕事でもして居るといふやうな工合てす。一躰人手のある家ても始終抱く癖をつけるのはよくないといつて、容易にそのやうなとをしない。日本ては初めての赤坊などは可愛いさのあまりに、どうかすると兩親の玩弄物のやうに撫てたりさすつたりされる事もあるやうてすが、愛情を抑へても可成こんな事は愼むのが子の爲てあらうと思ひます。

▲母親は前に申したやうな威嚴を以て、常に賞罰を正しくいたしますゆゑ、子供は極く幼い時から、母親の前には決して我儘の通らぬものゝまた如何なる塲合にも惡を仕通すとは出來ぬものだと、充分に承知して居りますゆゑ、母親ばかりてはありません、女中にても誰にてもよく云ふ事を聞くといふ優しいところがあります。

▲英國ては子供を早くから、手離して學校の寄宿舍などに托するといふやうな風もありますが、獨逸ては大學に入るまては大抵子供は父母の膝下に置くのです。女の子などは高等女學校を終へた後に、一年なり二年なり、多くは瑞西あたりの塾、(この塾はこれらの娘をあづかる塾です)に送つて、交際社會に出るための用意をさせるのてす。

▲女の子の高等女學校を卒業する頃は、大抵十六位で、子供同樣に取扱はれて居るのですが、先に申した通り間の見習から歸つて來ますと、一人前の令孃として社會に顏出しをするのてす。此時多くの娘達の希望は何てあるかと云へば、實に無邪氣に罪のないもので、いづれも未來の幸福なる同伴者にめぐりあふのが第一の樂しみとしてあります。夏は避暑地に、冬は都に歸つて夜會、舞踏會なんどゝ心忙しく、二三年の間はまつ〳〵夢中にすぎ去るやうてありますが、その中に例の待ち設けた運命(未來の幸福を作る同伴者)に出會つた時は、

即ち令孃時代に別れを告げて、最も眞面目なる新生涯に入るのです。

▲けれども種々な事情が、此の際に起りまして凡ての令孃をして此の新しき運命を捕へることを許しませぬ。交際社會にも慣れて見ればさういつまでも面白いものではない。そろそろ煩くなつてくるといふやうなことで樣々の思ひが始めて婦人の胸中に萌しかけて來るのです。そして獨逸は御承知の通女子教育の遲れて發達しかけた國柄ではありますが、今日では婦人は凡て人の妻たるべきもの、そしてもしも伉儷者を得る能はざるもので自活の必要ある場合には、下婢か、仕立屋か、洗濯屋かどその運命であるといつた時勢はもはや過ぎ去つて居ります。高等教育の道も開け、職業の種類も多くなり、なほ社會の種々の方面に婦人の手を要することに進みつゝある有樣でありますゆゑ、各自の趣味と伎倆に從つて、妻君以外に種々の境遇をつくるので御座います。



▲今の我國の高等女學校の卒業生が普通の手紙もろくには書けないと云ふことを聞きましたが、それは學科の種類などにも、種々缺點のあることでありませう。併し獨逸あたりも前に申したやうなことでありますから、ドーセ高等女學校位で役に立つ人間にするといふのはむづ

かしいので、今日一般に小學校を考へて居る位に、高等女學校を思つたらそれてよいので、高等敎育といふべきものてはないのです。

▲それならば獨逸の婦人は、高等女學校を卒業した上に更に高等の學校にいるかと云ふのに、その樣な人はごく小數て、前にも申したやうに暫くして妻君になるのてありますが、併し人中に出るやうになつて來ると、自然交際の社會から敎育されるてす。例へば女學校を卒業して、見習から歸つて來て、新に一人前の人間として、他人の前に出た新顏のお孃さんたちは、書齋や、新刊の書籍、或は芝居などの批評が出ても、他人に感服せらるゝやうな意見などを持ち出すことが出來ない、又時々奈何はしい事をもいふ。併し是等の事は凡て修業になるので、或は美術に就てモー少し智識が欲しいとか、また云々の事は平生心がけて讀んて置くべきものだとか、或は自分の短所はどのやうな所てあるとか、ドンナものは調べて置かうとか種々のことを考へる。また別段に考へないお孃さんてもいつか他人の話を聞く丈でそれ〳〵進歩して居るのです。また妻君になつた後でも他の事業に身を委ねた後でも、始終この樣なことから、間接に直接に敎育されて行くのです。

▲日本ても早晩、この樣な時が來るてせう。また來なければならぬのです。併し私の見るところによれば、いまだ我國の青年、令孃が自由に交際すべき地位にまて達して居らぬかと思はれるので、それよりも急なのは、若夫婦の交際であらうと思ひます。私なども友達の結婚披露に招待されて、新夫人に紹介される、が、それから後は半年經つても一年經つても少しも夫人の顏すら見ないことが度々ある。それは極端てすが、時々お目に懸る奧さんでも、ホンの御挨拶だけで、直ぐ引込んてお仕舞になる方が多いてすから、友人の獨身てあつた時代と、一向往來に趣味の加はるやうなことは少いのてす。私は若夫婦の交際が多くなりましたなら。各々の家庭に趣味を添ゆると同時に、自ら賤しい婦人などを交際の機關に用ゐるやうなことは少くなるだらうと思ひます。

▲現に私供四五人がこの趣意で、或約束をきめまして、

此間第一回を催したてすが、意外に成功したのてす。ツマり初めてすから、人數は大抵十人位ときめて互に食事に招び合ふのです、招ばれた時は勿論妻君同伴て、贈物などは持つて行かない事に、また御馳走も平民的にする筈て御座います。

秋風は身にしむばかり吹きにけり
いまやうつらんいもかさ衣　藤原輔尹

家庭の快樂

藤堂梅軒

○家庭の快樂と規律との關係

余は前に家庭の規律といふことに關して、呶々數百言を重ね、日本の家庭に於ては、痛く規律の乏しいことを責め、且つ切にそれを望みました。然るに今度は、それと品變つて、家庭の快樂といふことに付いて述べたいと思ふが、何だか前の規律に裏切りをするやうにも見えると、非難する人があるかも知れないから、一應説明の二つのもの丶、相互の關係を明かにして置こうと思ひます。

●規律と快樂との相反する點

規律といへば、嚴格といふことを意味し、即ち究窟束縛を意味することになります。ところて、快樂といへば、誰れが考へても、隨意、勝手、即ち自由といふことに異議はないてしよう。それは其の通りて、往こうと思ふ所へも往かれず、話さうと思ふ事も話されないでは、誰れも面白く感ずるものがあらう筈はない。どうしても規律と快樂とは、氷と炭とか、又犬と猿とかのように、互に相容れない敵同志になる譯のものであります。しかし、それ程に敵視する間柄てあらうか。余は多少又

●規律と快樂との相通ずる點

がなきにしもあるまいと思ひます。若しも、それ程に全く二つが容れ合はなければ、規律の正しい家庭では、毎も快樂の求められようもなく、又快樂を以て滿たせる家庭では、到底、無規律、不取締に終はつてしまはねばならぬ、ところが、實際に於ては、決して左樣なること

はなくて、規律の正しい彼の西洋の家庭などでは、規律の乏しい我が國の家庭よりも、深い濃い眞の快樂が、滿〻と充ち滿ちて居るに、どうも欽羨さに堪へられないばかりであります。して見ると、規律と快樂とは、決して互に敵となるものではなくて、反つて互に助け合ふものであることが分つて來ます。

さて、どういふ點が互に通ずるでしようか。規律といふことには、物事の整頓、淸潔といふ意味が含まれて居るので此の整頓なり、淸潔なりは、誰れも喜び滿足する所てあります。此の滿足といふことが、即ち一種の快樂といふことになるのです。規律と快樂との相通ずる點は、先づ、此んなことになるのでしようが、しかし、前にもいつたように、規律の正しい家庭ほど、快樂も亦深く濃いのが得られるのだとすれば、我々は右規律の外に特別に家庭の快樂を求むべき價値があらうと考へます

○家庭の快樂の殊更に求むべき價値

●二樣の滿足

前にも述べたように、規律は人の滿足を買ひ得るものてあるが、全躰、滿足といふものには、二樣あるものです。例へていはうに、何處かへ旅行しようとするに當つて、朝早く床を離れ、支度を調へて、都合よく汽車の出發時刻に遲れず乘り出したときは、心中に一種の滿足の情が起るに相違ない。それから其の汽車に乘り出して、幾時間か經て來ると、どうも怠屈無聊に堪へられない所へ、フト親しい朋友が乘り合して來て、暫く同行するといふとに出逢へば、其の時の滿足は、決して普通の滿足に止まるまい、即ち喜び滿面に溢るといつて、謂はゆる愉快といふものであるでしよう。能く考へて見ると、滿足には、普通のものと、生々とした活動的のものとの二樣があるようです。少々六しくなるかも知れんが、消極的と積極的との二樣があると思はれます。

●家庭の快樂と積極的滿足

そこで家庭の快樂といふことは、滿足の生々とした、即ち積極的のものであるといはねばなりません。快樂なるものは、どう考へても、普通の滿足と同樣には思はれ

ないてす。家庭の規律ては、只々家庭の滿足を買ふに止まつて居るが、快樂に至つては、規律以外に、別に之を造り出すものがあるので、即ちそれが家庭の快樂の殊更に求むべき價値のある所です。さればこゝに

●滿足と快樂との價値の比較

をして見ることが何よりの必要であると思ひます。成る程一家擧つて、滿足の空氣中に溫まることとは、最も得難いことゝて、而かも甚が幸福なる、ことてありましようが、家庭といふ立場から考へれば、それだけでは足りますまい。之を人間の身體に譬へて見ようならば、無病息災は最も幸福てはあるが、一方に又强健といふことがなければ、其の人が活動しません、世路艱難に當つても努力黽勉事に從ふといふ氣力も出ません、些の障害に逢つても、直に躰力も續かなければ精神も挫けて了ふてす。



家庭にしても、毛頭變つたことはありません。たゞ家庭が無病息災だけては足りません、どうしても强健といふことがなければならぬのです。家庭が滿足であるだけは、即ち無病といふだけで、强健を得ようには、どうしても家庭の快樂が必要なのてあります。快樂といふことは總て、元氣です、勇氣です、忍耐です、奮發です、決して無事平穩だけて留まるもの

てはありません。實に

●日本の家庭には快樂乏しといはねばなりません。日本の家庭では、兎角風波が多くて、適々善く行つて、平穩であるだけです。それだけに無氣力です、活動しません。狭つ苦しいです、直に怒り易く怨み易く、將た又嫉み易いのであります。余が家庭の快樂を此に物するは大に故あることです。これから段々と家庭の快樂の實際をお話ししようと思ひます

○衣食住の快樂

さて家庭の快樂とは、どんなことを指すのでありますか。家事といへは、差し當り衣食住のことを指すのであるとすれば、其の快樂も、矢張り衣食住のことに關係する譯であります。そこで先づ

●衣服と快樂との關係から、研究して行かうと思ひます。美服は疑もなく人間の快樂てしよう。世間には、布衣粗服を以て、人間の高尚美德だといつて、自ら許して居る人がある。成る程、奢侈といへば、人間の惡德だから、それで粗服質素にするのであるといふものの、爰に奢侈と質素との誤解を抱かないようにしなければならん。奢侈とは第一、金力の許さぬに衣を飾ること、次に富む者も、時と場所とを頓着なして美服を纏ふことてあります。例へば家政が火の車で、常に質屋と相談づくてありながら、流行の新服を拵へるような人も、又金滿家で働く時も、運動する場所も、學校の如き所へ通ふにも、何ても麗々と派手やかに美く絹布を以て包まつて居るような人が、即ち奢侈といふのだと思ひます。佛蘭西人は、世界中での最贅澤者といはれて居るが、其の家内に在る時、仕事する所などでは、極めて質素な衣服を着て居るといふそうてある。金力のある人は、宜しく許す限りの美衣溫服を纏ふも可なりてある、交際場裏て人目を眩惑させるも亦何の不可なることがありましようや。要するに其の分を守りて度を破らざれば良しいのであります。

之に反して質素といふことは、往々、吝嗇家の口實に利

用されることがある。隨分相當の金力があるに、輕衣暖服を纏うて身を保護することさへもせず、人前に出て見すぼらしい容姿をして自分で得意がつて居る人間もある。此んな人間に何んな快樂が存するのであらうか。如何にも質素を以て、自ら喜ぶといふてもあらうが、其は只々一の滿足即ち前に述べた消極的の滿足に過ぎないので、謂はゆる積極的の滿足、即ち快樂といふものは甚だ得れないのてあります。それて、世間の貧相な、見すぼらしい姿をして居る人を見ると、何となく色蒼ざめて元氣が乏しいように見受けられ、之に反して相當の身姿をして居る人は、活潑で



生々として居るように、見掛けられるでしよう。これだけ覿面に違ふのであります。

右のように話せば、余は立派な着物を勸めるように見られるであらうが、其の實は餘り勸め度くない方であります。善く考へると、美服は一人一個の快樂で、家庭の快樂ではないのです。眞個に家庭の快樂からいへば、一家擧つて、其の快樂を得なければならんのてあります。一家の主人のみが、美服を纏つて居るようては、決して家庭の快樂とはいはれないのて、主人夫婦は勿論のこと、小供もいはずとものこと婢僕等に至るまで、其れ〻〻相當に美服の快樂を與へ

るのであります。屢々道路で見ることがある、それは奥様や令嬢が、邊りを掃ふ程の美しい扮裝をして行くに、其のお伴をして居る女中や僕の姿が、實に見る影もない程に憐れなのがあることです。其の主人は如何にそれで得意であらうが、婢僕が餘り懸け隔つて居るだけに、決して其の家庭の快樂は、盡して居らぬと考へられる。我々通り掛つた人が、振り向いて、多少の不快を洩すだけ、それだけ其の家庭の內にも、不快の分子が蟠まつて居るだらうと思はれます。だから約めていへば、美衣美服必しも家庭の快樂にあらず、一家擧つてこれを着て然る後眞の家庭の快樂は存すと

●食物と快樂

食物の美味佳香なるは、誰しも喜ぶ所で、恰も美衣美服を喜ぶと少しも異つたことはありません。これも亦一家擧つて同樣に美食を喜ぶようにあり度いのです。主人ばかりが晩酌をして、さも旨さうに舌を皷して食事するは、最も怪しからん話であります。間々、主婦が、主人の留守の間に、竊に買喰をするといふに至りては、言語同斷、不埒極まることゝいはねばならぬ。全躰快樂は獨り自分のみで貪るよりも、衆と共にしてこそ眞の味あるものだとは、昔から書物にも記されて居ることであります。一家が團欒して、主夫婦、小供婢僕が、同樣の料理献立に舌を皷し腹を叩いて、そこで家庭の快樂が得られるのであります。たとひ、それが、山海の珍味でなくとも、湯氣のポツ〳〵と立て居る甘藷の椀盛りでも、一家團欒の食事なれば、實に溫い旨い快樂が湧いて來ます。

こゝに一つ猶出來得ることならば、主婦が割烹の法を辨へて居ることを望みます。尋常に有り振れた總菜でも、割烹法を心得て居れば、之を旨く巧に料理するから一家の快樂は一層深くなつて來るです。食物道樂の人は、動ともすると、外の料理屋に繁々足を運ばせて、どうも家の內で食事を共にしないようなことがあります。これには、其の主婦たる人が、割烹の心得のない所から、確かに原因したことであると思ひます。

●住居と快樂

住居を奇麗にして、玄關は嚴かに、座敷は立派ならんてとは誰れしも喜ぶ所でありま す。同じ我が家ならば、己れの金力で、思ふまゝの建築をしたいとは、金力ある人の樂しみとする所であらう。それほどでなくも、我が住居をサッパリと清く美しくして、暮したいとは、身分の有ると無しとを問はず、同じ望とする所でありま す併し、玄關や、客間や、胼た門前だけの美しいだけでは決して家庭の快樂は得られないです一家の者等が、夫れ〳〵、適當の場所を得んことが、第一に大切なることであります。主人、主婦、子供、婢僕の居る所が相當に美しく、淸くて、銘々が好みに從つて



或は花を挿し額を掲げなどして、そこて始めて家庭の快樂が得られるのであります。

それから一家全躰が打ち寄りて、面白く食事を共にしたり、或は打ち解けた會談をしたりする所の大房がなくてはならんてす日本の家は兎角座敷や玄關を立派にするが、肝腎の一家團欒すべき食堂が、不躰裁、不潔なのが通例であるは如何にも殘念なことであります。日當りの宜しく、庭の眺があつて、室内には生花や額面が飾られてある一室で、一家悉く、下男下婢さへも打ち集りて食事をしたり談話をしたりなどすれば、どれほどにか、家庭の快樂が得られるてあら

うか。若しや猶庭前をも取り擴げて、一面の芝生となし其處で一家が打ち寄りて、面白い遊戯をするやうならば、どれだけに家庭が樂しくあるであらうか。庭の片隅に珍花名草を栽ゑて、朝な夕な主人若くは主婦が小供等を連れて、其の花壇、盆架の間を徘徊するならば、どれだけか、小供の心樂しく父母の情嬉しくあるであらうか。ア、金力あるものは、此のやうな住居を設けて、一家全躰が、平等に隨意に快樂を取ることの出來るやうにありたいものです。

衣食住について、改良すべき點が數々あります。今日までの家庭が兎角快樂といふことに注意しないだけ、衣食住一般が不完全極まります。其の快樂が狹く只々主人を喜ばせるだけに止まつて居るのであります。衣食住の改良ばかりてはありません、衣食住の外にも家庭の快樂を得べき事柄が澤山にあります。

○衣食住以外の家庭快樂

或は花見、或は遊山、或は芝居見物などゝ、一家が打揃ひ、手を携へて出かけるのは、確かに家庭一般の快樂が得られるには相違ありません。これを除いては、外に快樂を得る道はありますまいが。決して、決して、幾等も外にあらうと思ひます。第一に

●一家の和合を圖る

ことであります。夫婦の睦じからぬは、最も惡いことでこゝに言ふまでもないが、小供一人でも、下女一人でも除物にせられて居る家庭では、どうしても一般の快樂は得られません。極言すれば、たとひ猫一疋でも、殘酷に取り扱はれて居らば、それでも旣に家庭の快樂が破れたものといはねばならぬのです。何でも一家全躰が、打ち揃つて、同じ待遇を受け、同じ平和な心がなくては家庭の快樂は迚も望まれようがないのです。次には

●主婦が一家の感情の中心となる

ことであります。主婦が家政の主任者であるとは、言はずも分かつて居るが、一家の感情の中心となることは、どんなことであらうか。即ち主婦が一家中での切手である外に、又最もの愛嬌者でなければならんことであ

ります。主人の心を慰めるも主婦、小供や婢僕を愛し氣を着けて遣るも主婦より外に及ぶものはありません。それて主人が外から歸つた時も、小供婢僕が戻つて來た時も、主婦が不在てあらば、何となく物足らぬ心地して、寥しく思ふ程に思はれます。それて見ると一家の快樂は全く、主婦一人の身に繋つて居るといはれる。されば、主婦は主人が外勤から歸り小供が學校から戻るときだけなりとも、精々家に居つて、それ等を慰め迎へるようにありたいものであります。次には



●一家に秘密の蟠まらぬよう

にありたい。秘密はどうしても、一家の中から全く滅却してしまふことは出來ないが、秘密があるように、殊更に戸を閉ち、口に囁くなどの行跡があつては、其の秘密の仲間に入れられなかつた者は、一種の不平が起るに相違ない。それが抑ゝ一家の快樂を破る基となります一家の眞の秘密は只々主夫婦のみの間に止まるだけて外の者等とは何もそんな關係を結ぶことはあるまいと思はれます。事情の許す限りは、成るべく、一家中を疏通し、何の隔もないように、したいものであります。次には

●食事後を利用す

るようにありたい。即ち食事の後に一家擧つての快樂を得るような工夫をするのであります。實際食事の直の後は、誰も業を執ることは出來ません。これを犯せば忽ち衛生に害が起りますから。そこで朝食の後には、主婦が、新聞を一同に讀み聞かせることであります。勿論これは家庭によりて、一概に左樣にする暇がないかも知れんが、これをなすならば、それだけ、食後の仕事を食前に繰り上げるか、或は朝起を少々早め、從つて朝食を早く濟ませるようにすれば、幾分かの餘裕が出來て來ます。世の中の日々の事變や用件を、大畧だけても一家中の者等が早く聞き知ることは、文明の國民では無くてならぬことであり、それに、主人だけでも、どうせ朝には早く自分で新聞を讀むから、それを食事後に人に聞かせるだけて、別に大した變りも面倒もないのてあります。

これと同樣に、夕食後は更に面白い小說などを讀み聞かせることも、食後の會談の中に加へれば良しいかと思ひます。併し其の小說を擇ばなければならぬは、勿論のことであります。靑年や少年の家族が多い家では、立志談に關する讀物も面白い。婦人の多い家では、毒のない害のない人情小說も差支なからうと思ひます。或は朝に讀み殘してある新聞の小說を、此の時に朗讀しても宜しいかと考へます。會談といふことは、何か中心になる種子が無くては、一同が耳を揃へることもなく、又それからそれと話に花の咲くこともありません。小說を讀んだ後て、其の批評をしたり、又其の中の事實を問題として硏究したりなど隨分色々の方法があるものです。

○結論

先づ家庭の快樂に關する問題や方法は、ザツトこんなものであります。余は決して金力のある家庭にのみこれを實行せよといふてはありません。各家相當に其の方法を盡すことが出來るのであります。そうして、家庭の快樂は、日本の一般の家庭では、一日も早くこれを得んことを望みます。余は前々から、日本の家庭に規律の

乏しいことを責めて居るが、此の規律に合せて、快樂の法を講ずることも責めるのであります。實に家庭は一方に規律を以て取締つて、他方には快樂を以て寬めることが必要であります。

終りに臨んで、家政の主任者に希望する事があります。それは先づ左の格言を味つてもらいたいのです。

1. Um solchen. Herren steht es gut,
der, was er befohen, selber thut.
人に命じた事は自分でも其れを行ふほどの主人こそが立派に遣りとげる

2. Die frau muss selber sein die Magd,
soll's gehen, wie es ihr behagt.
主婦が思ふように都合よくなりたいと望むならば自分で下女同様にならなくてはならん

此等の格言を味へば、これに依りても家庭の快樂は確かに得られると信じます。

立田川あらしや峯によわるらん
わたらぬ水にもしきたへにけり

秋の衛生

糸左近

古人は、「秋こそことにわびしけれ」とか、或は「聲聞くときぞ秋は悲しき」とか、色々人を淋しがらせたけれど、詩といふ思想に暗い我等には、「秋こそ殊に嬉しけれ」とか、或は「聲きく毎に秋は賑はし」とでも、改めたくなる、其の理由は、身體は有ち易くなる、食事は旨しくなる、勉強はし易くなる、其の他月の冴ゆること、菊や紅葉の美くしきこと、柿の熟すること、又は蕈の出ること、又は蚊の居ないことなど、一々數ふれば、實に樂しくて堪りませぬ、然るに其の蚊といふ小さい蟲めが、痩我慢にも、「己が居なくなつた其の後の態見ろ」と、罵しるさうですが、一寸癪に障はる言葉、けれども其の言葉を能々味はつて見ますと、此の上無い衛生の戒めかと存じます。

冴えわたる月は、八重葎茂れる我が宿にも依估偏頗なく照しくるゝ其の上に、そよと吹き來る涼しき風は、草

葉の露を吹き拂うて、時ならぬ螢かと思はしむる心地善さに、「見渡せば」の一句も下手なりに口吟んでゐると、例の蚊は居ないし、夜の深けゆくことも打ち忘れ知らず識らず肱を曲げてこれを枕とす樂み其の中に在りといふやうな調子になる、夜は愈〻闌になり、冷氣益〻加はる、驚き目覺むれば、華胥の國に遊んだなど、洒落るどころでない、身體は氷の如くブル〳〵と戰く、噴嚔は出る、頭痛はする、惡寒發熱、是に於いて、蚊はそれ見ろといふ一つてある。

抑〻身體には、目にこそ見えね、潛發汗といふ汗が、何時でも絕えず出てゐるので、溫まれば溫まるだけ、其れだけ多く汗が出て、それがために身體の老廢物を流し出し、且溫度を調へて、健康を保たしむるのである、然るに、假寢をして身體の運動を止め、而も冷氣に觸れてゐるから、物理の定則に依つて、身體の諸器官は縮まる從つて汗の出る孔も塞がる、さうなると、此の汗は出處が無いから、肺臟や鼻に行く、肺臟や鼻は、老廢物が一時に澤山來るから、どん〳〵追ひ出さうとして、頻りに咳嗽をなし、或は水鼻を流すのである、又體溫も外へ洩すことが出來ぬから、自然體內に積り、俄かに熱は三十八度乃至四十度以上にも昇り、輕きは感冒、重きは肺炎肋膜炎などゝ惱むのであります、斯ういふ人は、已れの罪を棚に上げて、秋こそ殊にわびしけれとかこつのであらう。

氣候は善くなるし、蚊は居なくなるし、どれ一つ、暫く無沙汰してゐた友達を訪ねようと、一泊がてらに行く、友も亦さう思つてゐたところであるから、能く來てくれた、さあ這入り玉へ、さあ逗留し玉へとの手厚い待遇隔ての無い中のことゝて、栗は言ふに及ばず、柿の實は二つ三つ四つ五つ六つ、何時の間にか貪る、次に松蕈をプン〳〵香はせての晩餐會、さあ召し上れさあ召し上れと、勸めらるゝがまゝに、數杯を傾むける、共に滿腹催眠、ために盡きぬ話も、又明日と寢に就く、稍經つと、腹部がシク〳〵痛くなる、續いて便意を催し來る、走つて厠にゆく、始めて悔む裏急後重、其の苦しみえも言へず、尙便所の隅に殘つてゐる例の蚊が、それ見ろといふ

二つてある。
栗は左程害のあるものでは無いが、柿は幾分の單寧を含んでゐるから、消化を妨げ、便通を害するものである松茸は固より何の功も無き、何れかと言へば、不消化の有害物である。夫れ秋は、夏の炎暑に弛んてゐた身躰を快復し、ために胃の作用も漸く鋭敏になり、從つて食欲が增して來る、是の時に當つて、或は栗或は柿或は蕈といふやうなものが、續々出て來る、てあるから、衛生思想の無い者は、我が身を忘れて貪り食ひ、遂に腸加答兒などを引き起し、ウン〳〵唸るのである、之を聞いたならば、大方誰でも、聲さくときぞ秋は悲しきと、言ふのであらう。

氣候は暑からず寒からず、しかも天が織りなす紅葉の錦は、紅々爛々として、二月の花よりも美くしい、そこで何うです、山遊びがてら蕈狩をしては、曰く善からうと、評議忽ち一決し、老若男女打ち群れて出懸くる、笑ひつ叫びつ、草分け入れば、有つたぞ有つたぞ、曰く松蕈、曰く淸水蕈、曰く鼠蕈、曰く何だらう、兎に角奇麗な菌、さあ集めて煮ませう、旨いぞ〳〵、美味津々美味津々と、飲み且つ食ふ、さうかうしてゐる中に、日もはや西山に傾かうといふ時、漸く家に歸る、歩いた疲れて、山路否夢路に入らうとすると、霹靂一聲といふ譯でも無いが、轟然として腹部に雷鳴を發す、續いて嘔吐下痢瀧の如く、殊に血液を吐く、續いて頭痛昏睡、身躰强直、流涎を發し、漸々脈が遲くなり、その苦痛譬ふるに物なし、一家枕を並べて呻き叫ぶ、躰質薄弱なるもの、又は老人小兒は、勿論歸らぬ旅路に赴むくのである、秋の落葉と朽ち果つるのである。

明治三十年の調査に依れば、我が國に菌の中毒て、八百七十一人中、死亡二百三十六名あつたとのこと、嗚呼恐るべきは秋である、否秋では無くて蕈である、否蕈でも無くて、豊太閤の所謂恐るべきは無鐵砲者である。

序でに、この恐ろしい蕈の鑑識法を、述べておくことも料理の指揮官に當らるゝ、婦人方のためには、無用なことでも無からうと思ふから、一寸左にかい摘んで、

●食用すべき菌

(一)空氣の通りの良い乾いた地に生えてゐるもの
(二)白い色或は褐色のもの
(三)質が緻密で脆い
(四)切片を空氣に晒すも變色しない
(五)指で壓し潰せば水の様な液が出る
(六)香氣が爽快である
(七)味が善い

●有毒な菌

(一)深い林の濕つた地に生えてゐるもの
(二)鮮やかな光りを有つてゐるもの
(三)質が軟かで多量の液を含んでゐる
(四)切片を空氣に晒せば褐色綠色青色などに變る
(五)指で壓し潰せば乳の様な液が出る
(六)香氣が惡い
(七)味が惡い

右は鑑別法の大略で有るが、之を以て完全無缺の法とは言へぬ、何となれば、「クマヒラタケ」の如きは、香も善く、色も鮮かで無くて、片切も變色し無い、すべて無毒の菌と、同一の資格を有つてゐる様にあるけれど、一つても食べたならば、猛烈なる害を及ぼし、大抵は斃るゝものである、要するに、菌は能く知つたので無い外は少しても食べぬが可い、否知つた菌でも、多く食はぬが何よりの上分別である、私の知つた人に、松蕈を小鍋に一杯一度に食べて、百日程病んだ例がある、であるから椎茸と同じく、香氣を助くる一種の薬味として、少量に用ゐる位にとゞめておくが善いと、余は思ふのてある。

右のやうに申しますと、秋は惡いやうにありますが、これは秋の注意すべき點だけを擧げたので、決して秋は惡い時てはありませぬ、前にも述べた通り、秋は身躰が爽快で、食物の消化が善いから、穩やかな日光に觸れて適度な運動をなし、滋養ある食品を擇んで用ゐたならば、夏痩も忽ちに恢復し、のみならず冬が來ても、其の鍛へ固めた身躰は、少しも困らぬてあらう。

新米の炊きたてに、雁か鴨の煮たのを副食物となし玉はゞ、啻に旨しいのみならず、滋養も亦多く取らるゝことてある其の他秋刀魚又はすべての小鳥類など、善い

物澤山である。
終りに臨んで、今一言申し上げたいのは、言ふまでも無く、秋は夏と冬との境向であるから、冷水浴の習慣を今最も怠られぬ時であるといふことである、夏は好んでも行ふけれど、金風一陣稻葉を訪づるゝ候となりますと、朝夕が非常に冷たくなるから、不知冷浴も怠るやうになる、すると冬になつてから、始めようと思つても、却つて感冒を招く恐れがあるから、遂に來年まで止めねばならぬといふ始末、返すゞゝも身躰の養生は、秋が最も肝要であるといふことを、夢な忘れ玉ひそ。

家庭の貯蓄

靄々女史

人間と生れて富貴になるがよいか、貧賤に甘んずるのがよいかと申せば、誰れしも貧賤に甘たやうとは思ひません、人間は富貴になッて衣食を足し、禮節をわきまへ、獨立して他人に重んせられ、高等の生活をして通りたいとは一般の人の願ひてありますから、その希望の第一の手段とする貯蓄の必要な事は三つ子も知ッた事て今更その事を諄々申す必要はありませんが、併し百の智識はあッても十の實行はむづかしいもの、ましてや貯蓄は人々の克己心、忍耐力、いづれも百折不撓の精神でなければ容易に實行が出來ないものであります、よしや自分一人は實行する氣でも毀譽褒貶の喧ましい世間の中に居て之れをするのは餘程の堅忍でなければならず、或は見る物、聞くもの食ふもの衣るもの悉く己れの慾望を誘ふ料となッて居る今の世の風習の中に居ては、豫てよい事とは知りながらも、みすゞゝその習慣の奴隷となッて仕舞ふのが多いのであります。ですから、これには堅い方法を立て、暫らくはこの方法の犧牲になる心得てなければ貯蓄といふものは出來ません、又々の蓄貯といふのは一個人でするよりは家庭でするのが効力が多いのであります、一躰家庭といふものは人間生活の根本であり、生活の本元であるから大小に拘らず、日々の經費といふものが中々少くはありませ

ん、ゆゑにその經費の中から工風して金を剩すといふ事は家の爲めにも國の爲めにも大なる利益でありますから、家の主婦たる人は是に十分の注意を加へなければなりません。

國の爲め（財布の尻をくゝれ）

先日或る學者の御話に日本は歐米と比較して國力が甚だ弱ひ、國民の富力が至つて微弱であるから、歐米諸國と迚も對等の御附合は出來兼る、實に殘念であると申されました、扨てその國力の弱いといふのは何でございませうか、と御尋ねをしまして、日本では御覧の通り近年陸海軍の力も大層增しまする、甲鐵艦なども莫大な製造で、陸軍も十二師團があるではございませんか、獨逸や、佛蘭西のやうな强大國と比較して少しも劣つてはゐますまい、又農業にせよ、工業にせよ、其他の製産業も日増に盛になるばかり、國力は進んで行くのではありませんかと申したら、その御方が大層御笑になつて、イヤそれが大變な大間違である、そんなものは見掛ばかりだ、如何に海陸軍が壯大でゐらうが、農工業が、進んで行からうが、肝腎な實力がなければ何で國が永遠に榮へて行かふ、論より證據日本には現在大變な借金があつて政府も國民も皆この借金に苦しんでゐるではないか、丁度借財家が美衣美食してゐると同樣で表面は大層エラそうであるが、內實の暮し向を尋ねて見ると皆んな頭痛鉢卷の境界だから仕樣がないと言はれました。成程段に考へて見ますと本統にそうに違いはないです。國民は隨分稼いでも外國へ取られる金が多くて結局今の處ろでは稼いだ御金を他國の人に持つて行かれて仕舞つてゐるのであります。恰ど底の拔いた財布に物つめるのと同じ事で誠に殘念な事ではありませんか、それからこの國力といふ事に就て段々御話を聞くと日本では國民の間に貯蓄といふものが蘧張り無い、これが第一國力の微弱な證據であらうと申されました。歐米では人間に貯蓄といふものがなければ人間たるの價値がないとしてあります、成程一寸商賣をしやうと思ふても資本金を他人から借りてせなければならんといふやうな事では何日まで立つても自分の頭は

上らない、てすから國にそれ丈の資本のないのは貧乏の證據ていくら働らいても身に附かない、一躰國が富むてゐるとか、實力かあるとかいふのは何てありません、皆銘々の財産があつての事決して陸海軍の力や、政府の歳入の澤山なのてはありません。そしてその財産は何から出來るかと申せば、國民の家々の貯蓄一つであります。いくら國民が骨を折つて働らいたからとてもうけたからとてそこに貯へるといふ事をしなかつたならばその儲けはその骨折賃は其日限りて跡に殘らない。即ち尻の抜けた財布と同じ事です譬へ儲けは少くても、貯蓄の方が少々づゝでも出來たならば。國の財産は段々と殖へて行くのです。ですから、これは政府の役人の働らきでもなければ學者や政治家の伎倆でもなく、唯家庭を宰どる家の主婦たる人の心掛一つであります。すべてこの貯蓄といふものは、外で儲け出すよりは内て儉約をして生活上の費用から絞り出す處ろにあるのでどうしても主婦たる人の日常の心掛一にあるのです。その心掛といふのは、一口に申せば財布の口をよく締りなさいといふだけですそれ故國を富ますのも、國を貧しくするのも主婦の腕前一つで、歐米の國の富裕なのは彼國の主婦の心掛がよいからであり、又日本の國



の貧乏なのは日本の主婦が家事經濟に迂濶てあるからと言はねばなりません。

家の爲め(收入一杯暮し一杯)

斯樣に一國の事から申せば何やら家庭とは緣が遠いやうに思はれませうが、一家の内の經濟を抑もから申す順序で、一生懸命に家を治めて行けば、それがつまり國の爲となるのですいくら收入があつても暮しに足りないやうては生涯家の榮へる目途はありません。人に依つては貯蓄を大層輕蔑して何も今日自分の腕で收入を得て、自分で活計して行けはそれてよいてはないか、今日は今日の風が吹けば明日は又明日の風が吹く米の飯と御天道樣は世の中のつき物だなどゝ仰しやる御方もありませうが、これはまあ論外で、斯樣な御方に貯蓄の御話をして贊成を得るまてには中々容易てないからそれを一々申しませんが中には隨分解ッた御方て貯蓄の心掛は十分に有りながらも、事情の爲めや、習慣上てこれを實行して行く事の出來ない方が多いやうてあります。譬へば月々五六十圓の收入のある御方は今の世間に隨分多うございませうが、その内で月々幾何かの貯蓄をなさる方は、十人に二人ともありますまい。その御方々に向ッて何故貯蓄をなさりませんかと聞けは、いづれも活計が一杯てとても貯蓄の餘裕はないといふだけであります。一躰貯蓄といふものは活計の餘裕があッてからするものでなくて、活計をきりつめてするのが本當の貯蓄てあります、餘裕があッてする貯蓄ならば誰れにても出來ますが、そのない餘裕から絞り出してするのが眞の貯蓄てあります。それに就て先日去る身分のある官吏の處へその親類の奧樣が參られて、いろ〳〵世間話の序てに活計向の事を御尋ねになッて失禮ながら貴婦の御家てはもう餘程御金が出來ましたらう、今に御家でも御建になるでせう。高臺あたりへ地面を御買になッたら宜しう御ざいませうと、聞かれますと、官吏の奧樣の言はるゝのに、イエどう致して私共の活計て、貯蓄なとの出來るものてすか。いつも月々一杯て暮して參るので、眞の其日ぐらし、どうかすると引足らない月もあります御存じの通り當節ては諸色は高

し、物は入る、御金の出來るなどは措いてまア借金しないのがよい位ですと答へられました。すると親戚の奥樣大きに驚ろいて、でも貴婦の方では月々百圓以上も還入るではありませんか、それで御金が出來んとはどうしたんでせう。まア私共では貴婦方の半分の收入もない位ですが、それで家族も相應に多い方ながら、どうにか遣つて行きます貴婦方では澤山お金が貯らなければなりませんのに一躰どうしてそう活計に掛るのでせうと尋ねると、その答に御覽の通りそんなに贅澤は致しませんが、毎月の物入はきまつてそれ丈けかゝるのですから、どうも仕樣がありません、まづ旦那の小費が少くも十圓は入ります、穿鑿すればこれも一々尤な費途ですから經濟の仕樣はありません、車夫に拂ふ金、下女も居れば書生も居ます、小兒も二人。老人にも相應のあてがいをせなければならない。彼是してその方に二三十圓は屹度かゝります。それから日々の雜用又旦那や小兒達の衣裳これとても唯世間並にするだけて少しも餘分な奢りに費ふのではありません、偶には氣保養もしなければならず、これも世間並み醫者を迎へる事もおらうし、器物の新調もすれば寄附にも出したし、それから家賃に月々二十圓づゝ引かれ仕舞へば殘る處ろがあらう筈はないではありませんか、少しは官吏の躰面も張らねばならずと一々聞いて見れば一々御尤で今日の生活の程度では無理もない譯で、これが今の世の世間並かと思へば一言もなく、成程取る方になれば取る丈げ物入も多い譯だと感心して引取りました。

雜用の經濟(目に見へぬ小遣)

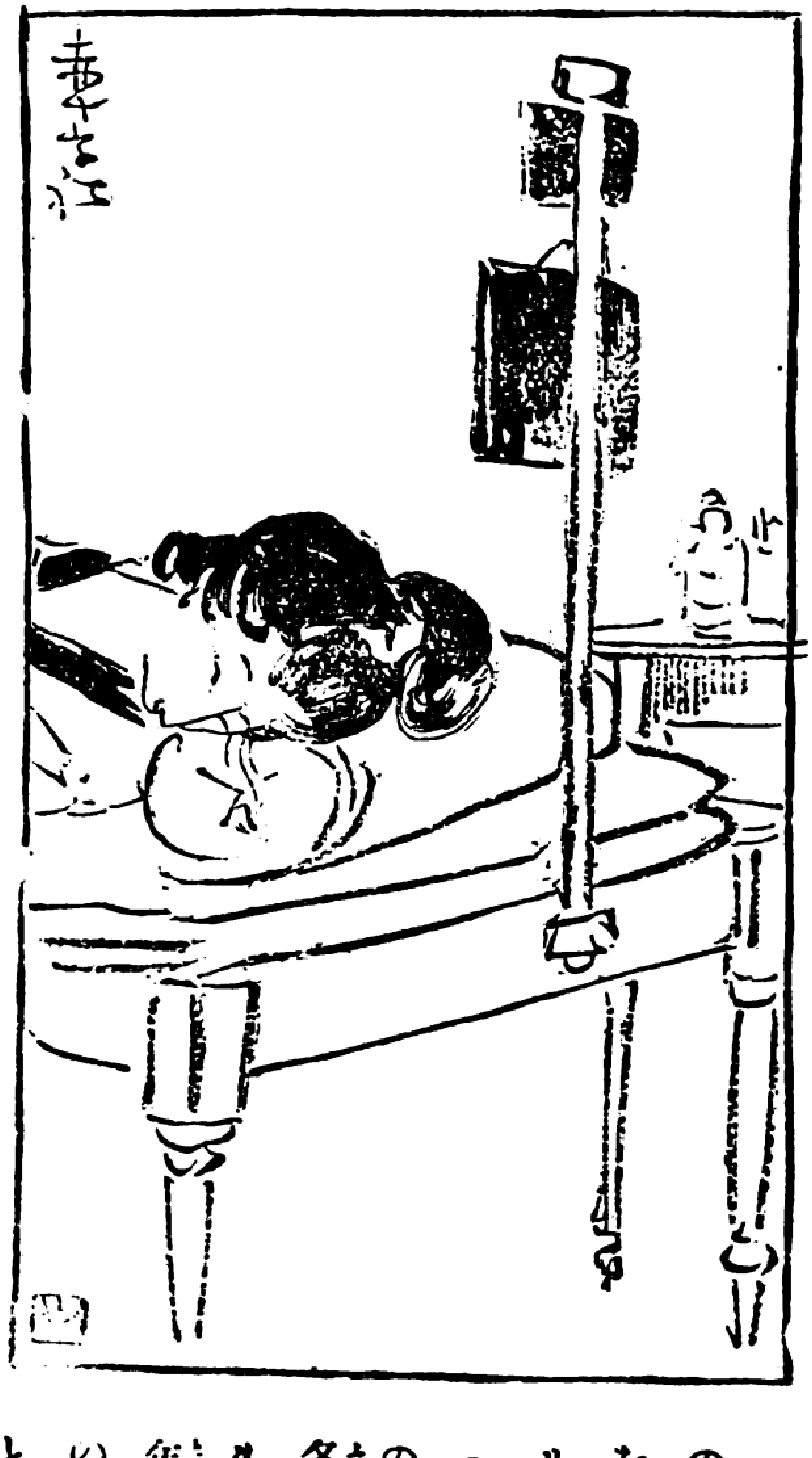
併しこれでは決して家の富む譯には參りません。百圓取つても二百圓取つても殘る處ろは無い筈です。けれどもそれは丸で考への無い經濟の仕方て。今日立派な活計をして居るとは言ふものゝ車夫や日雇取の其日暮しと少しも違いはないのです。フロツクコートを着て御手車に乘つて堂々と役所に御通ひになる歴々も牛馬の眞似をして働らく車夫や土方も同じ事ては仕樣のない話ではありませんか。一躰今日家事經濟上に世間並といふ言葉がつきますがこれが甚だいけません。世間

並といふ事を口實になさる御方が、活計は手一杯でやつと間に合せて行くものを、どこを何樣して貯蓄などして行かれませうと仰せられますが、その手一杯といふのがキット怪しいのです、これも躰裁上、あれも附合上、これも衛生上、あれも躰面上といふやうな事では貯金はおろか借財でもしなければ足りません。手短かく申せば、旦那が日々御喫りになる煙草の代は幾何かゝります、奥樣の髮結錢がいくら掛ります。又臺所で砂糖や、鰹魚節は月々どの位要ります、又下婢はどういふ風に御使ひになりますか。又御客來のあッた節にはどういふ風にして御賄ひになります。八百屋や魚屋の買方はどんな按排か、坊ちやんの翫具にはどんな物を買ッて御上げになります。それから躰裁とか躰面とか仰やる車夫の抱へ料、夏冬の衣裳、下駄や傘や、奥の間で御用ゐになる茶や御菓子どの位な品で月々これが何程かゝりますか、御寐卷の汚れた時にはどうして仕替になりますか、或は御敷物や毛布の類は新調の節に何程かかりましたか、又旦那さまは毎晩御酒を召上るか、その節には又どんな御肴をお誂へになりませうか、それから又他家から到來物のあッた節にそれを何樣いふ風に御處分になりますか。又他家へ遣ひ物をなさる時には何樣あんばいに御買上になりませう。家族何人の頭の上から足の爪先までを一々調べてその人々の身の上に月々どの位な御金がかゝるかといふ事を十分御考になッて見ると、成程入費は大したものです。けれどもその色々な入費を一々吟味して見て其の内から絞れるものを絞ッて見れば百圓の入費の中で二拾圓や二十五圓を絞り出すのは何の譯もない事ですが。あれも據ない事これも據ない事と一々理窟をつければ際限がなく金は消へます。ですから貯蓄をしやうといふには決して生活費の餘裕を當にしてはいけません。餘裕のない處ろをキリツメてそれから絞り出したのでなければ眞の貯蓄ではありません。

貯蓄の精神（髮結錢と煙草代）

譬へて見れば一週間に二度結ふ髮を月に三度とすれば一回が五錢づゝとしても四十五錢かゝる處ろは十五錢

て濟みませう、舶來の巻煙草日に二箱づゝ飲むのを刻み煙草にずれば月に百匁て濟みませう、三圓入る處ろは六十錢て濟みます。奧様か髮で三十錢、旦那が煙草て二圓四十錢、毎月消へて行く品物の中から金が湧いて來る勘定となります。何の僅かな髮錢結、僅かな煙草錢、月につもつて三圓にも足りないそんな吝な經濟が何にならうかと輕蔑なさる方もありませうが是の經濟は獨り髮結錢と煙草代とに止まつては居ません。一つの心掛は萬事に行渡ッて。アゝ本統に考へ見てれば日々消へて行く煙草錢にしても、これだけの金の絞れて見れば、高い税金の出る酒を呑むの



も馬鹿な話しと氣がついて三合飲む處なは二合にし、無暗に躰裁ばつて往復ともに呼び上げて乘ッた車も、以後は辻車にして片道だけは歩くとすれば。月に十圓かゝッたものも三圓で濟むやうになる、それなら、それへと經濟の糸は家の隅から隅まで筋を引いて小兒にメリンスの着物を拵へて遣るのも無益の費へと考へ。夏冬二度の新調裝服も年に一度とし、年によッては去年の物で間に合せるといふ按排になッて參れば、最早經濟も五圓や三圓の端金でなく、ずつと進んで月に何十圓といふ差いが出來て來るやうになります。これを銀行なり遞信省へなり貯へて置いて一年

に積り、十年に積ッて見れば何千圓といふ一大資本になッて家も建られれば屋敷も買へやう。こういふ譯で經濟の始めは極々僅かな、湯錢、髮結錢、煙草代のやうな少な事から段々と積ッて參るので、始め少しの習慣を破つて少々不自由な思をしたばかりで百圓の生活は五六十圓で結構立つて行くやうになるものですから、世帶をお持になる方にはどうか皆樣の毎日の活計の中から絞り出して。少しつゝでも貯蓄をするやうに御心掛になるのが第一です。必らずしも收入の多少には限らないのです世間で往々聞く事ですが、私の家では今三十圓しか收入がないから、とても貯蓄などは出來ないけれども、行々五十圓も取るやうになつたらは、月々十圓位な貯金はして見せやうなどゝ仰やるのが多うございます。けれども三十圓で貯金が出來ない方に五拾圓取れるやうになつたからとて決してそれが出來やう筈はありません百圓取るやうになつても同樣です、矢張三十圓ならば三十圓、現在取る處ろを儉しくして貯へて行くのが本當です

又是まで收入一杯に費いつけた方が今月から急に貯蓄をしやうといふ時には何だか物足らぬやうな氣がしていやでも遣いたくなるものですがそれはほんの一時で二三ヶ月も經てば段々金の積るのが樂になつて、これまでの冗費が却つて馬鹿らしくそうするともう經濟の眼が確かになつてどんな事にても無益に金を喪ふといふ患がなくなッて是までは浮の空で何に要ッたか譯のわからない所に消へ失せた金の逃げ道が歴々と分ッて來るやうになるものであります、

こうして一家の内が富貴となれば、つまりは國の富で、これまでのやうに日本は貧乏國だと西洋から輕蔑されるやうな憂もなく又折角働らいた金を空しく外國へ取られて仕舞ふやうな馬鹿な事もなく、結局國の繁榮の基となるのであります。から、どうぞ家の主婦たる方々はこの貯蓄といふ事に、滿身の注意を籠て戴きたいものであります

神無月寢さめてきけは山里の
あらしの聲は木の葉なりけり　能因法師

戸外遊戲

西川寒月

▲テンピンス (ten Pins)

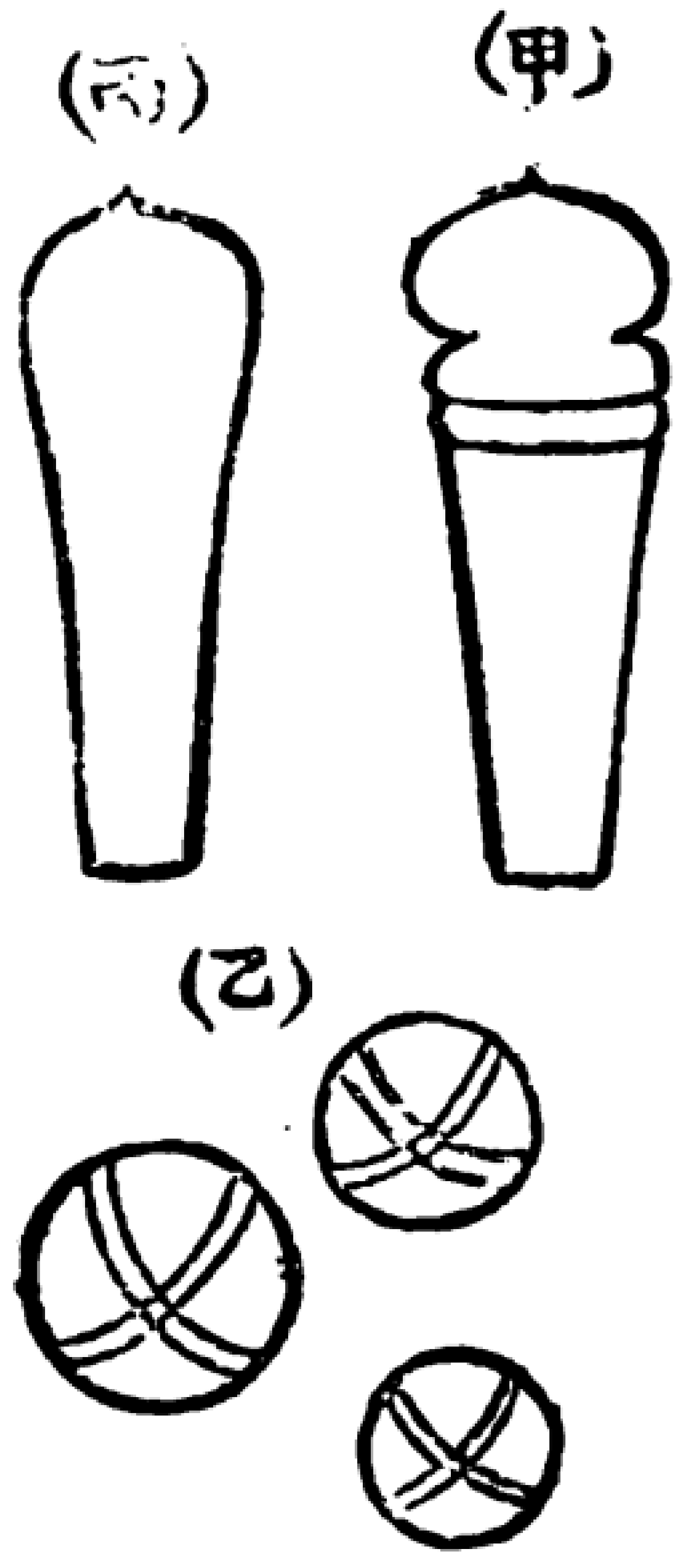
この遊戯は正式に行はゝ隨分八ヶ間敷ものなれども玆には畧して我が家庭に實際行はれ易き樣に説明すべし

遊戯場

遊戯は屋内にても又屋外にても行ふを得、只屋外にて行ふときは成る可く平坦なる所を選ぶべし平坦にして芝生地ならば之に越すことなし

器具

この遊戯に要する器具は左圖甲の如き木製のピン十本と乙の如き直徑七八寸位の木製の球三個とを要す



甲のピンは其形は如何樣にても差支なし、只頭部を太くし下部を小くして成る可く倒れ易くす

若し此の器具を得ること能はざるときは之に似寄りたる小さきものにて球も普通に持ち遊ぶ護謨毱にても差支なし

遊戯の方法

この遊戯は前方に立て置けるピンを木球を轉かして之を倒すと云ふが目的なり、其方法は幾種もあり一個の球を以て成る可く多くのピンを倒す方法もあれば、三個の球を以て十本のピンを悉く倒すを目的とするもあり、要するに木球を以てピンを倒すと云ふが此の遊戯の目的なり

其方法は遊戯場の一隅に圖の如く「ピン」を排列し他の一方より木球を轉送して此の「ピン」を倒すにあり、三個の木球を以て十本の「ピン」を倒すことを得は頗る伎倆に熟したるものなれども最初の間は六本乃至七本位は倒し得るも十

○ ○ ○ ○
○ ○ ○
○ ○
○

本悉皆は容易に倒し得ざるものなり

本來此の遊戲は玉突臺の如き平にして滑かなる長方形の臺ありて其上に「ピン」を立て奇麗なる木球をば轉がすものなれども器械も大きく從つて價も廉ならざれば皆く家庭に實行すること頗る困難なり、故に實地に於ては變則として椽側の板の間にてもよし又は座敷の疊の上にてもよく又は平坦なる庭にてもよろしかるべし

木球を轉がさんとするときは先づ木球を地上に置き中腰になりて兩手を木球の後下方に當て照準を定めて其方向に劇しく押し送るなり

此の遊戲の巧拙は一般の計畫と其照準とにあり第一、の球にて彼と是とを何本倒し第一球にて幾本か倒れたる其塲の摸樣により第二の計畫を立て其方向に球を正しく送る其照準と其方向に球を送ると云ふ其技倆とは即ち巧拙の分るゝ所なり

勝負

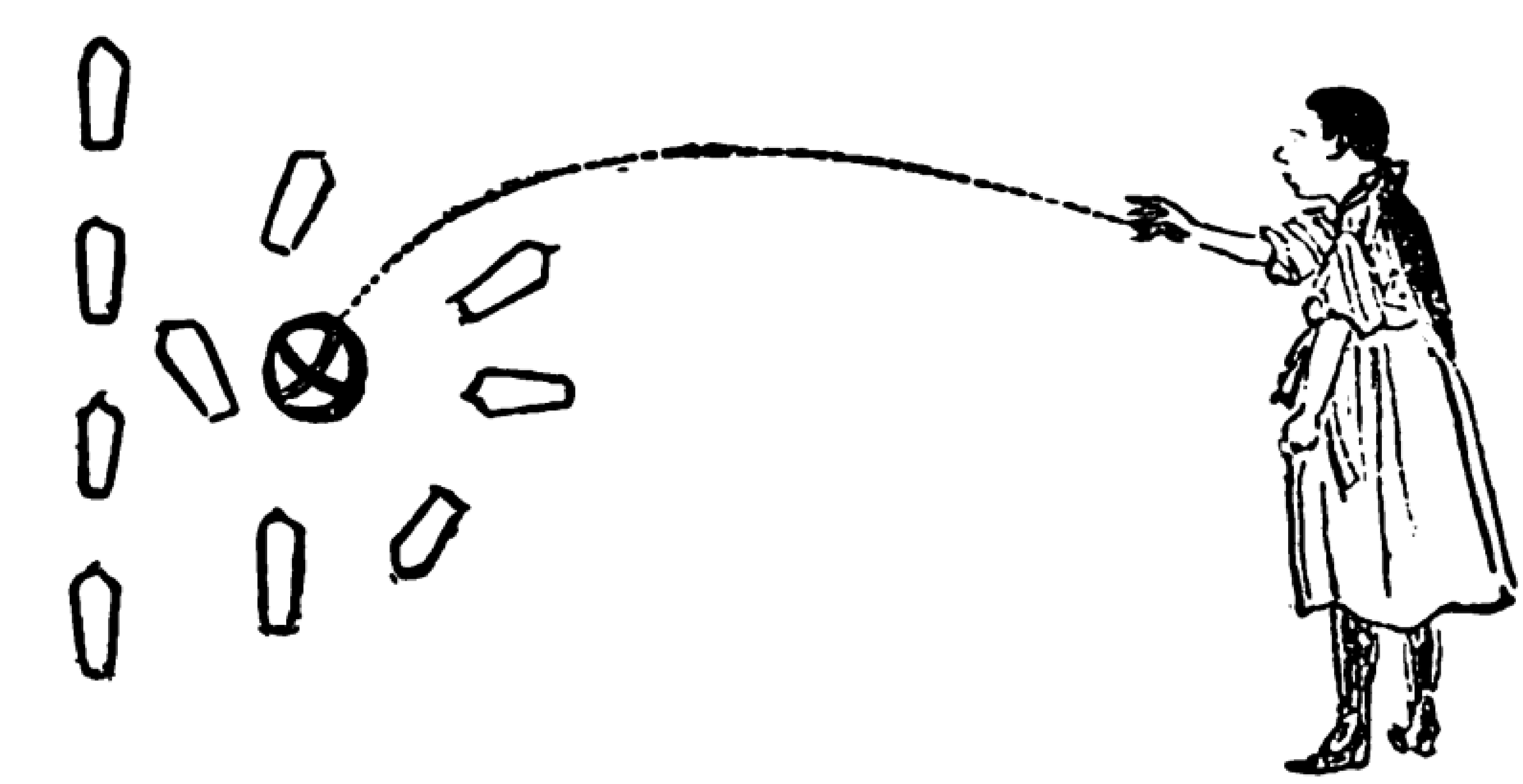
勝負の方法は數種あれども普通行はるゝものは

其一

源平兩組に分れ各組の者交〻出てゝ一個の木球を以てピンを倒し其倒れたる數を其人の得點とし全員倒し終れば各組の得點を比較して優劣を定む

其二

各組より代表者を出し三個の木球を以て「ピン」を倒し其倒れざる殘りの數を各組の得點とし其得點の少なき方を勝とし連續行ふ時は其點數の差を以



て優劣を定む

其三

各人は各獨立して組を爲さず採點表を造りて其優劣を定む、即ち左の如きものにて倒し殘りの數を示し三回

之を繰返して決勝す

姓名	第一回	第二回	第三回	合計	等級
佐々木	3	2	2	3	3
遠藤	2	2	2	6	2
大瀧	1	3	1	5	1
山下	4	3	1	8	4

注意　三個の木球にて行ふときは第一球にて倒れたるものは其儘とし續て第二球を放ちて混亂したる中に更に第三球を放つものなり故に第一第二球にて倒れたる「ピン」に妨げられ第三球は一本も倒し得ざることあり故に第一球第二球は第三球を顧慮して都合よく計畫せざる可らず

球を送るとき兩手の力均一ならざるときは球は常に力の弱き方に逸走するものなれば其加減をせざれば思ふ所に球の行かざることあり、要するに思ふ所に球を送ることを得れば其人は名人なり

「ピン」を排列しある所と遊戯者との距離は時と場合に依り一定せずと雖も普通は三四間を適度とす本式に演技臺にて行ふときは三十尺即ち五間を以て定法とすれども幼年者に餘り遠き距離は反つて困難にして興味を損ずる患あり

▲變則フートボール

（毬投戰爭）

この遊戯はフートボールに用ふるボールを以てするを第一とすれども若し此のボールを得ること能はざる時は大なる手毬を代用するも差支なし只なるべく柔かにして身躰に當りても痛さを感せざるものたるを要す

遊戯の方法

全躰の人員を源兵二組に分ち、兩組は適宜に兵を配置し陣を搆へて對向す

遊戯の方法は一個のボール（又は大手毬）を敵陣中に投げ込み敵方の者は之を地上に落さゝる様に手にて之を受け取るにあり、若し過つて投げ込まれたるボール

を受け損じ之を地上に落したる時は其れに直接關係したるものは敵に降參して敵陣に入り其組に加はるなり、故に一度ボールを地に落せば兵士一人を失ふ道理なり、斯の如くして兵士を失ひ殘員三人に至れば其組を負けとするなり

遊戯場

遊戯は危險なき限りは如何なる所にても差支なし源平兩組の距離は三四間を適度とす兩組の前には境界線を劃しボールを敵陣に投げ入るゝものは必ず此の線迄出て投ぐるものとす

兵の配置

兵を配置するには頗る巧拙あるものなり又兵の中には機敏なるものあり又比較的機敏ならざるものあり故に各組の中には大將を一人置きて萬事大將の指揮を受くるを利ありとす

區劃内の前方に主力を置くときは敵はボールを後方に投ぐるの恐あり、又主力を後方に置く時はボールを前方に投げらるゝの恐あり兵を前後に配置すれば中堅を衝かるゝの恐あり、故に前隊左右と中央に兵を配置し其內の勇將を遊軍として首尾相輔くるの方法に依り敵をして虛に乘ずるの隙なからしむるは尤も大將の指揮如何にあるものとす

修羅場

兩軍とも兵の配置を終れば源平より代表者を出して手拳を以て投擲の前後を定め勝たる方よりボールを投ぐるものとす

ボールを投ぐるものは何れも一方の勇將たらざる可らず宜敷敵の虛を隙ひ間に乘じて敵の不意を襲ふ丈けの伎倆を具ふるを要す、前に投ぐると見せて後方に投げ中堅と見せて前方に投ぐる等は戰士の巧拙にあるものとす

ボールを投げ込まれたる組はボールの中天に投げられたるを見るや其落ちんとする所に馳せ集まり全員一團となりボールの落下する餘地なき迄に密接して之を受け、受くるや否や撰手は其ボールを取り敵の虛に乘じて鋭どく之を投げ返し一上一下尤も機敏に動作して

勝敗を爭ふ其樣は双龍の玉を爭ふに似て頗る壯觀なる遊戯なり

又一法

全じ方法なれども此の方は敵方より投げ入れたるボールに當てられたるものは負傷兵として遊戯場より退去し漸々兵を損じて一組三四人となりたる時勝敗を決する方法なり

けさ見れば門田のおもにたつ鴫の
あとこそ霜のたへまなりけり

割烹實習

女子職業學校割烹科教授 井上善兵衛 講述
岡野をり江 筆記

▲煎鳥

鷄は皮ごと細かに切り置き、鍋に味醂一合、醬油一合、生酒五夕（鷄一羽の分量）を煮つめ、この中に前の切つた鷄を入れてサツト煮たて皿にあげ、さらに又其汁へ煮汁を加へ〔蓮根〕、〔芋〕〔午蒡〕などを煮る、但し蓮根、芋、午蒡とも豫め湯煮をして置くへし。又〔青隱元〕は湯出て横二つに切り、皿へ入れ、これは煮るに及ばず、まへの鳥の汁に醬油少量を加へ、隱元の上より注けて置く。以上とゝのひしのちさらに鍋に殘りし汁を煮つめてまへの鳥を再び入れてテリをつけべし。これを盛るにはまづ芋、蓮根、午蒡を盛り、鳥肉をもり、隱元をもる、青隱元なきときは銀杏の鬼皮をとり煎りて薄皮をむきたるを盛りそゆべし。

▲鍬燒鳥

鷄肉をうすく大片に切身にして、鍋に油をしき、これて兩面をいため置き、別に玉葱をこまかにきりて味醂、醬油（同割）、生酒（五勺）を加はへて煮あげ、皿へあげしあとの汁へ、まへの油にていためた肉を入れて味をつけべし。肉を皿へもりまへの玉葱を前盛にして侑む。

▲ずいき合

〔根芋〕の皮を剝き、二寸位にきり、竪に二つに割り、酢五勺（ズイキ大一本につきての分量）にて煮るべし、煮立しとき笊へあげ、水氣をとりしぼりて皿へあげ酢を

かけ置く、〔油揚〕ふたつにさき、白身をこそげて繊にきり、ざつと湯煮をし、下煮をして置く、〔胡麻〕は煎りてよく摺り、これまへの油揚のこそけし白身（醬油、砂糖にて下煮をして置き）を加へ、酢少量を入れてすりて裏漉にかけへし（胡麻三合につき砂糖六十目、酢一合、醬油三勺の割の鹽梅なり）。まへのズイキの酢をしぼり油揚とまぜてこの胡麻の中へ入れてよくあへるなり、尙これに枝豆をゆでゝはじき出し、うすかはをとりてこの中へ加へるをよしとす。

▲甘藷の鼈甲煮

甘藷を輪切五分くらゐにきり、メンをとりて皮をむき、酒一合、砂糖百目、水一合、（甘藷百目につき）を加へ、美濃紙を上にうかせてゆるりと煮るべし。

▲牛肉ドラ煮

牛肉一斤に豚半斤の割にて共によくたゝき摺りて、鹽、醬油、生酒、味淋、砂糖を加へ、饅頭形につくり、兩面を油にて燒き、さて鍋に煮汁を入れ、右饅頭につくりし肉をこの中にうつし、鰹煮汁、生酒、味淋、醬油等を加へて煮る、煮あがりしとき皿にわけ、のこりし汁へ別に饂飩粉を水にてよく解きしを加へ、どろ〳〵にして煮あげし肉を上に注けてすゝむ

▲隱元の伽羅煎

隱元の角をとりてよく洗ひ（切りてのち洗ふべからず）竪に三ツぐらゐにきり、鍋に醬油三合、生酒五勺、鰹節一つかみ入れ煮立て、水嚢にて漉し、さらにこの汁を煮立て、まへの隱元を入れ、煮あがしりとき味淋を加へ汁の無くなるまで煮るべし、唐辛子十本ばかり黑燒にして加ふ（以上隱元二升の割合なり）。

これは茶漬にも又はテリ燒、鹽燒の盛りあはせにも用ふ。

▲鮑のつけ燒

鮑は目のところへ庖刀を入れドン〳〵貝をたゝきて水を出し、卸し金の柄を殼と身の間へ入れつき放し、鹽にてあらひ、薄くそぎて串にさし、生醬油をかけて火にかけ、兩面を燒く、右三度ほど醬油をかけては燒くべし。

▲茄子の山かけ

茄子二十個の皮を剝き、亂切にして水につけ置き、鍋に湯を煑立て、其中にてゆで、直に笊にうつし、さて別に鍋に味醂一合、生酒一合、煑汁一合五勺、醬油一合を入れ右茄子をこの汁のなくなるまで煑るなり。別にツクイモ二十目、皮をむき、すり卸して摺鉢にて摺り、煑切三勺、煑汁五勺、醬油二勺を入れて鹽梅をつけ、右茄子を盛り上にこの摺薯をかけて侑む。

▲蛤の吸物

蛤を貝のまゝ水にてよくあらひ、鍋に入れ、薄煑汁を少々入れ、水を加へ、貝を入れ、火にかけ、煑立ちて口のあきしとき卸し、泡をすくひとり、再び火にかけ、生酒少量と醬油少々とを加へて吸物椀に盛る。

▲甘鯛味噌漬

甘鯛の頭は鰭下にて筒に切り、尾は子止(腹鰭)より切りすて、中骨は上よりさし身庖刀を入れて筒にぬきとり、味噌につけるなり。これを印籠づけといふ。

味噌加減は並味噌百目に付酒二勺、味淋三勺、醬油三勺をあはす、これは一夜漬の割合なり、其日即坐に用ゐるには醬油五勺にてよろし、燒くときは味噌を手にてよくこきとるべし。

▲さき甘鯛

甘鯛をひとしほあてゝ燒きて皮をむき、身を裂き、醬油一杯、味淋半分、酒半分、生姜しぼり汁をかけて用ふ。

▲生鮭鹽燒

鮭は一夜鹽をすべし、鹽の仕方は鹽をあて板にはさみ、壓石を置くべし。

▲あなご蒲燒

海鰻鱺は脊より庖丁を入れひらき骨をとり、太きは脊鰭をとり、横に串をうち燒くべし、汁は二度かけべし。汁の割合は味淋一杯、醬油一杯、これを三分に煑つむべし。

▲豆だこ

章魚をあらひよくぬめりをとり、さらにあらひ、水をきり、足一本づゝに切りはなし、さらにこの足一本を三ッ四ッに切り、鍋に煑笊をしきて煑る、煑方は番茶を煎じ二合入れ、蓋をして十五分間煑るべし、章魚よりは持汁

の出るものゆへ、蓋をとりて試み、その汁の七八合あるとき、酒一合五勺、砂糖三十目入れ、この汁一合五勺につまるまで煮て後、醤油二勺を加へ五分間煮るべし。隱元豆は水にてあらひ鍋にとりて湯出る、湯出ながら三度水をかへれば三度目にはやはらかになるべし。鍋を火より卸し、蓋をして五分時間蒸し、水を加へこれをこぼし、笊へあげるなり、アク引砂糖にてつよからぬ火にかけ二十分間煮るべし、其砂糖汁にしたし置く。(豆一升につき砂糖三百目、鹽五匁)
以上ものあはせて「豆だこ」といふ

秋の庖厨

春江女史

▲田樂

▲芋田樂　芋魁を能き程にきり子芋は大なるは二つに切り小さきはその儘蒸して水氣を去り串さしにして好みの味噌にてやくなり但し始めは白燒にして後味噌をつけ燒くべし

▲惣菜田樂　莢刀豆、莢いんげん　蕗、葱の白根、人參などいづれも湯煮し又灰氣多きものは灰氣を拔き水氣を去り油をひき又えその儘好みのみそにて燒くべし、又麩の類はざつと薄味つけて汁氣を絞りやくべし

▲牛蒡田樂　よき程にきりてそげてゆて水に漬け置き水氣を去りて串にさし油をつけて燒き後ち味噌やきにすべし

▲唐がらし田樂　若く柔らかなる青唐辛子を竹串に五つばかりさし胡麻の油をつけて燒き酒と砂糖少し加へたる味噌をつけて燒くなり

▲揚物

○伊勢ゑびむき身○海鰻骨切ほそきり○鰯細ぎり
○茄子皮むき厚切り○このしろの身叩きよせて
○紫蘇の實の穗一本づゝ
○ぜんまいゆてゝ二寸ほどに切よせて

▲海老の揚げ方　伊勢ゑび又は車ゑびの皮を剝き肉を搗き碎きて偖て麪包屑、細かにきざみたるあらんだ芹、及び鷄卵等をよき程に加へ食鹽と胡椒の粉をも合せて

右の品と肉をよくまぜ合せ大團子の如くまろめ、鍋にバタ若しくは豚の脂を沸騰させて、褐色になるまで揚げるべし

▲燒　物

○はも骨切胡麻の油にて揚げる。ねぎ味噌かけ

○いな拔き白燒　卸し生姜、生醬油

○きはだ鮪てん法やき

○子持鮎のいろ付やき。山の芋、唐からし味噌つけやき

▲飯

○鱧めし○松茸めし○鰯めし○初茸めし○鰤めし

○ごもくめし○栗めし○むかごめし

▲鯛めし　は鯛の身を洗ひたる汁にて飯を焚き、出來上りし上にてかねて身を簀の目に切りたるものを上より掛くべし但し薄清汁仕立て添ゆべし。

▲松茸飯　は米一升の中へ酒を猪口にて二杯ほどゝ同じ分量の醬油をいれて飯を仕懸け、松茸を短冊に打ちて飯の煮へ上る時に打ち入れて炊くなり、又松茸を味淋、醬油にて味をつけ置き常の飯を移す時にかけ交ぜるもよし

▲ごもく飯、飯を强めに炊き鯛の身を細く切り又さから麩を長めに切り各々味淋醬油にて煮玉子を煎りくわゐて蓮根をゆてゝ薄くきり鹽と味淋醬油にて煮餘まきいんぎんをゆて細くきり同じ樣に煮梅酢の生姜を細く切りいづれも飯の上にならべて出すべし但し魚類野菜とも時の物見計らひに仕立つべし

▲香の物

○冬瓜みそつけ○紫蘇の味しほづけ○茄子からしづけ

○山葵かすづけ○醍醐づけ○瓜季生だるまづけ

▲白瓜印籠漬　瓜のあと先を切り中實をくり取り扨蓼としその葉と生姜及び唐辛子などを押し入れ甘鹽かげんにして壓をつよくして漬けるなり、胡瓜も同し漬方にてよし七八日にて喰ひ頃となる

▲茄子芥子漬　はかり茄子の蔕を去り鹽をからめに三四日漬けざつと日に干し初め漬たる鹽水にて芥子をかき麴を入れよく煉りまぜ壺などに漬け込みよくおしつけて目貼をなし貯ふべし又辛を酢にて解き麴をまぜ醬油を入れて漬込むればこれは當坐喰なり

ビールの話

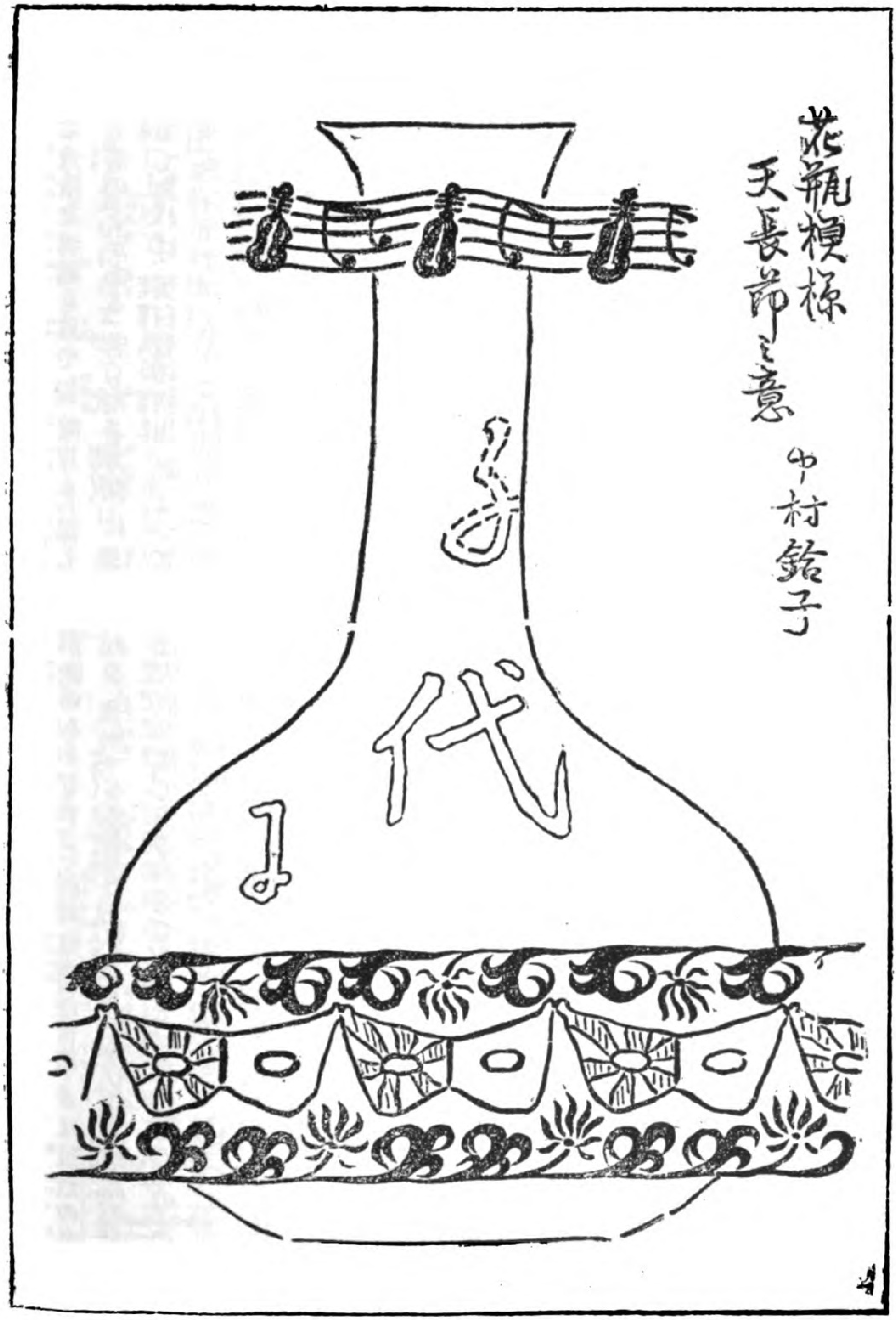
清水如水

酒と云へば殆んど男子の專有物となつて居る我邦の諸孃方に麥酒の話をするのは、チト如何はしき樣ですが、麥酒は酒と云ふよりも寧ろ飲料と云ふ方か適當な位で近時は漸く婦人の交際社界に愛玩せられつゝある樣になつた、また衛生上から云ふても適度に用ゆるのは、決して悪ひとてはない、夫れに麥酒はアルコールの含量が少なくして、種々の滋養物が溶解して居るから、婦人の飲料に麥酒を推撰するとは適當と思ひます

ビールは埃及の人が創めて製出した者だそーて、拜焉國の制度に據ると、麥芽、釀母、忽布及び水を用ひて釀造したものを云ふので、先づ濕氣を與へた大麥或は小麥を七八日間も堆積して置ひて、萌芽を發生させるのてある、そして此度は其萌芽を除ひて、大概五十度から八十度位の溫度で乾し上げて、其れを搗碎して水を加へて煮るのてす、すると其中に含まれて居る澱粉は、麥芽の中にあるチアスターゼと云ふ者の働きによつて、糖質に變じてチヨツト飴湯を稀くしたやうな甘味性の液汁となる其液汁を濾取つて、是に忽布即ちカラハナサウの花を投して、再び煮沸して冷却した者に釀母を加へると、糖質即ち麥芽糖の大半は、アルコールと炭酸に分解して、一種の飲料となるのてある、斯くして製造したビールは琥珀の樣な色合を以て居る、けれ共近時は黑ビールと云つて黑色のものが流行する樣になつた、又此頃旭ビール會社からは錦ビールと云つて、普通ビールと黑ビールの間位な者を製出して居るが其色の黑ひのは、全く原料の麥を焦がして使用するからてある、ビールは他の酒類に比べると、比較的釀造の少ない者て、中には蛋白質とか、ペプトンとか、又デキストリンとか云ふ樣な、人間の養ひになる極て善良な物質が含まれて居つて、前に陳た忽布と云ふ者に依て附せられた苦味は、實に健胃强壯の効能があるのてす、元來此忽布は、鎭痛、催眠及び、殺虫、驅虫等の効能を有して居る者てすことに神經痛などには特効を有する者であるから、異性なる麥酒を飲んだ後の醉心地は實に何とも言へないのてある、俗間て此忽布即ちカラハナソウを枕に入れて用ひると腦病か治るなどゝ云つて居るけれ

ども此忽布の代りにピクリン酸とか、蕃木鼈とか、コルシクムとか云ふ樣な危險な毒藥を以てし、阿片を混して酩酊性を附與する等のとがある、若し斯る方法によつて僞造せられた者であれば、蛋白質の折出によつて直に混濁を呈して來る、イヤまだ〳〵こればかりてはない、麥の代りに米、玉蜀黍等を使つて醸造したり、或は水を入れ、アルコールを加へ、其他魚屬の皮から製出した稀薄の膠質溶液などを以て醸造したともあるそうですが、是等は迚ても白人ては試驗するとは出來ぬ、それて素人ては先づ獨乙のストツクとか英のウロコとか我邦てはキリン、エビスアサヒの樣な信用のある會社の酒を撰ふに如くはない、酒の善し惡しを確むる上には學術上の理屈に基かねはならぬのは、云ふまでもないとであるが、只學術上のみを以て判斷しよふと云ふとは出來ないので、天から授つた此靈妙なる口中試驗に及第するとが第一である、即ち風味の善し惡しに重きを置かねはならむ、如何ほど衛生上完全な酒でも、風味を欠けば最早や嗜好品たるの價値はないのである、吾輩は下戸であるから此點になると何とも御話するとが出來ぬ、けれ共概してビールは瓶詰よりも樽詰の方が味いそーです、それは瓶詰のビールは破烈の危險があるから一々殺菌法を行つてあるけれ共樽詰のビールは大概其儘てあるからてあらふ、素人には泡の多いビールを、新鮮だから勢が宜いのだなど〻云つて居るが、其實余りに過剩の泡を吹き飛ばす樣な酒は下等品の證據てす、元來ビールは前述の通り、大麥に釀母と云ふ一種のバクテリヤを働かして、炭酸即ち泡とアルコールを成生せしめたのてあるから、充分其働きの終るのを待つて、それから瓶に詰めて、猶ほ念の爲めに强熱を加へて、殘りのバクテリヤを殺してしまうのである、處て僞造ビールは其手拔をやるから、瓶の中て矢張り發酵の働きを止めないで、段々と多くの炭酸を發生する樣になるのである、時によると瓶の栓を拔くと同時に半分過ぎも吹き出す樣な者があるが、是は下等品てす




花瓶模樣
天長節之意
中村銘子
代

表紙圖案



銘子

◉豚の料理法

○豚のつけ燒　豚の肉の赤身ばかりを大きく切りたるまゝ醤油と味淋と砂糖とを適宜に混たる汁漿の中へ大凡十時間程も浸し置き、食事の際薄く切りて燒くべし、其味の美なる事格別にて殊に辨當の菜杯に妙なり

○豚の味噌漬　摺味噌に味淋と砂糖とを加へ豚の肉を普通の大きさに切りて其中に漬しじよ〳〵になる迄箸にて掻き混し居れば味淋の爲に肉に味付て頗る美なり、これは數日間蓄へ置も差支なく大根、葱等加ふれば殊に妙なり

○鹽豚芥子酢　鹽豚を熱湯にて煮上げ小さく切り水にて洗ひて鹽出しなし酢に浸して食するなり味ひ淡泊にてよし

○ラフテと稱するは沖繩縣にて專ら貴紳の食用に供するものにて頗る贅澤の食物なるが其拵へ方は生豚を湯にて煮立て適宜に切りて味淋、醤油、泡盛の三種にて水は少しも入れずに煮上げるもの、一種言ふべからざる味出且つ泡盛にて防腐しあれば幾日にても蓄へ置くに差支なし。

○豚の心臓と腎臓　とを丸の儘にて、少しく鹽を混たる湯に入れて煮上げ、さし身形に切り、白味噌、芥子、酢、の三種を摺り混ぜたるものをつけて喰ふべし

○中身の吸物　豚の胃袋を裏返し鹽にて充分揉り臭みの去らざる迄水にて能く洗い、少しく鹽を混たる湯にて煮て上げ、薄く細かく切りたる上、煮出し汁漿に入れ、吸物若しくは酢の物にして喰ふべし

○うま煮　赤身の肉を胡麻の油にて煎り、小さく切り、これに蒟蒻と葱とを加へ、醤油、砂糖、味淋の三種にて煮付るなり、少しも油濃となく煎り鳥と同様の味となる

○頭及び耳の煮味噌　これは豚の頭、鼻、耳等軟骨多き處を食する法なるが、其拵へ方は熱湯を掛けて毛を取り、皮ぐるみの儘、少しく鹽を混ぜたる湯の中に入れて凡そ二時間計りも煮立てたる上、細切り摺味噌に酢と砂糖とを混ぜたるものをつけて喰ふべし、軟骨のブツ〳〵する處、格別の味にて酒の肴などに妙なり、又芥子を加ふるもよし

○氣管の吸物　豚の氣管を取り水に鹽を入れて能く洗ひ、湯にて茹で上げ小さく切りたる上、煮出の汁漿に入れ吸物となすべし、又酢の物として喰うも妙なり

○具手引　とは沖繩にて行はるゝ豚料理の名稱にて、大皿の中へ普通の煮出し汁漿を入れ、其中に豚の釜鉾、積入れ豆腐、玉子燒、椎茸、竹の子、南京豆、海苔卷中片の七種を入れたる汁漿なり、其拵方は豚の赤身と鷄卵とを擂鉢に入れて能く摺り、竹の皮にて丸く卷き、湯にて煮揚げ薄く切り、椎茸、竹の子、南京豆腐の三種は普通に煮締、椎茸は二切り、竹の子は薄丈け長に切り（海苔中片は沖繩にて製するもの）たるを加ふものなり、味よし

○足の味噌汁　豚の足の先を食するなり、拵へ方は先豚の足に微温の湯（凡そ手を入れ得る程の）を掛けて、爪と毛とを剥取り、皮にきばみの附く位迄に燒き湯に入れ、肉より骨の離るゝ位を程度に煮上げ、普通の大きさに切りて、味噌汁又は普通の汁漿となして喰ふべし、味ひ美なり

○豚汁漿　鹽豚の鹽出し（普通の大さに切りて、湯に入れ三十分間も煮上げ、水にて洗ふ）をなし大根、葱、人參、竹の子、油揚、茄子、里芋等を短尺若くは銀杏形に切りて豚と共に煮出し汁漿に入れて煮るべし

○豚雜炊　鹽豚の鹽出しを爲し、竹の子椎茸大根人參蓮等と共に細かく賽の目に切り、煮出しに入れ、磨立ての米と共に鍋にて煮るべし、頗る上等のおぢやとなるなり

史傳

三俠女

須藤求馬

武士の道は。禮義廉恥の四つのつな張りてこそ行はるれ、義理のためには家をも棄て、情けのためには身をも惜まず、一度承け引きたる事は、いかなる事ありとも必す行ひ、一度いへる言の葉は、いかなる由ありともつゆ違はざるを、武士の意氣とはいふならん、源氏平家の政の權を爭ひ、源 頼朝公、遂に、幕府を鎌倉の地に開き玉ひしよりこのかた、凡そ七百年余りの久さ、將軍家の興りもし亡びもしし事相つゞきぬ、その間、兎角に治まれる時は少くして、亂れたる世多しといへども、武士の道は、かへつてこの間におきて發達したりといふべきか、この道は、ひとり君臣主從の間柄に行はれたるのみにはあらず、世の中なべての風となりぬれば、遂に武士道てふものは、これを以て社會教育の基礎となすに至れり、

かくて、貴きにまれ、賤きにまれ、上にまれ、下にまれ、皆この敎によりて世の中をおさめ、皆この道によりて世間を渉れり、これによりて風紀をも保ち、これによりて社交をも開きたり、身分あり學問ある人は、つね〳〵義を行ひ、身分なく學問なき者は、いつも〳〵俠を爲したり故に、義を崇び俠を慕ふ風は、世の中に充ち滿ちて、世間の習となり、一たび承け引たる上は、身を思はず、所謂、身を輕ずること鴻とやらいへる鳥の毳毛の如く、只一筋に義理を重ずること富士の高根の如し、常に、生死を忘れて、事に從ひ意に相ひ許す、これはた武士道の華ともいふべきか。

されば當時、女子の社會に於きても、その行は、武士道てふもの丶華をさかせ匂ひゆかしき例、げに尠からず、いざや、その二つ三つの例をあげて、その一とはしを示

さん、如何に武士道の發達せしかを推したまひね。

今は昔、應永の頃、將軍旗下の士に内田兵庫助隆昌といふものあり、其が妻女は、鳴瀧三郎次郎淸長の娘なり、隆昌、勝定院將軍家(足利義持)の旨に違ふことありて出仕を止められ、西山の平岡と云ふ村落に追籠られてありしほどに、朝夕の設も既に盡きなんとするとき、此の妻弓矢を携へて立出て、野畠にあさる鳥を射留めて京に持行き、萬の物に交易て、日々の烟を立てけるが、或日、雙岡の邊にて、はしたなく將軍家に行會參らせたり、避くべき木蔭などもなかりしかば、據ろなく、路の側につゐ居たり、將軍家あやしみ御覽じて、何故に弓矢を持たるぞと問はせられしに、ありの儘に答申せし折こそあれ、向の山際に、山鳥一翅出來れり、將軍家あれを射よと宣へば、承はり候といふより早く射落したり、將軍家興に入らせ玉ひて、鳰鳥を求め玉ふに、凡そ二町ばかりを隔てたる田畔に白き鳥の見えけるを指さし玉ひ、少しく遠けれど、あれは如何と仰せらるゝとき、仕り候はゞやと申て、少し歩み出て、またこれをも射落しね、將軍家愛まどはして、祿賜はんとて物を召し玉ふを見て、祿には粟一斗を給はらば餘り有らんといふ、因て其の意を問ふに、今日は圖らず御成に參り會て、一日の活計を妨しと存ぜしに、御諚にて鳥二羽射止て候へば、一斗の粟に交易する程の物實を得たれば也と申す、其の理明かなれば粟を賜ひ、且つ夫の名を問はれしに、夫の知りたることに候はずとて言はず、强て問はれしかば、武士の妻に候、一度申さじと申せしものが、度重なればとて靡き申すべけんや、御暇給ひてんやと罷りたつ、行くこと一二町にして、又白鷺の群翔を見て、一矢に二翼を射留め、今日は幸よしと打笑つゝゆくを、將軍家はるかに御覽じ、あの女の歸る家を見認て參れと、跡を慕ひつゝ追はせられしかば、内田が妻とは知らせ給ひき、かくて後、内田も御前ゆるされて出仕したりけるときに、自然内田も、妻が射ることを能せしをも知て、妻にかゝることや有りしと問ひけるに、武士の妻たらん者の小鳥を射留たる、何の珍敷ことかはと答へて、紛しつゝ居たりけるとなむ、漢土にては魏の武帝の嬪

々公主の角弓を引て翔鴟を射落し、爾朱妃の長弓を引にて飛鳥を射留しと云ふこと、北史に見えたり、されど、これ等は、その射術の精しきに止まりて、その心根のゆかしきを聞かず、隆昌の妻其技既に弓矢の家に生れて武士の妻たるに恥ちさるのみか、その心術も、亦よく武士の道にかなひたりといひつべし。

今は昔、元和偃武の頃とかよ、北國中の大藩のさる家中に、濱田太郎有實といへる士あり、この者江戸在番の留守に、妻産をせしが、いまだ七夜もたゝず、産家の枕にかゝり居けるに、或る日、健かなる若き男、血刀を引提げ、産屋へ驅け込み、

拙者儀聊口論の上、堪忍ならさる儀につき朋輩を討てたちのき候處に、跡より追手かかりすてに危きところを切抜けこれまて參り候、御屋敷を見かけ御門内へ驅込候へども、折節御家來中も相見えず、申入べき便りもなく、追手火急に候間、不仕付ながらこれまて推參いたし候、拙者願ひある身に候へば、一トまづ命全ふいたしたく候、何分御圍ひ下され候はゞ、生前の御恩かたじけなし

と息つぎあへず申ける、妻女うけたまはり、私は、濱田某の妻にて、夫は江戸參勤致し留守にてこの間産をいたし、かくの如く取亂し居候、委細の儀は存ぜねども、この屋敷を見かけ御頼に候へば、なるほどかこひまゐらすべし、こなたへ來り給へ

と、かひ〳〵しく取りはらひ、我が凭りかゝれる枕の脊後へ入れおき、衣うちかけもとの如く凭りかゝり居ける、しかる處へ武士四五人どろ〳〵と押込、部屋の口へ立ちはだかり、只今この屋敷へ人を討つたる者をつけ込たり、早々これへ出し候へとのゝしりける、女房はねむれる目をひらき居直て、見れば各は武士方と見候ふが、主人の留守といひ、案内もなく屋敷へふみ込み、そのうへ女の寢間まで入込み無躰の事を言ひかけ給ふ、夫は小身ものゆゑ、漸く下女一人めしつかひ、江戸在番の留守の中、我は産後の惱みにて、かやうに枕もあがらず、わが身さへ自由ならざるに、さやうの人をなにとて隱し置くべきや、裏にも出口あれば若しや通りぬけた

るもしらず、それはともかくも、各眞の武士ならば、武士の作法は御存じあるべきに、女子ばかりの處へ、案内もなく押込み、そのうへ女の寢間までふみこみ。無禮のふるまひ。どなたの御家中にて御名はなにと申す御方にて候や、何とも法外なるしかた、不屆の至りなり、女なれども、武士の妻、そのぶんには成りがたし、一人もかへしはせじとありあふものにて鉢卷しめ、たち上り、小褄引あげ、承塵にかけたる長刀の鞘はづし、小脇にかひこみ立向ふ、追手の者ども大に驚き、皆一同に平伏し仰せの段々至極せり、我々心のせくまゝに重々の無禮、殊に御産屋をさはがせし段、無調法至極、一言の申訣もなき仕合、眞平御免下さるべし、といはせも果てず、いや〳〵それは御卑怯なり、無禮も無調法も眞の武士ならば、先き達て知るべきはづ、それを知らぬは實の武士にあらず、女子ばかりと知て、物取らんとてのことか、盗賊の惡名をうけるがいやならば、たちあがつて勝負しや、とせりかけ〳〵つめ寄すれば、いやはやいかやうにあふせ候とも、手向ひは仕らず、お園ひなきだんも見屆候、無調法の段は幾重にも御免〳〵と尻込して、はふ〳〵逃げて歸りける、漸くなりもしづまり、夜に入りければ、件の男を出し、今宵はこれにと申度は候へども御覽の通り女子ばかりの住居なれば、夫への義理、世間の遠慮、旁御留め申がたし、裏口より忍びて御出、いづかたへも御落着き候べし、と人を討ちし樣子、相手の名その者の姓名等をとくと聞き糺し、湯漬などしたゝめさせ、下女を出し門外の樣子を見せ、怪しきこともなければ、道の案内を敎へ、裏門より出しやりぬ、かの男も活命の恩厚く謝し、産婦の働きを感賞し、暇乞して出で行ぬ、その後下女へもかたく口止めして、さりげなき風情にてすぎ侍りぬ、天晴武士の妻也と聞く人嘆賞して止まざりけるとぞ。

今は昔、寶永年中、京にお穀といふ婦人あり、祇園華表の南がはに、茶店を張り、常に和歌を作りて樂しむ、一人の女を養ひ、名を百合といふ、百合女その母の爲す所を習ひ、また和歌を喜み、日々茜裙を着けて、茶菓を客に供し、閑暇さへあれば、筆を手にし、花鳥風月、見聞く

まゝに、眼に入らざるはなし、平生別に粧ひかざることをせざれども、生れつきての麗質は、楚々人をうごかし都下の年少志を動すもの多し、しかあるに百合女は、すこしも之を顧みず、時に德山某といふものあり、元旗本の子息なれども、事情ありて、都下に流寓しいたく落魄て、自ら口をも餬しかねたり、百合女これが爲に、心力をつくして扶助し、遂に之と相睦み、一女を生めり其のころ德山氏の宗家、嗣子の絶えたるを以て親族會議を開き、某を迎取り、宗家を繼がしめんとし、輿馬を具へて來り迎ふるに會ふ、某は百合女と共に歸らんとするに、百合女うけがはずして曰く、妾の郎君に侍する已に十年今更御離別れ申すは、きわめて情に忍び難し、されども、今や、晝錦の御身を以て、婦人を携へて歸り玉はゞ、世の人の指目をまねかん、別きてわらはは、路傍の楊柳、もとより郎君の手折るに堪へず、宜しく別に良縁をえらびて、琴瑟和合の道をおん謀らひあるべし、すなはち郎君の御名を全うするところなりと、某猶ほ之を要して曰く、吾れ客土に飄泊ひて、幸に飢渇を免れ今日あるを致すもの、皆そもじの力に頼る、然るに一旦富貴にして、糟糠の苦を忘れんは、余の心におきて、忍びがたき所なりと、百合女は益々いなみてうけがはざるにより、某も已むことを得ず、生む所の女兒を携え去らんとするに、百合女またいなみていへるやう、郎君は少壯の御身、更に、新人を伴ひたまはゞ、前途多福、今子なきも何の御憂ふべきことやある、妾は、もはや郎君に御離別申せば、誓ひて他所にかしづく事は致さじ、この女童を養育して、之を視る猶ほ郎君を見るが如くせんとす、さるをこれをも併せ連れ去らるゝ時は、何を以てか日を送らんと、某も深くその情を察し、遂に女兒を舍きて去りぬ、百合女は是れより、彌益節を持し、一意幼兒を撫育して、以てその生長を待ち、常に女にむかひていへるやう、そなたの父は士人なれば、そなたその身を大切にし、ゆめ自から粗末にすることなかれと、女既に人となりて、亦才情あり、爲めに佳き婿擇びて妻はさんと思ひつれど、いまた意に適へるものも見當らず、時に、池野といふものあり、眞葛原の片邊に假住居して、

書畫を賣りて生活となせども、貧にして自ら給するに足らず、人皆之を易らざるものなし、獨り百合女のみ、視て心に之を奇となし、終に女を以て之に妻はす、女もまたその夫の爲す所を見て、頗る書を善くし、夫妻終日紙を展べ墨を磨り、琴酒あひ娛み、釜甑屡塵を生ずるに至ることあるも、甚だしく頓着もせず、百合女視て大に喜びていへるやう、吾れ世にまた思ひのこす事なし、これにて安心して眠すべしと、幾程もなく、病みてみまかりぬ。

その後池野は、書畫を以て、名天下に喧傳せらる、即ち大雅先生といふ人是れなり、女は玉蘭と號し、先生と名を齊くす、當時、世の人之を歎稱せざる者なかりしとかや、誠に百合女の義侠にして、苦節なる、以て寡婦の敎と爲さまほし、

人生は概して泡沫の如し唯其内に石の如きもの二個あり即ち己れ自身の勇氣及び他人の困難に對する親切是れなり　コルトン

婦人と長壽

塚越停春

上世以來我が邦にて長壽なりし婦人の若干を擧ぐれば、まづ神功皇后は聖壽一百と算せられ、和比淸麿の姉にして大慈善家たりし法均尼廣蟲は七十の壽を保ち、聖武帝の光明皇后は年六十、嵯峨の檀林皇后嘉智子は年六十五、攝政道長の女にして、一條帝の中宮となり、美晢豐艷、累朝に母儀とし、福壽兼備し、後世椒房の貴盛を言ふもの丶毎に稱首となせる藤原彰子は年八十七にして、承保元年に殁したりき。其他歷朝の后妃中桓武の妃酒人內親王は年七十六、嵯峨の皇女にして淳和の皇后となり、美容貞婉、母儀の德を以て中表の則となりたる正子內親王は年七十一、文武の皇后淸和の母君にして、大政大臣良房の女たりし染殿后藤原明子は年七十二、淸和の皇后たる二條后藤原高子は年六十九、醍醐の皇后にして大政大臣基經の女たる藤原穩子は年七十、村上の麗景殿女御莊子女王は年七十八、一條の弘徽殿

女御藤原義子は年八十、後朱雀の皇后にして三條帝の皇女たる陽明門院禎子は年八十二、後朱雀の麗景殿女御藤原延子は年八十、後一條の皇女にして後冷泉の中宮たる二條院章子は年八十、關白頼通の女にして後冷泉の皇后たる四條宮藤原寛子は年九十二、關白教通の女にして同く後冷泉の皇后たる小野皇大后藤原歡子は年八十二、後一條の皇女にして後三條の中宮たる西院皇后馨子は年六十五、後三條の梅壺女御源基子は年八十八、白河の承香殿女御藤原道子は年九十一、鳥羽の賀陽院皇后藤原泰子は年六十一、崇德の中宮にして關白忠通の女たる皇嘉門院藤原聖子は年六十一、近衞の皇后藤原多子は年六十二、後白河の中宮藤原忻子は年七十六、高倉の女御にして後高倉院後鳥羽帝の母君たる七條院藤原殖子は年七十二、後鳥羽の中宮宜秋門院藤原任子(攝政兼實の女)は年六十六、後鳥羽の女御修明門院藤原重子は年八十二、同く承明門院源在子は年八十八、後堀河の皇后藤原有子は年八十、後嵯峨の中宮にして後深草帝龜山帝其他の母君たる大宮院藤原姞子は年六十八、後深草の中宮東二條院藤原公子は年七十三、後深草の女御玄輝門院藤原愔子は年八十四、龜山の中宮今出川院藤原瑄子は年六十七、龜山の昭訓門院藤原瑛子は年六十四、後宇多の西華門院源基子は年八十七、伏見の中宮永福門院藤原鏱子は年七十二、伏見の顯親門院藤原季子は年七十二、後伏見の女御廣義門院藤原寧子は年六十六、後二條の中宮長樂門院藤原忻子は年七十、後二條の尙侍萬秋門院藤原頊子は年七十一、後光嚴の後宮崇賢門院藤原仲子は年九十三、後圓融院の後宮にして後小松帝の母后たる通陽門院藤原嚴子は年六十九也。亦以て健康と人物との間に決して偶然ならざる關係の存するあるを察すべからずや。

啻に此等の人々のみならず、勇婦[illegible]か能く九十一の壽を保ちたるも思ふに偶然に非さるべく、鎌倉の尼將軍北條政子が能く六十九の齡を有したりしも同く偶然に非ざりしに似たり。水戶の儒臣小池友賢の母、駿臺の女にして、四書五經を暗誦したりし室陽は年八十八にして歿し、平將門の女にして姿色あり、將門の亡後遁れ

て奥州慧日寺の傍に菴りしたりし尼如巌も、八十餘歳に至り、水戸義公の老女にして、頗る經史に通じ、書及び和歌を能くしたりし村上節は七十三歳、浪華の女俠にして傳奇家の所謂奴小萬三好阿雲は七十五歳に達したりき。

阿雪は浪華長堀の藥舗にして家商たりし木津屋の女也妾腹たるの故を以て出されて同く浪華の富商たる三好某の養ふ所となり、十二三より書畫詩歌を善くし、絲竹管絃に巧みにし、風姿艷麗、素行磊落にして、任俠を好み、好て劍を撃ち、柔術を習ひ、又柳澤淇園に書畫を學べり。生平男子の柔弱を惡で、夫婿を求めず。常に侍女お龜お岩の二人を隨へ、以て無賴の徒を取りひしぎ、嘗て南郊蛇坂を過ぎて、剽兒四人に逢ふや、彼女は自ら二人を投じ、侍女お岩お龜亦各一人を投じ、遂に彼等をして驚き恐れて遁れ去らしめたりき。其健康想ふべき也。

而して彼女は嘗て一たび某公卿の公達に暱み語らひたることありしも、公達の約に背くに及び、乃ち怒て交りを絶ち、爾來再び男子に近かざりしと云ふ。年二十の時京に入りて長橋局に仕へ、女右筆となること五年にして、後尼となり、浪華天王寺畔の月江寺に住めり。而して其實家は楠正成の後にして、養家三好は、正慶の後なりと稱し、號して正慶尼と云ひ、毎年中元には二女を隨へて無緣の墓を祭り、或は豐臣秀次の爲に法會を設け、或は太閤秀吉の菩提を吊ひ、嘗て月江寺の開帳に驟雨の來ることあるや、乃ち人を市に遣はして傘千餘本を買ひ、以て之を參詣の老幼に頒ちたりき。其性行察すべからずや。

備前の人湯淺英の妻にして有名なる元禎常山の母たる瀧瑠璃は、賢婦人として人に知られたるもの也。亦七十二の齡を保てり。成田喜和の妻にして夙に夫を喪ひ、子喜起を敎育すること甚だ嚴に、文藝武技皆名士に就かしめ、遂に其子を良士となしたる福島氏は、年六十九を以て天明中に歿せり。儒士綾部道弘の妻にして豐後杵築の人たる小林志知は、亦賢婦の稱ありたるものなるが、年六十三にして正德中に歿し、伊藤東涯をして

『躬孟光之賢、而兼衛氏之筆』と稱せしめ、文墨を能くし、隷書を巧みにしたりし貝原益軒の妻東軒江崎初は、年六十二を以て亦正德中に歿したりき。而して高名なる近江聖人中江藤樹の母北川氏市女は年八十八に達し土佐の名士野中兼山の母秋田氏萬女は年六十六に及べり。亦以て婦人の健康が如何に大に夫婿の人物事業を成就せしむるに與て力ある乎、如何に大に兒孫の人物事業を成就せしむるに與て力ある乎を知るべきのみ。帝舒明の九年に蝦夷叛し、將軍上毛野君形名之を討じて軍敗れ、單身走て壘に入り、賊の爲に圍まれたることありき。形名計の出る所を知らず、昏に乘して窃に逃れ去らむと欲するや、彼が妻慨然彼に謂て曰く、『吁走れば則ち免るゝを得る乎、祗辱を取るのみ。妾聞く、君の祖先は海表を平治し、威武著聞せりと。今君難に臨で苟も免る則ち前烈盡く廢せむ。豈自ら耻ちざらむや。』と。因て飲ましむるに酒を以てし、夫婿の酣寝するに及び、彼女は親ら夫婿の劍を佩き、十の弓を張り、婢妾數十をして弦を鳴さしめり。既にして夫婿亦醒めて蹶起し、仗を取て進む。賊以爲らく軍衆猶多しと。乃ち圍を解て去り、遂に再び散卒を集むるを得て、擊て大に蝦夷を破れり。亦婦人の健康と勇氣とが夫婿の事業を成功せしめたる一例に非ずや。

關が原の役、西軍勢州阿野津の城を圍み、城主信濃守富田信高防戰甚だ力むと雖、衆寡敵せず、乃ち引て牙城に入りて自殺せむとし、將に城に入らむとするや、敵兵追至して入るべからず。依て鎗を揮て還り鬪ひ、分部右馬介來り助け、以て共に防戰に力を盡したりき。偶容顏美麗なる一個の若武者あり、緋威の鎧の中二段を黑革にて威したるを着け、半月を打ちたる兜の緒を締め、片鎌の手鎗を把り、城より出てゝ信高の前に進み、敵數人を傷け、更に進で挑戰せり。信高曰ふ、『如何に右馬介あの若武者は京兆(分部左京光嘉)か小性乎。』と。右馬介曰ふ『いや見知り候はず。左京が小性にては無之候。』而して彼の若武者の內甲を見れば、年比廿四五にして、化粧をなし、鐵漿を着けたり。右馬介戰の間に信高に謂て曰ふ、『あの若武者は眉を化粧し、齒黑を着け、爪紅を

差し候。必定女に候やらむ』と。斯くて信高は又敵軍の込み入るを門外遠く突き退け、之が引取りざまに彼の若武者の内甲を見れば、若武者近づき來りて『嬉しくも未だ討れ給はざりし。自ら是迄參り候は、御討死と來告げ候を聞き、其場にて同じ枕に討死せむと思ひ侍り、物の具して參り候得ば、斯くは御目に懸り候。嬉しさ申すも愚かなり。』と言ふ。視れば則ち其妻宇喜多氏安心が女なりき。依て與に相伴ふて城に入りたりと云ふ。是亦婦人の健康と勇氣とが夫婿の事業を援助したる一例となすに足るへき也。

江戸三世將軍が乳母春日局齋藤氏福女（内藏助利三の女、母は明智光秀の女也）は、年六十五にして歿せり。東照公家康の妾お茶の局飯田氏は年八十三にして歿せり同く英勝院太田氏お梶の方（新六郎康資の女）は年六十五にして歿せり。又嘗て『蕣に釣瓶取られて貰ひ水』と歌ひ、『千なりも蔓ひとすじの心より。』と歌ひて人に知られたる加賀の千代女（福島氏）は年七十四の齡を有ち、同く有名なる女俳客の一人たる渡會園女は年六十三、久田捨女は年六十五、武田信玄の曾孫にして詩及ひ和歌を能くし、武州落合村泰雲寺の開山として高名なる尼葛山氏了然は年六十六、京都の女詩人小田垣蓮月は年八十三、兼山の女にして著名の女丈夫野山婉子は年六十六、近衞家の老女たる勤王家村岡局津村氏は年八十八、杉本光貞の妻にして杉田望一に學びたる女俳家美津女は年七十五、赤穗の堀部武庸の妻にして萬苦を忍び千辛に堪へ、以て主家の復興を請ひたりし妙海尼幸女は年九十一、祇園百合の女池大雅堂の妻として名高き徳山氏玉瀾町女は年七十八の壽を有し、共に健康と成功との相依るべき證左を示しつゝあるを見る。此等を始めとして英雄豪傑の母に健康の人多く、長壽の人多きは、今一々之を數ふるの煩に堪へさる也。要するに健康があらゆる成功の基礎たり、總ての福祉の母たること、男性に於て然る如く、女性に於ても亦然るを見る。今後の婦人たるもの、攝養術に對して更に大に猛省する所なくむばあるべからさる也。益軒貝原篤信は曰く、『養生の術を行ふ事、天地父母につかへて孝をな

し、次には我が身長生安樂の爲なれば、不急なるつとめは先づさし置きて、若き時より早く此の術を學ぶべし。身を愼み、生を養ふは、是人間第一の重くすべき事の至りなり。』と。又曰く、『萬の事、つとめて止まざれば必ずしるしあり。たとへば春種を蒔きて、夏よく養へば、必す秋ありてなりはひ多きが如し。若し養生の術をつとめ學びて、久しく行はゞ、身強く、病無くして、天年を保ち、長生を得て、久しく樂まむ事、必然のしるしあるべし。此の程疑ふへからず。』と。亦自ら眞ならずとせず

癖のいろ／＼

無くて七癖と諺にもいふ通り、癖に多きものの、わけても娘の時代などは此癖の多きものあり。一つ二つ注意の爲めに取り出して云へば

（一）多言。此は說明する迄もなし。言と云はれぬ樣注意したまへかし

（二）無言。此は前と裏腹ながら、やはりつゞきなり。言はでもの時には言も其ちのけにて、言ふべき時は啞となること注意す可し

（三）不行儀不作法。客來の時など、母上の顏をしかめさす樣の事・謹む可し。或は母上か、花ちやんや、此お鉢を戸棚にしまつておくれ。など仰しやる時、無言にて芋虫の樣にふりつとふくれ、罪もない障子ながわたりとしめる、樣の事ある可からず。斯る時には部屋に行きて、鏡を見玉ふ可し。吾顏の愛らしきや否やを。

（四）無遠不遜。尊敬は父母に限らず。近頃の娘方はやゝもすれば老人を嘲笑する癖あり。老人を嘲笑したりとて、己が身分をあげるにあらず。謙遜は人の別して女の美德といふ事を忘れ玉ふな

（五）法外。此には色／＼あり。金使ひの法外なること。言葉の法外なること。此は物事の話をするに、眞實に似かけて話す事にて、座興にはなれど、信用をおとし、人品を賤しくするものなり。

（六）無分別。此か餘程あぶなきものなり。分別盛といふ四十にはまだ中々間かあるとも、其迄とても片時も分別なくてはかなはぬ事なり

（七）嫉妬。此は女の大敵なり。娘の頃にては、誰某は標致が好い、妬ましひ、誰某は友染の振袖をもつて居る、妬ましい、誰某は學校で一番、妬ましい、ヒアノが上手、妬ましい、など〻此敵に始終襲ふて來るものなり。人品をさけ、人の心をにかくし、言語擧動を卑劣にし、募り／＼ては身の破滅、家の名なれ、人の大害ともなるものなり。深く恐るべきものなり

文苑

秋のすさひ

鹽井福子

紫式部は、溫良恭儉、よく聖賢の敎を守り、淸少納言は英俊奇拔、よく男子を凌げり。此れを學んで達すれば、あつぱれ莊子ともなりぬべし。かれを學んて達すれば、あつぱれ孔子ともなりぬべし。もし達せざれば、一つは巧言令色、紫のあけを奪ふの感あらずやと疑はれ、一つは輕卒お轉婆、狂人に類せざるやなど思はる。而して達するは固き事よ。

馬耳東風、若き女のみめ美つくしき中には、たゞみなり

を飾る事のみ心にみちくて、他の事は少しも心に入らぬげに見らるゝよ。「婦女子よ衰へ易き容色を補はんために、精神を磨け、汝の臨終まで永く存するものは只精神のみ」と、オビダスの云ひたるを、一語千金の中に拾ひたるよ。貪慾なるものに正理を說くも、小人に聖人の敎へを說くも、心にごれる人に萬づを說くもまた心に入らざるべく。學びの道のかへるさ、何を考ふるともなく、ぼんやりと步みたるうしろに、あの人のお說敎を聞くのは、いやよと云ふ聲の、ふと耳にひゞきぬるに、思はず省みれば、海老茶の袴をはきたる人なり。何れの學校の生徒にや。釋尊もかやうの人は度しがたかるべしと、むづかしうこそは察せられたれ。

西洋のをしへは、少しにても知りたるを知りたりと知らするが、學びの道かと、英學佛學する人にて感じられたるに、己れの伎倆をかくし得るは、大なる伎倆なりと英人ロシフュールドの云ひたるが、西諺となりをるよしなり。

己れの云ふ事のみ云ひて、人のする答へは少しも耳に

入らぬげなる人あるよ。

風呂に行きたるに、四五人の女子、芝居の物語りかしがましく、おきたる桶も目に入らで、しきりに流し場の無き水をすくはんとなしをりき。中にはやう〳〵十歳になりたらんかと覺ぼしき子まで交りて、こつさに役者を評しをりたり。朱に交ぢはるは恐ろしきもの哉。

何處の家の飼ひ犬にや、我れに從ひて十町ばかり來りたり。足もとに立つもうるさければ、じやれつきもせざれば、をかしき犬よ、主人とどり違へたるかなど思ひつゝ行きたるに、やがて何處の犬か、狆か、ほえかゝりたり。如何にするぞと歩みを止めてたゝずめば、從ひたる犬は、わんとも云はず、泰然として靜かに歩みをるに、ほえかけし犬もはづみを失ひてか、そのまゝ道をゆづりて去りたり。犬の中にも大人あるよ。汝が主人は如何なる人ぞ、我れは似もつかざるべきをなど思ひつゝ行くほどに、いつか、その犬、見えずなりたり、嗚呼主人は何處如何なる人にや。

此の頃うつりたる家のほとりの稻荷に、狐すみをるよしうち聞きて、何となく氣味わろく感じられたる故か、一夜の夢に、狐に化かされたる夢を見たり。そのあくる夜に、また、狐にとりつかれたる夢を見たり。何となう心地あしくて、母に告ぐれば、夢は五臟のつかれなり、心になとめそ、殊に稻荷の狐なれば、人をたばかる如きあしき業はあるまじ。神經なれば、思はぬがよきぞとの玉ふ。我れもしか思へば、思ふまじと思へど思はれ、思ふなとの玉はすも思はずには居られじなど、老いたる母にかこつも我れながら心なきかな。その夜、また狐の子の數多、前に並びをるを夢みたり。ます〳〵心地あしく思へば、もし我れ不思議なる病にとりつかれもして、つねの心を失ひ、死ぬるをも忘れて、祖先をけがすやうの事もあらば、殺ろし玉へ、必す殺ろし玉へ、いたはりおぼして、ながらへさせ玉はでよ。殺ろして耻をかくし玉ふが、中々に情なり。誰れにても必ずよなど、人々にたのみ聞ゆるを、おろかな、さやうの事に心をなとめそ必ず忘れよと、母にも兄にも叱られ、人々にもさとされぬ。今宵もまた同じ夢をば見るかやなど思ひつゝいね

けるが、其の夜、隣りの家の鷄二羽、狐に捕らへられたりと聞きぬ。ぞや、稻荷のにてもさやうのわるさするに我が夢ますくあやしなど思ひて、氣味わるく、二更すぐるまでいねもせざりき。折りふし、我が家の鳥小屋の方にあやしき物音す。不思議やと思ひ、兄を呼び起し、燈火かゝげて、其處此處しらべたりしに、かこひし竹の二本ばかり破ぶりありて、あやしき足あとさへありたり。隣りにも、其の夜來りてうつしたるねぐらのあとをさんくにさぐりたるよし聞く。さてはその歸へるさなるべしと恐ろしき心地して、犬だも飼はまほしくおぼえたるが。何のおろかや、人にありながら、狐など恐るゝ事やある、かやうに臆病にてこそ妖魔もみ入るべけれ、我が心、勇氣盛んならば、何か入るべきいとまあらん。よし入らば入れ、天にもありぬべし。命にもありぬべし。もし、世にさやうの妖魔あらんには、佛もありぬべし。あはれ我が父君、佛になりませし我が父君、君が子に耻なく、亡きおんあとを、けがしまゐらさぬやう守り玉ひてよと、心にいのりけるが、それ限りまた夢をも、ゆめ、見ざりき。

十歳に足らぬと思ふ少女の、雨のふる日、左の手に何か竹の皮包みを風呂敷にもつゝまず ひつさげ、右には盆に豆腐の奴に切りたるを載せたるをさゝげ、左の脇に、傘の破ぶれたるを、かゝへもちたるが、酒屋に入りて、なほ味噌を買はんとす。顔を見れば、さのみくるしげもなく、耻かしげもなし。何者の子にや、早う、世のくるしみにも、耻にも堪へたるかなと思はれたるよ。

北野神社の祭禮とて、あたりにぎはしかりし中を行きけるが、或る車夫、子供のほうづき屋に向ひて、早く行きて見よ、まだほうづき屋は一人も居らざりし、商人にうそはつかぬ、必ず賣れるならんとすゝめ居たり。何となく身にしみて、買はまほしかりしかど、あやにく財をもたざりき。

傘の柄もりて、單の衣に通りぬ。田舎にはよろしきものあらじ、道すがら買ひ來れよと云ひつけられたれど、求むるがうるさくて、其の日は買はざりき。翌日も降りたり、同じ事云はれたれど、なほうるさくてかはざりき

その翌日もふりたり。しのをつく雨に三日をうたれたれば、骨さへ折れて、裂はいよ〳〵ひまなくこぼれぬ。流石に今日こそはと思へど、なほ買ふもうるさし。柄もりもうるさしなど思ひつゝ、半ばつぼめて、なほ傘屋の前を過ぐる事二三軒なり。遂にまたうるさくて往きには買はざりき。四日めなり、如何なる雨もはるゝならんと思ひたるに、いよ〳〵はげしく、しのをつくばかり、今宵は如何なる變人もかへるまじ。かつてたのみおきたる人の許にとまり來んかなど、家には云ひあへりと聞くばかりなるを、また遂にうるさくて傘をも買はでかへりぬ。これはうるさくてやめたるなれど、物萬事、足らずに足るものぞと推せられたり。

日來、めでたしと思ひ居る人の、あしき名立ちたるぞあやにくなりや。あはれ、かしがましき世や、空事なるべし。伊勢より、女の鬼になりたるをひき來りたるなどの類ひにやあらん。世には一犬の虚をほゆるに和する萬犬にはあらで、人もあるよなどと思へど、流石に心には疑はれ、みちのくにありと云ふなる名取川、なき名におれかしと祈るも何の心にか、見知らぬ人を。まこと、無き名なれば、中々に口惜しからず。實事なりとても、人の名立つるほどにはあらじと聞けば、少しく心もすみぬ。さやうに云ひくるゝ人は、衆に群ぜぬ人とたのもしくさへおもはれぬ。誠にまことなるはうらめし、されど、その人はうらめしからで、何となう、世のかなしき心地す。

死刑

柴生田鶴子

師團の地を去る十四五町あまり、高くそびえ立てる大麻山といへるあり。その中ほどに陸軍の射的場あり。地獄谷といふ。こゝに近き頃、銃殺せられたる兵士ありて、あたりの人々はめづらかにいひ傳へ、さわぎのゝしるを聞くまゝに、あはれなるふし多くおぼえぬ。

縫工の務とれる一兵卒、おのが長官とたのむ縫工長を、一夜職務用の庖丁とりいでて、寐たる枕がみにおし殺

したりしにて、恐ろしき事しいてたるもとすゑは、只日頃よりおのれに、つれなくありしよりぞとのみつたへきゝしは、去年の五月頃なりき。

夜半の雨やう〳〵晴れ渡りて、吹く風いとなまぬるく、人のかしらも何となく重きあした、彼はひとやの窓より、さばきの庭に引きいだされて、罪のさだめ言渡されし時も、なか〳〵に立ならぶ人々は、いとあはれに眺めけんを、いさゝかも思ひ屈したる氣色はなうて、にこやかにほゝゑみつゝ、いひおく事あらばいへとの、身にあまる言葉打きゝし時、初めて眼のうちをうるまして、ふり仰ぎぬ。かくあるべしとは、初より思ひ定めしところにて、ふかき罪を犯したる身は、もとよりのがるべき望は露ほどもなし。なか〳〵にかゝるわれのながらへてあり經んは、惡人の數をましてふくさばひなるべければ、けふあるこそ人の爲世の爲いと嬉しうなん。いさゝかも思ひ殘すことはあらねど、早くよりうみの親にわかれて、今は古郷なるまゝ母の手に人となりぬ。この腹に妹二人侍り。深き惠をむなしくして、家名をけがせしのみ、生先こもる人々の行末まで、世の人々にいひひそめらるゝは、ひとへにわがあさき心よりまねきし事にて、今となりては、只くいなげくのみ。ふかき罪、さり處もなくとてそ。外に一人の老婆。こは血をつなぎしきはにはあらねど、幼きよりいとよういつくしみくれし人なり。ことしははや七十に餘れるを、われかゝれりときかば、如何におどろき悲しぶらん。この人の娘、今はさる處に嫁ぎ居れるが、この許にたよりして、よしなに傳へ給へと、靜に兩手たゞしてうつむく。いまはのはなむけにと、設けられし酒食は、やがてそのかたへにはこばれぬ。彼は直に謝して箸とりあげ、二口三口たうべて、假に立あがりざま、長き月日をひとやの中にありて、うまきものほしうのみおぼえしかば、あまりにあさましけれどと、つゝましげにくちごもるに、よしと打うなづく法官の面を、うれしげに見やりて、腰うちかけ、再び箸をとりぬ。かすかに打ふるへながらも、上なる方大かた食しつくして、下なる器にうつらんとせし時、手にせし箸はぽきとをれぬ。おごそかなるさばきの庭に、いか

めしう立ならぶ、人々の前ちかう、せばき椅子のかたはしに、身躰まるうかゞめて、悄然と猶ものたうぶる姿よ如何にあはれなりけん。冷たき酒は好ましからず、只湯をとこひて、手づから打くみ、こゝちよげに呑みほしつつ、折れたる箸を眺めて、昔佐倉宗吾はさばきの庭にて遺言の書したためし時、その筆のをれたりときゝしが、わがこの箸も折れ侍りそ、くるしげなる笑をふくみて、人々をながめぬ。

重罪犯と定まりては、今迄の手錠を荒なはにかえんと、立よる看守らに、猶刑場まであゆませてよと、願ひ出てしかども、しひて駕籠にのせられて、めづらかに見はやさんと、おしかへす人波をわけつゝ、その山のふもと、みどり色こき松原のかたへなる、設けの柱のもとに至りて止まりし時、さらに静なる歩調もて、みづからあゆみて、その傍にすゝみしとぞ。打つどふ人々は、只あきれにあきれぬ。五人の兵士は銃をさゝげて、そが前にならびたち、柱なる罪人のめに、白き布の　おほはるゝややがてすゝみ出し、中なる一人は銃とりなほし、かたつ方のひざを地につけて、只其鼻をねらひてといふ、上官の聲のもとに、ねらひさだめたり赤うかゞやきゐし日影、はたと雲にかくれて、山おろしの風、さと音たつるに、人は皆息をひそめ身をちゞめて、うかゞひぬ。十重二十重、打きづきたる人垣の、どよみも静まりかへりて、多くのまなこは、罪人の顔にそゝぎぬ。白き布のもとに、猶ゑみをふくめりしかの口は、不意に日本大勝利と叫びいたせしに、呀とおのれも聲たつるまでおどろきし人々は、つゞきてひゞく銃の音とゝもに、鼻口より吹きいづる血汐の瀧に、さらに胸つめたうおぼえしとぞ。三十路にみたぬ、わかき命、いとはかなうもすてしものかな。さばかり何をたへ難きうらみのありて、人を殺しおのれをさへも殺すべくなりしぞ、くいあらたむる一すぢに、うはべをゝしくつくろひかくすも、人にこえて熱し安き胸は、猶青春のわきかへる血に、うらめしうも悲しうもおどりたりけんを、さわがずせまらず、従容として刑をうけし勇氣のほどは、かゝる罪人がため、いとあたらしうおぼゆ。あはれこを國のため君の爲、よきかた

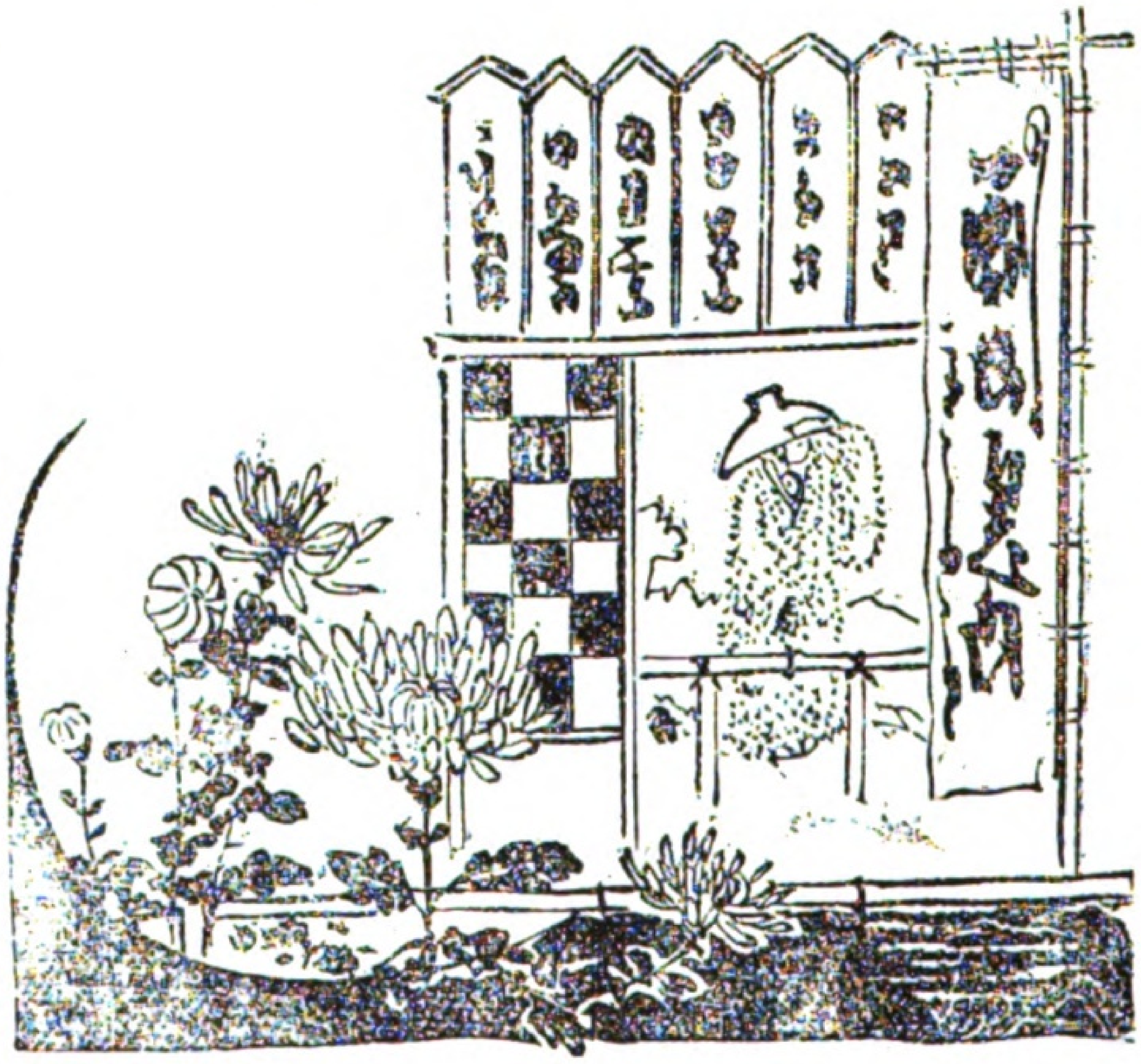
にそゝぎたらましかば、如何にをゝしく、如何にめでたきますらをのこなりけん。大麻山の松風は、只長閑なる春のしらべを吹きつたへつゝ、二もとの梅はきよき香をゑみこぼせり。ものみな樂しみにかすむ、天地のいづこに彼が魂はやすむらん。血しほにけがれたる刑場のほとり、ふみしだかれし小草の上は、ゆふべの露おきそふれども、天つ日の光とゝもに消えゆく。とこしへにねぶる彼がふしどにも、手向の花さゝぐる人は、ありやなしや。

かへりみち

有賀晴子

恙なう勤めよ又來ん年の宿下りをこそ待ためなとゝ誰の詞か聞きわかねど只胸にひゞき渡るこゑは引出したる轍の響に打消されて聞えすなりつゝ老ましたる父君母君門に立ちつくしてや見送り給ふらんかへり見まほしき心はしきりなれど否々見じふりかへらし中々にわろき別とやなりなん思ひなげにこそ行かめとて眼をとぢぬ不忍の池無緣坂鐵門このあたりにそたちし車の上の人には思ひ出つるとや多からんをたゞ禪に參せる人のやうにてやう〳〵人通りしげき本郷通に出つれは目なれぬ雲の上ふりは珍らしけに幌の内さしのぞかるゝもまぶしき心地して頭をたれぬあはれ道ゆく人は何を見るらん昔の友むかしの知りし人などはましていかにか思ふべきさもほこらしげに得意らしうとや笑はれん笑ひてあはれむ心もあらざらんかに角につらきは涙なき人なり世なり我はかしこき宮のうちによしやはかなき明暮なりしとも二度この恐ろしき世にはいでじなと狐狼のむれに入るべきさばれかの單調なる生活よ一日たに暮を待たるゝものをいつまてそをつゝけゆくべきにか思へば胸せまる心地もする哉おしろひあつういくつか取重ねたる白襟もこと〳〵し匂ふばかりの總縫の花摸様年はと問はれんもやさしやがて卅となり四十となり猶かう弁つやゝかにかと女はつゝましげに袖かき合せつ

一日のつとめなしをへておの〳〵樂しきすさましき樣々なる家路に急く職工の一むれ登り來る壹岐坂を車は勢よう走下りゆく節まはしをかしう昔は花よの詞身にしむやうにてふと頭をもたげ見れば泥よけに袖するはかりに行過ひたりあはれかの君なり人ごみをよけてかなたの烟草屋が軒下過ぎんとするは紛れもなしかの君なり嬉しうも見られざりつるよ見らるゝさへ苦しう胸わろしあはれ何故にかうはなりしぞ宮つかへはするぞ親たちの强て引とゞみ玉ふをふり放ちてゆきたるは我なれど行かしめたるは君そかし頼み渡りつる君さへかの如くあさましかりしものを外に誰をか語らひ人とはせんあゝ誰にもあはし誰をも頼まし我は只消えぬ間の露の身を頼まんよ



車は風のやうに水道橋のあなたに消えぬ大城門の松の入日に後かげや淋しかるべし

秋の曉

小西雅子

常には朝いがちなる身の、けさは友と曉の散歩せむと約しありつれば珍しくまだきにおきいでぬ。

金色の殘月星もところ〳〵にきらめきて東の空やゝ白みたり。

やがて友の君とひき給ひしかばいとゞうれしくて共に朝風に四つの袖を任せつゝそことしもなうそゞろあゆみをはこびしぬ。大方の家々未だ夢さめず、ゆきゝの人もなくものしづけきはこほろぎの聲露けき草むらよりきこゆ、しばしゆ

く程に新月橋にさしかける、あはれ橋上に立ちてながめたる景色を何とか云はむ。げに一幅の畫にてこそ。鏡川の流れは清く小波たてゝ樂しげにうたふが如き聲にて遠くながれゆく末は岸邊の森人家と共にさぎりに包まれて白うけぶれり。ふて山のもと其他の四方山皆霧ふかくおぼろなる、高知公園東北の空たかくうす色にけぶれる、氏神の森ひるなほくらくしげれる上に鎌なす月のいろうすれゆく、つり人のかげかすかなるなどいづれか清き秋曉の趣ならざらむ。しばし恍惚として心ちよきそよ風にふかれつゝ二人はたゝずみき。

をりしも雞の聲しげくさぎりやゝ薄るゝと見れば東の空ほの〴〵に紅をおびぬ。日やいでむと見つむれば金色の光やう〳〵ひろごりて山よりいでし日のみ神一面に金色の光を下界になげ給ひぬ、見る〳〵霧に白かりしは皆金色の衣にぬぎかへつ、鏡川の水いよ〳〵清くこがねのさゞなみきら〳〵とかゞやく美しさ。みにくき賤がやも金のよそひし、やれ衣まとひし賤の女もまばゆき衣をきたる。あゝげにこれ神のみ國にあらずやとばかり二人は顔をあはせてほゝ笑みき。

やがて、なごりはつきねども母上の朝げとゝのへて待ちまさむにいざと家路をたどりて袂を別ちぬ。

あゝ清くもたのしかりしこの朝とこしへのかたみにとてしるしゝが、あはれ例の拙き筆をいかにせむ。吁我に友の君の才あらば筆あらばこの清き秋の曉をそのまゝにうつし出さんものをと今更にいと悔しくこそ覺えしか。

末摘花

宮澤すみれ

源氏の君は、彼の可憐可哀なるやさしの人に別かれてより、年月經れども忘られず、執着ふかき六條の君、情愛うすき葵の上、共に光君が燃ゆる如きおもひをみたす能はず、いかにもして夕貌に似たる女性を得、互の心を愛の神に捧げんとおもひ給ふ、人事定むべからず、魔神しば〳〵君が幸運をさまたげんとす、もとより君比

枝のふもとに美くしき人ひとりを得給ひしが、齡未だ幼なうして、共に戀をかたるの期至らず、こゝに君偶々一薄倖の姫が身の上をきゝ傳へて、うたゝ愛憐の心に堪へず、こは即ち常陸宮の御娘なり、運拙なうして殿上の交りに遠かり、乳母某の養育にて漸く人となりたるなり、荒れ果てし殿宇、ものふりたる梢、こゝに仕へまつる人、いづれも〳〵不運不幸の影見へて、才色ならびなき貴公子が、足を容れ給ふべき所ならぬを、こよい月の夜、ころは春なり、命婦といへるをかたらひて琴の一曲にまだ見ぬ人のおもかげを忍び給ふ、禍なる哉命婦、天が下の幸運兒をこよひ醜婦にちぎらしむる、さても寢殿のかたより洩るゝ物の響、たくみならねとあやしき熱情にかゝる靑年の貴人、遂に近より見給へば鼻いとあかき女なりき。



末摘花もとより何の風流もなく用意もなし、まして愛情の何たるを解せず、君よりの御歌さへ、また人して奉つるほどの不才子、しかも一點うちとけたるさまもなし、まして妬心をや、彼女は一世のほまれを身に負ひ給ふ源氏の君にゆくりなくもちぎりて、而かも滿腔の血をそゝぎ奉るの熱情なし、ひやゝかなる女哉

雪の夜の對面、普賢菩薩の乘物とをもはしき彼女の顏のなみ〳〵ならぬ鼻つき、唯髮のみは桂の裾にたまりて、一尺ばかりあまりたり、其衣服は當代の花やかなるには非らずしていづれも古代のものゝみ、嗚呼彼女は遂にむかしこひしき歌くりかへさてや然れ共君は君捨て給はぬなり、華の門再び三度御車よせ給ひしかしこさよ、こは常陸の宮がたましひの姫が身を守りしによるべし。

ゆかりいろこき若紫つひのさだめの紫の上に、彼女は末摘花とほとんど等しき境遇たりしなり、祖母に養はれ、老僧に冊かれ、しかも發達の時代を比枝山中にすごす、朝に夕に讀經のこゑ、溪水のながれ、松風またちさき枕べにかよひて、世をうしとおもひつるもありぬべし、志かも紫の上は天性かしこうして、花やかなる未來の影滿身に輝きわたり有爲有望なる女性が前途ゆくての春あたゝかき愛の光、天上の月のそれよりもおほいなるを、あはれむべし末摘花、死人の如く亡者の如く偶々赫々たる光に遇ふも往年のさびしさを取り去る能はずして、くらき〳〵谷間のすみれ、遂に濃き紫のいろをそむる能はざるなり。

敎育と天性相まつに非ずんば、完全なる一箇の人間を作るにかたかるべし、末摘花が性、春の花のごとくんば夕貌を失ひし人にあたゝかき情をよせて、そが露に遲れし御心のうさつらさを消し奉らんをあはれ君御息所の妬心、葵の上が冷性に加へて今またうつくしからぬ人に契る、魔神がたはむれやといはんされど幸なるはこの人なり、葎の門たれか又あはれを寄するものあらんや、而かも君終生すて給はず、等しう情人のむれに加へて、薄命の姫を救ひ給ふこれにむくゆる心、そもそも彼女はいかにして現はしゝや、妬心なく要意なきの彼女、到底狂ふばかりのよろこび狂ふばかりの感謝を捧げ參らせざりしや疑ひなし、かくの如きは生れながら猶墓場の主なり、趣味なき人、涙なき人、ひやゝかなる人、而かも源氏の君と相見ゆ、幸福といはずして何ぞや。



やちぐさ（竹柏會匠人）

○八月十五夜隅田川に舟を浮べて　　佐々木信綱

川そひの家居大方とさしたり
年に一夜のあたら今宵を

都人八百よろつ人すめれとも
今宵の月夜見る人のなき　　上凪行

夕つく日影も黄はみて大寺の
いてふの梢秋ふけにけり

鷹匠の鷹すうる手に霰おちて
朝風さむし岡の篠原　　渡邊[illegible]

木枯は海のあなたに馳走りて
鵯越に月さえわたる

行宮のみあとやいつこ白雲の
静にうかふ屋島山の上　　湯川貫一

かくてしも小瓶の花はゑみにけり
文机の上を天地にして

都にて物學ふ子か音つれを
此頃きかすさきくてあらむか　　小屋保影

夕つく日色なく暮れて秋風の
さゝやきわたるあしの一村

吾か望わか身と共におとろへて
ことしの秋も半過きけり　　松寺久稚

汽車のまとにうす日にほひて
曉の秋風さむし木曾の大川

我車岩かねゆする岩山に
一本たてり山百合のはな　　樺山常子

大方の草てふ草はさきいてゝ
花のむしろと野はなりにけり

二子山峯に薄日はさしなから
村雨しふく竹のしたみち

親は子を子は親を呼ふひまもなく
あはれつなみにさらはれし人　　堀越科子

たをれたる垣根のもとに隣どち
昨日のあれを語りあふ哉

縫ひあげしきぬをたゝみて文机に
ひとり文よむ秋の夜なかさ　　大村八代子

二葉三葉のこる梢になく百舌の
聲ものさひし夕くれの庭

もろともに眺めし月の影ふみて
我子の墓に尾花もてゆく　　松井友子

知るや君知らずやあるらむよし知るも

此我心知るべくはあらし　片山卿子

霧のうちの家を木立の下に見て
　み空に高し秋の夜の月

人なみの寒さ暑さの文のみと
　いつしかなりぬ古里の父　市田豐子

しろかねの浪間こきわけゆく舟の
　人かけくろき月の海哉

草かりの媼かへりて蟬とりの
　童かへりて日はくれにけり　關屋愛子

家まはら野あり森あり山ありて
　みるめにあかぬ道つゝきかな

一葉ちりし桐の葉ひらふ手のほとり
　また一葉ちりて秋の風ふく　森雅子

わか爲と植えたまはりし桐の木の
　枝葉さかえて祖父はいまさぬ

光なり寶なりけるをさな子の
　消えてをくらき家の内かな　富田俊子

云ひもえすはかりも知らぬ天見れは
　いよ〳〵低き人のこゝろか

一筋のまかねち細く末きえて
　汽笛のねおもき山あひの道

何となく胸こそさわけ琴の糸の
　きれし音ありもの思ふ夜に　渡邊節子

なき人のかたみの小琴とりいてゝ
　ひく夜さひしく雨そゝき來ぬ　中村文子

山ぶみに人皆ゆきて病める身の
　宿に待つ日の長くもある哉

富もあきぬ海も見あきぬ旅やかた
　雨のふる日のつれ〴〵にして　久保花子

病む親のみとりもならて人の家に
　やとはれくらす身のすくせ哉

糸萩の小さき花におく霜の
　上にもやとる秋の夜の月　田中たな子

何事か語りかたらふ老人の
　話つきせぬ窓の内かな

村長の直き心も見ゆるかな
　昔なからの萱ふきの屋根　垣稻銑子

波の上は何の思もあらさらむ
　ふしおもしろし舟人の歌

島々に舟ゆきかひて見るかうちに
　けしきかはりゆく日和山かな

學藝

消化器の話

淑徳女學校講師醫學士 佐藤恒久

（素人看護法）

消化器と云ふのは前々にもお話致しました通り、飲食物を消化して其中に含んで居る所の營養分を取つてそれで身躰の成分を補つて往く所のものであります、消化器と申しますと云ふと、詰り口から肛門迄の間を申すので其道は隨分長いものであります、五つの部分から成立つて居りまして一番上は口及び咽喉でありまして、此部分では物を噛み碎きさうして唾液粘液などと能く之を交へて多少消化し嚥下し易いやうにするのであります、それから第二が食道或は胃管と言ひます、之は咽喉と胃の間を結付ける所の管であります、第三が胃、胃は廣い袋であります、之は廣がることも出來又縮むことも出來る、物が這入つて往くと這入つて往つた丈け廣がり又中が空虛になれば從つて小さくなると云ふやうな袋であります、此胃の袋の壁には澤山の分泌線がありましてさうして胃液と申します液躰を出します、それから第四が小腸、之は長い管でありまして其中には膵汁或は膵液などゝ云ふものが注ぎます、是も矢張食物をこなす力のある液躰でありまして膵汁は肝の臟から出て、膵液は膵の臟から分泌さるゝものであります右の唾液胃液膵汁、膵液抔いふものは食物を溶解消化する力のある液汁であつて各特別の役目がありますが委しいとはお話を止めて置きます第五が大腸及び直腸であります、此部分はどう云ふ役をするかと云ふに大便を硬くすると云ふ役目の所であります、それで食物を食べまして重もにこれなる場所は胃と小腸であります、小腸に於ては食物をこなす許りで

なくして既にこなれた所の食物中の滋養分を身躰に吸收すると云ふ役目を持つて居ります、併し小腸の終り即ち大腸の初めの方に來ますと云ふと、最早食物中の營養分は悉く吸收されてしまつて後に殘つた所のものは粕許りであります、けれども其粕がまた澤山の水分を含んで居りましてドロドロして居る、其ドロ〱して居るものを幾分か固くする、詰り水分を取つて了ふと云ふのが大腸の仕事であります、それで大腸の終り即ち直腸に食物の粕が達しますと大概の固さを以て出て來る、即ち通常の大便となつて出て來るのであります、若し此腸に病氣でもありますと第一に消化が十分に往かない、營養の吸收も十分に往かないと云ふことも出來、或は大便が固くならないと云ふやうなことも出來る、それは腸の病氣であつて下痢が起るのがそれてあります、

それから尚皆さんに一寸お慰みにお話をして置きますが、此消化器の長さと云ふものは凡そどれ位あるものであるかと云ふことを皆さんはどう云ふ風に想像なさいますが、兎に角腹の中にたぐまつて居るのでありますから決して短いものとはお思ひになりますまいが、どれ位の長さであるかと云ふことは想像が付くまいと思ひますから一寸お話して置きます、消化器の長さ即ち口から肛門迄の長さと云ふものは凡そ身躰の五倍と云ふのであります、それでありますから五尺の身躰であると消化器の長さが二丈五尺であります、尤も肉を重もに食ふ西洋人の如き者と、それから日本人の如き植物性の物を重もに食する者とは此消化器の長さが違ひます、肉食を重もにする者は消化器が短くつて濟む、それから米だの野菜などを澤山に食べる者は消化器が長くなくては困る、其譯は肉などの方は消化が早いから從つて消化器が長くなくとも濟むのであるが、野菜物はさうは往きませぬからどうしても道中が長くなければそれ丈けの物をこなすことは出來ないから、據ろなくさう云ふ者の方は長いのであります、

以上は先づ消化器の部分のお話でありまするが、併し此消化器が飲食物を消化させるに付いては無論消化

器の運動と云ふものが必要であります、消化器の運動がなければ物を消化すると云ふことは出來ぬのであります、例へば口に致した所で只だ食物を口の中に含んで居つて許りては消化は出來ませぬから、之を嚙碎くとか或は飲むとか云ふことに付ては夫れ〳〵の運動が必要であります、それと同じやうに矢張胃だの腸に於ても相當の運動が必要であります、胃の運動と云ふのは其中に這入つて來た所の飲食物を能く胃液と混じてさうして消化させる、混ずると云ふのは詰り攪拌するので、其攪拌と云ふことも勿論棒などを待つて攪拌する譯に往かぬ、胃其物が色々に動きましてさうして中で以て食物と胃液とを混合させるのであります、斯様に混合されて了ふと其中には消化して了ひますから、其消化した部分を腸の方に送出すと云ふ働きが必要であります、又腸に於ても矢張それと同じことで、段々上の方から送られて來た所の飲食物を消化させ、或は其中の營養分を吸收するには矢張腸は腸の運動が要用である、先づ腸の出來工合をお話すると之は一つの

管と見做さなければならぬ、其管は氣管などゝ違ひまして矢張肉から出來て居る所の管である、外側は肉で出來て居つて內側には粘膜があります、其粘膜の中には分泌線があつて粘液を出しまた淋巴管が澤山廣がつて居りまして食物を消化さして其中に含んで居る所の營養分が此淋巴管の中に染込む、丁度樹の根が水を吸取るやうな工合で染込んで往く、それで此胃であるとか或は腸などは肉で出來て居りますから矢張他の肉と同じ様に收縮もする、從つて胃腸がウヂ〳〵と動きます、其動き方は恰も蚯蚓が動くやうで長くなつたり短かくなつたりする、短くなる時は太くなり又長くなる時は細くなると云ふやうに、蚯蚓や蛇がノタクルやうに腹の中でウヂ〳〵と動きます、其動くに從つて飲食物が段々下の方にこき遣られると云ふ譯で始めて消化器の働きが十分出來るのであります、尤も飲食物か上の方から下の方へ段々こき出されると云ふのが當前の運動でありますが、時に依ると腸や胃が逆に往くことがある、即ち下の方から上の方に飲食物をこき出すと

云ふこともあります、それは病氣の場合でありますが、さうすると中の食物が上に來るから物を吐くと云ふのは其運動に依て出來るのであります、即ち胃の中に在る所の物は口迄跡つて來ると云ふのは、胃或は腸の運動が平素とは違つて逆に往くから下の物が上に出て來る、けれども之は決して通例のことではない、常はいつも上から下へ下るのであります、

それから消化器の運動でありますが、消化器の運動は不隨意の運動であります、不隨意と云ふのは我々の意思に隨はないと云ふことであります、例へば今是から胃を動かしてやらうとか腸を動かしてやらうと云つても自分の思ふ通りに胃や腸が動くものではない、さう思はないでも胃や腸自身が動く必要があれば動き始めるので、動かないで宜い時には少しも動かない、併ながら消化器の運動は悉く不隨意であるとは申されませぬ、或る部分は隨意運動をする、それは何處であるかと云ふに物を嚙むとか飲むとか云ふのは我々が思つて初めて出來ることで、口の中に物を入れると云ふと之を嚙下さなければならない、嚙砕かうと云ふ意思かあつて初めて嚙んだり飲んだりするのであります、それから大便を出すと云ふのも是も一つの消化器の働きと見なければならぬ、是も隨意運動であります、大便に往かうと云ふ心があつて初めて出るのであります、若し之が不隨意であつた日には自分が知らない間に大便が出てしまふなどと云ふ不始末が出來る、先づ手短かに申せば消化器の運動は大部分は不隨意運動であるけれども、消化器の上部と下部に於ける運動は隨意運動である、斯うお話するのが一番分り易いやうに思ふ、斯の如く腸が腹の中で蚯蚓の如く動いて居ると云ふと、或は腹に在るべき所の腸が胸の方に入込まないとも限らない、又は長い二丈も三丈もある所の腸が頻りと動きますと云ふと互ひにこぐらかると云ふことがないとも言へない、それでありますから之を禦ぐ手段が出來て居ります、それは何であるかと云ふに第一に腸間膜と云ふ薄い皮がありまして、それが腸と背骨の間を結付けて居つて腸は假令動くにした所で余り自由に

動けないやうに制限がしてある、勿論腸の長さだけのものが矢張腸間膜としてなければならぬのであります、所が二丈だとか三丈だとか云ふ程の長さの膜が決して背骨にくつ付いて居られやう理窟はない、所が短い背骨に付いて居ると云ふのは元と短いけれども澤山の襞襀があつて末の方に往くと云ふと長くなつて、丁度其長さが腸の長さだけあるのであります、斯様にして腸の運動を制限して居りますから、中て幾ら動いてもこぐらかるなどと云ふことはないのであります、尤も事に依るとこぐらかると云ふことはないとも申されませぬが併常にはさう云ふことはない、又腹の中にある所の腸が胸の方に迄這入り込まないと云ふのは矢張腸間膜があるからして胸の方迄はまさか腸が動き得ないのであります、それに前にお話致しました横隔膜と云ふのがあつて胸と腹との界を成して居る、之がある爲めにどうしても腹の中にある所のものと胸の中にあるものとが一つの場所に集らないのであります、それから飲食物が消化されて其營養分がどう云ふ道を經て血液の中に入込んで身體の補ひをなすかと云ふことことは、今迄お話申したことで大概お分りであらうと思ひます、それは腸の中で以て食物の營養分が吸收されて即ち淋巴となつて其淋巴が遂に血液に混じて往くのであるからして此事は最早改めてお話を申しませう、

泌尿器の話

泌尿器と云ふのは穢ないお話になりますが小便の製造場のお話であります、之は強ち製造場だけのお話ではなくして小便を出す道迄のお話をしなければならぬ、小便の製造場と云ふのは何處にあるかと云ふと即ち腎臓でありまして左右に二つの器械がある、右の方は肝臓の後ろ及び下の方に位して居り左の方は脾臓の下にあります、此左右の腎臓が即ち尿を造る所であります、それはどう云ふ風にして造るかと云ふに、腎臓の中に往く所の動脈が肝臓内で以て毛細管になる、さうすると其毛細管の中を通過する血液の中の所謂廢物があります、其廢物を小便となして腎臓が血液の中から吸取

るのであります、詰り腎臓は一つの水漉のやうなものと思へば宜い、腎臓の中に血が這入り込むと云ふと其血の中にある小便になる分だけの物を漉してしまつてさうして血の良い部分だけは元に返してやるが、悪い粕だけは小便として外に出して仕舞ふと云ふ理屈でありますこれで血液中の廢物の捨方は前に述べた肺臓と此腎臓の活動に在るとを御承知下さい又皮膚にも同様の役目がある、則ち肺では炭酸、腎では尿皮膚では汗を捨てるのですそれで腎臓の中で出來た所の尿は何處に往くかと云ふに、左右の腎臓から骨盤の方に向つて細い管があります、其管は腸の後ろの方にありまして所謂輸尿管と云ふのであります、此輸尿管が骨盤に達すると云ふと、骨盤内に膀胱と云ふ袋があつて其袋の中に注ぎます、それで始終腎臓では尿を造つて居りますけれども其造つた尿は少しも腎臓には溜めて置かないで輸尿管から膀胱の方へ送ります、其尿が最早膀胱に這入り切らない時になると初めて排尿と云ふことをする、此塲合には我々が便所に立つて往つてそれを出して來るのであります、

此排尿の度數は一晝夜に四遍とか五遍とか極つて居りますけれども尿を造ると云ふことは一分時間も休まないのであります、此膀胱の出來方は矢張肉から出來て居る袋でありまして、空である時には小さくなつて居りますが段々物が這入つて來るとそれが膨れて大きくなります、遂には其中の尿の入り塲所がないと云ふやうな時になると初めて排尿の心持がして來て隨意運動をなして排尿するのであります、之も矢張不隨意運動であつた日には自分の知らぬ間に小便が出ると云ふやうな隨分不都合なことが起ります、尤も病氣では不隨意の排尿と云ふことが幾らもありますが健康な身体であつて不隨意の排尿と云ふことは決してありません、併し子供などは何時も不隨意の排尿があつて襁褓を當てゝ置かなければ不用心であるなどゝ云ふこともある、それで此排尿と云ふことは何の爲にするかと云へば無論身躰を健康にする爲に、血液の中の廢物を出す爲に腎臓が尿を造るのであります、先づ解剖生理に付

ては此位にして置きまして胸及び腹の中の臓腑の在場所もお話すれば御宜いかも知れませぬが、併し之は只今迄御話したことで大概お分りにならうと思ひますから別段改めてお話は致しませぬ、

人の體内に住む動物

處女は蛾と同じく光の爲に捕へらる而して
天使が失望する時に禍神は得々たり

女子高等師範講師　藤堂忠次郎

動物は、其れ〴〵此の廣い天地の間に生活して居るものであるといふことは、誰れしも不思議に思ふ者もあるまい。ところが、人間の躰内を以て天地間として居る動物があるといつたらば、一寸耳を聳てるてあらう。しかし、之を聞いて直に會得する者は、蛔虫や條虫のことを思ひ出すに相違ない。如何にもその通りで、此の問題の下には直ちにそんな答が喚び起されて來るのてある。然るところ、人の躰内に生活する動物といへば、決してこれだけてはない、さうして條蟲や蛔虫の如きは差して、恐れるには足らぬ。實に怖ろしい、而かも我々の命ちさへ奪ひ取るような動物が、數多く人の躰内を生活の天地と定めて居るのてある。人の躰内に住む動物は、果してどれ程あるか、何々種あるかは、餘り多くて未だ悉く知られて居ない位てある。醫學と動物學との進歩は年に月に新しい物を發見して往くものだから、此の後どの位にまで達するか殆んどいひ表すことが難い。それには極々微小躰で顯微鏡の力を假らなければ見えない程の最下等動物もあり、又割合に高等の物の中に這入つて居る動物もある。此處には其の最下等の動物は已めて、外のを話さうと思ふ。最下等の動物には純粹の動物と、又植物ともつかぬバクテリヤの類もあつて、一々話して來ようならば僅々の讀切り物では纒り難いと、且外のと一緒に述べる暇がない、よつてこれを他日特別に記すことゝして、先づ分り易い高等の物だけを話すことにしよう。

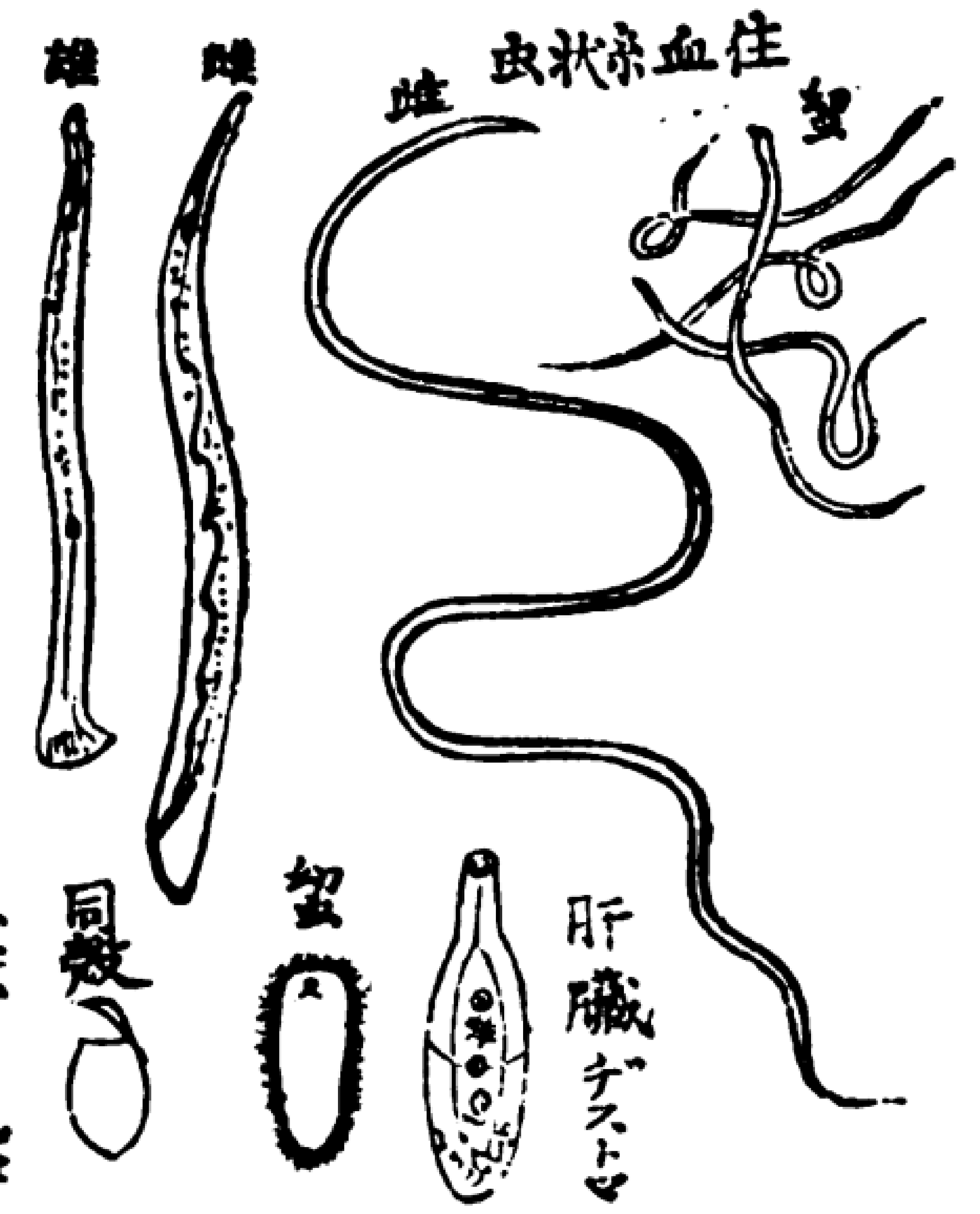
高等の物とは即ち蛔虫や條虫などのことである。全躰こんな動物がどうして人の躰内に來たのであるか。マサカ、親の胎内に居る赤兒の時から、既に此の動物に取付かれてあらう筈もない。隨分病氣には、遺傳といつて親の代から其の子孫に傳はるものもあるが、此ういふ動物の躰が、どうして人間の胎兒に傳はらうか。どう考へてもこれは、人間が母の胎内から生れ出てから後に、或る方法によつて入り込んで來たに相違ない。如何にも左樣な次第で、それには種々の事情の下に入り込んで來たのである。それに、それ等の動物は、往々生涯人の躰内にのみ居るものでなくて、或る時は他の動物の躰内や或は全く此の廣い天地間に生活して、それが巧に人間の躰を出入するのである。いはゞ人間こそ馬鹿を見た話で、そんな動物に自由にされて居るようなものである。しかし、人間の靈智を以てしては、其のように馬鹿にされるものではない、相當に書物を讀み智識を積むに從つて、中々悧巧になるので、決して心配はいらぬ筈である。

さてそれには我々が先づ水を飲むと、食を取ると、日常の器物を扱ふとに於て、心得べきことを心得ることが最大急務である。何となれば、之等の動物が、水と食物と器物とに依りて、我々の躰内へ入り込む方便とするからである。

先づ飲む水に注意しない所から我々の躰内に侵入する動物は何かといふに、住血絲狀虫、十二指腸虫及び肝臟ヂストマといふのが主なる物である。住血絲狀虫といふは、其の名の如く我々の血管の中に居つて、長さ一寸の十分の一、即ち一分ほどの極めて小い絲のような姿で、活潑に血液の中を運動するもので、大畧は左の圖によりて想像が出來る。しかし此の姿は兒供のときであつて、親は之とは遙に大きくて長さ三四寸もあり、太さは我々の髮の毛程である、之は雌のことで、雄は之より少々短いといふことである。

それから十二指腸虫といふのは、人の小腸の初にある十二指腸といふ、所に居るもので、雌は長さ凡そ五分雄は凡三分程もあるさうして、雄の後端は特別に開い

て傘のやうである。
次に肝臓ヂストマは、形は丸て違つて、扁い木の葉のやうて前端に口があり腹の眞中に吸盤があつて、しかと人の肝臓の管の内部に吸ひ着いて離れないのてある。之には雄と雌との區別がない、不思議てはないか、動物て此の區別がなければ、どうして子が出來るだらうかとの疑は誰しも起る所てあらう、しかし一つの躰て雄と雌との二つ分を兼つて居るので實際は少しも差支はない、差支ないのみか寧ろ便利なのてある、何故かといふに、始め人の躰内に入り込む時に注文通り雌と雄とが共に道連れをするに限つたこともなからう、若しもどれか一方だけてあつたならば忽ち子が殖えずにそれ切り子孫が絶えてしまうてあらう、そうなると雌雄兼躰の方が餘つほど都合のよろしい方である。其の大さは通常長さ三分ほどで最も大きくて五分もあらば澤山てある。



さてこれ等の虫が人の躰内に入り込むによつて、人間にどんな禍を來すてあらうかは、誰れも知らんと欲する所てあらう。先づ我々が住血糸状虫に取附かれたならばどんな病氣が起るてあらうかといふに、これに二種ある、其の一は初に尿に乳のような汁を含みて、段々經つと終に血を泥じて來るのてある、これは數週若くは數月間に渉りて續き、たとひ一旦癒ることあるも數月若くは數年の後に再發するものてある。其の起つて居る間には寒氣を催したり熱が注して往々背腹などに疼痛を覺ゆることがある、隨分此の間には衰弱の色もなく長命する人もあるが、しかし又貧血となりて大變瘦せ衰へ、終には下痢症ともなり、或はそうならずして死に至るものがある。全躰どうして此んな病氣になるかといふに、此の虫は人躰の腰の邊や淋巴管や

淋巴腺に居つて、それて淋巴液の通行を遮り止めるから管が破裂して尿の中へ乳色の淋巴液を漏すようになる、それに又淋巴管の破裂するに從がつて血管も亦破裂する、夫だから後に尿に血を混ずるのてある。幼虫は血液の中に居るが、又親虫と共に淋巴管内に居つてこんな害をなすので、段々それが血管内へ移つて來る。こゝに不思議なことは、日中は血液の中に居ること甚だ稀て、夕刻に至るに從ひ段々血中に顯はれ、夜半となれば其の數、極端に増して、一滴の中に數十から一百以上に達することがある、それから再び減じて正午には極點に及び夕方になつてから又々増して來るのてある。

それから猶一種の病氣はこれを象皮病といつて、これは片脚の皮膚に水腫を生じて段々其の勢を增して皮膚は益々厚く固く一見象の脚のように太く醜くなるのてある、これも矢張り皮膚の淋巴管から起るのてある。

ところて此の虫がどうして人の躰内へ入り込むかといふに、今日猶不明瞭てはあるが、一説には蚊が媒をするのてあるといふ、それは夜間は此の虫が最も多く血液中に混じて居るものだから、夏の夜、蚊が人の血を吸ふと共に其虫が之に連れて蚊の躰内に入り込み、それから蚊は自分の卵を水上に產み落して然る後其處て死ぬものてあるから、自然其の虫が水に移ることが出來る、その水を人が飲むときは、忽ち此の虫は、人躰の淋巴管中に進入しこゝて成長して親虫となり、それが無數に幼虫を生めば段々と血管の中へ移つて來るのてあるといふことである。これによつて汲桶や水甕の水は迂濶には呑まれないことが分かるてあらう、蚊がよく飛ん來るからてある、平生之等の水には蓋を設けて置くことが肝要てある、それよりも生水は安心しては飲まれないので面倒ても一旦煮沸かさなければならぬといふは、こゝのことてある、さても注意すべきことかな

此の次に十二指腸のことをいはう。此の虫に取付かれると、この病氣が起る。其の輕いものでは、先づ貧血

を興し、皮膚や唇の色は死人の如く、動ともすれば動悸高く勞働するときは非常に疲れを生ず、それが尋常の貧血とは違つて反つて身躰に脂肪を増して肥滿して來る。重いものは偶ゝ下痢か何かの急性の病に逢へば、之を支へることが出來なくて死に至る、或は又そのために非常の貧血になれば自然と死を來すのである、どうも恐ろしい病氣ではないか。一躰どうして十二指腸虫が貧血を來すかといふに、此の虫には水蛭のように口中に齒を具へて人の腸の内面に固く附着して常に血液を吸ひ涸らすからてある。これも矢張り生水を飲むから人の躰内へ入り込むので、元と或る人の躰内に無數居つたものが卵を其の人の糞と共に外へ出し、それが雨などに流されて下水や川池などに入り、その水を飲むようなことゝするので危險なのである。



肝臓ヂストマは地方によりて多くの人に取付くものて、岡山縣下廣島縣下に盛なるは有名な話である、又東京でも多少あるそうて、東北ては宮城縣下にも見えるといふことてある。これ等は知れ渉つて居る地方であるが、此の外にも猶多少は其處此處にある筈である。岡山縣の如きは人口の十分の一は盡く此の病にかゝつて居る村があるそうて、一家それがために全滅したものもあつたといふこと。さて此の虫は段々肝臓の中て繁殖して、終に其の中に充滿して肝臓を膨らますに至るは勿論それから、恐るべき病氣となるのてそれも、始の間は一向氣付かずに居るが、病漸く進むにつれて、食氣を頻りと催したり、或は軟かな便を催したりする。しかし此の時は未だ苦痛を感じないから、平氣て仕事をして居るが、段々胸の下の邊が壓し付けられたような感が起つて、少しづゝ痛を覺え、腹の上部が段々膨れて來る。猶病勢進むときは下痢甚しく一日に十回より十四

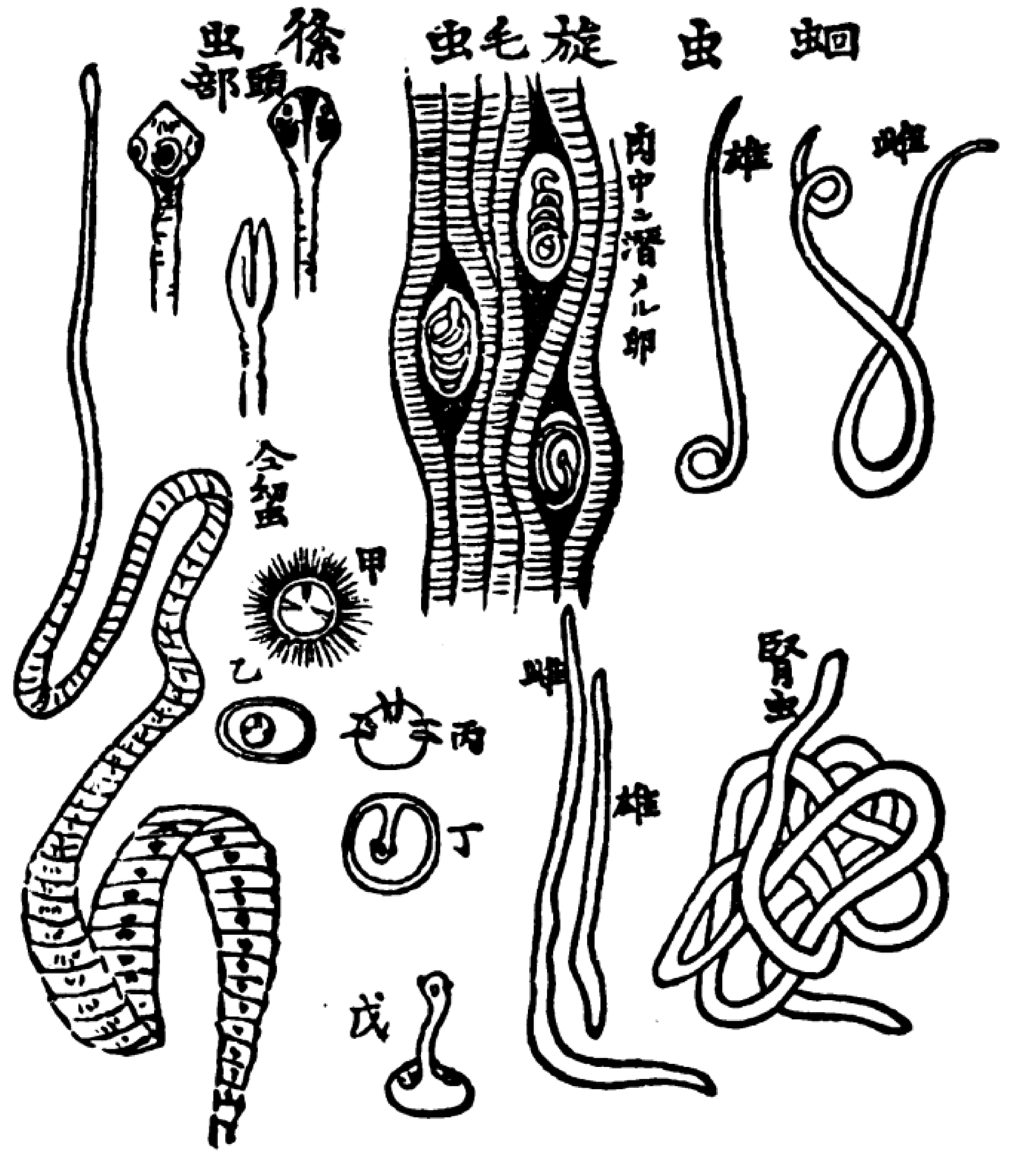
五回に至り、又往々之に血を混じたり吐血、衂血などあつて非常に貧血となつてしまう。此うなると食欲が大に減じて、脚に水腫を生じ、それが段々腹にまで上つて腹水となり呼吸が困難となり、それで終に痩せ衰へて斃れてしまうのである。

して、此の蟲がどうして人躰に入り込むかといふに、確かなことは未だ不明である。しかし其の卵が人の便に伴うて外に出て、段々便宜を求めて川や沼などに行く、そうすると其の卵の殼の蓋が明いて、中から毛だらけの小さな幼虫が現はれる（前の圖を見なさい）。その幼虫は毛を動して自在に水中を游ぎ廻つて、其の間に小い貝類等の躰内に入り込んで、少し姿の變つた者第二の幼虫を夥しく生み出し、それが貝の躰から出て又水中を泳いで居る。それを人が知らないで、直接に水を飲み、或は菜を洗ひ皿を濯めるか、或は其を含んで居る小貝小蝦小魚などを食用するからで、到頭取付かれるのである。

上に段々と水からして恐ろしい虫に寄生せられる話をしたが、食物からしても亦同様の結果がある。それには先づ蛔虫を擧げねばならん、その次に旋毛虫といつて肉の中に隱れて居るもの、それから腎臟の中に寄生する腎虫、お終には條虫を數へることになる。

そこで蛔虫は我々のよく知つて居る通り、小供の腸の中に居るはいふまでもなく、老人でも壯年でも離れにも取り付くもので、それが青年の頃に最も多いといふことである。態々これを百人中で調べた人のいふに、一歳から五歳までの小供は十人、十五歳から二十歳の者は二十七人、四十歳から五十歳の者は十五人あつたといふこと。此の女學世界を御覽になつて居る令孃方隨分御用心なさい。して其躰の長さは雌は一尺三寸程、雄は七寸程もあつて、常に尾を卷き付けて居るのが雄である。斯な虫はいつも、三四匹以上居る、甚しきは數十若くは數百も腹の中にウヨウヨと叢つて居ることもある。一小兒が五ヶ月間に二千五百を出した例もあるそうぢや。蛔虫の害は大人にあつては其の數少ければ、格別之を覺えないほどであるが小兒にあつては、

たとひ少くつても容易ならぬ病状を現すものである。即ち食欲減じ下痢を催し、臍の邊がキリ〱と痛み出し、嘔吐、貧血、頭痛、神經過敏等になり、劇しくなれば、血が大便に混じ拘攣を來すことも往々ある、俗に小供に虫が出るといふのは此の事であるさてこれが人躰に入り込むには、確かなことは未だ研究がとどかないが、先づ人の大便に伴うて出た幼虫が土に居りて、地に落ちた所の果物などに入り込んで、それで以て人躰へ取付くのであるといふことである。蛔虫が夏に多いといふのは、即ち夏に果物が多いからでもあらう。



次には旋毛虫の話である、これは親子其の居所を異にして、親は人の腸に居ること蛔虫の如く、子は筋肉の中に竄り込んで嚢を被つていつまでも潜んで居る。親の大さは雌が一分、雄が五厘の長さで、子は三厘三毛の百分の一である。親が腸の中で子を産めば、子は多く自ら進んで腸を潜り出て肉の中へ入り込で來る。始めて親虫に取付かれると十日目には既に幼虫が肉に到着するそうである。此の虫は人間のみならず、鼠、豚、猫、鼬鼠などにも寄生して世界上に廣がつて居るもので、人が始めて取り付かれるのは多く豚の肉を食するからであるようだ。そうして人間の頸の邊頰の近所などの肉に、それが多く潜んで居る。歐羅巴などでは恰も流行病のように、同時に多人數を惱まし、或る市の如

きは人口の三分の一突然これに罹り、六七週間で病人總數の三割は死亡したといふことである。始め親虫だけの間は頭痛、下痢、嘔吐ぐらゐで濟むが、子虫が廣がつてからは、俄に劇しくなつて、皮膚に水腫が現はれ(殊に顔に多い)次に眼が痛み手足か强ばり、大に熱をさして往々五十度に上り、脈搏は百四十に達す、段段肉が痛んで、咽頭の働を妨げて聲を凋らし、物を咀むに困難で、譫語を吐き、終に身躰大に痩せ衰へて、重症は初發より三四週間で死亡す。

それから腎虫に移りて話さうに、此の虫は中々大きなもので雌は三尺餘り雄は一尺もある。しかしこれは餘り澤山に居らぬもので、居れば腎臓の內室中である。これは腎臓を損ずるは勿論、尿に血を混じ、尿が充分に出なくて、日夜苦痛に呻吟くものである。これが人躰に入り込むは或は河魚によりてするともいふ。

今度は條虫のことである。眞劔に此の話をしやうならば夜を明しても足りないほどである。それで此には其の大躰を述べることとする。條虫は中々種類の多いもので人間は愚か、兎、鼠、猫、犬、豚、牛、羊、馬、鷄、蛙などにも寄生して現今知られて居るだけでも、五十餘種ある。しかし人間に取付くものは通常三類九種であるといふことで、其の頭の形が餘程違つて居る。前圖にある通り、頭に四つの吸盤があつて、それの頂上に毛のような鉤をもつて居ると、もつて居らぬとがある、それから猶一は亦鉤がなくて吸盤が溝のように裂けて居る。だから人に取付く條虫を區別して有鉤條虫、無鉤條虫、裂頭條虫の三類といふのである。各々長さを多少違へて、全躰が多くの環節から成つて、其の一環節が一動物たる資格を有して居る、即ち一環節毎に同様の躰內器管をもつて同様に卵を産むのである。有鉤條虫の長さは六尺半より一丈二尺程もあり、無鉤條虫の長さは之よりも長くて、一丈四尺より三丈に達し、裂頭條虫の長さは一丈六尺より又三丈もある。

條虫は扁く長く、丸で眞田紐のようだが、前にもいつた如く其の一環節づゝが一動物であるとすれば、彼れは多數の動物が數珠つなぎになつて居ると視なければな

らぬ。ところで其の環節は後部のものほど成長老熟して、前部ほど幼少なのである、チョット頸のやうな所は實は小い動物が未だ充分に發達しないから、環節が見えないのである、それに頭だけの一環節は特別の形をなして、腸の内面に鉤を以て引掛け吸盤を以て吸ひ付け、それで全躰の支へを引受けて居るのである。末節の老成したものは自分に澤山の卵を含んで、離れて人の肛門から出て行き、其の躰がいつの間にか朽ちてしまつて、卵ばかりが四方へ擴がり或は水の中或は草の根本などに到着する。水中に行くものは殼を脱し全躰の毛で以て能く泳ぎ（前圖幼虫の甲）草に止まるものは殼のまゝて眠つて居る。（仝上乙圖）水中を泳ぐものは魚の躰内へ入り込み、草に止まるものは牛や豚に其の草諸共に食べられて其の體に入り込む。それで我々が生魚を食して取り付かれる條虫は前に述べた裂頭條虫の類で、日本人は膾肉を多く食するものから此の類に條虫をもつて居る人が多い、殊にそれが鱒や鮭を生食するより起るのが最も多い。それから支那人などは豚を多く食するから他の條虫に取り付かれる、即ち有鉤條虫の類である。西洋人は牛肉によりて取り付かれそれが、無鉤條虫である。幼蟲が何れも魚や豚牛の假りの宿に入るときは、躰にある六本の鉤を用ひて（丙圖）、其の宿主の腸や胃の壁を穿ちて血管の中に入り、血の循るに伴ひ其の肉に達して何時までも潜み、其の間に嚢を破りて其の中で頭や頸が出來る（丁圖）それから頭頸が延びて猶未だ嚢を被つて居る（戊圖）漸く人が其の魚豚牛の肉を生食或は半熟食するに遇へば、始めて其の嚢を脱して段々と成長するのである。

條虫によりて起る病は强壯なる人ては左程に苦痛ともしないが、虚弱なる人にあつて殊に之を感ずるものてある。病人は常に軟い便を催し腹痛、嘔吐、食後に胸惡いこと、熱い物を食べ度くなり、又不時に食欲が進んだり、神經質の人は激し易く言語が錯雜して、眩暈、悶絶などのことがある。條虫は末節が離れ出れば、直ちに頭の環節が成長して元の通りになるもので、たとひ殆んど全身を抜き去つても、頭部のみが殘れば、それて

又始の通りになる。

以上蛔虫 旋毛虫、腎蟲、條虫、は我等が食物を取るに不注意なるから、其れ〳〵取付かれるものであるといふことは充分了解したてあらうと思ふ。何ても生物の煮方焼方の不充分なものは食べないようにすればよろしいのてあつて、其の養生は格段に六つかしくもない。

今度は一般に、不潔から起つて取付かれるものを述べよう。これには先づ蟯虫、毛頭虫などを眞先に擧げなければならん。

蟯虫はチヨツト蛔虫のような姿であるが、非常に小くて比べられたものではない、即ち雌は長さ三分程、雄は一分五厘程てある。此の虫は小兒に殊に多くて常に大腸の中に居る。大人ても可なり多く之をもつて居る。實に夥しく大腸の中に叢がつて、活潑に運動するもので、屢々肛門から出て又元へ歸つてしまう。奇妙にも毎日一回夜眠に就いた頃にウヨ〳〵と肛門から匍ひ出して、大變そこの痒さに堪へられないことがある、數時間經てば復び肛門内へ歸るから始めて安眠することが出來る。其の卵は非常に小いものてあるから、其の小兒等の夜具、衣服、指先、其の他の器物に附着し或は其の邊の空氣に散つて居つても見えない物だから、取付かれ易いのてある、殊に小兒は手當り次第に物を口にする所から一層甚いのてある。兎に角不潔は最もよろしくないのてある。其の病は下痢を以て始まり、腸から多くの粘液を出すから糞便が粘々して且往々血色を帶びることがある、又肛門が痒くなるものだから、無暗に之を搔ぎ破つて後に痛さに堪へられないやうになる。神經質の者は精神不安て甚しきは拘攣を來すことがある。虫若し多數に且永く存するときは衰弱を招くに至る。

毛頭虫は、姿の通り、頭の方が毛のように甚だ細く長くなつて居る、それて以て、人の腸の壁を貫き通して、容易に離れない。雌の長さは一寸五分雄は之よりも少し短くある。此の虫にかゝつたときの病は左程著しくはないが、多數になると隨分腸加答兒などを起し、又往

々脳病に陥ることがあるといふことである。これは人體から出た卵が溝や濕地に落ちて不潔の所に留まるを人が知らないで口の中へ入れるからであるといふことだ。

段々長く人體に住む動物の話をしたが、主なるものは即ち住血絲狀虫、十二指腸虫、肝臓ヂストマ、蛔虫、旋毛虫、腎虫、條虫、蟯虫、毛頭虫であつた、固よりこれは他にも未だ多くあることを略いてのことである。何れもヌラ〳〵とした長い體で眼もなく足もない不完全なる姿であるが、其の害を人身に及ぼすことは、吾々が之を思ひ返すも實にゾッとする程である。して是れは飲水や食物や身邊の清潔には大に注意しなければなるまい。

蟯虫



鼠も忍耐と勉強とによりて鐵の網を囓斷す

幽靈の話

山形縣女子師範學校長　津田元德

動物心理

幽靈は、有るものでせうか、無いものでせうかと、度々諸嬢より、尋ねられますが、心が、正當に働いて居る時には、決して幽靈などば、見るものではない、が、驚き、恐れ、悲み等、凡て、心の作用か、甚だ鋭くなりて、爲に、其事ばかり、思ひ出して、他の事には、心が少しもうつりませねば、幽靈其他色々の事が見えます、故に幽靈などは、心の作用の、間違つて居る時には、有るものと云はねばなりませぬ。

今を距る事、五百六十年前、世は南北朝に分れ、至尊の貴きも、邊鄙にさすらひ賜ひ、竹の園生の、やんごとな

き方々まで、身に鐵創を帶びて、御なやみ遊ばさるゝ御代の頃、忠義にはこり固りたる新田家の一族わきて、一とて二なき智勇兼備無双の大將、新田義興が、

彼の股肱と頼みに頼み、今の今まで、忠良無比の家來と思ひつめし、老臣、江戸高重、竹澤良衡の詭計に陷り、鎌倉を襲はんが爲に、其兵卒は先きに往かしめ、親臣數人と、東京の西數里なる六郷川矢口の渡に抵りしに、高重かねて命じたる事とて、其船手等は、中流の頃、舟の栒を抽きて泅ぎ去り、同時に、

兩岸より起りし伏勢が冷笑嘲罵せし時の、義興の瞋恚、實に如何ばかりなりしならん。

見る見る、髮は逆立となり、眦は裂けて朱となり、己れ憎き大逆無道人等、如何てか、此怨晴さで置くべき、假令、身は九泉の土となるとも、魂魄此世に止まりて、目に物見せ吳れんずと、實に見るも恐ろしく、聞くも肉戰慄を生ずる有樣にて、自殺せしといふ。

實に、さもありぬべき事にて、敵と味方と相戰ひ、軍敗れ、時利あらで、死に至るは、武士の習ひ、むしろ本望と云ふべけれど、數代恩顧の家臣に、かく詐かられ、かく嘲られ、かく害せられ、耻辱の横死を遂げし、其遺恨やる方なき如何なる語を以てか、之を現はし得ん。

されば、天道いかで、此儘にてあるべき、流石の高重も、深き恐怖は、其心に針さす如き感をなせしが、鎌倉に至りて、其歸途、矢口を過ぐる頃ひ、一天俄かにかきくもり、轟々たる大雷は、今にも頭蓋をくだくかと疑はれ、閃々たる電光は、今にも瞳孔をつぶすかとおもはしめ、横より下より吹きつくる風は、四肢をつんざく勢ひなり、右より左より降りかくる雨は、百戰の勇士も面を向くるを得ず、我ながら、知らず識らず、たぢ〳〵と避易し、ふりかへる途端に美々しき甲冑をつけ、白馬に乘り、あり〳〵と現はれいでたる武者一騎、聲高らかに、己れ高重思ひ知るかと、飛鳥の如く迫かけ來るをよく見れば、こはいかに〳〵、先きの日、たしかに此地にて自殺せしめし、舊主人、新田左兵衛佐義興なり。

こは、いかゞすべきと、鞭も折るゝばかりに、其馬を打ち据へ〳〵息をもつかせず、ひた走りに走り、やがて

數里も逃げのびたれば、と、振り返り見れば、尙いかに、義興は早巳に追付來れるに、尙ます〳〵恐れわなゝき、周章狼狽とは、かゝる事をか云ふべき、見るもあわれに、急ぎ馳せしがやがて其邸につきし頃、遂に馬より墜ち、それよりは、日となく夜となく今義興がせまり來れり、あはれ、主人は、予が頭を打たんとすなり、誰かある、之を止むる者は、やあ〳〵今予を殺さんとひしめけり、何故に、疾く來り救はぬぞ、など口走りつゝ、狂ひ死をぞなしたりと云ふ。

不忠不義の士、かゝるべきは明かなれど、さて死せる義興が何故に幽靈となりて現れしか、又高重一人の目には、日となく夜となく義興のせめ立つるを見れど、他の人々には、其影だに見えざるはいかに

これ幽靈なるもの、心の作用の正當の時出づるものにあらざる證にして、畢竟、高重といへども、其反逆のあしきを知らざるにあらねば、かの良心にせめ立られ、心自ら心をせむる上に、主人の死狀は、一層恐怖の感を深くし、其事のみ、心にかゝりし中、再び其地をすぎて、尙一層其情を強くし、特に雷雨の物すさまじきに、益々恐怖の念を鋭くし、遂に、義興につきて考へたる心の中の作用をも、實際の事と、思ふに至りし、最上の好適例ならざるべからず。

如斯、思ひはげしくなれば、只考へたばかりの事でも、實際の事と思ふに至るは、他にも其例の多い事でありまして、人の心ほど、げに、不思議のものはありませぬ、これを

心理學にては、幻想と云ひます。

弘法大師、唐よりの歸りに、九州の沖にて、大暴風雨に出あひ、

高さ千丈の怒濤は、船をゆり上げゆり下げ、幅數十町の狂瀾は、前より横より、舳艫をくだき、今にも海中の藻屑とならんず有樣にて、船中の老幼男女、皆生ける心地とては、あらざりし時、同大師は、流石の高德とて、目を閉ぢ、心を靜め、一心に佛を拜し、彌陀如來の御助けを祈りしが、忽ち金光燦爛たる如來佛の出現せられ、いとも尊き音聲にて、「ゆめ心配すな、雨風は直に靜めく

るゝぞ」、と申されしが、忽ちかきけす如くに其御すがたを失せさせ玉ひき、と元亨釋書なる書にあるのも、又此幻想で、一心に如來の出現を、想ひつめて居た故に、其心の中丈の作用を、實事と思つたのであります、されば、大師一人には、其が見えもし、聞えもしましたが、他の人々には、いくら、泣いても、喚んでも、見えも聞えもしなかつたのが證據です。

七日七夜の斷食、二十日間の參籠などせる、成田不動の參詣者は、よく不動樣を見るそうです、これ永く斷食などし、身體は衰弱し、心ばかり鋭くなり、實に不動の靈現のみ思ひつめて居る故、遂には、眞に出現せられしと同樣の心になるものであります、されば、たとへ、七日七夜は置て、百日參籠しても、一心に其事を思ひつめぬ人は、決して見えませぬ。

其ほか、ヒポコンデリーと申す病の人は、何もないに、腹中に固まりが出來た樣に思ひ、心配性のかの、鬱憂病者は、何もありもしないに、恐ろしき顔の人が、前に來て自殺をすゝめるなど云ふも、皆此幻想の、強く永く續いたのであります。

つまり云へば、彼の氣狂ひは、此幻想の永く續いたので、時々幽靈を見たりなどするは、此氣狂の短いのであります。

さあー、赤飯をたけよ、油揚を持てこよ、千年前の篠田の森の古狐だなど云ふ、世の狐つき又犬神つきなども全く此幻想の一種で、何か、一時の興で、狐を打つとか、其穴を堀るとかするが、さて狐は、人に憑くものだと、かねて聞き込み居る故、興さめた後に、はて狐はつきはせぬか、たゝりはあらぬかと、日夜其事ばかりに心を痛め、彼の高重の樣に、思ひつめて恐れて居る内に、自然に血液の循環をあしくし、膓胃病などおこし、腹部に固まりでも出來れば、さあー、仕舞つた、確かに狐がついたと、一層恐怖の情つよくなり、其心丈の思を、眞實にある事と思ひ誤り、遂に自ら自分を眞の狐つきに、爲て仕舞のであります。

壹升五合の赤飯を、一度にたべ、油揚の五十も一時に食し盡すを見て、世人は、狐が憑いて居ないのなら、な

ぜに、あの樣に食べる事が出來るかと疑ふ人もあるが、人の胃は、一時は中々擴張するもので、書生の時に、ざるそばを、身の丈だけ食べたとか、汁粉十五杯平げたなどの話は、珍しくない事であります、かの、狐つきの油揚五十も、十日や二十日は、續きます、が、胃が衰弱しますから、三十日とも續かぬが證據て、狐が眞に憑いて居るなれば、一年でも二年でも、乃至十年ても、右の大食を續けらるべき筈であるが、必ず二十日か三十日かより續きませぬ。

又、これ迄、一字も習はなかつた者も、狐つきとなれば、字が書け、一度も彈かなかつた三味線も、彈く事が出來るなどは、なぜか、神變不思議の古狐が憑いてるにあらざれば、出來ない事ではないかと、問ふ人もありますが、此も、心が、一方にのみ、非常に鋭くなれば、出來るもので、心ほど誠に面白いものはありませぬ。

有名の詩人「ミルトン」氏は、悲いかな、中年其最も大切なる兩眼の明を失ひましたが、其非常に鋭き心の作用は、常に生々として、働いて居ますから、盲目となつた後、尙立派な景色を、あり／＼と見たと云ひます。

名高き音樂家「ビートーベン」氏も、其一番大切な耳をいため、遂に、聾となりましたが、其後も尙度々、面白き音聲を聽いたと申します。

實に、心次第て、盲目も物を見、聾も常人と同じく、面白き音聲を聞く事が出來ると云ふは、珍らしき事ては、ありませんか。

彼の、碁、象棊に、熱心なる人は、日夜能く工夫し、考究する内に、あり／＼と、黑白の石の排列を見、又彼の病犬に噛まれて、世にも恐ろしさ、恐水病となつた人には、水の話しても、又水の畫を見せても、眞の水と思つてふるひます。

星學士、「サー、ジョン、ハルセル」氏は、考へて居る内に、幾何學の圖式が、目の前に現はるゝ事は、度々あつたと云ひました。

希臘の學者の家に居た下婢は、熱病にかゝつた時に、曾ては一度も見もし聞もし、又學びも爲なかつた、有名なる長篇の詩を、暗誦して、一驚を喫せしめしが、能く

〱調べて見ると、全く其家の先生が、常々朗讀せられたのを、聞くともなしに、聞いて居たが爲、無論平常は、其一句すら記臆もしないと思つて居たのも、心の方では、覺えて居たと見えて、熱の爲に、うかされ出したのだそうであります。

　されば、狐つきが、文字を書き、三味線を彈く位の事は此下婢に比べて見れば、何でもなき事て、其位の事は、たやすく出來る筈てあります、則ち、平常は、決して書きもせず、彈きも爲ないが、目には見、耳には聞いて居る故、それが、かの、精神の狂ひの爲に、非常に鋭くなつた爲に、出て來るのてあります。

　故に、斯樣な狐つきなどは、一度も見もせず、聞きもしない事は、決して書きもせず、言ひもせぬが、證據てあります。

　因幡國氣高郡酒津村と云ふ漁村に、一人の狐つきが出來て、從來、未だ一の字すら學ばなかつた男が、立派に文字を書くと聞きましたから、西洋の文字を書いてくれと、申し送りましたら、「書き得ぬ」と、斷つて來ました。

　則ち、まだ一度も西洋文字を見た事がないから、幾ら心の作用が鋭くなつても、出來ないのてあります、若し眞に千年の功を積みし古狐で、神變不思議の物が、憑て居るなれば、なんで、六尺の童兒も書く位の、AB位が、書けぬ事がありますか。

　此通りに、御話して見れば、幽靈や狐つきも、皆誠に心からてあります、西洋には幽靈が出ず、日本にばかり幽靈があると云ふ人も、ありますが、右申した通り、全く心の作用てすから、西洋でも日本と同じて、種々の書物に出て居ますが、今其一を擧げますれば、彼の、

　文學には、古今無比とも云ふべき、英國の、「シエークスピーヤ」氏の名高き著書、「はむれつと」にも丁抹の王（ハムレットの父）が、突然に死せし後、一ケ月も經たぬ内に、幽靈となりて現れ、其太子、「ハムレット」に、自分の弟、則「ハチレット」の叔父に殺されたのだから、是非に、敵を討つてくれよ、と賴む處が、非常に物凄く書いてあります。

これも、「ハムレット」始め、一同の者が、國王の死の突然なりしに疑をいだき、心は鋭く常に其事ばかりに作用で居た結果てあります。

されば、洋の東西を問はず、人の黄白を論ぜず、心から狐つきともなり、心から幽靈も見えるのてありますから、お互に心の作用を正しくし、心から恐れ、心から悲み、心から驚かされ心から惑はされ、自ら其心を病人にし、自ら其心を狐つきにし、自ら其心を氣狂にしてはなりませぬ。

斯く、爲らない樣にするには、彼のありもせず、出來も仕ない、つまらぬ事に、心を鋭くし、神經を強くし、思ひこみ、考へ込などしないて、日々正當の業務をはげみ、不德不良の行ひの爲に心を勞する事なく、晝は孜々としてつとめ、夜は靜穩に安眠する事が第一てあります。

我國の人達、特に母親たちは、子供の啼泣を止むる爲に、そらお化が出るとか幽靈が物凄いとか、此世界に實際ある物かの樣に話す癖があるが、極々いけない事てす、此が爲に我國の人が、かねて神經質であるに、無暗に恐怖心が強くなつて、中學校、師範學校の學生になつてさへ、實に夜中一人で便所に行き得ぬ者が澤山あると云ふ風ては、まして、人の母たる者てすら其室内を恐るゝ有樣ては、とても、東洋第一の大帝國民とは申されませぬ、まして、世界の大帝國となる事は、出來ませぬ。

筆者が、奉職して居た師範學校などにも、澤山の憶病者があつたが、一夜便所て誰か來る足音を聞き、ヤーと聲を懸けた處非常に驚いたと見え、かねて隱し持ちたる佩劍を打ちつけて、周章逃げ去り、巳に、大創を負ふ所危くも免れた、と憶病てなき學生の一人が話して居ました、ヤーと人聲のするに驚く樣な膽ては、貝の中の虫と同樣てありますが、此貝虫ほどの小膽には、誰が致しましたか、實に幼少の時より、右のつまらなき、お化などの話を實際として、聞かした親達てあります。

彼の古への武士が、膽力をねる爲に、色々の練習をなし、水戸黄門光圀卿の如きも、十歳の幼時に、獄間に上

り し首を、深夜携へ歸りしなどの傳說がありますが、斯樣にして、膽力を練らぬまでも、せめては、以上說明せし、幽靈又は狐つき、或は、お化などの道理を、能く辨へて、其子弟に敎ふるにも、從來の如く、つまらなき事を聞かせぬ樣、願ひたきものであります。

尙序に、次卷には、此の幻想とよく似て居る幻影の話をいたしませう。

名をきけば昔ながらの山なれど
しぐるゝ秋はいろまさりけり

裁縫實習

共立女子職業學校教員　金子銅子述

▲女兒用洋服（つゞき）

縫ひかたは先づ第四十四圖の袖をとります、これは第四十三圖の（あ）と同樣のもので（あ）は袖を二つ折にしたものでこれは、（あ）の如く裁つたものを廣げた所で第四十四圖の（ら）の點線は第四十三圖の（あ）の（ア）に當ります、これの（イ）（第四十三圖の）の縁を三つ折にして躾にてをさへ置きてミシンをかけます、次に（イ）の縁より七分位離れた所で（ア）の如く三本若くは五本小針にて縫ひをき此小針の間は一分位はなすをよしといたします

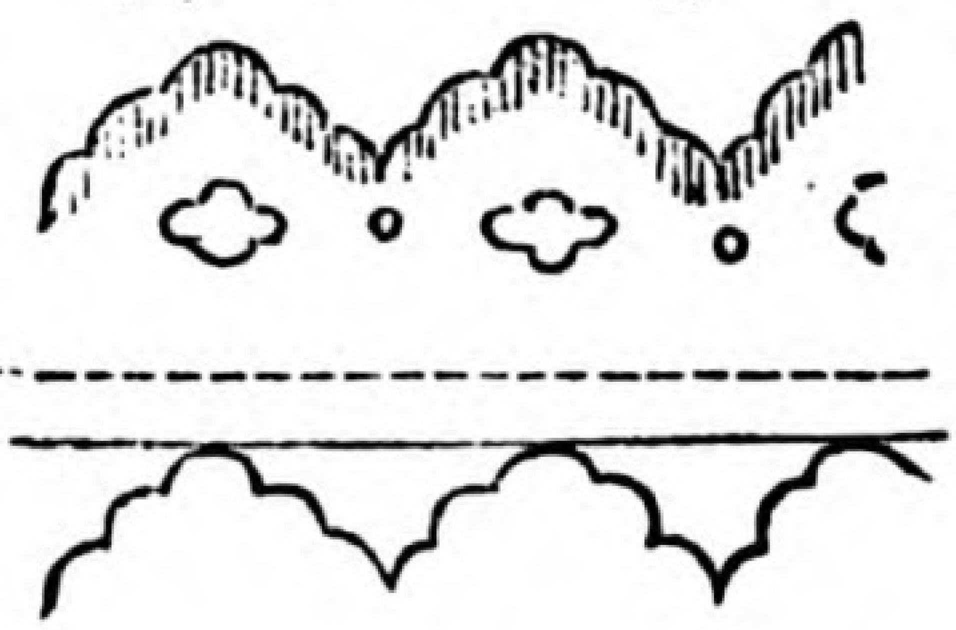
この小針に縫ひました（オ）の兩端は一寸三分位を縫ひのこします、この小針に縫ひました糸を引き縮めて着用する人の手の太さに適ふ樣に致してギヤダをつくります、そのギヤダの表の方に縫ひ取りテツプを當て其テツプの兩方の縁をミシンにてをさへます、次に（カ）二寸五分（キ）一寸二分位をのこして縁にそひて三本小針にぬひます、この三本の間はやはり一分位はなします、次に（エ）と（エ）を合せて袋縫ひに致します、（はしめは小針に手縫ひにいたし二度目はミシンにて縫ひます、次は第四十三圖の（え）の切をとりまして、（オ）の所の縁を三つ折にしてミシンをかけます、次に圖の（オ）より二分位さがりまして、兩端（カ）を一寸三分位殘して、小針に五度縫ひます、此間もやはり一分位をはなします、次に第四十三圖の（か）の切をとりまして、（ア）の切れめの所に見返しをつけます、（この見返しの切は六分位の巾につくので今までヅロース、シミヅなそに付けたと同樣に致します、）次に此切の（エ）の所を三つ折

にしてミシンをかけます、次にこの見返しだけと兩端の縫ひ込丈とを殘して又三本小針に縫ひます、次に第四十三圖の(い)の切と(う)の切とをとりまして、(い)の切の(ホ)と(う)の切の(コ)とを合せます、左右、裏表ともか樣に致しましたら肩を合せ縫ひ込みは皆割ります、次に(い)の切の(ケ)を表裏を合せて縫ひ(う)の切もまた(ク)を表裏合せて縫ひます、次に脊の上まへになる方即ち右は(う)の切の(ケ)の點線の所を裏表合せて縫ひ、下まへ即ち左の方は(ケ)より(ア)までの巾を八分位として裏表を合せてぬひます、次には矢張第四十三圖の(ね)の切をとりまして中央に針をうち(い)の切の(コ)の所に合せ(た)の切の(キ)(ク)の巾が(い)の切の(コ)(ク)にわふ樣にギャダをつくり此所を二枚合せて待ち針をうちて躾にてとめミシンをかけます、この(え)をつけるには少しく(た)の切を(い)の上に重ねかけてつけます、即ち第四十五圖の如くになります、つまり(い)の切の(ア)はつゞきてありますから前の胸の所は左右とも一度につけ終るのでござります、次に(た)の切の(ウ)と(か)の(ウ)とを合せます、次に(か)の切の(ア)の見返しの下を見返しの巾だけに一寸縫ひまして、並の着物と反對にかへします、即ち第四十六圖の

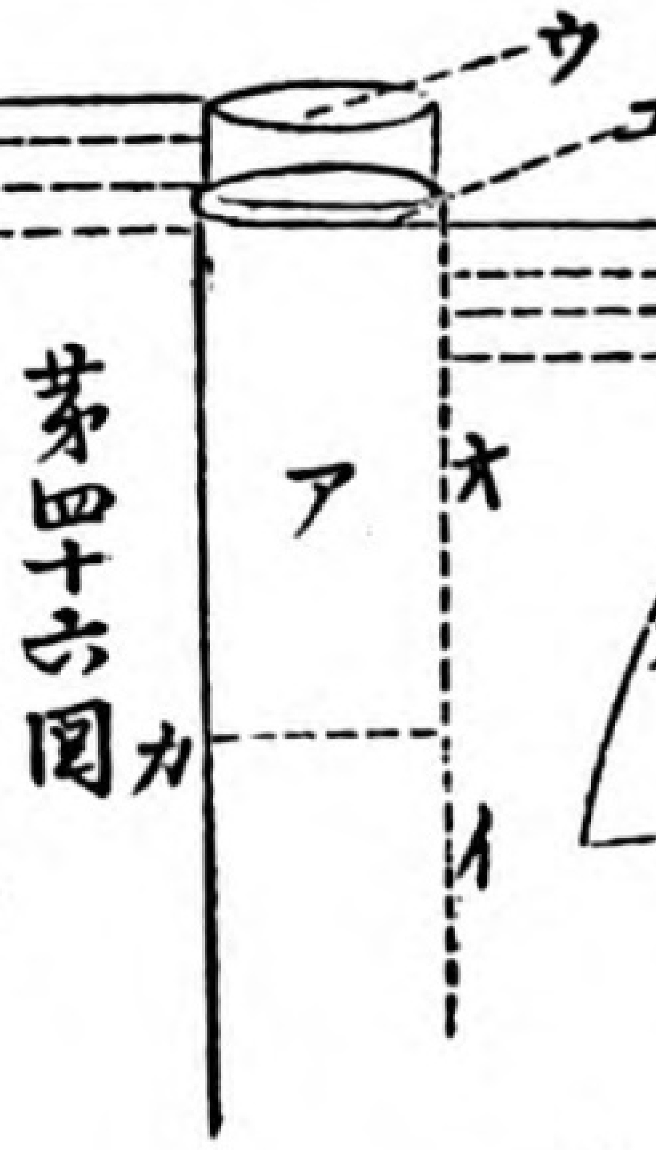
(ア)の樣になるので(ウ)は下まへの見返し、(エ)は上まへの見返しの折り込めた所(オ)の點線は見返しの折り込みてある所を現したもの、(イ)は縫ひ込みを示したものでございます、そして(ウ)と(エ)との見返しは離れて居り(カ)より下が一寸縫くある所でございます、次に同圖の小針に三本縫てあります所を第四十三圖の(か)の切の(エ)に(う)の切の(ク)を合せて糸を縮め背の切につけます、これもミシンか返し縫ひに致します、次に裾がけこれは初めに一分五厘位折りまして、次は一寸に折ります、もし、丈のあるものなれば今少々多く折ります、其所はミシンかマツルか致します、次には襟の所でありますが、こゝは裏表別々になるべく淺く折り込みまして（此折込みの端はツレルことがありますからそれをさける爲に極々少しく切りめを入れます、）此間にエンブロイダを入れます、エンブロイダは御承知でもござりませうが一寸略圖を以て示せば第四十七圖の樣なもので(ア)の所を縫めとしてそれより一分位の切を殘して(イ)の所を切りとります、かくして仕度の出來ましたエンブロイダをとり兩端を三つ折にして細くマツリ襟の間にはさみてツレヌ樣に又ユルマヌ樣に注意して躾にてとめミシンをかけます、次に

袖を付ます、袖は第四十四圖の(ク)の縁に出來てをる三本の小針に縫ひ置きました糸を縮めて身の明と同樣に致し袖の幅の一番に廣き所を山にして袖下の縫ひめ即ち第四十四圖の(ユ)及(エ)の合せめは胸の切と下の切との合せめより五分位下りました樣に(無論袖下の縫ひ目は前に向きます、)致して肩の所にギヤダを多くつくり他は少しくゆるむ位にして置きます、そして格好のよき樣につけてゆきます、こゝは矢張躾にてとめをきミシンをかけますが返し縫ひに致します、左右とも斯樣にして終りましたら縫ひ込みの凹凸がありますから其縫ひ込みを二分位の巾に切りましてこゝをからげてをきます、次に第四十三圖の(き)の切の中で(ク)及(コ)の切をとりまして(コ)と(エ)とを繼ぎ合せ縫込みを割て其縁をマツリつけます、次に斜になつて居る方の縁(イ)(ウ)と兩端とを細く三つ折にしてミシンをかけ、(カ)及(キ)の縁を二分位離して小針に四度縫ひます、此四本の間はやはり一分位に致します、この小針の所を適宜に縮めて前は第四十九圖の(ア)(イ)の如くつけまして、後は第五十圖の(ア)及(イ)の樣につけます、この圖の(ウ)は第四十八圖の(ア)及(エ)でございます、これも亦肩の所にギヤダを多く致します、此つけ方は第五十一圖の樣になりますので、即ち(ア)の所をつけ(イ)の端は離してをきます、次に第四十三圖の(き)の圖中の(ア)の及び(イ)の切をとりまして、灣曲になりてをる方の縁を三つ折にしてミシンをかけ、眞直の方を三本小針に縫ひます、即ち第五十二圖の(ア)(ウ)(イ)の縁を三つ折にしてミシンをかけ、(エ)の縁より二分離れた所に小針に三本ぬひます、次はこの切をつけまするに、前は第四十九圖の(ウ)(エ)の如く、後は第五十圖の(ウ)(エ)の如くつけます、この切は縁が切りめになつてをりますから裏を出して身の切につけて折りかへしますのでござります、即ち第五十三圖の(イ)を裏よりつけて引かへしますので、(ア)は裏を見た所の(ウ)の點線は縫ひ込みを現したものでございます、次に此洋服の總丈でありますがこれは着用する人の丈によりまして、裾にタックをつくります、此タックは下より一寸五分上りました所に三分つまみまして、次は六分上りました所を三分つまみまして、ダシ縫ひ(これはごく細く)かミシンかにて縫ひます、タックの數はいくつでもよろしく又つまみますあげの巾は其人によりていろ〳〵に致します、つまりタックの致しよい樣に割つけるのでございます、又第四十三圖の(き)の切の

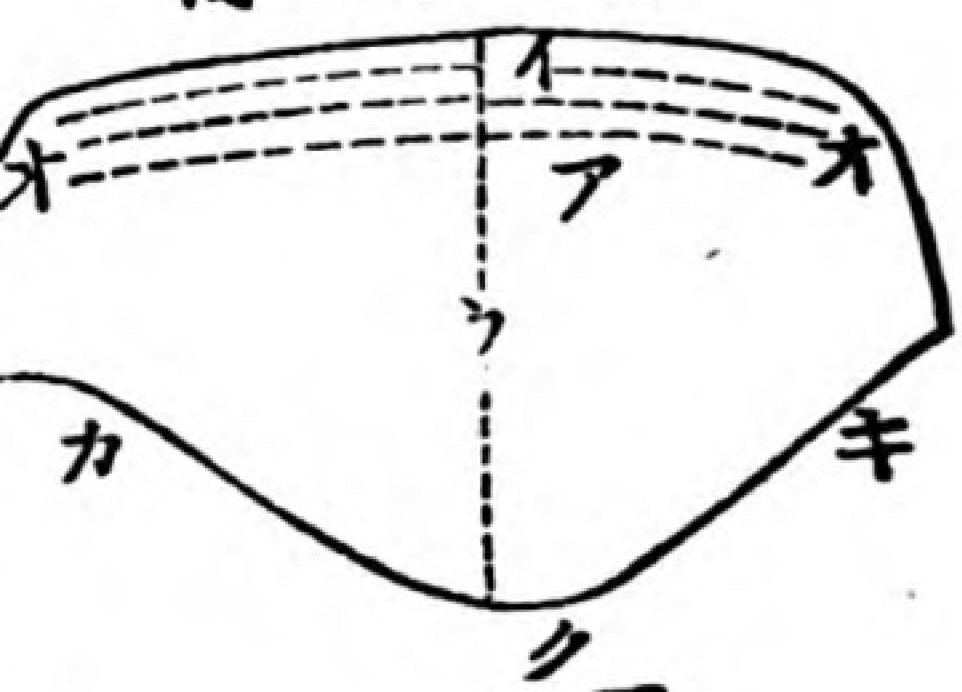
第四十七図



第四十六図



第四十四図



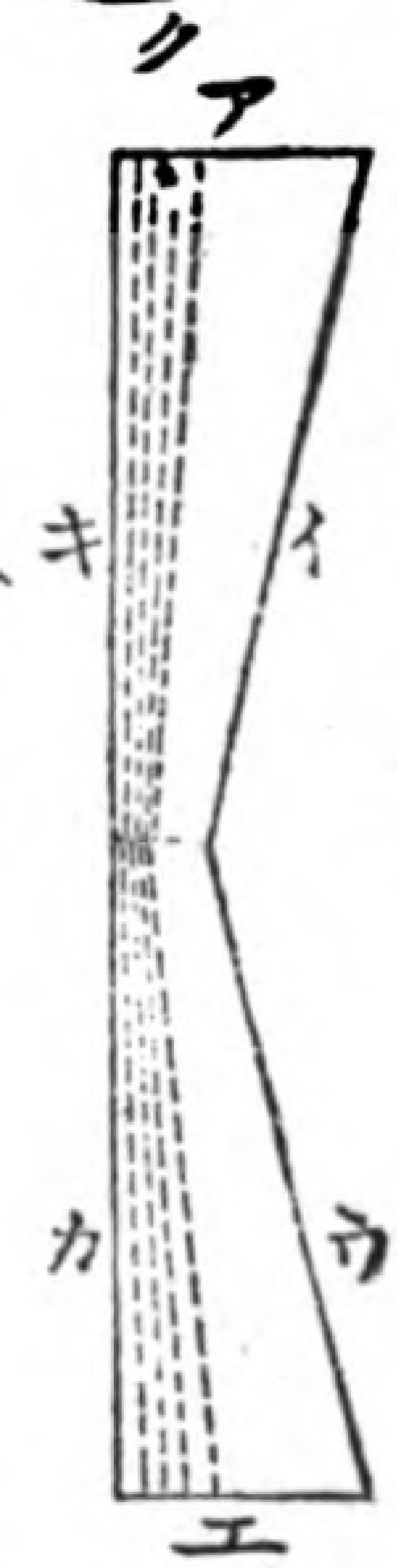
第五十之図



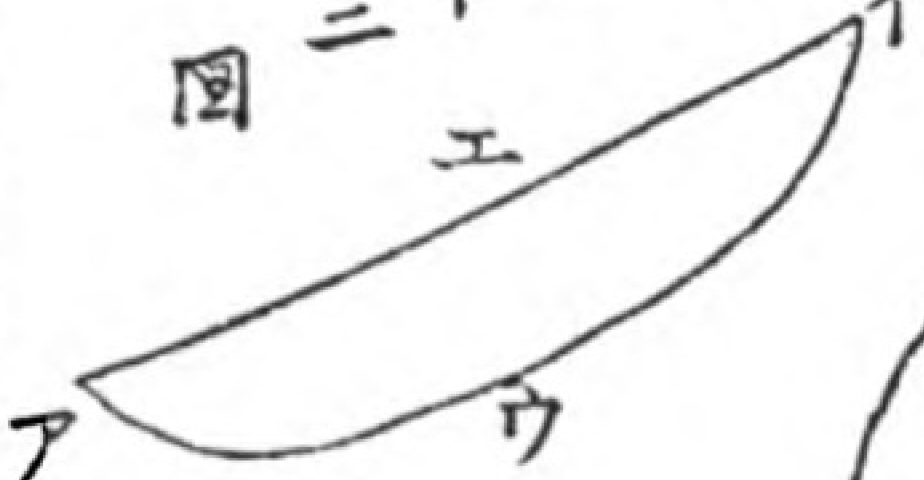
第五十図



第四十八図



第五十二図



第四十九図



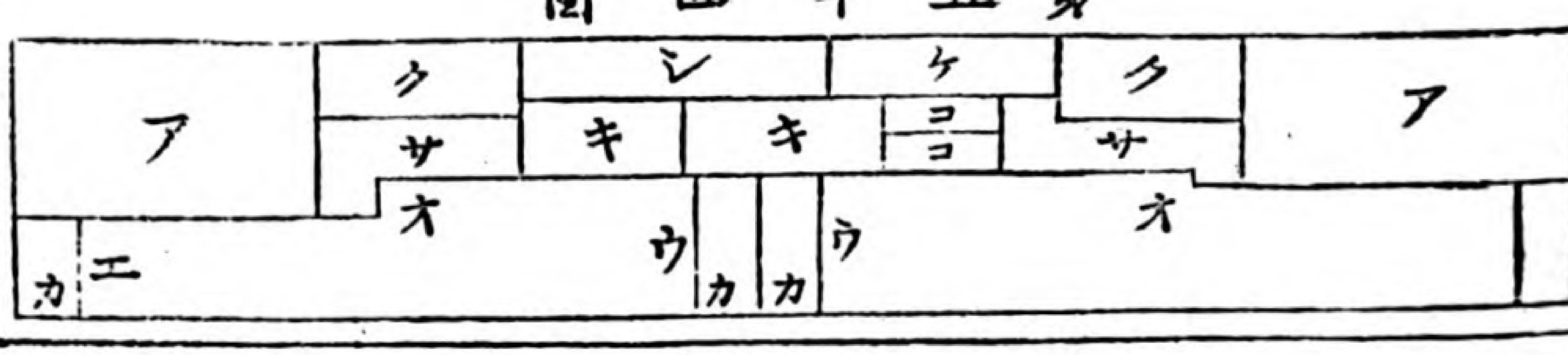
第五十一図



第四十五図



第五十四図



内て(ア)(イ)の丈を九寸とし、(ク)及(コ)の切を一尺三寸位にいたしますと一寸アッサリとした飾になりますつまり、ギヤタの多きと少きとの相違で別にかわりはありませぬ、先づこれで小兒用洋服は出來上りといたします。

三つ身裁ち方

猶引續き今二三も小兒用洋服に就て御話し致したいと存して居りましたがもはや本年もあと一回となりまして、とても一つ丈ても御話し致し盡すわけにまゐりませぬ、それゆゑあまり順序が種々になッてこまりますけれどもやむを得ず只今まで申殘したものを二三申上まして本年は終りと致しませう、さて此度御話いたしますは、小兒衣服、てこれは中巾もの大概一尺二寸巾のもので三つ身引返しを裁つしかたでございます、即ち第五十四圖の如く(ア)袖で總丈が三尺丁度一尺五寸の袖丈でござります、巾は七寸四分、(イ)は身頃て(ウ)後巾て六寸三分、(エ)前巾四寸五分、(オ)衿肩一寸八分、身の丈後及前身頃を通して總丈が六尺つまり三尺の丈てござります、(カ)が裾廻して、この丈が一尺即ち點線の所が表と裾廻しとの別ちてござります、(キ)は衽で、丈が二尺八寸つゝ、巾四寸といたします、(ク)は立褄(裏の立褄であります、)長さ一尺三寸、巾四寸三分、(シ)は衿でございまして、巾一寸七分、丈五尺四寸といたします、(ク)はかけ衿でござります、(コ)兩袖の袖口切て、巾は丁度衽巾の二分の一、丈は一尺三寸、(サ)は餘り切でござります、積り方は身頃の四倍に裾廻しの丈の四倍とを加へて用布丈を得るのでござります、仕立方は普通のと相違はありません、それに前巻に仕立方に付て御話しもいたしてござ いますから、こゝでは申上ませぬ、しかし並のとちがひまして、裾廻しの切たけは切はなたずに縫ひ上けました方がよろしうございます。

編物實習

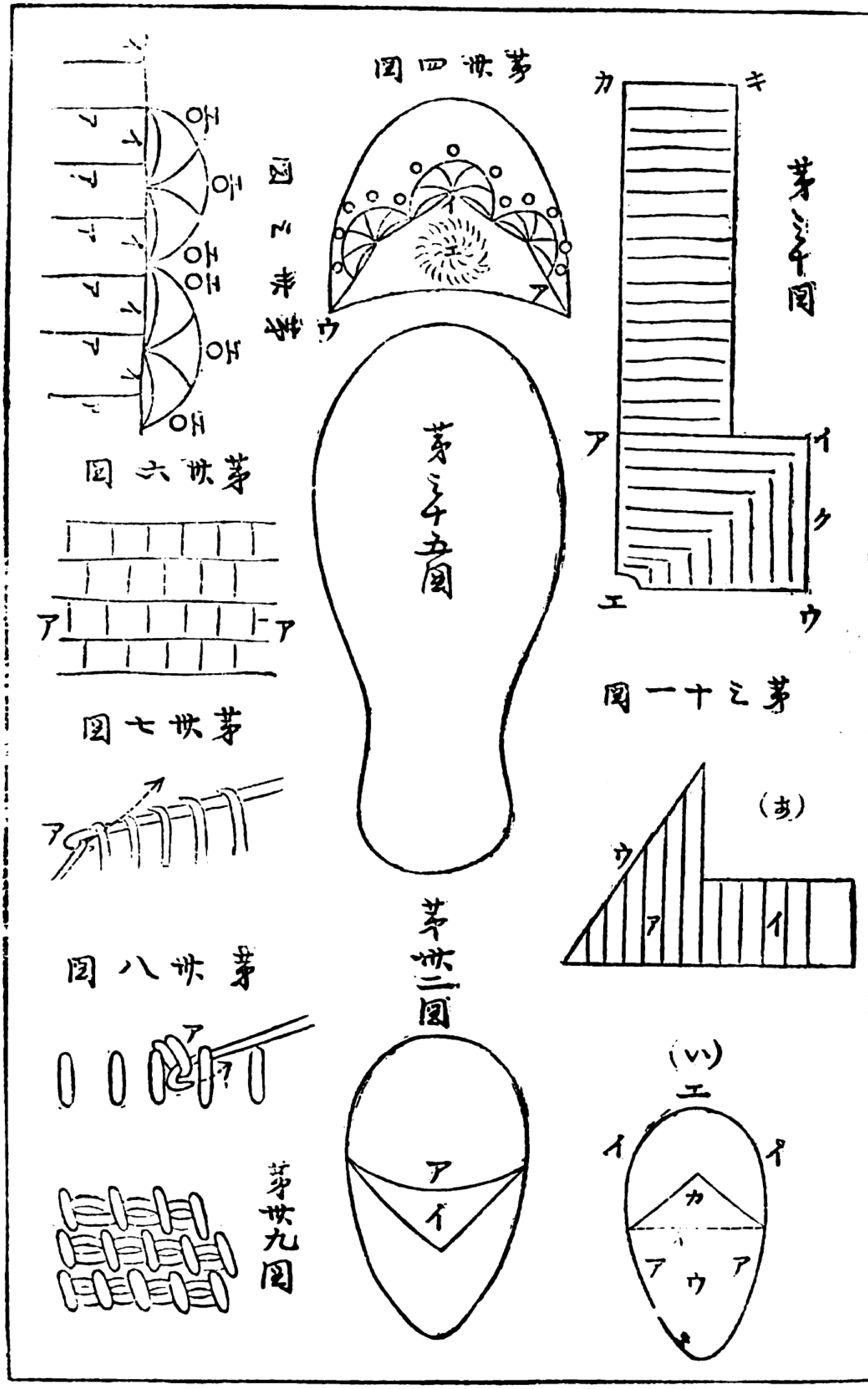
花靴の編方

共立女子職業學校教員　豐原繁尾述

此度は一二歳位の小兒用の花靴編み方を申上ませう、糸は並の太さの毛糸で二色を用ゐます、これを編みますには足の甲のつまさきから始めます、先づ八個の鎖編みをいたして其鎖編みの終の次の目より其鎖編み一つゝゝをすくひまして、帽子編み一個つゝを致します、

端より數へて三つ帽子編みが出來ましたら四つめの目に帽子編みを三つ一所に入れます、次は又一つの鎖編みに一つの帽子編みをいたして三つ編一つあみまして、一寸持ち直して、(此度は裏を見てあむ樣になります、)今編みました帽子編みの向うの目一本をすくひまして、帽子編みにて一目つゝすくひて編てまゐりまして前の側て出來てをる中央の目(三つの帽子編みが一つ所に出來てをる其中央の目)に又帽子編み三つを編み入れます、又次は一目つゝすくひまして帽子編一つツゝ致たして此側を終ります、次は他の色の毛糸をとりまして糸を引出しますと十度一つの鎖編みが出來ます、直に其糸にて裏にかへり中央の所までは一つの帽子編向ふの目一本をすくひまして、帽子編一ツ、入れまして、中央(前の側に一つの目に三つの帽子編が編み込みてありますその中央)の目に三つの帽子編みをいたし他の所は一個の帽子編みの上の向ふの目一つツ、すくひまして一つの帽子編みをいたして此側を終ります、又次に鎖編み一つをいたして一寸持ちかへて前の側と同樣に編み(中央の所には一つの目に三つの帽子編を入れます、)て前に用ゐました糸がきらずに其まゝになつてをりますから其糸をとりかへまして直に引出し持ち直して又前の側の通りに編みます、つまり一の色でゆきかへり編みますそれて色の替りました所を一段と數へて十四段編みまして、第卅圖の(ア)(イ)(ウ)(エ)の如き形が出來ます、それて此十四段出來上りました總目數が六十三となります、次に此圖の(ア)(オ)の間の目數二十個丈とりまして、只今までの通りにとりかへまして、十三段編みますと(ア)(カ)(キ)、(オ)の形が出來ます、こゝを同圖の(ウ)(ク)の所に付けます、このときはよく目の數の違はぬ樣にヘーケルにて合せます、が、よく表と裏とを見わけて(同色にてあみました所の目の絲が一本立て居る方で裏はこの目が立て居りませぬ、つまり編初めに表にいたした方を外に出して之を表とするのでございます、)表を外に出して合せます、即ち第三十一圖の樣になります この圖の(あ)は側面て(い)が正面であります、(あ)の(ア)は(い)の(ア)と同樣、(あ)の(ウ)は(い)の(ウ)ト同樣(あ)の(イ)は(い)の(イ)と同樣のものでございます、次は(い)の圖の(エ)の所あたりより帽子編みをいたして(オ)の所は點線の如く(カ)の三角形のものを足の甲の表の方に折返して丁度圖に示せは第三十二圖の(ア)に帽子編みを致します、(此三角の所は余程多く折る心

もちて返して編みませぬと出來上つてから少くなりまして見えがわるくなりますから御注意中して置きます、）此帽子編みを一回致しましたら其糸にて鎖四つを編み前の側にて出來てをる帽子編の目一つとばして次の目の（帽子編みの目）二本をすくひまして長編みを一つ入れ一つ鎖編みを致しては前の側の帽子編みの目一つとばして、長編み一つを入れ互ちがひに編て一回致します、此側の終には初めに鎖編みが四つ出來てをる其所の目を下より數へて三つ目の所にへーヽヽヽクルを入れて糸を引出し、殘の一つの鎖編みの所を向ふの目一本をすくひまして、他の色の糸をとりてそこより引出します、これてこの一側が終りました、次にはそこを皆すくひまして、帽子編みを致して鎖編み四つ、編み前の側の鎖編みの所に長編みを入れ一の鎖編みをいたして、前の側の長編をとばして、鎖編みの所に長編を入れます、か樣にして一回致しますと、終りは此側の初めに編ました四つの鎖編みの所にまゐりますからそこを下より數へて三つ目の鎖にへーヽヽクルを入れて直に糸を引出し直く隣の目の向ふをすくひまして、他の色の糸（前に用ゐましたものと同色のもの）をすくひ出しそこに直に帽子編みを致して鎖編四つを編みます、か樣にして一側毎に糸をとりかへて編むこと五段次の側よりは飾になります、此飾は前の側の鎖編みの所に長編み一つを入れて鎖編み五つをいたし其長編みの上の目（前の側て編みましたのでなく飾として今編みました長編み、）を二本ともすくひまして直に絲を引出して丸球の形をつくり又長編みを同じ所に入れて五つの鎖編みをいたして前の通り球をつくり又長編みを致して前の側にて出來をる長編み二つをとばして鎖編みの所に帽子編み一つを致します、即ち第三十三圖の（ア）は五段目の長編みと（イ）の鎖編みてあります、（ウ）は飾の部の長編み四つが一つ所に出來てをるもの、（エ）が五つの鎖編みの球の形に編みましたものでござります、次は前の側の長編み即ち圖中の（ア）を一つとばしまして、又長編み四つと球の形のもの三つと編てまゐります、それば此飾が一回致しましたら絲をきります、次は足の甲の三角形のもの即ち第三十二圖の（イ）の三角形、これを第三十四圖の樣に持ちまして、（ア）の端の目に帽子編みを一ついたしまして、それより四つ位目をとばしまして五のめの目に第三十三圖の（ウ）及（エ）の如き飾を編みました通りに致します、しかしこゝは一つ所に編み込む長編みの數が六つ球の形が五つとなり


第卅四図
第卅三ノ図
第三十図
カ
キ
ア
イ
ク
エ
ウ
第卅五図
第卅六図
ア
第卅七図
ア
第卅八図
ア
第卅九図
第三十一図
(あ)
ウ
ア
イ
第卅二図
ア
イ
(い)
エ
イ
イ
カ
ア
ウ
ア

ます、それより四つ位目をとばして、帽子編みを致し、次は第三十四圖の（イ）の所に長編み六つ、球五つをつくります、つまり此三角形のまわりに三所飾が出來ますので第三十四圖の如くなります、以上申上ました丈で足の甲の方は出來ましたから蹠になります、蹠即ち底は目數は申上られませぬから厚き紙をきり置きましてそれに合せてムシロ編で底をつくります、（ムシロ編みの編み方は此終りに申上ませう）其底の形は第三十五圖の樣なものでござります、大さはなるべく甲の方と比べて小さめの方がよろしうございます、底が編み上りましたら踵の方より付けはじめて（この蹠と甲とを合せますときは甲を手前に底を向ふにいたして持ち編みつけますのでござります、）帽子編みにて合せます、夫から此ときに注意すべきことは踵の方て少々ツル工合に（これは第三十一圖の（あ）の（イ）の所の方をツルのでございます、）いたしツマサキの方は少しく甲の方をタルマセル樣に付け合せます、か樣にして出來上りますと格好のよいものになります、次は紐、これは二色の內三角の形の所の飾と同色の方をとりまして、鎖編み八十より百位までと致し其上に帽子編みを一側いたし靴の飾の下に長編み一ツ、鎖編み一ツと五段に編みました其所の下より二段目丁度第三十六圖の（ア）の所に長編み二つ置に通し足の前になる方を眞中として紐の先をこゝに出し其先に同色の色にて球を付けます、此球は前に度々申上ました通り二本指に毛糸を五十回許巻きつけそれを其中央にて木綿絲にて固く結び丸くなる樣に切り揃へます、次に此飾の球とちがふ色の毛糸をとりまして、又二本指に七十回ばかり巻きつけ前の樣に其中央を木綿絲にて結び球の樣に丸くいたして其木綿糸にて第三十四圖の（エ）の樣に表より通し裏にて結ぶ、左右共此樣にして出來上る。

是て花靴が終る、ムシロ編を申ませう、此是は初めに鎖を編て、其鎖の目一ツづゝにヘークルを入れ糸を引出してヘークルにかけ置ます、此側殘らず此樣にして終りたらばヘークルの先に懸て居る方より糸を引出してはづしてまゐります、第三十七圖の樣にヘークルに糸をかけ（ア）の端より糸を引抜乍矢の向にヘークルを拔て參ます、こゝ一側編みたら次は只今出來ました縦の目第三十八圖の（ア）の樣に目にヘークルを入れては糸を出してヘークルに懸置す、殘らずかけ終りたら又前の如くに端より糸を引出して此掛た糸をはづして參ます、これがムシロ編で第三十九圖の樣に編み上ります。

講義

國文學講義

憎きもの（下）（枕草紙）

文學士　尾上柴舟

いま參りの、さしこえて、もの知り顏に、敎へやうなること云ひ後見たる、いと憎し。(中略)嚔ひて、誦文する人。大かた、家の男しうならでは高くはなひたるもの、いと憎し。

○いま參りは今參りたる者の意、乃ち、新參者を云ふ

○さしこえて、さしは意なし。こえて、は人より先きに、人の先を越しての意。○敎へやうなること。人に物敎へなどするやうの事。○後見たる。人の世話を燒きたるなり ○嚔はなひるは、嚔をするといふ。○誦文、文をとなふるなり。これ、嚔すれば、當時、惡氣身に入ると考へたれば、文を誦して、之を拒ぐまじなひとせり。其文は、休息萬命、急々如律令といふと、拾芥抄に見えたり。○家の男しう。男しうは、男主にて、男主人を云ふ。

○新參者の、先輩の先を越して、物知り顏をなし、人に、物敎へをするやうの事を云ひ、何彼と、世話を燒きたるは、實に、無遠慮千萬にて、人を凌ぐ風、著しく見えて、いと憎きものなり。また、嚔をなせば、惡氣身に入るの恐れありとて、傍の人が、その人の爲めに、急々如律令と、呪の文を唱ふることとなるが、自づから嚔して、自づから、其文を誦する人も憎し。また、一躰家の男主人ならば、兎に角、主人にてもなき者は、皆遠慮して憚ることとなるに、それ等の中の者の、聲高らかに嚔したるは、謹みなきやうにて、いと憎きものなり。

○新參者の差出は、もとより憎し。男主人ならぬもの

の、高き嚔めも、また、憎かるべし。されど、嚔ひて後の誦文を咎めたるは、今日にては、一寸想像しがたきことなり。平安朝は、元來、迷信の深き時なれば、自づから、かゝる事もいはるるに至りしなり。此處、異本に「はなひて、てづから誦んじ、祈る人」とあり。これならば、意いよ〱明らかなり。「大かた家の男主ならでは」のはの字、必ず、無くてありぬべし。ありては、頗る明快を欠く。中畧の處は、讀者の知らでよきものあればなり。

蚤もいと憎し。衣の下にをどりありきて、もたぐるやうにするも。又、犬のもろ聲に、長々と鳴きあげたる、まが〲しく憎し。

○もたぐるやう。持ち上ぐるやうなり。衣を、下より持ち上ぐる如くするなり。○もろ聲。諸聲の意にて。數多居て、あれも、これも鳴く聲なり。○長々と鳴きあげたる。犬の長鳴きをするを云ふ。鳴きあぐるは、たゞ、鳴きつゞくること。○まが〱しく、狂々しきなり。狂事らしきなり。氣味惡きなり。

○以上の外、蚤もいと憎きものなり。衣の下に飛び廻りて、下より持ち上ぐるやうにするも、いと憎きものなり。また、犬の聲を長々とつゞけて、數多鳴きたるは、いと〱氣味のわろく、憎きものなり。

○蚤の形容、眞に迫れるにあらずや。もたぐるやうにする、讀み來て、何となく膚の痒きを覺ゆるやうなり。夜深く、戸外犬の群れ集りて、聲長く鳴きつゞくるを聞けば、何人か無氣味の感なからむや。かゝる觀察、何人にも出來得べくして、しかも、遂に、能くす可からざるところなり。

乳母の男こそあれ。女は、されど、近くもよらねばよし。男子をば、たゞ、わが物にして、立ちそひ領して、後見、いさゝかも、此御事に違ふものをは讒し、人をば、人とも思ひたらず、あやしけれど、これが咎を、心にまかせて、云ふ人もなければ、所えいみじきおもゝちして、事を行ひなどするよ。

○乳母の男云々。乳母の夫こそ憎くあれ、といふの意にて、わざと、憎くの二字を省きたるなり。○女は、されど近くもよらねば。女は、乳母の仕ふる主人の娘そ

いふ。此處の「女は」には、「女には」の意にて、乳母の夫の、男の子の方には來れど、女の子の方には、より來ぬものなれば、これは、よしといふなり。○立ちそひ領じ。乳母の夫の、男の子の方に、常に、附き添ひ、之を領したるが如くして、何彼と、關渉するを云ふ。○この御事に違ふもの。乳母の仕ふる男子に關する事に付きて、其命令に違背するものなり。○あやしけれど、その跋扈するさまは、奇怪千萬なれどもの意。○人をば、人とも思ひたらず。人を敬ふの風なきを云ふ。思ひたらずは、思ひてあらずの約りたるなり。○所え、いみじきおもゝちして。得意になり、大層なるえらさうなる顏色をなして、なり。

○乳母の夫こそ、いと憎きものなれ。その乳母の仕ふるもの、女の子なれば、夫は、近くもより來らねば、これは、いとよろし。されど、男の子なれば、それを、たゞ、己れが所有物の如くにして、その側に附き添ひ、之を支配して、かれこれ、世話を燒き、些しにても、此男子君の御事につきて、違背するものあらば、その者の事を主人に讒言をなし、人をも人とも思はず、傍若無人に意張り廻り、奇怪千萬なる樣子をなせども、この罪咎を、わが思ふまゝに、充分に、主人に告ぐる人も無ければ、得意になり、大層なる顏色をなして、種々の事を執り行ひなどもする、いとく憎きものなり。

○乳母の夫の跋扈、これも今日は思ひ至らざるところなるも、猶、かゝる事行はるゝあたりもあらむか。此節、説き來つて、甚だ詳なり。著者の心中、憎むこと甚しきによるならむ。此節の次に、「小一條院をば今內裏といふ」の一段あり。されど、こは、他より混れ入りたるものらしく、此處に用なきものなり。故に、今は、略きて講せず。

文ことば、なめき人こそ、いとゞ憎けれ。世を、なのめに書きなしたる詞の憎きこそ。さるまじき人の許に、あまり、畏まりたるも、げに、わろきことぞ。さるを、わが得たらむは理り、人の許なるさへ、憎くゝこそあれ。

○文ことば、文の詞なり。手紙の文句なり。なめき人、無禮なる人。いとゞ、いとくの意。○世をなのめに、な

のめは、斜めなり。世間を、何とも思はずに、なり。○憎きこその下、あれの結び省かれたり。○さるまじき人、しかあるまじき人にて、此處にては、あまり、重々しからぬ人。○あまり、畏まりたる、度に過ぎて、丁寧なるを云ふ。○人の許なるさへ、人の許にある手紙さへの意。

○手紙の文句の無禮なる人は、いと〳〵憎し。そは、世間の人を、何とも思はず、馬鹿にして、書きなしたる詞の憎きなり。さればとて、あまりに、丁寧にせずともよき人の所、尊ぶにも及ばざる人の所へ、非常に度に過ぎたる鄭重なる文句を書きたるも、あしき事なり。さる手紙を、我が貰ひたるは、眞に、憎し。しかのみならず、人の許に、かゝる手紙のあるを見るさへ憎く思はるゝなり。

○對話する時は、少々、無禮の事ありとも、さほど、惡感を起すものならざれども、手紙の文句の無禮なるを見れば、まことに、心地あしくて、堪へがたきものなり。殊に、世上、只乃公一人といふやうに、書きつけたるは、憎しとも憎し。されど、また、猥りに、拳る、遊ばされ等の文字を臚列して、丁寧を極めたるが如きは、只管、己れに諂ふやうに見えて、嘔吐を催すものなり。要は、中庸を得るに在り。中庸を得れば、人を怒らすことなく、また、人に見下げらるゝことなし。かゝるところ、著者に由て、教示せらるゝこと多し。繙讀再三なるを要す。

大方、さしむかひても、なめきは、など、かく云ふらむ、とかたはらいたし。まして、よき人などを、さ申すものは、をこにて、いと憎し。

○大方は、大凡とおなじ、前にあり。○かたはら痛し、傍にて聞くも、耳痛しの意、片腹の痛きにあらず。○をこ、烏滸といふ南蠻の國名より出でたりといふ。そは、この國人は、常に、馬鹿らしき事をなすを以て、馬鹿らしき行を、かくいふなり。後には、尾籠ともかけり。○さるは、しかあるはにて、さやうなるものは、位の意。

○大凡さし向ひて、物語るときも、無禮なる人は、何故に、かく無禮の事を云ふならむ、と思はれて、傍にて聞くも、耳痛し。況んや、地位名望のある人などの事を、無禮に云ひ散らすものは、馬鹿らしくて、いと

憎らし。
○無禮なる人は、何時にても憎し。よき人に關してのみにあらず。己れが師事する人の、事をも、何彼と罵り嘲けるもの、學生中に多し。かゝるもの、皆、著者のすでに擯斥せしところなり。

男主など、わろく云ふ、いとわろし。我使ふ者など、おはする、のたまふ、など云ひたる、いと憎し。こゝもとに侍る、といふ文字をあらせばや、と聞くことこそ多かめれ。愛敬なくと、詞しなめきなど云へば、云はるゝ人も、聞く人も笑ふ。かく覺ゆればにや、あまり、嘲弄する、など云はるゝまである人も、惡きなるべし。

○男主は、男主人、すでに出づ。○わが使ふ者など云々、わが從者共に、あまりに、丁寧なるは、よからずといふなり。乃ち、おはする、のたまふなど、從者に云ふは、馬鹿らしきなり。使ふ者などの下に、「に」の語なくては、不明了なり。ありたるが落ちたるにや。○こゝもとに侍る、といふ文字云々、こゝに居ります、といふ文字(此處にては語の意)あらば、よからむ、と思ふを云ふ。そは、あまり、從者に丁寧なれば、自分にも卑下して、こゝに居ります、と云ふやうに云はずば、釣合あしければなり。○愛敬なくと。愛敬、まへにいへり。なくとは、無くとも、とおなじ。かゝる用法少なからず。○詞しなめき。語の上品らしきを云ふ。○云はるゝ人も、聞く人も笑ふ。詞を上品らしくして云へば、話しかけられたる人も、傍にて聞きたる人も笑をふくむの意。○かくおぼゆればにや。上品めかしていへば、話す人も、先方の喜びて笑ふ、と思へばにやあらむ、となり。○あまり、嘲弄するなど云はるゝまで云々。あまり、上品めかして、先方を嘲弄するなど云はるゝまでありては、惡しきことなり、といふなり
○男主人などを罵るも、いと惡しきことなり。さればとて、わが使ふ從者どもに、おはする、のたまふなどの尊敬語を使ふも、いと憎し。こゝもとに侍るといふ謙遜の語を、そこに用ゐたらば、釣合つきていとよからむと思ひつゝ、其從者への語を聞くこといと多し。また、愛敬はなくとも、詞を上品めかして云へば、云はるゝ人も、聞く人も、心地あしからねば、皆笑をふ

くむなり。それを、いつにても人の喜ぶものと思へばにや、あまりに、かゝる語を用ゐて、「我を嘲弄して、かくわざと丁寧に云ふ」と云はるゝまでにする人も、また、あしきこととなるべし。
○おのれが從者に向ひて、丁寧すぐるも、滑稽なるものなるべし。また、あまりに、人に丁寧すぎて、遂に、人を怒らすも、また、馬鹿げたることとなり。讀者は、常に、かゝる些事につきても、深く、注意するところなかるべからず。「愛敬なくと」、以下の文、語短く、意長し、從て、甚だ解し易からず。かゝるもの、むしろ、避けて學ばざるに如かず。惜きもの、こゝに盡きたるにあらず。されどこれより以下、男女の秘事にわたる事おほく、講述の要を見ざれば、暫らく擱筆して、次號より他に轉ぜんとす。

み吉野の山かきくもり雪ふれば
ふもとの里はうちしぐれつゝ

詠歌の志をり（四）

文學士　武島羽衣

○

（原）なれて吹くなごりや惜しき青柳の
　　たをりし枝をしたふ春風
（改）吹きなれしなごりや惜しむ青柳の
　　たをりし枝をしたふ春風

これは德川時代に新井白石とならびて、最も有名なりし漢學者室鳩巢が、唐の詩人楊巨源が作なる

水邊楊柳綠煙絲。　立馬煩君折一枝。
唯有春風最相惜。　慇懃更向手中吹。

とあるを譯したるもの也。原詩の意はいかにといふに水邊に來りて見れば楊柳が煙れる絲の如くに垂れて、その色も綠にいとうるはしう見えたり。さて馬を立てながら、あなたを煩はして、その一枝を折りてもらひしところ、春風は今まで吹き馳れてゐた枝を折り取られて惜いかしらむ、ねむごろにわが手中に吹ききたりて青柳を慕ひ顏なるよと也。いとゞあはれに、おもしろき心の詩といふべし。譯歌もよく詩の心をうつしおほ

せてはあれど、なほ一二の飽かぬふしあるやうに覺ゆ。
第一の疵はなれて吹くといふ句也。なれて吹くなごりといふにて、則ち今まで吹き馴れてゐた別れが惜しいといふことなれば、吹き馴れてをつたといふ意に對して、これは必ず吹きなれしと過去にいはではかなはぬところ也。よし現在にて宜しきところとするも馴れて吹くは語のつゞけかた未熟なり。吹きなるゝなといはむかた雅馴なるべし。
第二には惜きといふ語也。これは風が手中に向ひて吹き來るは名ごり惜きのかしらむといふにて無論惜きにても意はきこゆるなれど、今假りにこゝを惜むと打直して、二者を比ぶるに、惜きといへば自然に惜しく思はるゝこと也。
惜むといへばわざ／＼惜むなり。則ち心より故更に惜む也。則ち惜さは力よわく、惜むは力づよき也。こゝは春風を擬人して靑柳を慕ふ心によめるなれば、なるべく、風になごり惜しき心あることを力づよくあらはすかたよかるべし。則ち自然に惜しく感ずるならむといふよりも、必ずなごりを惜むならむといはむかた宜しからむ。惜きといふを改めて惜むと打直したるは是故也。よく／＼思ふべし。

○

（原）たえずもひゞけとこしへに
　　地籟天籟身に兼ねる
　ゆふ入相の鐘の聲

（改）高くもひゞけとこしへに
　　地籟天籟身にかねる
　日も入りあひの鐘の聲

これは晩翠が暮鐘の歌の終節也。第一の疵はたえずもといふ語也。たえずもいはゞ下のとこしへには無用也。とこしへにいはゞ上のたえずもは無用也。これ語は異なれど、共に同一の意味あるものなれば也。この重複のあやまりを避けむために、上のたえずもを高くもと打直すべし。
第二にゆふ入相の鐘といふ語也。これも重複したる言ひざま也。また奇なるいひざま也。ゆふべの入相の鐘といふべきを約めてゆふ入相といひたる、いと聽きにくし。よしまた聽きにくからずとしても奇なり。そは是意は入相の鐘の夕べの鐘といふ意なるにあらずや。さすればわざ／＼ゆふといふ語を添ふるの必要なきや

うおぼゆ。たゞゆふぐれの鐘とか入相の鐘とかばかりにて十分なる也。序でなれば入相といふ語の意味を説き置かむ。入りあひは入り間なり。則ち日の入る間也。間とはあひだ也。あはひ也。則ち日の沈みかゝりて全く山に入るその間をいふにて、夕ぐれかゝる時を指せる言語也。されば入りあひの鐘といひてこそ夕ぐれ頃の鐘といふ意味になるべきを後には畧してたゞ、入りあひとのみいひて暮鐘といふ心には用ゐるにいたりし也。なほ、たらちねは垂乳根にて親の形容詞なるを後には畧してたゞたらちねとのみいひて親といふ意味に用ゐたるが如し。これにつきて心得べきは入りあひとかくには必ず入りあひと書きて入相とかくべからざる事也。これ前にもいふ如くあひは間にて相といふ意ならず、相は全くの當字なれば也。すべて當字は用ゐぬやう心懸くべし。

兎角○淺墓なる○事柄○左有れば○覺束なし○たのも敷○掛卷くも○いふ計りなし○なすべき筈○折ふし○床し○左樣○甲斐なし○友達

これら皆當字なり。必ず左の如く書かざるべからず。

とかく○淺はかなる○事がら○さ有れば○覺つかなし○たのもしく○かけまくも○いふばかりなし○なすべきはづ○をりふし○ゆかし○さやう○かひなし○友だち

○

(原)　かねの音もかすみてけりな花かけに
匂ひていてたる春の夜の月

(改)　かねの音のかすみてひゞく花かけに
匂ひいてたる春の夜の月

これ春月といふ題にてよめる歌也。第一にいふべきは霞みてけりなといふ句也。かくいひては花かけにほひいてたる月のおぼろの影のために鐘までが霞みたりよといふ心になりて、鐘が主になりて、春月はやゝ客になれる心地ぞ。客とまではならずとも重みが減りたるやうに思はるゝ也。されどこゝは春月を主にして讀むべきなれば、かくいはずして、かすみてひゞくと直すべし、かくせば以上花かけの形容句となりて、ために下句の春月が重く、しかと、主の地位を占むべければ也。序てにいふ。かすみてけりなといふ句の語調何となうなだらかならず聞ゆ。かゝる場合にはかすみにけりなといふが宜し。

霞みにけりな。
霞みてけりな。

是二者意は全く同じき也。てもにも異なる點なき也。尤もてはて、つ、つる、つれと活き、にはな、に、ぬ、ぬる、ぬれと活きて一方はわざ〳〵の働きをあらはす時、他方はおのづからなる働きをあらはす時に用ゐる差ありなどいふ說もあれど、古歌を見るに混同して用ゐたるがあれば、二者は畢竟同一のものなりと見むかた穩やかならむ。但し注意すべきはてはた行の音にてするどき響あるに反しにはな行に屬して柔かなる響あり。故によく注意して場合にしたがひて使ひ分くること必要也。則ちするどく強き調を要するところにはてを用ゐなめらかに、弱き調を好む場合にはにを用ゐるごとくするをいふ。こゝは霞みてほんやりと鐘の音の聞えたりといふにて、のどかに、かすかなる意味あるところなればてといはずしてにといはむかた適當なるべし。

○

（原）谷川の淸きなかれにうつりても
　　　おほろなるかな春の夜の月

（改）谷川の淸きなかれにうつりても
　　　なほおほろなる春の夜の月

作者の意を考ふるに、春の夜の月おほろなるかなと普通ならばいふべき言語の順序を顚倒しておほろなるかな春の夜の月といへるはおほろなるかなといふことを強めていはむとてなるべし。然り信に強くきこゆる也。然れども、詠歌法上の一則として歌の最後の句は最も重みあるところなり。從ひてそこにあらはるゝ語はその意味強くきこゆる也。是場合に於てもしかなり春の夜の月といひすえたる、信に重みあり。故に是歌に於てはおほろなるかなも重く、春の夜の月も重くしてはいつれに力をこめたるかいづれを主としていへるか、分ちがたく曖昧なる點ある也。然かのみならず淸きなかれにうつりてもおほろなり云々にては淸き流にうつりてもやはり、おほろなるといふ意うすきやうに聞ゆ。なほといふ副詞なくては意十分ならざるにあらずや。されば改めたる如くなさばなほといふ副詞もそはり春の夜の月といふとに力もこもりて意味かくれなくあらはるるにいたるべし。

○

（原）ふりそゝぐ雨はえやまでつれ〴〵を
　　　なくさめよとて鶯のなく

（改）ふりそゝぐ雨はやまねど鶯の
なく聲きけば心はれけり

原歌の意味は明かなるべし。第一にあやまれるはえやまでといふ語の用ゐかた也。こゝはたゞ雨が止までといふ意なるを、えやまてといひてはさは聞えず。えやまては得止まで也。則ち止み得て也。その得といふ動詞を語の頭にあげて得やまてとはいへる也。なほ花ちるらむかといふべきをかをあげて花かちるらむなどいへるが如し。されば俗言に何々することか出來ないてといふべきところならでは是えやまてとかえ何々とはいはれざる也。えをさ夜中、さ夜時雨などのさと同じく意味なき發語のやうに思ふはあやまり也。

第二の缺點は三句よりかけて下句の全體也。これはあまりにはたらきなき平凡なるいひさまならずや。もし改めたる如くになさば雨ははれねど鶯の聲に心のうちだけは雨にはれたる如くはれ〴〵したりといふにて比較的に多少のおもしろみを持てるにあらずや。かく上に雨ふることをいひ、下にはその反對なる心がはれたりといふなどこれを詠歌法上對照法といふ。黑きを一層黑く見せむとてその傍に白きを對照するが如く、反對のものを相向はしめて相方の姿を著しくあらはす一法なり。

物語の發達

文學士　中内蝶二

五　宇津保物語と住吉物語

大和物語に次で世にあらはれたのは、宇津保物語と、住吉物語とである。二書の中、何れの方が前きに出たかは判然しないけれども、宇津保の方が少しはやいと云ふ説が多いやうである。

宇津保物語は、竹取物語や、伊勢物語などに較べると其體やゝ下り、古の格に違つた所も少なくはない。今日に傳はつて居る書は、いかにも誤脱多く、また錯簡もあると見えて、解し難い處が甚だ多いのである。作者は、或は源順の作であるといふ説もあり、或はまた、紫式部の父なる藤原爲時の作であるといふ説もあるが、いづれも憶説に止まつて、實際何人の作であるか、斷言することは出來ない。

この物語の大意は、清原俊陰といふ人が、遣唐副使と

なつて、支那へ航らうとした途中、海上颶風に遭ひ、吹き流されて佛界に漂着し、其所で佛から琴を授けられ、無事歸朝したことから書き起して、俊蔭の歿した後、孤兒となれる娘の零落して、山中に隱れ住みて孝子に養はれ、後遂に大政大臣の若君なる仲忠といふ人の北の方になることに及び、それより其若君の世に時めく三十四歳までの事を記したもので、かの山中に隱れた時、木の空虛の中を住居とした事があるゆゑ、それを取つて題名としたのである。文章は古雅簡潔で、多少の情趣も有してゐる。二三の文例を擧げて見れば

世の中も知らぬ若き心地に、いとあはれに悲しく、春は花をながめ、秋は紅葉をながめて明かし暮らすに、たゞ此女の食はすれば食ひ、食はせねば食はてあり。獨かくれ居るばかりの屛風几帳だつものばかりは、さはいへど、廣かりし處のなごりに、無くなりぬと見れど、なほしつらひてあり。云々、

恐ろしきことおぼえず、面白きところを分け入り見給ふ。秋風河原風まじりて、はやく草むらに虫の聲みだれて聞こゆ。月隈なうあはれなり。人の聲きこえず。かゝる處にや住むらむ人を思ひやりて、獨りごとに

虫だにもあまた聲せぬ淺茅生に
ひとり住むらむ人をこそ思へ

とて、深き草を分け入りたまひて、屋のもとに立ち寄りたまへれど、人も見えず、たゞ薄のみいと面白くて招く。くまなう見ゆれば、なほ近くより給ふ。」東おもての格子一間あけて、琴をみそかに彈く人あり。立ち寄りたまへば入りぬ。

住吉物語も、また作者を明らかにしない。今日に傳はつてゐる書は、後の人が古書の名を借りて題としたので、もとのものでは無いといふ説もある。成程文辭の上から研究して見ると、さほど古いものとも思はれないから、或は僞書かも知れない。其筋の大畧をつまむで云へば、昔中納言で左衞門督をかねてゐた人の娘が、繼母の爲めに憎まれて、さま〳〵の憂き艱難を重ね、遂には辛抱しかねて、もと緣ある尼の、住吉の浦に住むで居るのを尋ねて落ち行き、事情を訴へて其庵に隱れてゐるうち、幸運めぐり來て次第に富み榮え、繼母は却て天罰の爲めに、重き病にかゝりて果敢なくなつたといふことを記したものである。文章は、前にも述べた通り、僞

作であるから、古雅とはいふことは出來ないが、書き方は極めて面白く、歌もまた平凡ではない。殊に、嵯峨野の子の日の條や、また繼母がむくつけき女をかたらうて、娘を苦しめる所など、さながら其樣子を目の前に見るやうで、筆路自在に活動してゐるのを見れば、僞作にしても、尋常の人の作ではなく、十分才學にすぐれた人の手になつたものであらうと思はれる。その文例を示せば

少將は、三の君をも哀れと思ひながら、おもひそめてしことの末ならむのみにあらず、さしも聞こえざりし人だにも、かほどこそ侍れ、ましていかならむと、ゆかしくぞ思ひ侍りける。いかでか見たてまつらむなど思ひわたるほどに、冬にもなりにけり。侍從に、いかでか物いはむと思ひて、思ふほどのことゞも書きたまひて、直衣の腰にさしはさみて、雪のいみじう降りたる日、たゝずみありきて、蔀のもとに立ち寄りて聞けば、はし近くいざり出て給ひて、をかしき四方の梢かな、いづれを梅とわけがたくこそといひて、うちはらふ中に、今少し忍びたる聲にて、琴かきならして、かひのしらねを思ひこそやれといひてけり。これなむ姫君よと、胸うちさわぎて、忍びかねつゝ、蔀をうちたゝけば、あやし誰ならむと見れば、少將立ち給へり。侍從あさましく思ひて、歸りなむとする裳の裾をひかへて結びたる文をやり給ひて、よろづ人のつゝましさにとて、歸りたまひにけり。あやしく、いかなる文ふと見れば、

白雪の世にふるかひはなけれども
　思ひ消えなむことぞ悲しき

とて、さま〲のことかき給へり。姫君にこれを聞こゆれば、さすがに哀れと思ひながら、よそなりしそのかみだにも思ひよらざりし、今はいよ〱人聞き見ぐるし、ゆめ〲とぞ聞こえける。

六　落窪物語

次であらはれたのは、落窪物語、とりかへばや物語、濱松中納言物語、堤中納言物語などである。

落窪物語も、また作者がわからない。例の源順の作であるといふ説があるけれども、これは信じられない。賀茂眞淵の説によると

冷泉院の頃に作れるものにて、書中に道頼の大臣とかけるは、藤原忠平のことなるべし。子息たちの官途昇進の順序、いとよく似たり。云々

とあり。また、上田秋成の説によれば

こや貞信公の公達、實頼、師輔の御はらからの、いとわかうおはすより、競ひたちて、なりのぼり給へる事を、此御腹の若君たちの、おとらず官位すゝろぎ給ふにもてつけて、かきたるなりけりとなむ。そは、さる事にしもあらめど、そのわたりの事のみをすて、思し考ふべくもからず。かゝる書は、人ひとりの上を、らうたう忝きものに云ひはやさむとするほどに、いにしへ今にも、をち近にも、あるは人の國のかしこき例をさへ取り混へていひあへるなれば、いつの世のこと、誰が御上とも、さた〳〵とは云ひあつまじき、それなむ、かう樣の書つくる人の、をさ〳〵しう、かどあるものとこそ聞こえたれ。唐のふみにも、かゝりとぞ聞こゆ。さは強いごとして、正しげにことわりたるぞ、かへりてはしれがましきぞと、物知りの翁たちは云はれたれ云々

と云つて居る。或は作者が思ふ所ありて、當時の人の身の上に引き當てゝ書いたのかも知れないが、矢張秋成の説の如く、いつの頃、誰が事とは定めない方が至當だらうと考へられる。

この物語の大意は、むかし中納言なる人の女、繼母の憎みによりて、一室の落窪むだ處へ押し籠められ、明け暮れ裁ち縫ひの業をして、わびしく暮らしてゐるうち、下婢の媒で、藏人の少將と契り、繼母の家を脱け出でゝ同棲し、末は繼母とも和睦して、兩家共に榮えたといふ筋で、趣向も面白く、筆力も雄健である。その文例を擧ぐれば

今はむかし、中納言なる人の、娘あまた持ちたまへるおはしき。大君、中の君には聟取りして、西の對、東の對に、花〳〵として住ませ奉らせ給ふ。三四の君にも、裳着せ奉りたまはむとて、かしづきぞし給ふ。また時々通ひたまうける、王家統流腹の君とて母もなき御女おはす。北の方、心やいかゞおはしけむ、仕うまつる御達の數にだにおぼさず、寢殿の放出の、また一間なる、落窪なるところの二間なるになむ、住ませ給うける。君達ともいはず。御方とはまして言はせ給ふべくもあらず。名を附けむとす

れば、さすがに大臣のおぼさむ心あるべしと、つゝみ給うて、落窪の君といへとのたまへば、人々もさいふ。おとゞも乳兒よりらうたくおぼしつかずなりにけむ。まして北の方の御まゝにて、はかなき事多かりけり。はかぐ／＼しき人もなく、乳母もなかりけり。たゞ母のおはしける時より、仕ひつけたる童の、されたる女ぞ、後見とつけて使ひたまひける。あはれに思ひかはして、片時はなれず。されば此君かたちは、かくかしづきたまふ御女などにも劣るまじけれど、出て交らふこともなくて、あるものとも知る人なし。やう／＼物思ひ知るまゝに、世の中のあはれに心うき事のみ思されければ、かくのみぞうち嘆く。

日にそへて憂さのみまさる世の中に
心づくしの身をいかんせむ

といひて、いたう物思ひしりたるさまにて、大方の心ざまさとくて、琴なども習はす人あらば、いとよくしつべけれど、誰かは教へむ。云々

支那婦人の性情

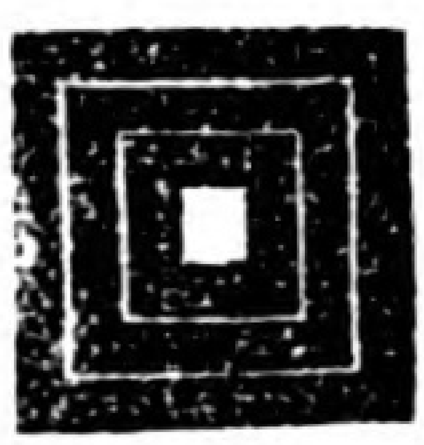
世上に取沙汰さるゝ如く余は一回支那に遊び支那人の家庭につき婦人の狀態を視察し且つ其婦人とも交際し然る後對支那婦人教育方針の斷定を下さんと欲す、現に余の監督の下に華族女學校に二名、余の私塾に二名の支那婦人を教育しつゝあるか這は彼國においても折角我國に留學せしむるものなればとて兒女中の秀才を選拔したるものと見えいづれも敏慧怜悧にして日本婦人の量に企及する能はざる所なりサレば此の二三婦女子につき支那婦人全般の性情をトせんとするは少しく早計たることを免れざるなり是れ余の支那行を思立ちし所以なり（下田女史の談）

英語實習

江口操舟

TO SEE THE CHRYSANTHEMUM.	菊見
A. Have you been to Dangozaka?	甲. あなたは團子坂へいらつしやいましたか。
B. Yes, I went there last Sunday.	乙. はい此前の日曜に參りました
A. How crouded it must have been!	甲. さぞ賑やかな事で御坐りましたてしようねー。
B. Yes, there were many visitors so that we could hardly walk through.	乙. はい。もー人がいつぱいで通りきれない程で御坐りました。
A. Was there any thing particular?	甲. 何か珍らしいものでも御坐りましたか。
B. No, nothing particular, but all the Chrysanthemums were very beautiful.	乙. イーエ格別變つたものは御坐りませんけれど菊の花は皆大變奇麗で御坐りました。
A. How was the stage?	甲. 舞臺の方は如何で御坐りましたか。
B. Just as I was asetnished about some noise, that I heard there appeared a large doll.	乙. キーヽヽ云ふので何かと思て居ましたら中から大きな人形が出て參りました。
A. It was the imitation of an actor, was it not?	甲. 其れは役者の似顔で御坐りましたでしやう。
B. Oh, Miss. A. I did not care to attend to it.	乙. へー。私はそんな事には氣がつきませんで御坐りました。

新編紋づくし（三）

			
三ます	源氏輪	菊輪	鞠挾み
			
二重輪	爪輪	日向雪輪	矢ぐるま
			
九につた	おふ輪	角切子持	蛇の目
			
源氏ぐるま	子持龜甲	影まり挾み	ふち輪



今朝の秋

(上)

柳川春葉

本郷の唯或る横町の角で、夏幌の綺麗な俥を降りたのは、二十歳を何程も越えぬらしい、赤い手絡をかけた小柄の美しい奥様で、葡萄色の深張の蝙蝠傘を、折から西にまわる日光に向いて颯と擴げたが、一寸車夫の方を振返つて、

「私と一緒に來ておくれ。」

謹みぶかくも門口まで乘附けぬものと見える、五六間歩むと右側の小締した格子戸の前に佇立まりて、俥の上に置いた包物を受取つて靜に門口を開ける。

「御免下さいまし。」 傘を疊んで、沓脱に入ると、内にも人の立つて來る氣勢が爲て、葭戸の口へ現れたのは此家の細君であらう、年齢は客よりも三つ四つ老けて見える。

「オヤ是はお靜さん。」と可懷しさうに言つて、其まゝ奥へ取て返しながら、

「何うぞ此方へ……まあ可く來て下いましたねえ。」

「御免下さいましよ。」 客は導かれて一間次ぎの六疊の座敷へ通る。

「此方へいらつしやいまし、少は風が通しますから。」

と主婦は座布團を据ゑて、團扇の風を遣りながら、

「眞實に可く來て下さいましたのね。先日はお邪魔に出まして種々御馳走に成りました。」

「何もお構ひ申しませんで、失禮ばかり致しました屹度御腹立て、彼ぎり來ては下さるまいかと存じましたのよ。」

と横の方で包を解いて、

「麁末ではございますが、お敏ちやんのお目覺に上げて下さいまし。」

「お土產では恐れ入りますのね。まあ結構な。歸つて參りましたら嘸喜びましやう。まあお靜さん今日は緩り爲てゐらつしても宜敷いのでせう。」

「否、是から主人の用で一寸小石川まで廻らなければなりませんの。」

客は帶の間から撫子の繪を描いた女持の扇を拔いて、愼しやかに風を入れる。

「おや〳〵其はお忙しいではありませんか、尤も其樣なお次手もなければ私共なぞへは寄つても下さいますまいけれど。」

「大層お口が惡いのね。然ういふ理由でもありませんけれど、用でも無いと猶且出憎いものですから、御存知の老人が喧しいものですから。」

と少し萎れて、俯いたまゝ茶を啜る。主婦は食籠の中から菓子を取分けてゐたが、不圖手を止めて、其方を見上げた。

「其れは貴方何方だつて同じ事でございますよ。お年寄といふものは萬事にお世話をお燒きなさるものですから、然しお宅のお姑御樣は結構な方ね。彼では貴方もお樂ですわ。」

お靜は何を思つたか颯と赤面して、

「えゝ好い方です……けれど餘り物事に心配なさり過ぎるものですから。」

「其れがお年寄の癖といふものです。其に旦那樣が彼の通りな、洒落した方ですもの、私はお羨しうございますよ。」

「難有うございます。」お靜はます〳〵極り惡げに、いとゞ暑さに堪へかねるのであつた。

「其意で近いうちに又伺ひますから、其時は澤山御馳走を爲て戴きますよ。」

「えゝ致しましやうとも。其は然うと今日はお敏さんは何方へかいらしつたのですか。」

「近所の子供と一緒に遊んでゐましたが、大方お隣へでも參つてをりましやう。」

「疾く歸つてならつしやれば可いのに、眞實にお可愛い雛ちやんね。宛然神樣のやうな。嘸貴方もお可愛いでしやう、主人も然う申してをりました。お千代さんは可いお子持だつて。」

「私の頼なのは彼一人でございますもの、然しねえ、親は無くとも子は育つと申しますか、全ですのねえ。」

お千代は急に涙組んで、今迄の元氣も何處へやら、悄然として俯いた。

「其れは貴方御教育が宜いのですもの。」

お靜は據なく言ふ。

「教育と申した處で、肝腎な父親は居りませず、甘い母の手一つですもの何うせ碌な事は出來は致しません。」

「けれども其は今の事で、末始終は猶且お樂ですわ。」

「何で末が樂になりましやう、是が男の子ででもあつたら、又何うとも成りましやうけれど、何にしても女ではお互樣のやうに……と申しては失禮ですが：・まあ人樣のお蔭で生涯暮らさなければならないのですもの。」

「然うでございますね。」

客も共に引入れられて、力無い嘆息を吐いたが、軈て顏を擡げて、

「然う仰有るけれどもお千代さん、其は過去の女の仕來りで是からは、然うとも限りますまい。斯う申すと何ですが大層生意氣のやうですけれども、女が獨立の出來ないものゝやうに言つたのは昔の教で、其はまあ私達あたりまでは何うでも然ういふ運に育つたのですけれど今の時勢では男だつて女だつて……其は自然に違ひはありましやうけれども……必ず昔の教通りと極つてはをりますまい。立派な學校も出來て、教師にも成れましやうし、其こそ大臣とか何とか其樣な方には成れますまいが、獨立を爲る位は別に難かしい事はありません。」

と熱心に成つて、

「貴方も御承知でしやう、一緒に學校に居らしつた新井さんね。」

「ハア存じてをります。」

「彼の方なんぞは其後大相勉强なすつて、今では立派な教員を爲てゐらつしやるそうですよ。ですから女だから可けないとも限りません、其は私共は仕方もありませんけれど。」

「然し、猶且女といふと何處へ出ても負を取りますからね。」

「だつて現に貴方も獨立を爲てゐらつしやるではありませんか。」

「私？。」

お千代は目を丸くしたが、

「私のは斯うしなければ成らないやうに爲れたのですもの、是れが決して幸福ではございません。自分の孃も私のやうに爲たく無いと思ふばかりに、何時でも心配を爲るのですよ。此通り生きてゐる効も無い。」

と目を拭うて、

「まあ御覽なすつても知れましやう。」

「其れはお察し申してゐないではございません。然し又私共に言はせれば、誰に氣兼をなさらうでは無し謂はゞ氣儘の世渡りですもの、反てお幸福かも知れませんわ。」

お靜は慰める意で、途切れ〳〵に言ふのである。

「貴方には然う見えますか。」

「え？」

「然うでございましやうね。何も御存知なければ然う御有るのも御尤ですけれど、貴方其は私に親類も無し、親も無いのでしたら、實に氣樂で、此上の樂もありますまいけれど、世の中の事は然うは參りません。」

お靜は默つたまゝ呢と主婦を打目戍つてゐる。

「貴方だから、子供のうちから御懇意な貴方だから私は打明けてお話を致しますが、私も最う長く斯うしては居られますまい。」

「其れでは何うなさるの？」

お靜は驚いて膝を進めた。

「實家の方で種々と申しますので、自分の爲にも、頼少ない親達の爲にも、是非とも再縁爲てくれろと、ずつと以前からの話です、私は其樣な氣は少しもありません

から、何の斯のと斷つてゐたのですが、段々に難しく成つて來まして、今では何うしても私の言ふ事を立てる譯にも參りませんので……。」

「然うでございましやうとも。」

「其でも未だ承知は爲てやりまんが、萬一何うしても不承知なら其意で所置をつけると申すので、其處へ行くと女は弱いものですね。何時か負けて了はなければなりますまいと思ひます。」

「其も貴方の御不運だから。」

客も淚聲になつて、

「然う仰有られるのを何處までも斷るといふ事は誰だつて出來ますまい。」

「世間では不孝者のやうに言ひますから。」

お千代は低聲で言つた。

「然うですとも、然し萬一御再緣なすつたらお敏さんは何うなさるお意なの？」

「彼は實家で預つて、行末園部の家を立てさせると言つてをります。」

「其れではお祖父さんお祖母さんのお手許へいらつしやるのですね。」

「ハア父も母も無い子に成るのですよ。」

お千代は又も突かける淚を嚙しめながら言ふ。

「お可哀さうですね。」

「何れ然う成りましたらば、唯今までのお馴染効に何うか面倒を見てやつて下さいまし。眞實に斯樣な事を願ふのは貴方ばかりです。」

「えゝ何んなにでも。」

お靜は賴もしげに、

「私共の力で及ぶだけはお世話を致しましやうから、決して御心配なさいますな。」

「難有うございます。實は其事や何かでお家へも出ましやうと存してゐた處で丁度お出來下すつたのは幸ひに勝手な事ばかり願ひます。」

「其では近いうちにお極りに成るのですか。」

「私さへ承知を致せば、翌日にも極のださうでして。」

「何方へいらつしやるのです。」

「先方ですか。」

お千代は少して慌てた樣子である。

「あゝ止ましせう、其は今度參つた時に伺ひましやう明日か……明後日、然う〳〵明後日は是非又伺ひましやうから。」

「眞實ですか。」

「ハイ、其時は立派に此方へ來ると言つて一日がゝりて遊びに參りますよ。」

「何うかね。身が極りますと又少時はお目にもかゝれますまいから、悠り其意で來て下さいまし。」

お千代はやをら急須の湯を差しに立つたが、秋口の日はやう〳〵暮れかゝつて、柱時計が五時を打つので、お靜は最も歸り支度にかゝる。

「まあお靜さん可いてはございませんか。」

「否、最早斯うしては居られないのです、小石川がありますからね。」

と扇を畳んで帶へ挿し、

「其ては是て御暇致します。誠にお邪魔を。」

「然うですか、……何もお搆ひ申しませんて、失禮ばかり、何うぞ明後日はお待ち申して居りますよ。」

「えゝ、何んな事があつても參ります。」

玄關へ出ると、車夫が車を門口へ寄せる。

「其れでは御免下さいまし。」

「何うぞ其處て召してゐらつしやいな。」

お靜は身輕に車へ乘つて幌を疊ませ、一寸鬢のあたりへ手をやつたが、目禮を爲ると同時に車夫は轅を揚げて勇しく驅出した。

軈て半町も來た四ッ角て不圖振返ると、お敏は二三人の友達と一所に竹の先へ烏瓜をつけ、面白さうに遊んてゐるので、ハッと思つて聲を懸けたが、間が遠いので聞えなんだ。

「あばよ、芝よ金杉よ。」

凜しい聲を張揚げながら、お敏は一散に家の方へ驅けて行つた。

（下）

「母さん、今日は眞實に可笑しかつてよ。」

「何が？」　お千代は笑ましげに顔を揚げた。
敏子は今年七歳に成つたが、年齢の割にはませた方である。親子ばかりで淋しく暮らす此家には夕餉も濟んで一しきりお千代はお敏を相手に面白さうなお伽噺を爲て聞かせたり、又は他愛の無い口から話を聽いたりして、やがて此子が寐るまでは睦しく笑ふのが常でゐつた。お敏は左の手に團扇を弄りながら横座りに母親の顔を見上げたが、
「今日はお隣の道子さんが、崖の方へ行きましやうと仰有るから、私行きたかつたけれども……ねえ母樣崖は危險いのね。」
「あゝ決して彼處へ行つてはなりませんよ、萬一間違つて辷つたら大變ですよ。」
「眞實に危險いのね、其だから私は行かなかつたの、烏瓜が澤山實つてゐるのだつて、採りに行くと何個でも採れますとさ。」
「烏瓜なんぞは採つて來なくつても可うございます。お前家へ持つて來たのは道子さんにお貰ひなのかえ。」
「えゝ然うよ、私は欲しいと言はなかつたのだけれど、道子さんが上げましやうつて下すつたから貰つたの。」
「上ると仰有つたのなら可いけれども、無暗に人樣の物を欲しがるものではありませんよ。お前は能く母樣に吩附られてゐるから知つてゐますねえ。」
母親は靜に敏子の額に止つた蚊を叩いてやつて、蚊遣の煙出しを前へ出した。
「私は最う崖なんかへ行くまいと思ふのよ、葉山の剛雄さんが男だもんだから樹へ昇つて採らうとして蜂に刺されてよ。」
「オヤ〳〵剛さんが何處を刺されたの。」
「此處の處を！」
額に手をやつて、
「而してねえ母樣、男の癖に痛いつて泣き出したの。」
「蜂に刺されると痛いものです。」
「然うですつてねえ。」
お敏は目を丸くしたが、
「大な聲で泣きながら家へ歸つて了つたのよ。其から

皆も可恐く成つたから町の方へ行つて遊んで、今歸つて來たら、四つ角の處で剛さんが威張つて遊んでゐるのですよ。額の處がね。」

と言かけたが、お千代が考に沈んで返事も爲なゐので、其膝を動かしながら、

「母さん、額の處が瘤に成つて、お團子のやうに膨れてゐるのよ。」

「まあ！　然うかえ。」

「而して、其上へ朝顏の葉を貼付けて痛くも何とも無いやいつて威張つてゐるの。」

と急に腹を抱えて笑ひながら、

「眞言に私は可笑しつて〱、其顏つたら變な顏！　道子さんが、私の家の本に描いてある、彼の桃太郎に踏潰されてゐる鬼の大將に似てゐるつて。」

お千代も引込まれて一緒に笑つたが、

「敏ちやん其樣な事を言ものではありませんよ。女の癖に、憎まれますよ。」

「だつて道子さんが大きな聲で言ふのですもの、私餘り可笑しかつたから笑つたのよ。然うすると剛さんが怒つて、追驅けて來たものだから一生懸命に家へ逃げて來ましたの。」

「眞實にお前達は面白いねえ。」

お千代は何を思つたか泌々と言つて又考へ込んで了つた。

「え丶面白いのですよ、母樣は然うじやなくつて。」

不思議さうに又見成る。

「母さんもお前位な時には猶且面白い事ばかりだつたけれど。」

と不圖浮んだやうに、

「お前はお祖父さんやお祖母さんは好かえ。」

「四谷の？」

「ア丶。」

「好ですよ。其れは。」

「では母樣が萬一居なくつてもお祖父さんやお祖母さんがおゐでだつたら可からう。」

「母さんが居なくなつて？」　驚いた顏色。

「萬一もの事さ、母樣が死んで居なくなりでもしたらば、お前は四谷の方へ行くのだから。」

「可厭!可厭!母樣は彼樣な事を言ふのだもの、私は眞實に可厭だわ。」

「否、お前の爲だから言ふのです。人間といふものは敏さん能く聽いてゐらつしやいよ、母樣でもお前でも何時何うして死ぬか解らないものなのです。其だから丁と用心して置かないと困るのですよ。

「死んだら何う成るの?」

「死んだら家の父樣のやうに、最早誰にも逢ふ事は出來ずに、佛樣の中に入つて了ふのです。」

「ぢやあ母樣も然う成るかも知れないのですか。」

お敏は泣聲に成つて、

「然したら私だつて死ぬわ、四谷へ行くのは可厭です其はお祖父さんやお祖母さんも好だけれど、私は母樣の方が何んなに好か知れやしない。」

「だつて世の中にはお前位で一人法師になてゐつる者が幾何あるか知れやしません、其樣な弱い事では可けませんよ。」

「だつて私は可厭ですもの。」

と少し考へて、

「其では母樣何時死ぬの。」

「えゝ? 何時死ぬか其樣な事は解るものですか。壽命ですもの。」

「ぢやあ大概なら死には爲ないのですね。」

「何で死ぬものですか、何時までも生きてゐたいと思ひますわ。」

「然うでしやう、其樣なら安心した。」

「けれども今言つたやうに、人間の事は解らないものだから、母樣は死なないでもお前と逢れないやうに成るかも知れない。だから聽いて置くのさ。」

お千代は膝に縋る子の頭を掻撫でた。

「最早私其樣なお話は可厭。何か面白い事を話して頂戴な。」

「然うねえ、何か面白さうな事は無からうか、何に爲ましやう。ア、今日はお前の好な渡邊さんの小母さんが

お光來なすつたよ。」

「然うですか、何時？」

「夕方でした。而して忘れてゐました、彼のお土産を持つて來て下すつた。お前に上げるのだつて。」

手を延べて茶棚の上から菓子鉢をおろし、

「お前さんの好な物をと思つて、小母さんが氣を利かして下さつたのだらう、當てゝ御覽なさい、何だか。」

「私は食べたく無いわ。」　お敏は悄れ切つて常の元氣も無いのである。

「おやお前何かお爲なの、お菓子は欲しく無いかえ。」

「欲しくも何とも無いの！」

お千代は氣遣はしさうに覗き込んで、

「敏さん心持でも惡いのではないかえ、え何うかしたの。」

「何うも爲ないけれど。」

「ぢやあ折角下すつたものだからお戴きなさいまし。當らなければ見せてあげやう、ソレ栗饅頭可いてしやう。」

「澤山です。」

見向きも爲ぬので、お千代は訝しげに其顏を打目戍つた。

「お菓子なんか……食べたくも何ともありません。」

「何がお前は氣に入らないのです。」

餘りなので、少し勃然と爲た樣子を見せると、お敏は急に泣き出した。

「母樣が彼樣な事を仰有るんだもの、私はお菓子より何より母樣が好きなのだから。」

お千代は默つて其手を握つたが、此無邪氣な言を笑ひも爲ずに、同じやうにハラ〳〵と淚を流すのである。

「お前は未だ其樣な事を氣に爲てゐるかえ。何て母樣が死にますものか、死にも爲ないし何處へも行きは爲ませんよ。何時までもお前と一緒に居るから。」

と泣顏を隱して、

「さあ〳〵お前こそ最早其樣な可厭な事をお言ひでないよね。」

「眞實に然うなの。」　お敏は顏を上げた。

「えゝ、何てお前のやうな可愛い子を置いて行くものですか、母樣の大事なのはお前一人お前の大事な人は？え、敏さん誰です。」

「母樣一人。」お敏は直に答へた。

「然うとも、其だから是からも仲を善く爲ましやうねまあ起きてお話をお爲なさい。剛さんが蜂に刺された事でゝね。」

「彼れは最早語して了つたわ。」

「然うかい、其ては何が可かろ、繪解を爲て頂戴な。」

「アヽ致しましやう。」

身輕に立つて翫弄物函の中から繪本を持つて來たが、燈火の前に行儀よく坐つた、

「章魚と鰹が一所にお湯へ行きました。」

「オヤ／＼面白さうね。」お千代は縫物を取出しながら合槌を打つ。

「然うするとお湯が大相熱いものですから、鰹魚の言ひますのには、章魚さん此お湯は熱いから水槽の中へ入らうてはありませんかと申しました。」

一寸上目て見て、

「母樣此方を見てゐなくつては可けないのよ。」

「ハイ／＼見てゐますよ。其から何うしましたの。」

「然うすると章魚の申しますのは、鰹魚さん、斯樣なお湯に入れなくつて何うするものですか、お湯へ入りに來て水の中へ入る位なら來ない方が可いと言ひましたけれども鰹魚は用心してゐますから何うしても入るのは可厭だと言ひました。章魚は大相意氣地無しだつて笑らひましたが、其ては私が中へ入つて搔廻してあげましやう、足が八本あるから丁度可いと言ひました。鰹魚は危いからお止しなさいと制めましたが、章魚は言ふ事を肯かずに突然お湯に飛込みますと、餘り熱かつたものですから、搔廻す事も何も出來ずに、其まゝゆて章魚に成つて了ひました。」

敏へられた通りを暗誦してけろりと爲てゐる。

「まあ面白かつた事御苦勞樣です、其てはお菓子でもおあがりなさいまし。」

「母樣、是は渡邊の小母さんが下すつたの。」

「然うですよ。」
「私栗饅頭は大好よ。」
「好なら澤山おあがれ、敏さんにと言つて持つて來て下すつたのだから。」
「又明日に爲ましやう、私眠いから。」
お敏は目を擦つてゐる。
「其が可うございます、母様も一所にお蚊帳へ入りましやう。」
お千代は軈て寐衣を着せて、蚊帳の中へ連れて入るとお敏は最早造作も無くすや／＼と睡たが、物に驚いたやうに急に母親に縋り付いて、
「母さん何處へ行きは爲ないのですね。」
「あゝ何處へも行くものですか。」
確乎言ふと、又安らかに睡に入るのを、眺めて、お千代は一人何時までもと泣いてゐたが、軈て思切つて蚊帳を出て縫かけのお敏が袷を手に取つたが、考へれば考へる程此子の行末が悲しく成つて、如何に義理とは言へ、見捨てゝ他へ行く氣は無いのである。
人がましく爲て暮らすも一生、斯うして居るも一生。
譬へ人には憎まれても唯一人の子には憎まれまいと、屹と思ひ定めて、微に白い寐貌を蚊帳越しに打目戍つたが、
「敏！　私は嘘にも何處へも行きません。」
母が添寐の夢は圓に、何時までも眠れ稚子。（完）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ながむれば袖にも露ぞこぼれける
そともの小田の秋の夕暮

旦那さま（上）

加藤眠柳

おまへの好きな言文一致で書く
ぶじに着いたさうだね其地は東京より暖いにちがひないが何度位ちがうの寒暖計は
ぶじに着いたといふおまへの端書を落手しながら今日

まて一回の音信も爲なかたのはわたしが惡かつた然しおまへも大概察してゐたらうがわたしは近來のおまへの擧止に對して甚こゝろよく思つてゐなかつたのだ其はおまへがメランコリヤに罹つていくら慵いからといつて頑是ない正雄に乳も與つてくれぬ傍へ這つてゞも行かうものなら怨敵でも來たやうに眼の色を變へて慍る其は可いとしたところがわたしがおまへの部屋へ行つても苦い／＼顔ばかりしてゐて碌たま語も言はなかつたらう正雄は可愛うない歟從來のおまへにも似あはない其ては薄情すぎる冷酷すぎる母子らしくない夫婦らしくないと不知々々愚痴から癇癪に障へておまへに烈しい言葉もいつた然てない風もして示せた然し別れてみると誰しも後悔する可懷しくもある其だからわたしは折れて出る氣になつた腹の立つこともあつたらうが敎しておくれおまへが以前のおまへのやうでなくなつたのは言うまでもなく病の故だ其病人に對して辛く當つたのは全くわたしが惡かつたから

昨今の容態は那樣だいおまへは如何かすると私の病氣は治りませぬ治らないと定まつて居りますから一日も早く死にたいなんて言つてたねえキリスト信者のおまへてもない愚なことを言うものぢやない那樣ことを言うのは皆病が言はせるのだよ病とは言ひながら常識を失はないやうに短慮を發こさないやうにしておくれよエマーソンも常識ある人の心には神の姿あらざるなしと言つてゐる何卒神を忘れないやうにしておくれ死なれては正雄は固よりわたしが困る自己をして平安ならしむるものは自己だくれ／＼も心を大きく持つて自宅の事などは心配しておくれてないよ

體の不快いのは火鉢の火の消えかゝつたやうなものだ早く炭を加がないと火が消える湯が沸かない然し其炭の加ぎ法に因つて火は早くも晩くも熾る拙を爲ると火種まで消して了ふ實に加ぎ法ひとつさ考へものだねえおまへ早く健康の人になつておくれ神の御心なら已むを得ないが長壽を爲なければ生れてきた効が無いぢやない乎わたしだつておまへの識つてゐるとほり莫大な收入が有るのぢやない唯醫者が勸めるから湯治にもや

つたのだ成るべく早く治つてくれいでは困る死なれでもしたら猶更困る義しい人も迫害を被るのが斯世の常だ迫害を被つたときは闘はなければならない然し社會の戰の勝敗というものは突貫して敵を逐散らすやうに早く決しるものではない最後は耐久の力の有る者が勝つ耐久の力は體力が軟弱では到底だめだよ其だからおまへも十分に養生して早く耐久の力を養つておかへりなさい正雄は牛乳か嫌ひで困る昨日の朝のが尚二本も殘つてゐる始末だもの然し今朝は早くから眼を覺して阿母さんに脊負して一合ばかり飲んだお友には如何しても馴染まない

今朝は大層好お天氣風も實に靜だから其地は一層暖いだらうがお松は好く世話をしてくれるかい年が年だから隨分ぢれつたいこともあらうが癇癪を發すのは身の毒彼は老人だからと目を閉ぢてねえ

わたしの胃病も其後は全快のやうに忘れてゐる昨宵も無感覺に熟睡したから安神しておくれ昨日の晩總會があつて十一時頃歸宅するとおまへから二回目にくれた端書が飯臺の上に載つてゐたわたしが其を讀んでゐるとお友は讀めもせぬ癖に火鉢の向から覗いてゐたが其眼色の睡さうな鹽梅といつたらなかつた其でわたしが讀み了る時分には堪らなくなつたとみえて遂に大袈裟に舟を漕ぎ始めてゐた正雄は阿母さんと高鼾だつた

昨日のおまへの端書に淋しくつて十日とは辛抱が能きまいと書いてあつたので今朝阿母さんは笑つておゐでなすつたよお元の宅好にも困るといつて然しおまへも體の養生のために函根までも出かけたのぢやない乎淋しいのは最初から分つてゐる一月や二月位辛抱してゐてくれなくつては困る自宅のことなどは決して心配おしでない可いかいきつとだよ飛煙閣へは行つてみたかいおまへの事だから尚だらうが風の穩な暖い日には運動しなければ不可ませぬよ

一昨日本郷へ端書を發しておまへが歸宅するまで富子に手傳に來てくれと言つてやつた今朝あたりは來てくれることゝ想ふ

中條さんへは是非手紙をお發しなさいよ昨日菅野さん

に途中で遇つたおまへに宜しくと仰有つてだつた千世ちやんの手紙を此中へ封じて置く何も慰みだから返事をおやり那様に喜ぶ歟

もう御ぜんだと阿母さんが階下で呼んでゐてなさる今降りて行かうと思ふ時計は尚七時前だ些と前刻阿母さんの聲で「今朝は美春の嫌ひな御ぜんが出來た」と仰有つたのが聞えたから多分べた〱の糊のやうなのが出來たのだらう何にしても向後はお互に慍りわはぬことにしやう親子にしろ夫婦にしろ兄弟にしろ双方が讓歩しなければ一家は圓く行かぬお互に讓歩さへすれば生活の質素な而も思想の高尚な家庭が出來る是家庭から自然節制も愛情も勇氣も生じる何卒これまでのわたしの然てない風したのを赦しておくれ而して體の加減の好いときには手紙をおくれ夫から又くれ〱も養生の方をねえ

書き了つたところへ富子が來たやうだ其聲が聞えるわたしは之れから二階を降りる

十六日　　　　義春

おもとどの

（下）

いつにかはらぬお優しい誠の籠つたお手紙くりかへし〱拜讀いたしました

おろかな取るにも足らぬ剛情な隨分これまで癇癪も發して家内の平和を缺いた私の樣な者を何處が可愛くて斯ばかりに御深切なお言葉を給はつたの歟私は貴郎に慰められ憐まれるよりは咎められ叱られる方が嬉しいと存じまするほどにお優しいお言葉の數々をありがたく拜讀いたしました而して泣き咽ばずにゐられませんでした貴郎の高い清い御心を今更つく〱と感じたのでございます如何いたしまして貴郎からお謝りのお言葉を受ける譯がございません私こそ幾重にも〱お謝言を致さなければ濟まないのでございます

この一月半許前から私が正雄に乳も呑ませませず又貴郎に對ひましても不機嫌な顏ばかり致して居りましたので貴郎は嘸御立腹あそばしてゐらしつたでせうが是れには深い意味が有るのでございますあゝ私は今日ま

て隱せるだけ隱してゐる意でございましたが貴郎の御深切な御心に絆されてもう〳〵隱して居ることが能きなくなりました其て始終を申上げることに決心いたしましたさそ〳〵吃驚あそばしませうが私の病氣は婦人病から發るヒステリーや又メランコリヤなどではございません母上へは何卒御きかせくださいますな實は私の病氣は肺病なのでございます

とばかりでは尙お疑ひ遊ばしませうが私の父の亡くなりましたのは肺病でございました兄も妹も其で歿したのでございますですから私も其系統を引いて居るものと見えます

恰ど半年ほども前でございました烈しい風邪を感いたことがございましたが私は貴郎の御存じの通り風邪を感いても藥一服呑まずに通しました其で程なく風邪の方は癒りましたが疲勞と咳とが如何いたしても癒りません何を致すのも億劫て太儀て正雄が泣むづかつても賺すのが煩しいほどでしたから是れは尙風邪の熱が除れぬとみえる一回お醫者さまに診て貰はうかと存じながら一月二月過ぎたのでございます所が二月ばかり前でした或朝顏を洗ひましたとき咽喉から出ましたのは痰とばかり思ひの外血の塊てございました

私が狂人のやうに六疊へ駈込んで自身に蒲團を布いて臥りましたのは是時でございます正雄を始めて傍へ寄せつけなくなりましたのも是時母上や貴郎に苦い顏したのも是時からでございます嘸貴郎は變に思召したでございませうが私は自身肺病と覺りましたから傳染を虞れて皆樣の傍へ來てくださるのを嫌がつたのでございました然し肺病だと申したら母上や貴郎が那樣に御心配あそばすかと美山學士に呉々もお願ひ申して今日までメランコリヤだと申上げてゐたのでございます

あゝ肺病遺傳とは言ひながら情ない病氣に罹つたもの醫學の進歩した今日でも肺病といへばまづ治らぬものにしてある自分は其に罹つたあゝ如何しやう死ぬのは壽命神の御心死ぬのは搆はぬとしたところで正雄は尙滿二歲にならぬあゝ死にたくない如何にかして癒りたい死ぬにしても今少し善い事をしてから死にたい今少

し罪を消してから死にたい今少し母上に孝行を竭し又貴郎を助けてから死にたいと斯存じましたので私は其晩貴郎には秘密で熱心に〱に神に祈禱しました
然し其からは前にも増して病が重るばかり少しも快くはなりませんでした一週間ばかりの中に四回まで咯血しました其時でございます私が正雄を置て實家へ還つて居りましたのは
ですが私の精を籠めた一生懸命の祈禱は毫も聽かれる模樣がございません而已ならず熱血を濺いで祈禱した翌日は却つて病勢が募るやうに感じられました私は其にも萎ないで猶々熱心に祈禱しましたが次第に體も精神も衰弱するばかりで到底本復する者と想はれませんので一時は失望いたしました其でも若しや自分の熱心が足らなかつたのではあるまい歟もう一回祈つてみやうと又奮つて祈禱を捧げましたところが其翌朝二合ほども咯血しましたあゝ自分の死ぬのは神の御心歟けれども其時は神の御心とは思へませんでした勿體ない次第ではございますが凡人の淺ましさに神樣を怨みました怨むばかりでなく神の存在に就て疑ひ始めました今になつてみると乃枝子さんの臨終の一時間許前に永世だの希望だのを怜悧らだつて說いたのが愧しくつて堪りません他人の苦痛は何とでも言つて慰められるが自分の苦痛は慰めることが能ません其も其理 私は不信仰の人懷疑の人になつたのですもの以來 私は何を見ても聞いても樂しいとは感じられなくなりました日光は暖くありません月影は憂の色を帶び鳥の聲は悲しい音のやうに響きました藥は呑みましたが此傷める心を有つてゐる者には驗きません湯治に行つたとて何で肺病が治るもの歟山や川は見るのも嫌だと思つてゐました實に私は神の存在を疑ひ始めてからといふものは全然祈禱や感謝を廢してゐました
ところが噫神は是信仰の薄い邪道に迷ひ入つた私を少しもお怒りあそばさないのみならず反つてお憐れみくだすつて難有い〱御惠を垂れて再たゝしい徑へとお導きくださいました其は私が是函根へ參つた翌朝でした不圖眼が覺めて起上る氣になつて片手を枕に支きな

から倘小軒をかいて睡つてゐるお松の顏を覗いたとき突然自分の口の中で「肉のために祈る勿れ靈のために祈れ」といふ御言を無心で繰かへしました

靈のため靈のため——私は更に靈のためといふ御言葉を繰かへしながら悟りました祈禱が聽かれたからつて神を認め聽かれないからつて神を認めないのは餘り勝手すぎるキリスト信者の愧づべきことだ聽かれて信じるのは當然聽かれないで信じることが能きなければ倘々ほんとうの信者でない

斯悟りますとゝもに私は斯悟ることの能きたのは眞に神の御惠に相違ないと感じました而して喩へることの能きない喜びを以て能きるだけ熱心に感謝しました何卒貴郎も與にお喜びくださいまし私の病氣は治らぬかも知れませぬが私は神を認め永生を認めることが能きました死ぬに致しましても活きるに致しましても皆神の御心でございます

ですが萬一私が死にましたら正雄が——あゝもう何も書きますまい母上へ宜しく正雄へ宜しく

旦那さま　　もと

△△△△婦人記者　として今日我新聞社會に成功したるものを見ず、腹藏なく言はしめんには總體的に記者の品位未だ我邦における學識ある貴婦人を歡迎するに足らざるか而して今日我國の現勢を察するに一般社會において常識の缺如せるを見る、社會の上流に位する男子すら遺憾ながら往々常識の缺如せるを見る、况んや久しくその教育をすら無用視されたる余等婦人社會においてをや、我國の新聞社において適〻婦人記者を採用することあるも未だ成功を見る能はざるは全く社會一般常識の發達せざることを證明する所以にして深く婦人記者を罪するの不當なるを信ず(下田歌子女史談片)

雜録

滿洲人の婚禮

文學士　稻葉君山

茲に滿洲人の婚禮と題して東大陸の風俗を紹介せんとするは、予が前年、野崎貴族院議員の留學生となりて北京に在學中、京中の滿洲人に就て親しく聞きまた親しく目睹せしを蒐錄せるものなり、而して特に滿洲人の婚儀を揭げしは、他意あるにあらず、第一には方今の皇室は、滿洲人にして、進關以後には、皇族及皇室の風俗一般に上流社會に行はるゝにいたりたると、次には漢人の婚儀は、一般に知れ渡りあることとなれば、主としてこの方面より紹介することゝせり。

支那や面積廣濶にして、其一省といふも、我が版圖に比して尙ほ大なるものあることなれば、風俗習慣も亦た一樣ならざるは推して知るべきなり、一寸北京に遊びても、かしこには漢人もあり、滿洲人もあり、蒙古人もあり、西藏人もありといふが如き有狀なり、これに從つて言語も亦た不同を生じ、東西南北の人、其服裝と其文字とを同一にする丈けにして、其語言は一向に不通なるが多し。同じ漢人にても然り、况んや蒙古、西藏の人に於てをや。此章に說明する婚禮に就て觀んも亦た極めて不同なり、かの西藏の如きは積極的に女權の高きところにして、一妻多夫の習慣なり、人の婦人たるものは、自己の良人以外に情人を作るを以て名譽となし、これを良人に誇說するが多しと聞きては、吾輩一驚を喫せざるを得ざるなり。

閑話休提、滿洲の婦人は、漢人に比し、いかなる點に於て異なるありやとは、少くも吾人の質問に値するものあらん。いま吾人の視るところにては、滿洲婦人は漢人に比して氣象豁達なり。躰格偉大なり。脚足小ならずして能く發達せり。唯だ厚化粧を好むところは彼

此同様なりと知るべし。且つ渠等は常に旗下譜第の士女たりといふ一種の自負心なきにあらざれば、往々にして節操學才、共に俊秀なる者をいだすことあり。然も一般漢人には、兎角滿人と結婚することを好まず、皇室に於てもまた同様に之を避けしむる方針なるが如し

餘話なれども茲に注意したきことは、漢人滿人のいづれに關らず、支那の女子は、頗る活達にして臆面なく、氣象の磊落なるは、我が邦人よりも遙に上手たること即ちこれなり。かの頤和園の主人たる西太后は即ちこの般の模形たりと知るべきなり。

偖て、今の皇室を滿洲人となす所以は、かれらの祖先の長白山、黑龍江地方より起りたるをいふ。かの稱して白山黑水より龍興せりとなすもの即ちこれなり。當時滿洲や、人口稀薄にして、土地に草萊多く、漢人は毎に之を塞外の地となせり。然るに千六百年の始めに方り清の太祖努兒哈赤といふ豪傑起り、部下の訓練せる八旗兵を提げて、山海關を破り、聖祖の時代には、北京に都して、漢族の天下を司配せり。清朝の北京占領以前の於ては多少の禮文もありしかど、單純なる葬祭の儀式にとゞまりて記述すべき程のものなかりき。さればこゝに記せるものは、純粹なる滿洲人の婚儀にあらずして、漢禮に折中して作爲せるものとせざるべからず。

滿洲人の婚禮は、男女十六歳より二十歳までを以て適當なる時期となす。娶嫁の順序は、媒人ありて男女双方の親許に交渉し、相談略ぼ纏りたるをまちて、更に算命者をして吉凶を卜はしむること通例なり。もし吉を得れば之を合婚といふ。この風習は蒙古地方も同様にて、兩性の甲子を算命者に托して卜はしむるなり。次に大媒といふものあり。こは朋友中の名望家を請じて婚儀の主人公たらしむるなり。算命既に吉を得、大媒も其宜きを得れば、男女兩性の意志を疏通するが爲めに、男家はやがて黄道吉日を擇び、玉如意一鈞を女家に贈る。然る後ち兩性の家人は男女の年庚字帖を交換す、これを放定といふ。即ち古代に行はれたる納米の禮に相當せり。さて婚儀の式を擧ぐるには、その準備

として大約二十餘日を要することとなるが、其前に男家は、吉日に於て、鷄酒、衣服、首飾の類を幾棹かの臺上に列ね、また鄭重なる金帖に迎娶の日を誌し、その日の來るを俟つ。但し嫁人の日取は女家に於て之を定むるが通例にて、專ら新姑娘の月潮を避けんが爲めなり。古に奠雁之禮と稱するものは、即ち今の通信と稱するものなりと知るべし。

偖て愈々新姑娘、轎入の日にいたりて、女家は饗宴を設けて客を招く、其客人は四名又は八名にして衣冠整々として、鼓樂者の一隊を先導となし、粧具を送りて男家にいたる。男家は收めて中庭に陳列す、之を安粧といふ。右畢て男家は、太媒をして其子(婿)を導かしめ、女家の中堂にいたりて三叩首の禮を行ふ、之を謝粧といふ。禮畢はるや大媒は婿を伴ふて家を歸る。

その夜、男家に於ては、彩轎とて諸種の色をもて色どりたる轎子を具へ、燈籠數十對を推立て、儀仗を設け、奏樂して女の家に至る、之を細樂といふ。奏樂に用ふるは、金鼓、號筒、鎖哪、銅鑼、笙笛、雲鑼、懐鼓の類なり。



この行列の女家に着するや否や先づ檑を吹く、之を聞きたる女家は、暫く門を鎖して迎娶の行列をして家敷内に入らしめず、こゝに於てか門外の客は門旁に立ちて世にも目出度き祝言を述べつらね、門扉を叩くこと數回にして、纔かに女家門を開きて客を導くに及ぶ。之を求親迨といふ。かくして一行は新姑娘を彩轎に乘すると同時に、婿は男家の中堂に入り、三跪九叩首の禮を行ふ。之を謝親といふ。禮畢て男家に返る。新姑娘を乘せたる彩轎は、路すがら諸種の奏樂をなし、大道を練り行くこと數時にして、男家の門に達するや直に數聲の爆竹を鳴らす。之を避煞といふ。彩轎中庭に入れば三たび天を射る、これを射煞

といふ。やがて新婦は、轎を出で中庭に立ちて新夫婦香案の前にいたり、交々天神地祇を拜す。その履むところの地には、紅色の毡舖をしき禮式最も嚴かなり。右畢て新夫婦は室に入り、床に上りて相對坐し、杯盞を交へ、孫餑餑、長壽麵を喰ひ。然る後、寢に入る、是れ合巹の禮也。

次日黎明に女家の母、親族を新夫の家に伴ひ來る、先づ門上に懸り居る彩綢の如何に注目するものとす、若し之れが懸樣の低きにあれば、直に車を驅て遁去る。また、懸ること高ければ、喜んで婿家に入る。蓋前者は女の處女ならざりしを表はし、後者は處女たりしを表すものなり。婿家の賓客は女家の母幷びにその親戚を中庭に導きて華莚を張り、新親年齢の序に順じ坐につくや、婿跪いて三爵を獻ず。莚畢て岳母は辭し去るの時、婿は百余歩の地に送ること通例なり。これを扶輪の禮といふ。暫くにして新夫婦は舅姑老幼の家眷に對面す、之を分大小之禮といふ。婚儀の一通り終はりたる後、一二日を經て、岳家は吉日を擇び、婿に請ふて、其女と共に家に來らしむ。之を四門といふ。婿、岳家に至り、また家眷に對面し分大小之禮を行ふ、禮畢りて宴席につく、この宴に於て婿は酒を飲まず、醋を用ゐず、魚蟹を食せず、また笑聲を發すること能はず、かくして宴を終はるや新夫新婦、相伴ふて家に歸る。

其後は毎日もしくは隔日に岳家より僕を遣はして女の様子を伺候せしむ。九日目に及びて岳母躬ら男家にいたりて女を見る、これを作單九といふ、十八日目には岳家輿を送りて女を迎ふ、之を接准九といふ。一週月にして又女を岳家に送る、この時は五六日岳家に留り、然る後歸家するものとす、之を住對月といふ。

滿洲人婚禮の大要を述ぶれば上のごとし。漢禮は、大同小異にして、唯だ稍々奢侈繁瑣なる所あるものゝごとし。合婚、放定、通信、などの儀式も格別更るとなし、放定には、如意の代りに釵釧、通信には猪羊の代りに鶏、鴨もしくは菓果を用ふ、其他の諸禮容は一致せりと雖も、滿禮の夜間にとり行ふに反し、漢禮は凡て白晝に行はる

米國に於ける女子の職業

在米國 飯嶋かね子

女子の職業は十九世紀末の一大問題にして輓近盛に論ぜらるゝ所でありますが、近年米國婦人一般の傾向なりといはるゝを聞きますのに、成る可く臺所働きを離れて、何なりとも一かどの職業に就かんことを、力むるの一事であります。さて私しの觀察した所によりまするに、實際然らかと思はれます、日本に於て公の場所、又は會社製造所等に女子の影を見ることの少なふございました私の眼には當地の女子の勢力の偉大なのに一驚を吃し且つ實に當然であると信じました、雜誌書籍に就て見ますするに、歐羅巴諸國では、未だ當米國の如くはありませぬ樣です、從て米國婦人の氣質も、大に歐洲諸國と異り居るのみならず、舊時の本國たりし英國婦人とも、又頗ぶる異つて居るやうであります、以下職業の種類に就て少しく述べませう。



書記(クラーク) 先づ商店、會社、ホテル等を始めとして、諸官衙、郵便電信、出版業、其他總て躰力を要せない業務の書記として働いて居りますものは、最も多數でありまして、「タイプライター」の如きは、殆んど女子の專門業といふやうな傾きがあります。

敎員(テーチャー) 之は最も適當の業務として、(業務の性質上幷に彼等の品性の維持上)年々に增加するの傾きがあります、公私の學校、下は小學校より、上は大學校に至る迄を通じて居るのみならず、又單に女生の敎員たるに止まらず、男生の敎員として、其勢力はなか〱大したものであります。私は偶一週日の春期休業中、スタンフォード大學を距る十八哩の所に在る、サンノゼー市に徒歩遠足した序を以て、州立なる同地の師範學校を參觀して、一見私は女子のみの師範校ではないかと、疑ひました、けれども

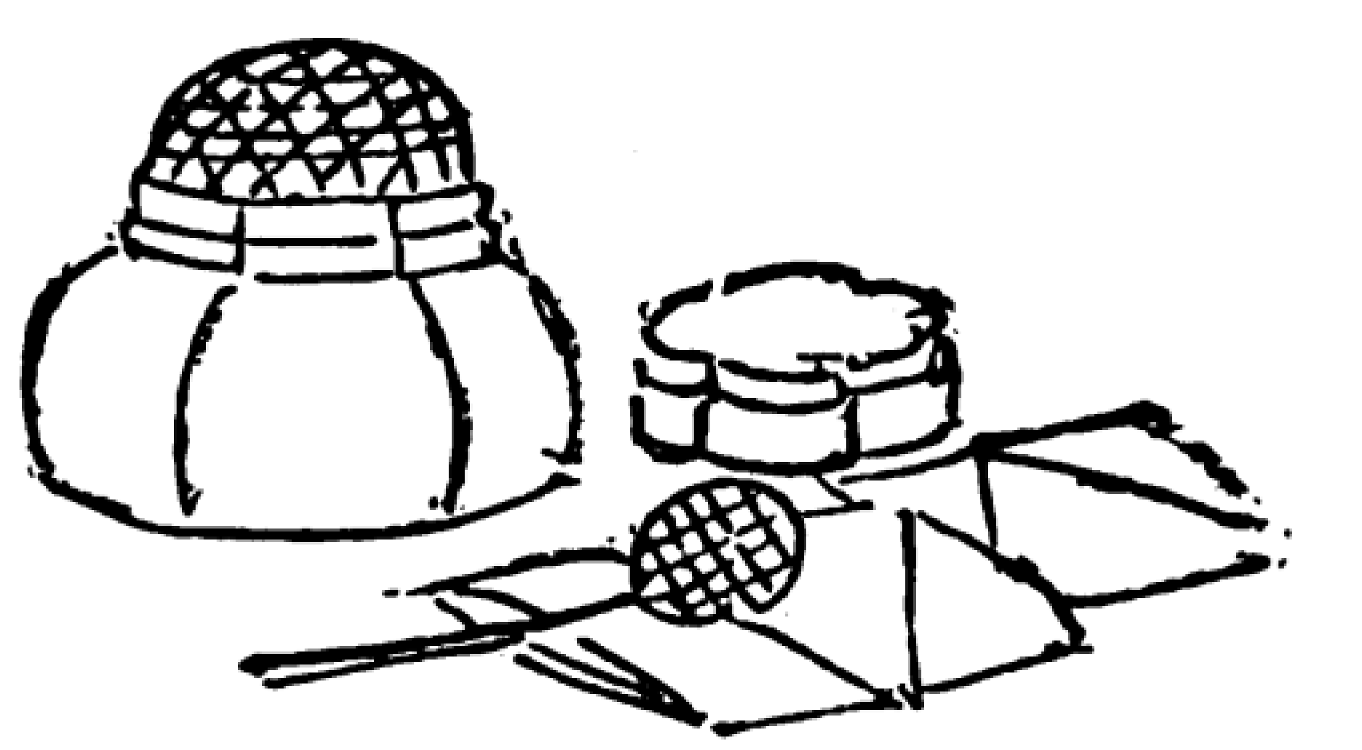
事務員（校長及び一二の職員を除きて、他は總て女子なりき）に就て、親しく質しました所に依ればそうてはなくして等しく、コーエヂユケーションシステム（男女混合教育）でありまして、男生も居ります。けれども其數は女生の五分の一に過ぎませぬと語りました。千八百八十九年の合衆國教育局（文部省）の統計を見まするに普通學校の教員總數の中、十二萬五千六百人は男子、二十三萬八千三百人は女子でありまして、殆んど倍數に垂んとして居ります、是を見ても其勢を推知するに足ります、其他大學に教鞭を執る處の女子を加へたならば、優に倍數となりませう。現在スタンフオード大學にも、社會學に一人、歷史其他に三人あります、聞く所に依りますれば未婚者教員は、結婚すると同時に、其職務を失ふといふ事てあります。併し結婚後職を得たるものは、何等の故障もないのてあります。それてすから結婚に因て教職を失ふことは、甚だ不當てあるといふ訴訟が、曾て起りまして以來、時々同樣の訴訟を起す者があるといふことてすが、其結局に付ては、未だ聞いた事はありませぬ。既婚後教職に就くことを得、又從事するものが現にあるのを見ますれば、斯る訴訟の起るのも當然であることゝ思はれますが、之を失ふといふ事に就ては、確たる理由がなくてはなりますまい。

醫師と辯護士　北方の諸市府に於ては、醫師を業とする女子がなか〳〵多いのてあります。元より之を禁する理由は無いのでありますから、或る大學では、特更に女子の爲に、醫學部を設けて居ります、日本に於きましても、近來漸く女醫の增加する傾向があるとか申しますが、社會の進運上慶すべき事であると信じます、又當米國に於ては、女子の辯護士といふのが中々多いのてす、之れには我々本邦人は、少しく異樣に感ぜられます。けれども日本の將來にも、必ず同樣の季節が來るべきを思へば、別段怪しむにも足らない事であります。而して當米國に於ては、統計上ての辯護士が、益々增加するといふ事です。辯護士は單に法庭に出てゝ、原告被告の權利義務を論じ、法律上の當否を爭ふのみを以て、唯一の務めとなすものでなくして、原被の中間に立

つて、平和に調停の策を講じ、双方感情の衝突を和らげるは却て彼等の名譽とするもの、如くに思はれます。又如何に米國婦人なればとて、陰陽氣を異にするは免れない事でありますから、其天資の柔和なる所は、斯る場合に於て最も有效であらうと思ひます。されば大に好結果を現はして今日數多の法廷法官を減ずるの時節が來るかも知れませぬ。我が本邦の御婦人方も御奮發ありては如何かと存じます。

記者と文學者　古來女流の文學者として、名を一世に轟かし、長き未來迄も、其傑作を傳へたるもの、東西共に其人尠くありませぬ。記者たり、文學者たるは、女子に好適の業でありますから、現時此方面に向ふ女子は益々多いのであります。

さらぬだに秋の旅寐はかなしきに
松に吹くなり床のやま風



佛教と北信婦人

宮澤須美子

○題して北信婦人といへど、實は井底の蛙にひとしき身また他をしらず、いふは唯こゝなる里がおなご達の事、よむ人このこゝろしたまひてよ。

○主もに眞宗は本派本願寺に屬す、御門跡樣が御名、生佛のやうたふとみて、おそれ多き事ながら九重の雲深くまします　大君の御みいづよりいと高く、またありがたうおもひつるあさまし、我は嚴父がつよき〳〵尊王のもとに養はれて、初めてこゝへ來つる時さながら異邦人の中にまよひ來りしやうおもひぬ。

○いづこの家にても佛壇の美々しき事、これが附屬品一切また價をとはず、幾十年の煙にくろくすゝけたる唐紙も、あくれば五光かゞやく如來樣の安置されて、四季の造花巧に、九品蓮台にまがへられたるもまたありかたさの身にしむやうおぼへしを、

そが祖母より、はた曾祖母より、母の胎内を通して生れきつる幼子の、いかでか、いかでか、これにひざまづかざるを得んや。

○眼に一丁字なき婦人も、梵語にやあらん、はた何にやあらん、おもへば我も念佛のことにつゝまれてより六年の星霜、夢まぼろしの如くすぎぬ、そも〳〵初めてこゝへ來りける折、今は故人となりたまひし姑君、六十路あまりになり給へるが、「何もかも因緣ぢや、こんな山の中へきたのも定まる約束」といひたまひしにはおどろかれぬ、腰にあづさの弓彎りたる老媼が口より、因緣を聽き、運命をきゝ、萬世の動かすべからざる所謂、約束なるもの即ち今の若き詩人等が口ぐせのやうにいひ給ふ宿世をきく、おどろかざるを得んや。

○來る人もくる人も初對面の我へ、「娑婆」と世の事をいひ、草ふかき山里を一生の棲家となさゞるべからざる我へさま〳〵の慰籍を與へくれぬ、即ち娑婆の事一寸先は暗、如來樣の御仰のとほり、右むくも左むくも如來（あなたと稱ふ）のまに〳〵せねば相ならぬ故、我が都はなれてこゝへ來りしとうらむなかれとの意をくりかへし說明されて、げにもとおもはれしぞ。

○御命日とて月の二日は午後より農をやすみ寺詣をなす、雨の日と雪の日をゑらばず、こは開祖（御開山樣といふ）親鸞上人見眞大師を追想するなり、また蓮如上人の事績をことにもしたひまつりて、我が耳へいつも入るは蓮如樣の一代記。

○一日我に、さる女の說いて曰く、お釋迦樣が人間のはかない事をなげき我々に代りて難行苦行の末、とても自力の信心では、極樂へ行かれぬゆゑ、他力の信心即ち南無阿彌陀佛の六字の稱號を稱へさへすれば、あなたの御慈悲でお淨土まゐりさしていたゞけるやうにおはからひ遊せしなり、お前樣も念佛が肝心じやぞへと、好意多謝、いつかは我もまたあなたの前にひざまづくものたるべしとちかひぬ。

○いつかではいかぬ、今、今、たつた今、お前樣は人間の

もろい事、はかない事を知り得ぬか、御文様にも紅顔おとろへて白骨となりとおかき遊ばしたではないか信心は明日のものに非らず、今日のものなりと、再び謝す、我はある一種の意味に於ては、生と死の研究を怠たらぬもの幸ひに安ぜよと答へしが、彼女には鮮し得しや否や。

○嫁と姑は山高く水きよきほとりにても變る事なし、いさゝかの變化なし、兩々恰も猫とねづみ、火と水、花と風、雨と雪、念佛稱ふる間はのろひなし、終れば即ち嫁の惡口、姑の罵、これのみや御佛もてあまし給ふらん。

○田地山林あまた持てる家の妻君をも尊號いはず、寺のを奥様又は御新造様、そが娘を御孃様といふはよし、御姫様といふにいたりては過ぎたる尊稱にあらずや、依然としておひめさんといふ、これのみは贊成なしがたし、佛敎が今猶非常なる勢力あることの詞につきても知らるゝなり。



○里の女等、花を愛して春毎にまく種いと多し、されば婉なる喬木の梢よりにほふ梅櫻桃李はいはずもがな、夏草に交れる百合の花、これは詩人が隨喜の涙をこぼすもの、外に秋のにしきはとり〳〵にをかしうて知らぬは風流のなごりとおもふべし、是等は先祖の靈を慰む爲かの美々しき佛壇にかざる料とはなすなり、詩歌の題にも入れまほしき花、婦女等が目的は肉の眼をたのしましむるに非らずして、實に彌陀をおもへるにあり、大悲大慈のみほとけがみこゝろを慰め奉らばやの目的なり、またたかゝらずや。

○冬季尤も多し、そは雪丈餘につもりて農家の婦女等もいさゝか暇あれば、日を定めて御會合となんいふをいとなむ、これ字の如く會合なり、順次家々をめぐりて會場にあて、皆念佛を申

し又御文章をきく、これは僧を招くにあらず、番にあたりたる家の主人、導者となるなり、主婦は茶を煮、粗菓粗菜を供して人々にいだす、この會尤も益あり、一種の婦人會なり親睦會なり、懇談會なり、村皆一致してなす、美風にあらずや、まして田もつもたぬもこの會に赴く、いさゝかのへだてなし、都には一般みるあたはざるところ平民的集合也。

○御文章はさながら聖者のみことばきくやう、いとありがたし、佛によりて行はるゝ葬式ましてよし、其鐘のね、悲しうひゞきて人間が心と調和する、こもまたこの教の特有ならん、女は皆白むくにて式につらなる、貧富の別あれども大同小異の摸形、婚儀と葬送白を着用す。

○婦女が終生かけての大願は京の本願寺へまうでゝ淨土のおもかげをしのぶ事なり、十里の西南、三國一の如來善光寺あれど、近ければにや、大々志願は京の六條にあり、如來も亦ふるさとにては尋ばれ給はぬにやとをかし。

○絹糸の房ながき水晶まがへの珠數、京みあげとて里の女よりもらふ、今や手匣の中にねむりつゝあり、これを兩の手にかけて、からげて、こゑあらしむるはいつ。

あすありとほこれるものよ　きたりけりきけ
けふとぞ告ぐる　　よろこびのこゑ

妙なる樂に伴ふて讃美のねきこゆ、神よりか佛よりか、村雲ふたがりて、我いまだ天上に達し得ぬぞうらみなる。

この世界のならひは、老少不定にして電光朝露のあたなる身なれば、いまも無常の風來らん事をば知らぬ躰にすぎゆきて、後生をばかつてねがはず、……中略、今日より彌陀如來の他力本願をたのみ、一向に無量壽佛に歸命して眞實報土の往生を願ひ稱名念佛せしむべきものなりあなかしこ〳〵。

をこがましけれどうつしとりぬ。世のひめたちいかゞおもひ給ふらん。

○婦人に關する雜誌今世に多し、文學、美術、技藝、科學

修身それ〴〵完備しあれど、いまだ一言宗教に關してはいはずかたらず、世をいとふこれ宗教にあらず、經世の道よろしきを得て、安心立命の途につく、こは婦人にとりて研究すべき大問題なりと信ず、習慣とはいへ、山間僻地には單純ながらも偉大なる覺悟と信仰をもてるあり、花にそたち月にあこがれ給ふ都の婦人等よ。こゝなる女等の如く、しかく安神と慰籍を保ちつゝありや、とはまほし。

○死……あゝ……死……こゝにては御むかひのきたりしといふ、惨たる御むかひ、即ち生息の最終に於て、臨終の枕邊に侍する人々は唯手を合はせ稱名をとなへて、涙の中によろこびあるを見、われはいひがたきの感にむせびぬ。もとより妻に別るゝ夫、子に別るゝ母、涙なきにあらず、うれひなきにあらず、哭しての後、光明を來世にみとめ、涙つきての後、淨土の再會をたのしむ、彼等は徒に泣き徒らに哭するものならず、この熱涙、この慟哭の中に價高き希望あり、生命あり、文字なきの姉妹、文字ある婦人よりは高尚なるを得、奇ならずや



○萬感あふれて、筆つくるときなし、世人よ、しばし我が筆にたふとき耳を傾けたまへ、ことにも〴〵我が愛するひめたちにと、ひとへにこひ參らすになん。猶ほ、佛教が幾世幾とせ、我が里人に與へたる利、幷に害、他日委しうのぶる時あらん、愛する妹姉等よ、しばし音曲詩歌の風流をすてゝ、我がことばにゆるしたまへや。

袖ぬらすをしまか磯のとまりかな
松風さむくしくれふるなり　俊成師

名家談叢

板垣伯の社會改良談

◎囚人携帯兒の保育　社會には眞の慈善家なるもの甚だ僅少なり過般婦人同情會に一の事業として組織したる囚人携帯兒保育會の如き慈善家ありて續續寄附金を投ぜらるゝあらば大に犯罪人を改善せしむるを得べし過般一囚人が携帯せる幼兒は母の乳不足なるより麥飯の汁を吸はしめたるより下痢を起し殆んど死に垂とせるを引取り治療せしに忽ち健康舊に復し又當日の觀なし頃日母が刑期滿つるを聞き監獄に至り母子會見せしめたるに母は兒の健康を見て聲を放て歎泣し以後決して惡事を成さゞることを幼兒に向て誓へり同囚の婦女貰泣するもの其幾人なるを知らず幼兒は暫く母に離れたるより母の懷に抱かるゝを拒みたるも強て引渡したり斯かる有樣にて之等は苦役を以て囚人を懲戒するより數千倍の効能あり

◎天性の犯罪は虛說なり　近來學者とか云ふ一種の空想家は犯罪人には骨相に依て定まるとか或は天性治すべからざるものありなど左も誠らしく無遠慮に說くものあるも之れは一場の夢想論なり今犯罪者に就て調査するに無妻者は有妻者より多く無教育者は有教育者より多く無家族者は有家族者より多く無資力者は財產家より多く男は女より多し財產あり妻子あるものは何の必要ありて罪を犯さんや罪を犯すは一家團欒の快なく且つ糊口に迷ふ者に多し犯罪に天性治すべからざるものありとせば獨り之等不幸者に多くして幸福者に少き道理なし今假に夢想家の天性治す可からざる犯罪者を捕へ來り巨萬の資產を與へ社會をして相當の交りを爲すあらば何の不平ありて好んで罪を犯さんや罪を犯すは不平より起る不平は家に財なく身に技術なく妻子と團欒して朝食晩餐の快を看る能はざるより來たる彼等

が財なく身に技術なきは第一學問せしめざると社會が虐待するとの結果なり是れ社會組織の不完全なるに依るものにて罪は罪人が好で犯すに非ずして社會が犯さしむるなり罪人の罪にあらずして社會の罪なり曾て内務大臣たりしとき監獄を巡視し一囚人の北海道に傳遞さるゝを見るに其犯罪は十錢を與ふる故山に火を放つべしと教唆され甘く燃へれば一圓を與ふべしとの約にて放火したるなりと嗚呼此の一圓の金若し當時彼に投ずる慈善家ありせば何ぞ十有餘年の苦役をなさしめんや是れ全く社會の罪にして彼の罪にあらず余は此の犯人を見て坐ろ憫然の情に堪へざりし

◎工女虐待と警察の責任　埼玉縣の工女虐待は尤も惡むべき行爲なり併し此の惡弊は獨り同縣のみならず東京の眞中にも未だ發見せざる者多々あるを信ず之等は警察官の不取締に屬す埼玉の如きは雪中裸體にて戸外に佇立せしめたりと云ふ何たる酷待ぞ野蠻時代と雖も尚且之をなさゞるべし聖代の汚點之れより甚だしきはなし故に余は事實を調査し第十七議會に於て政府に質問せん考へにて目下調査せしめつゝあり埼玉縣の警察官たるもの豫め覺悟なかるべからず

◎芝新網は盜賊の産地にあらず　同所は盜賊の産地として人の口にする所なるが實際を調査するに同地の乞食等は一日五錢十錢の損料にて他より貧民の子弟を借り受け乞食の手先に使用するを例とす右の子弟が十歳以上に達すれば最早同情を寄するものなきより解雇せらるゝに至るも乞食育ちは慣習上工場其他の徒弟にも從事する能はず遂に惡徒の群に入るなり此等は消費組合を組織し漸々貯蓄の風を養成せば終に善良の民となると疑なし云々（東京日々新聞）

谷子爵夫人の籠城談

◎干城は三谷の別莊に引込で讀書三昧に日を送つて居り議會が開けますとナカ〳〵忙くなります干城は自己の隨意で議會を休むといふことをしませぬから會期中は少しも隙もありませんソレに公私訪問の御客も多くなりますから臺所を働いて居る私の用事も自然多くなる

譯でございます、よくお出でになるお客ですか、左樣てす曾我さん三浦さんなどて御座ませう何分頑固な爺婆の所へは當世向の人は餘り來ないのです

◎西南戰爭の時ですかあの時は私も干城と一所に籠城しました一所に籠城した士官方の夫人や妾なども六人ばかりありました尤も士官の夫人方には最初田舍に立退うといふ話もあつたのですが私が黑土になるならば所天と共にしやうと申して堅く籠城說を唱へたものてありますから他の夫人方も奧さんが籠城なさるなら私しも／＼といふので遂に六人ばかりが籠城するとになつたのてした、中には田舍に立退いた人もありましたが田舍にも賊の手が廻はつて居つたものてすからソレは／＼ひどい目にあつたそうで御座います、干城と共に籠城されたのは樺山(大將)奧(中將)小川(中將)與倉(中佐)さんなどて連絡をつける時には奧さんが斬つて出たのです、籠城日數は二月二十二日から丁度五十四日間で此間私共婦人連が何をしたかと申しまするると其時分には今の樣に看護婦など申すものもなかつたてすから兵士の用ゐます足袋やシャツなどを縫ひましたので每日天幕の中に這入つて鐵砲の音を聞きつゝ足袋やシャツを縫ふて居つてので時々將校方を慰めるために私は「おはぎ」をこしらへて本營の方に贈つて居りましたが樺山さんは酒好で「おはぎ」などは召上らなかつたものですから兵營の土手に生へて居ります嫁菜を摘んで「ひたしもの」にしてあげましたところが大層旨いと仰やつて澤山お喰りになりました凱旋後お宅てお拵へになつて召上つたら少も旨くなかつたつて何時もお目にかゝると一つ話にいたします、ソレから野蒜を摘んで酢合をしましたが味噌は燒殘りのがありましたけれども酢がないので私が持つて居りました沸騰散を水に融いて酢の代りに用ゐましたところソレは／＼酢つぱいとでありました、私の家では今でも紀念のために每年二月の廿二日に「おはぎ」と粟粥をこしらへましてその日はドンなお客にも出すとにして居りますソレから每年籠城會にも「おはぎ」をこしらへて送るとにして居りますハイ籠城中の困難といふものはお話も出來

ない程てありました糧食が盡きるといふ心配から粟粥を十日間食べましてその後米に改めましたが連絡がついて初めて喇叭の聲を聞いた時は何ともいへないほど嬉しかつたてす（大阪毎日新聞）

稲澤女史　獨逸下婢談

◎彼の國では一人の下婢を使のもなか〳〵容易ではありませぬゆゑ普通の家では大抵主婦が力の限り働きますそして獨逸の主婦の最も心をこめて手を入れるのは客室の飾附よりも寧ろ臺所の整理だと申します

◎獨逸にも矢張桂庵が御座います桂庵に賴んで下婢を雇入れた場合には傭主と下婢より大抵一圓五十錢位づゝの周旋料を拂ひますめみえは三ヶ月で愈々雇ふ雇はれるとなつた以上は少くも四週間以前に云ひ出してゞなければ容易に出すの出るのと云ふ譯に參りません

◎年齡は十四歳以上即ち義務敎育年限後の女でなければ法律上下婢となることを許しません下婢は大抵農家の娘達で初めは料理の心得等もありませぬゆゑまづ安給料で其家の主婦が萬事敎えると云ふ條件つきで約束が出來ます給料は安くつて一ヶ年六十圓上等は百圓位でありますがフランクフールトアムマイン市の樣な繁華な都では百廿圓以上でなければ得られぬさうで御座いますそして毎年四月一日と九月廿九日とが國内下婢の代り日と定つて居ります

◎下婢はまた皆一冊の帳面を持つて居りますそれは一々住み込んだ家の主婦がその者の品行や性質がどれ丈の働きが出來るといふと解雇の理由などを手記したる一個の履歴帳で御座います新に雇ふとする人はこれによりてその婦人の人柄を知るのであります若しも或主婦が實際不都合のあつたためその下婢を解雇しながら氣の毒などの感情のためにその事を隱してやつて次の主人がその爲に損害を被りました場合には第二の主婦が第一の主婦を告訴致す事が出來ます

◎二週間毎に日曜日の午後一時より六時まで下婢に休暇を與へます此日は下婢のために種々の集會が開かれますので心掛けのよい下婢は此會に出席して基督敎の

牧師の監督の下に音樂、將棊、談話、講談、讀書など自由に好むところを樂しむ間に様々の良き感化を受取るのて御座いますまた或者は動物園博物館芝居や郊外散歩と友達同士遊びくらして歸ります
◎下婢の最も樂しんで待つて居るのは十二月廿四日のクリスマスで御座います此日は主家より大抵給料の四分の一か五分の一にあたる位の贈物を貰ふのです主婦は平生下婢の好みや必要に氣をつけて居りまして可成下婢の喜ぶものを贈ります
◎また獨逸の下婢は一般に給料の幾分を銀行にあづけるやうな習慣になつて居ります必要品の重なるものはクリスマスに貰ますから少し辛棒すると六七年の間に數百圓の貯金が出來ますこの金は大抵この人達の嫁入仕度になるのです一生獨身で居らうと思ふものは旅館に雇はれて大宴會儀式用の料理給仕法などを習ひ出精の道を開きます
◎家族と召使との區別がちやんとして居りまして主婦などが女中と一所に無駄言を云ひ合ふなど丶云ふとは一切ありませぬが大人は勿論子供でも自分で出來る程の用事には下婢を煩はさぬことになつて居て言葉使なども叮嚀であります子供は下婢に何か用事をして貰ひました時輕く「ありがたう」と云ふなどは見つきのよいものであります食物は普通の家では下婢のと云つて別段に違へずに家族と同じにするやうで御座います唯家族の食事が濟みました後で臺所で食べるといふ丈の違ひてあります
◎逗留の客などのあつたときは別段に手當をいたします（報知新聞）

原禮子氏の育兒談

◎育兒法など丶云ふ六ヶ敷い事は存じませんですが自分の大勢の子が丈夫なのは此爲だらうと思ふ事が一つあります、それは外でもありません「子供を餘り大切にし過ごさない」と云ふ事です、貴方の知つて居有しやる御家に就ても考へて御覽なさいまし夏でも薄着しては風を引くとかチョットした病氣にも大病人扱ひをし目

に見えぬ程の怪我にも大騒ぎをする樣な所のお子さんに限つて丈夫ではありません

◎貧民の子など冬も煎餅蒲團にくるまつて何ともないと同じ事で人間は萬事習慣でありますから小供の將來を思ふなら可成苦しく育てるが宜いと思ひます私供のやうに大勢子がありますと兎角十分の世話は屆きませんから寢る時などズーッと枕を並べて眠つて居るのを見渡して寢冷しないやうないやうに位の氣はつけますが朝になりますと疊の上に跳ね出て居るものもありますけれども別段其爲に病氣になつたとも覺えません

◎宅ではまた年子の樣な子ばかりですから生れると直と乳母に預けます時々皆々樣がいくら熟練た乳母でも根が他人だから十分の世話は屆くまいと仰有つて下さいますが私は預けた上はその樣な事もあまり氣に致しません却て荒い颪に當てる方が丈夫に育つかと思ふ位です

◎斯う申しますと、それは貴方の樣に十幾人と云ふ子供を持つて居たから一人や二人は何うなつても宜いと思ふかも知れないが數ないものは仲々そんな平氣なまねは出來ない、とお云ひかも知れませんが廿人ありましても卅人ありましても子の可愛さと云ふものは違ふものではありません

トゥイチ夫人の女子躰育談

英國の有名なる女文學者トゥイチー夫人は此程女子躰育の價値と題して女子の躰育に關し異說を立てゝ曰く「試に見よ少しも運動を爲さゞるマホメット敎の婦人に肥滿せるもの多くまた躰育を勵まざる西班牙の女子に肉つきの完きもの多きは何の故ぞや抑も亞剌比亞にては婦人の美醜は其躰量の如何によりて定められ肉つき饒かにして躰量多ければ多き程美人として稱嘆せらるされば女子にして嫁期に近づけば其父母は只管ら其肥滿せんことを欲しあらゆる手段を盡してこれが道を講じ十二歲の頃より身躰を肥滿せしむべき丸藥を與へ又た勉めて甘味のものを食せしむ彼等が睡床と稱する長き柔かき床の上にありて歌を謠ひ樂を奏するの外他

に何の爲す事もなく食い睡り且休息するを生涯の務めとなし居れる樣は實に他國に於て見るべからざるの奇觀にして彼等は一週一回祖先の墓に詣づるの外外出する事とては無く況や運動といひ遊戯といへる事の如きは夢にだもこれを見るべからざる也然るに彼等は斯の如くすること一二年にして十三四の齡に達すれば身軆は充分に肥滿してこれを結婚の市場に出すも決して遺憾あることなしこれ實に驚くべき事實にして此事實より推斷するときは運動不足なる亞剌比亞婦人は遙か運動過度なる英國婦人よりも其結果に於て勝ることを知るに足るべし

過度の運動は洋燈を置く臺の如く丈け高く肩狹まく全軆に於て不調子なる女子を造るも決して美顏なる婦人を作る能はず何となれば女子にして力に於て長ずる時は楚々たる其外顔は勢ひ削弱せられざるを得ざるの理なれば也

運動の利益ある點は顔色を爽かならしめ快活なる容貌を得せしむるにあり此點に於ては我英國婦人は慥かに世界に向つて誇ることを得べし然れ共運動過度なるに至れば其害勝て數ふべからざるものあり吾等は軆操遊戯等に耽りて却てこれによりて女子の特性を失ひ可憐の小女にして遂に變性男子たるに至るものあるを悲しむそれ男子の婦人化せるの醜なるが如く女子の男子化せるものも亦醜なり何となればこれ兩乍ら天性に違ひ人間の常規に戻るものなれば也」云々

潮田女史の工女談

◎私の知人の中に篤志家がありまして若しも工場主が工女の勞働時間の中から毎日一時間づゝを寄附するとを承知して與れますなら自ら同志の人と共にその教育に力を盡して見たいといふので御座います此頃ライオンはみがきの小林さんにお目に懸りましたところ同氏のお話に「宅に去年まで姉妹連れ立つて五六年通つて居る女工がありましたが或日母親が突然訪ねて參つて娘たちの爲に暇ねがひをするのでありましたその姉妹は大層やくに立つ女工でありましたから急に居なくな

られては此方も大層勝手がわるいのだが一躰何ういふ譯かと聞きますと母親は涙を流して私共の行き届きませぬところから生活の足にもと工場にお願ひを申した譯でありますがモー廿歳にもなりますのに三人とも綻び一つ縫ふことも出來ませぬ此間中つく〴〵娘どもの行末を考へて見ますと親として誠に濟ないと思ひましたから是からどうなりといたして縫物の一も覺えさせてやりたいものだと存じましてとの事でありました「私も此時此婦人の前に實に面目ない氣の毒な思ひを致しまして穴があるなら入ても仕舞ひたき心地でしたて早速この事を海老名さんに御相談いたしますと幸ひ其教會のお方がお二人ばかり來て下さるとになりましたので此節は女工達の氣風が著しく善良になつて參りました」と申して居られました初めは小さな工場でも志のある工場主を說きまして一時間づゝでも女工の勞働時間を寄附させるとが出來ましたならたゞあの人たちの友達になつてやる丈でも少からぬ効能のあると思ひます

武田女史の歐洲觀光談

華族女學校幼稚園に開會したる婦人教育會常習會に於て先頃歸朝せし武田貢女史が歐洲旅行の談話ありたれば其目新しき節々を左に掲ぐ

◎香港の船中に居住せる支那婦人は大なる茶碗に七八杯の御飯を喫し茶碗を洗滌し拭ひたる汚なき木綿切にて己が足及び板の間などをも拭ふ又印度人中には繪などにある達磨と露異る所なき人種あり而して馬來人種は老幼男女學校敎師と雖も己が年齡を知るものなく卿か物を辨へたるにても椰子の生長に由て之れを數ふ又た佛國人は日本人の想像する如き派手なる人種に非らず學校生徒は大小悉く黒衣を用ひ家庭至て質素に中流以上と雖もパリ市中には借家せざる者稀にして儉約の結果久しく旅人の滯在を喜ばぬ樣あり而して臺所の整頓せるは驚くべく何れも水道及び瓦斯を用ひ竈の上に傳ひ來る瓦斯にて順次自然に食物の出來得る仕組なれば從て下婢の如き普通の家に多くとも二人以上使ふ者なく又ホテル其他非常なる贅澤家の外は電氣燈を用ひず宴會等には悉く蠟燭を點ず

雜俎

酸漿を吹く事

石井研堂

若き女童が、酸漿を吹き鳴らして玩とするとは、都も鄙も同しき習はしにて、東京市内には、現に專門の酸漿屋あり、薄手の商ながら、市中を振り賣りし又神佛の祭日には、必ず古木、檜の葉の上などに、幾段にも飾り立て商へると、誰もよく知る處なり。

この酸漿屋の商ふ所のものは、紅白燦爛、目を奪ふの美あるにぞ、おのれ、ある時其店につき、一種づゝ有らん限りの種類を買ひ求めて視たるとありしが、遠目に見しとは違ひて、近く見る時は其種同しくて、只其染色の異なるのみも多く、失望したりき。

買ひたる品は、動物性と植物性と、二類ありて、何れも鹽漬のものなりし。植物性には、例の丹波酸漿、千生酸漿など、動物性には、海酸漿、長刀酸漿、軍配酸漿ヒヨツトコ酸漿チヤン〳〵酸漿など數種あり、強き皮の中に、液を含み、軍配、長刀、ひよつとこといへるは、自然の小孔生ずれども、たゞ海酸漿といへるには、三角に切りたる小孔あり。其名の如く、其形狀の少しづゝ異れるは可笑し。

海ほゝづきの、動物の卵たるとは、古人すでにいへり「物類稱呼」かぶと蟹の條に「海ほゝづきは、うんきう(筑紫にて、蟹甲をうんきうといふ)の卵なりといふ、岩或は流れ木などに、卵を生みつけおくを取りて、海ほゝづきと呼びて、小女口に含み鳴らすもの也、其色黄なるを、梅酢をもて、是を染赤色となすなり、江戸へは安房國より出す」とあり。これ甲蟹の卵と思へる誤りなり。されども、其實は、辛螺類の卵なりといふ。「嬉遊笑覽」には「海ほゝづきは、蓼螺(長にし)の卵なり。其介は形王螺より大にして長し。肉は紅螺に似たり。膓辛辣なる故に、辛にしと云ふ。又夜なきともいふは、小兒夜啼の

呪に用るよし、本朝食鑑に見ゆ。海ほゝづきは、江戸近國の産は形小し、大なるは加賀能登より來れるなり。長刀ほゝづきといへるものは、紅螺の卵なりといへり。この說從べきなり。海ほゝづきの、房の如くに、十も二十も連り着けるを見れば、螺類の卵たるとも明に知らるゝなり。市內にて賣るものは、大坂より仕入るゝものにて、この物專門の問屋といふものもあるとか、聞きたりしが、今、明に記臆せず。

植物性酸漿は、一年種子を蒔けば、其舊根より、每春芽を出す、所謂宿根草にて、高さは二三尺に滿たず、葉は、粗き刻みある楕圓形にて、夏日、牽牛子の如き盞形の花を開き、其實は下に垂れ外皮は五角にて、熟すれば紅色となり、殼さけて紅珠を露はす。東京の外には、豐後の平家山、河州の茨田郡、ともに名ありといふ。千なり酸漿といふは、其實甚だ小さく、數多く簇り結ぶ一種にて、色は綠なるものなり。いぬ酸漿とて、鉢に植えて賞翫するものあれども、こは、全く別種の龍葵といふものにて、其實は南天に似、外殼を有せざるものなり。

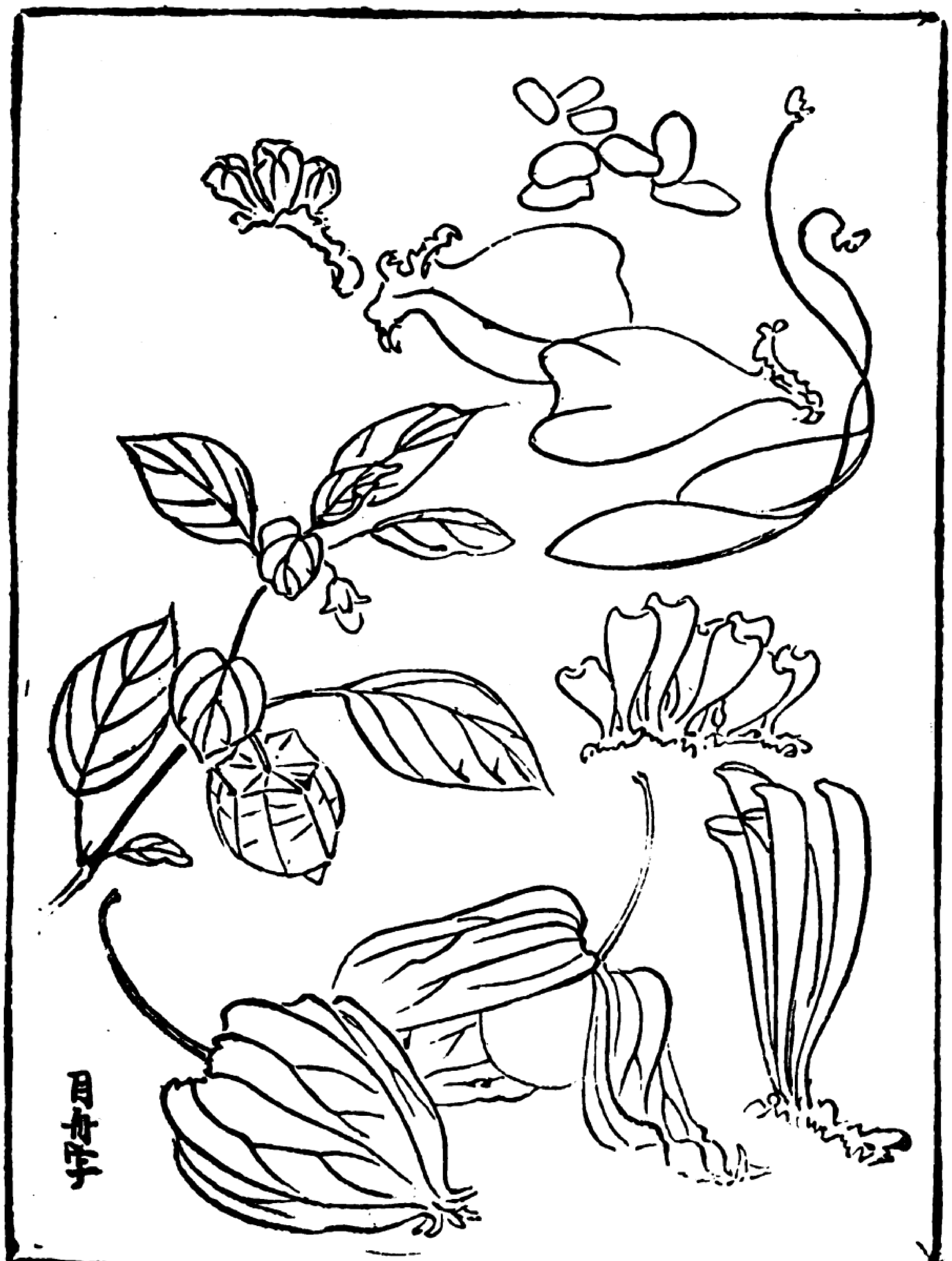
「古事記」の大蛇の眼をいふ文に、酸漿子の如しとありしやうに覺えしが、今日、山かゞちといふ蛇あるは、其眼光酸漿の實の紅り映り匂ふに同じければの名ならんか。近松門左の戲曲中に口惜しき折の男泣をたとへて、「酸漿の如き血の淚をほろ〳〵とこぼしてけり」などあるは、さすがは門左の筆なりと想はるゝなり。

又、今日、市中に見る所の酸漿提燈といふものは、正圓にして紅きが、酸漿の實に似たればの名なるべきは勿論にて、鬼灯の二字をほゝづきと訓するも亦、其實に因めるものなるが、酸漿の異名に燈籠草の名あるは、其外殼の狀より得たるものなるべし。「本草綱目」に、「其花盃狀の如く、無瓣にして五尖有り、一鈴を結ぶ、殼凡て五稜なり、一枝に一顆、下に懸りて燈籠の形の如し」とあるこれなり。

少女が、口に含みて吹き鳴らすものに、酸漿の外種々あり。枸杞の芽の出て初めしころ、其莖を五分ばかりに切り心をつきぬきて管狀と爲し、吹き鳴らすとあり

又、枸杞の實、蠶豆などの、中を去りて吹き鳴らすとあり。其他、車前草の葉の如きは、糸にて一處を括り、酸漿の如く吹き鳴らすといふがこれは未だ實見せず。

「日次紀事」の八朔の條に「今日、兒童、戯れに、松笠を以て雛鳥を造り、或は烏賊魚の甲を以て鸞鳳を作り、或は糸絮を以て金灯籠草の實を括りて瓢の形と作す。



是等の類、自ら之を玩び、或は互に相贈る、之を頼合と謂ふ」とあり。今日にても、酸漿の實を集め、圓く結ひて花輪の如くするを見るよあれども、八朔の節事は廢りたれば、相贈るの事は聞かず。

さて、酸漿を口に含みて吹き鳴らす戯れは、何時の代より始れるものにや。其原始は詳かならされども、「榮花物語」（初

花）上東門院の御事と申す條に、「御色白くうるはしうほゝづきなどを吹き膨らめて、するたらんやうにぞ見えさせ給ふ」とあるは、容顔の麗しきを、酸漿に見立てたる文なれども、當時吹き膨らめる遊のありしかば、かく言へるなるべし。又「源氏物語」（野分）玉鬘の様をいへる處に、ほゝづきとか言ふめる様に、ふくらかにて、髪のかゝれるひま〳〵美う覺ゆ」とあり。これ等を證として、當時、酸漿を吹き玩びしものとする時は、凡そ九百年に近き風俗といふを得べきなり。

山は鱠鬼灯の日を出されたり。　洛陽集

鬼灯や穴に音を鳴蟲くひ齒。　同

枝ながら吹鬼灯や風の口。　懐子

鬼灯も吹口ひるも紅染か　同

金燈籠　詠物詩

齊案不レ勞レ照、金燈含二赤珠一、凋傷初見レ賞、誰復戯二藥枯一、

麝香の話

藥劑師　清水　水

近頃はヤン「ホワイト、ロサイ」の、ヤレ「ヴアイチレット」のと頻りに諸種の香油が澤山出來て實に數限りもないほどであるが、昔しは薰香料として貴ばれた者は、殆んど蘭麝丁子の他には無い位であつた、其中でも麝香の如きは上古の時代より今日に至るまで、貴婦人方や令孃方に親まれて嘗て倦かれたとのない香料であるから麝香の談を一ツ通俗的に述べて見やう、麝香は昔は醫藥としても、中々盛に稱用せられた者て、殊に中世期の頃に至りて、亞剌比亞の醫師が、其應用の道を開いてよりは興奮、鎭痙等の目的を以て喘息、痙咳、虚脫、ヘステリー等に稱用せらるゝ様になつた、興奮劑としては昔時は、中々重要な藥品となつて居つて、此興奮力に依つて、一旦死んだ人間を蘇生せしめて、遺言を全ふせしむる等、是非なければならぬ者てあつたのてあるか、近時化學進歩の賜は、是等を靈藥とするとは出來なくなつた、て今は麝香も醫藥と云ふよりは寧ろ香具料てあ

る、而かして其麝香と云ふ者は一體どんな者であるかと云ふに、支那西部、西藏及び西伯利亞に連亘する山嶽殊にヒマラヤの山嶺等に棲息する、反芻雙蹄族の、角の無き鹿に似寄つて居る麝と稱する牡獸の、臍と陰莖の間にある麝嚢と云ふ者の中に含まれて居る分泌物で、其麝嚢の重量は一匁位から二三匁位である、併し此麝の香氣を以て居るものは、只に此麝獸の麝嚢ばかりではないので、玄參科植物のシヤコウミゾホウヅキとか、唇形科植物のホトケ、ノザ、及び錦葵科、風露草科等に於ても、間々發見することがある、それから重に亞細亞北部の河川に棲息する、海狸科の獸類の嚢狀分泌物中に含まれて居る、カストレウム或は海狸香と稱する者がある、市場に於ては加奈陀產と西伯利亞產との二種があつて西伯利亞產の如きは中々善良の香氣を以て居る、又靈猫香と云つて、ギニア、ゼネガル等の地方に棲んで居る一種の猫の、分泌器より採集した麝香に類する者もある、また此他に麞と云ふ獸類がある、此獸類の分泌器中にも、極て能く麝香に類した、香氣を有する者を蓄へてある、市中に於て白毛麝香、能呂毛麝香、土麝香、シベリア麝香、カベルヂニア麝香、などゝ稱して販賣する者は、皆この麞と云ふ獸類より採集したものであつて、其白毛麝香と云ふのは、麝嚢に白毛が密生して居るからで、能呂毛麝香と云ふのは、此麞のことを朝鮮語で能呂と云ふからなのである、其の他シベリア麝香と云ひ、ベルヂニア麝香と云ふが如きは、多く產地の名を附した者で、必竟同一物に外ならないのである、麞と云ふ獸類は本邦に於てはクヂカと稱へて、本草綱目啓蒙に依ると、水戶公は嘗つて此種を朝鮮に得て、常州の山中に放養したことがあるそうである、又眞正の麝獸より採集した者でも、雲南麝香、本口麝香、薄皮麝香等の種別がある、此外にも、くゝり玉、べと、など、稱する品種があるけれども、最良の麝香と云へば、雲南產の右に出づる者はない夫れて、麝香と云へば必ず雲南麝香と云つて販賣して居る樣であるが、其實雲南麝香の善良な者を其儘で販賣して居ることは殆んどない位で、多くは本口、薄皮、白毛等の混和物で、中には酸化鉛、砂、鐵粉、樹脂、銀

朱及び動物の皮膜等を混入したものがある、雲南麝香は高價な者であるから、一匁の內に一分の混物をしても、八九十錢も直段が違ふ樣になる、夫れに素人では中々之を見別るヿは出來ないから、到底之等の惡弊を矯むるヿは出來ない、イヤ素人ばかりでない、巧みに贋造した者になると、學者や熟練の商人でも往々欺かるゝヿがある、夫れて麝香の良否を鑑定するには、是非顯微鏡試驗、化學試驗、及び經驗等に依らねばならない、けれども何分高價な者であるから、一分か二分位買ふのには外觀、香氣、口味等に依るの外は、只信用ある藥舖より求むるの外致方はない、即ち良好の品は黑褐色不整の顆粒より成れる者で、黃色或は帶黃褐色の斑點を有して居つて、某少量を味ふて見ると苦味を感ずるのてある、麝香は久しく蓄へて置くと香氣が失せるヿがあるが、夫れは全く乾燥して來るからなので、水かすスハンかて、少しく濕氣を與ゆれば、再び元の香氣を放つ樣になる、又硫黃や樟腦の如きものに合へば直に香氣を失ふ者であるから、樟腦を入れた衣類の間には麝香を入れぬ樣に注意せねばならぬ

ダイヤモンドの話

◎金剛石は吾人人間が生活する世界に於て貴重と稱せらるゝもの〻中第一である其光澤の燦爛たる所謂金剛光にして甚しく屈折するの性あるもので實に言ふべからざるものてある彼支那にて有名なる趙氏連城の璧や和家の玉はいざ知らず我邦にては夜光の玉と稱へて之を貴んだは則ち此金剛石のことであつて只往古稀に印度より渡來せる佛像の眼目に之を箝入せるあるのは見聞するのみであつた其產地は今一般の說に依ると南米ブラヂル東印度ボルチオ阿弗利加喜望峯及び魯西亞墨國等であつた其價の貴重なると其もの〻得難いとの點からして明治初年以來我か日本に舶來したもの〻中には驚くべき程の者は少くない、只た一つ畏くも我國にて高貴の御方の御愛藏あらせる物は驚くへき高價のものである

◎金剛石の特質たるは云ふ迄もないが全く純炭素より

化合した結晶物てあるので其剛なることは他に比較すべきものがないがさりとて性質は脆きものである即ち硬度は十度て比重は三、五又は三、四てある他の金屬に比べては輕い方て之を摩擦すると積極電氣を起し又た之を烈火の下へ入れるも毫も溶解することがない瓦斯を以てするも電氣を以てするも矢張り其形狀を害さない又た總て酸類及び亞爾加里にも感化することがないが唯た酸素ばかりを以て之を燃けば炭酸瓦斯となるのてある

◎今各國に於いて之を用ゆるは專ら帽子の飾や又は時計の中或は釦指輪等に嵌入する又た炭酸瓦斯となつた上は細紛砂のやうなものは物を琢くに用ゐ或は稜角あるものは陶磁器や寶石類を鑽截するに用ゆる而して金剛石は如何なる有樣にて見出され得るかと云ふに大抵は個々の鑛石等に存在し又は河底の沙中に產するものて其鑛石等に存するものは外部に必一ヶ所或は二ヶ所若くは數ヶ所の空氣孔があつて內部の空隙に通するものてある其包被石即ち鑛石も亦た頗る堅剛である、そして河底から出るものは間々露躰の儘て現出することもある此等は積年の久しき急流の爲め岩石に破碎かれたものであるだろう又た其形狀は完全八面躰若くは錐形八面躰て或は十二面形のもある其色は白色透明水の如くなるものは第一等として黃色や紅色や藍色や褐黑色や黑色等あるものは品位皆下るものてある唯た紅色は二等であるさうな

◎我邦鑛物學者の說て見ると我日本には金剛石を產出しないと明言して居る者もあるが現に記臆する所では肥後白川紀伊名草川陸奧弘前川等て拾ひ得た者がある又た東京神田橋外て拾つた者もある和歌山の古道具屋て堀出した者もあつた夫れ是れて少なからぬ利益を得た者も往々耳にしたことがある其他古佛像の眼より抜取つて賣拂つたこともある此等の點から推察すると全く我國に產出しないとは云はれない

◎曾て內務省御雇てあつた西洋人某か公用巡回の序に拾つたのを見たが彼は非常に秘して其場所を明白なかつたが思ふに多分肥後白川であつたろう又た或る熊

本縣人は飛彈白川の上流に金剛石のあることを信じて數年間之が探究に從事したが惜いことには遂に其志を遂げずに死んで仕舞つた又た北海道を探究して種々の奇石を拾つた人がある予は此等の人が雄然として探究に從事した志に服するので唯た其結果のないを悲しむのである併し我邦內にも必ず產出するものであると云ふことは信認する者であるされば金剛石は最初天然物を見た時は案外の粗璞に見られ往々誤認さるゝことがあるさうだ

◎終に臨んで一言したきは碌々都會に逸居し徒らに埒もなき事に貴重の光陰を費消するなどよりは奮然蹶起深山幽谷を探險するならば其人自身の幸福のみに止らす或は進んで我邦の新富源を現出するに至るであらう世人幸に玆に注意されたいものて（某鑛業家の談話）

挿花漫言

近藤格齋

〇〇夜の花　朝日に匂ふ山櫻は素より高崇の景致であるが「月移花影上欄干」よるの花の美は又格別である、何處となく優しく大人しやかな趣がある樣に思はるゝ、夜目、遠目、傘の內、物はあらはに見たるよりも、おぼろげに眺めたるが却てめでたきもので、それは山の端の花や庭上の花計りではなく床の間、棚の上の挿花も凡て同樣である、紅白挿し交へたる花が夜燭に照らされて、置露のきら〳〵として或は紅に或は紫に或は青く或は琉璃色に金剛石も及ばぬ麗はしき光彩を放つ風情はえも謂はれぬ、牡丹海棠黃白の菊などは特更に夜がうるはしく思ふ、然るに世の挿花者流や喫茶家は夜の花を嫌ふ、それは夜間は草木が炭素を吐くとか云ふ樣な六しき理由があるでもなく只々花の影が麗はしくないと云ふ至極簡畧な理由であるが若し疎影横斜淸瘦鐵に似たる梅花の影などが床の壁上に縱横自在の墨畫一幅を描出したる情趣は比類なき面白味がある、然しそれは何流とか何派とか云ふ流儀張つた挿花てはとても其風情は知られぬ、或は夫れが爲にこの極美の情趣を會せぬのかも知れぬ。

挿花の極美　夜の花には夜の花の風情あり朝の花には朝の花の面白味あり各〻特殊の妙趣があつて決して何れ劣れりと申すことは出來ぬが、取分け通じて麗はしき挿花の美は挿し揚げて打水したる秒時の樣で、それは四季の花何れも同してあるが分けて春夏の交の花は殊更に然か覺ゆる内にも又木の花よりも草の花は一層然樣に思はるゝ、燕子花を廣口の水盤などに挿み、或は山吹などを壁釘にかけたる竹籠などに挿みたるが溶金色の花を掩ふ嫩緑の葉末より滴る露のほと〳〵と青疊の上に落ちて聲ある、その風姿の極美なる樣はとても畫にも筆ても盡さるゝものでは無からう。

世の挿花者流は水揚と稱へて一つの花を三日も四日も挿みて萎れざるを誇るがあれども、それは挿花の美と申すことを會せ輩の業である、たとへ花の萎れざるとも日を經たる折花に何の見所があるか挿花は客を招ずる前に挿し揚げて客去れば撤し去りてゆめ〳〵水揚の法など傳へ習はんなど思ふまじき事てある。池坊小野氏は代々挿花を以て宮廷に仕へ殊に專定と云へる中世の宗匠は斯道の巧手て其の挿む所の瓶花は少しも人爲の格法を以て規束するが如きとなく、一見殆んど自然のまゝの如くなりとの曾て某縉紳が水揚の法を問はれし時に我家には別に水揚の傳と申すものこれ無く花を其まゝに挿む計りにて候、然りながら花若し萎るれば幾度にても挿し代るを以て法とすと答へられしとか、これは實に面白い答へてある、この心を以て挿むが故に其の瓶花までが淡然無爲の極妙所に達することが得らるるのであらう。

挿花の多少　花は多く挿みたりとて必ずしも美はしきものとは申されぬ、黄紫白の草花を瓶中に滿挿したるも美しからぬにはあらねども、古銅若は白南京燒の小花瓶に秋海棠か撫子を一枝さしたる閑寂の風情は却て彼のこて〳〵と種々の草花を挿し交へたるより立優つて見ゆるもので古人の濃は淡の淸趣多きに如かずとは、この風情を云ひ顯す爲めに出來た語てあるかの如くに思はるゝ、然し一枝の木や一莖の花を挿して他の濃艶的饒多の挿花を壓すると云ふは餘程の巧手てなく

ては及ばぬ所であらう。

押しなべて申さば　春の花は多く挿したるか趣があり秋の花は少なく挿みたる所に妙味がある、然し春の花が必しも少くては趣がないと申すのではない、彼の青磁瓶に牡丹花の一輪挿、しかも茎短く無造作に挿し入れたる優揚の趣は丁度浴後の美人を見る樣で格別に麗はしく見ゆる

青楓と七夕の花○○○○○　青楓は挿まぬものと或る流派では掟てあるそれは、楓は素と紅い深く染めたるをこそ愛づるものなれ青楓は賞玩の季て無いとの理由があるとか近頃岐阜の誓願精舎に七夕會とて二星手向の挿花會を催されたが、席上雲井と銘ある二重切の上に青楓の枝たわゝなるを挿し下に床夏一二茎を極めて無作意に入れたるを見たが、青楓が打水にぬれて、風の爲めに葉末の微動する所、床夏の露重げに見ゆるなど誠に面白く感じた、然し青楓を挿まぬと云ふ掟には背くがと思ひながら傍を見ると花臺の上に

　あまの川もみちを橋に渡せはや
　　たなはたつめの待ち渡るらむ

と云ふ古歌が短冊に書て載せてある、始めて青楓も七夕會に限りては挿みても搆はぬものであると思ひました。

木のみは挿むものでなく○○○○○○○○○　もし松杉の如き花なきものを挿む時は根〻に花あるものを配するを規則とするに、薫り菖蒲と稱て五月端午の日に限りては菖蒲とよもぎの二種とも花なき草を挿むこともあるとかかた〳〵この青楓も殊更に面白く感じたこれは或は當坐の風流かも知らぬが却て法則に拘はらぬ所に風情はあるものである



婦人と職業

婦女子の内職

職業に據ては春夏秋冬の四季を異にして居る、其の期節に準じて物品を製造するのであるから、之等の職工に使役されつゝある下職、則ち婦女子の内職と稱する側まで、自然と期節に關係を及ぼして來る、まづ秋季の内職として、襯衣と莫大小を述べん

襯衣の縫工

○職工の組合　襯衣専門の裁縫師は市内に百六十餘軒あつて、問屋に對し裁縫料に高低のないやう、先頃仲間が集會して組合を組織しました、其の事務所は下谷坂町に設け、襯衣下裁縫職組合と稱してあります、此組合員の裁縫料は一定して居るから下職則ち縫工、之を俗に縫子と稱する、其の縫子の賃銭まで規定して居る、之等の裁縫師と縫子の棲息の所在は、日本橋、淺草、神田、下谷、本所、深川の六區で、本所、深川が其の職工等の過半數を占めて居る、

○縫子の仕事　裁縫師の仕事は先づ裁、火熨斗、仕揚踏彌針の四種で、他は下職の手になる、其の縫子の仕事と云ふのは、手彌針、手縫、穴縢りて、之等の縫子を抱えて襯衣の下縫を、熾んに出す裁縫師は

△日本橋區橘町濱口△淺草區西鳥越町淺岡。小島町畔柳。山の宿町川島△神田區久右衛門町蘆部△本所區松井町三丁目若下。緑町五丁目藥師寺。松代町澤井△深川區西森下町井筒。八名川町大塚。東六間堀結束

以上は、所謂襯衣下裁縫職組合中で、屈指の裁縫師である先づ一軒の裁縫師に對して、縫子の二十名位宛は抱えて居る普通の裁縫師でも四五名の縫子を有す斯う云ふ按排に縫子を蓄て置ねば、仕事が繁忙な時分に問屋の間を欠くので、縫子を手離さないやうにして居る、

◎襯衣と洋袴　組合を襯袴下で組織はしてあるが、實際襯衣と洋袴下とは別になつて居る、洋袴下の裁縫師を俗に下屋、また股引屋と稱ふ、仕入股引の裁縫師は洋袴下を兼業する故洋袴下に就ては襯衣の縫子と

關係がない

◎襯衣の名稱　　襯衣にも大中小の種類がある、先づ小兒物が『尺三』『尺五』『尺七』の三種で、夫から『相形』『並物』『並大』『別大』『極大』『無頭』と云ふ順序になります、小物を省いたら跡は大物と中裁ですが、其の裁縫料も問屋に對つては、多少の差があらう、が、縫子に對しては別に差がない、縫子の側では大小を問ないで上物並物と云つて居る、並物は一本糸で縫、上物は二本糸で縫ふ、其の賃錢も一本縫、二本縫で差がある、二本縫が一打で八錢、一本縫は二本縫から見ると、一打で五厘宛減じると云ふ話してす、之は縫子が下縫の仕揚相場であります、

◎彌針の仕事　　縫子が襯衣一枚を手彌針で仕揚るまでは、隨分と手數を要する、その部類を分ますと恁うてある△カブラ附　　襯衣の手首でカフ裏を附るのだからカフ裏附と云つたのを、何時か云ひ誤つたと云ふ話し△袖縫。袖附。此縫樣は讀んで文字の如く、襯衣の袖縫と胴裏へ袖を縫附るのである△据巻き　　襯衣の据を折返すのだが、手彌針に附屬してある器械で卷くのです△襟附　　胴へ襟を縫ふのである△見返し　　俗に立前と云つて、襯衣の鈕裏の裂を胴へ附るのだらうな、之だけの手數を要して漸やく、襯衣一枚の下縫が成効するのだが、裁縫師の手都合で、其の一部分を縫子へ廻す事が往々あります

◎部類の賃錢　　之とても一打に就ての標準價格がある、先づカプラ附が一錢五厘、袖縫と袖附が合して五錢据巻きが一錢三厘、見返しが五厘、襟附が一錢乃至一錢五厘で、孰れも二本縫の上物相場である、一枚の全體を仕揚るよりは、多少價格に相違があつて割の可いやうですが、偖て其の一部分だけの仕事では、手の隙時もあるから、仍り縫子の方で割に合ないのです。

◎縫子一人前　　の腕としてあるのは、夜業をかけて上物襯衣を五打仕揚るのであるが、之を仕揚るには餘程の機敏を要する、普通縫子の仕事としたら、晝夜で三打半がまづ勉強した處だらうです、乃て其の賃錢の收入も敏腕家で四十錢、普通の縫子で三十錢内外ですか

ら、女工の日給としたら割の可い方であるが、併し最初からは匆々に恁うはゆかない、修業中には無給で勞働をしなければならない

◎縫子の卒業　之まで三ヶ月間も手辨當て、下縫の稽古に通つたものだが、縫子の方でも狡猾になつて來たから、三月は措置いて二月も耐忍をしない、彌針が些し動いて來たらば他の裁縫師の許の縫子となるので折角教授したとて虻蜂とらすだから、裁縫師の方でも如才なく縫子に逃げられぬ方針をとり、目下では其の修業期を縮め、僅に一ヶ月を勤めたら卒業させ、直ぐ翌月から若干宛の賃錢が、得られる事にしてあるか、前記のやうに四十錢の日給を得る迄は、練磨に練磨を積むのだから、尠くも三ヶ年間の時日を要するのだ、また內職としての賃錢では、收入の多い側であらうが、其の割合に縫子が殖ないと云ふ話しで

◎彌針の購求　縫子となつて縫裁師から下縫を受る日には、彌針の必要を感じる、乃て購求するとしたら、アジ彌針の新臺て八圓、中古物でも四五圓、內職をする者に斯んな餘裕はないので、其の彌針を、裁縫師の方で貸のです、損料は一ヶ月に五十錢內外、襯衣の縫習ひの縫子であつたら、自辨する縫糸と彌針の損料で、收入の賃錢は唯になるから、誰も酒落に內職をして居る者はないので、中途で他の內職へ業を轉ずる者が多いとの事です

◎穴屋と手縫　穴屋とは斯道の略語で、實際は穴縢りと云ふのださうな、此穴縢りの仕事と云つたら仕揚をした襯衣へ、鈕附と其の鈕の穴を糸で縢るのである、が、單に鈕のみでない袖口留、脇下留、隱し留などゝ云つて、要部を木綿糸で縢るのである、其の縢り賃と云たら一打に就き、八錢乃至六錢と云ふ相場だ、が、穴屋の方は縫子と違つて、縫針一本あつたら賃錢を得られるので、勢ひ縫子よりは穴屋が多い、

◎穴屋の收入　穴縢りの方も熟練をしたら、一日三打は急度仕揚るさうな、穴縢りの上物は一打で七錢內外だから、三打として二十一錢の收入がある、無資本て割が可いから穴屋が殖るばかりで、之が爲めに仕事の

隙ことがある、乃て穴屋は多く手縫を兼業するのだ、手縫と云ふ女工の側は、俗にまつり附と稱し、襯衣の襟、カラを其の部分へ組附るのである、此職は別製物の外にはないから、仕事のてるのも他の下職のやうに多くありません。

莫大小の事

◎莫大小女工　綿ネルとは違つて、其の仕事の區域が廣いから、從つて內職の種類が複雜して居る、夫を內譯したら、襯衣、猿股、手袋、靴下の四種類である、職工の方にも彌針屋、縢り屋、仕揚屋と分けてあつて綿ネルの方とは違ひ、織元や卸問屋から直接に仕事が出るのですが、其の下職も綿ネルと同じく、本所、深川の兩區に多く棲息して居る、また彼等へ內職を出す處の、莫大小の卸商と織元てあるが、市內に五十餘軒程もあると云ふ、夫に日本莫大小會社、東京莫大小會社、堀川工場、齋藤工場の四大工場がある、

◎彌針の仕事　綿ネルの縫手から見ると修業に時日を要し、莫大小の襯衣を縫ふやうになる迄は、一ヶ年間の年季を入れねば、織元や問屋から仕事を受取る事ができません、其の彌針も本彌針、フシ彌針、穴縢り器械飾り彌針を用ゐる、總てが恁う云ふ按排に器械を使用するのだから、綿ネルのやうに仕事が容易てありません、

◎襯衣と猿股　當時縫子が着手して居る仕事は、冬襯衣の裏毛物だが其の賃錢は、穴縢り付きで一打廿五錢、綿ネルに對しては高價のやうに聞えるが、汗水を垂して一日稼いた所で、漸く一打半を揚る位ゐなものですから、收入の點に就いては綿ネルと大差はない、併し綿ネルのやうに品物が嵩張らないから、年季が永のにも拘はらず、莫大小の縫手になる者が多い、猿股は本掛けが一打六錢て普通物が、五錢一日の仕事が、敏腕家て縫揚り五打位な事だ

◎手袋と靴下　手袋の彌針仕事は、縢り彌針を使用して手袋の飾りを縫のてす、之が一本飾りで一打十一錢二本飾りて、十二錢、結局一錢の差があるまでだが、

一人職が、二打位るとしてある、夫から靴下の側で生のぺと云ふのがある、之は重に軍人や警官の需用品で、多く諸官省へ納になる品、此生のべにも口のぺと並のべがある、並のべとは靴下の片口で、口のべとは兩口を縫ふのである、口のべと並のべとは、殆んど仕事が中途違ふ、乃て賃錢にも差があつて、口のべが百足十一錢なら並のべは其の半額の五錢五厘か六錢だが、夫て、口のべの仕揚が一日に三百足内外、並のべは之の倍と見るべし、

◎海軍用靴下　之は生のべのやうな毛品ではなく、靴下の踵の所を彌針て縫ふ、此海軍用と稱する靴下は生のべよりは、賃錢もハルカに可いので先づ百足二十五錢内外之とても、仕揚て賃錢を得る時は、生のべと大差がなく、終日働いて三十錢位

◎縢り屋の職　莫大小の縢り屋は、高等内職で、此縫子の側は重に官吏の細君が多いゆゑ、縢りの方は小石川本郷邊へ出す、其の仕事と云ふは手袋と靴下、二種ともにスコーチと毛糸てあるから、座敷の裡て內職としてよし、

◎大宮が本場　莫大小縢りの女工は、武州大宮驛が本場としてある、同所の日本鐵道會社の工夫や驛員の妻女が、靴下や手袋の縢りを内職にして居る、然は卸問屋から態々と汽車便で、大宮驛まで莫大小の生地を贈るのだが、毎日百打以上の仕事が仕揚がるので、莫大小商仲間では大宮驛を一大工場のやうに思つて居る、

◎縢りの賃錢　靴下では改良アゼ織四錢五厘、平織が口附とともに十錢、手袋は軍人メン手袋で八錢五厘、毛糸で九錢、夫からスコーチなら二割増としてある、以上は孰れも一打の賃錢て、普通の手腕て一日の仕事が二打以内、縢るには莫大小の小口の友糸を解き、夫て縢つて行くのだから彌針屋のやうに、糸代だの器械の代價が入らないので、莫大小では縢り屋の側が、彌針屋と比格をしたら多いと云ふ事、

◎仕揚屋の話　莫大小の仕揚は縫揚つた品物を、火熨斗て仕揚るのだが、其の相場は襯衣が一打十五錢、猿股が一打八錢、靴下百足三十五錢て毛糸とスコーチ



物てあつたら、百足に就て四十錢、内外であらう手袋はメン物で十打二十五錢、毛糸物で三十五錢ではあるが、仕揚屋は火熨斗で焚棄る炭代に。賃錢高の二割は消滅して終ふのである、

◎日給五十錢　莫大小の内職では、仕揚屋が一番割が可い先づ轆轤器械を一臺据附てあつたらば、毎日五十錢の所得は欠さない、此轆轤で仕揚るのは重に軍人手袋だが、器械を回轉する働力に耐得られたら、十打廿五錢の手袋が廿打は容易に仕揚る、之を二人掛りの仕事としたら、一日一圓二卅錢の所得になると云ふ事だ

才媛詞藻

落合直文先生選

〔天〕雁

故郷に似たる景色の村過ぎて
おもひいて多しあまつかりがね

横濱市　長谷川さく子

〔地〕山家秋

粟の穂の黄ばみそめにし西谷に
小鳥むれ居て日はなゝめなり

伊勢　柴田雅子

〔人〕仝

我が庵は深山の奥の一つ家
紅葉に明けて紅葉に暮れぬ

東京　山田清

〔秀逸〕（山家秋、雁、寺）

馬子のつらはなれ〳〵に行く見えて日の暮れかゝる秋の山里

東京　上山春榮

捨てし兒をまた抱きあげて歸り行く橋を斜に雁鳴き渡る

大阪　小野雅子

國を出でゝ六たびむかへぬゆくかりを去年はかしこに今年はこゝに

相模　大村とみ子

雁一つ落ち行く方に月入りてあけの鐘なる江の北の里

伊勢　石澤あき子

あはれ知る人にとはれし思ひして雁を見おくる秋の夕ぐれ

東京　下村ふみ子

はつせ寺飛石さびし廣庭に白き小鳩のふたつおりきぬ

河内　鶴白百合

一束のかれし樒のあかたなにのこるもさびしみねの古寺

岩代　金子春子

苫はねてふりさけ見れば大海原雁一行の南（ミンナミ）へとぶ

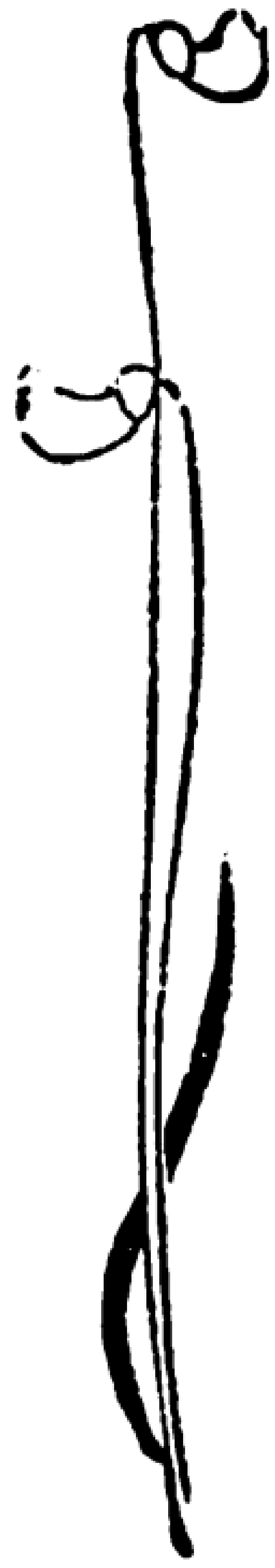
陸奥　角鹿清子

鳥のものとりあらされて今日もまた猪狩りくらすふもと七むら

信濃　竹鼻春子

雨ふくむ雲につらなる關山のかなたわたるは雁にあらずや

仙臺　町田周子



佳調

雁　和歌山　しらつゆ

ぬばたまの淀の夜舟の夢のうちにほのかに聞きつはつかりの聲

雁　河内　大矢勇尾子

なくこゑに夕霧うすれ〳〵ゆきておちはにみゆるかりの一つら

寺　麹町區　神谷よし子

七ふしぎありと傳ふる古寺の落葉の上に小雨ふるなり

雁　河内　大矢たれ子

さかになれかぎになれよと呼ひ志子の行へやいつこ初雁のこゑ

雁　大和五條　木村よし子

母はうせてさむしとおもふ夕くれに涙そへゆくはつ雁の聲

秋山家　伊勢　阿部文子

秋の日の影うすらきて山里の色づく柿に鳥とまれり

雁　伊勢　廣幡みさを

獵人にこゝろおくらむ年々に後れかちなる初雁の聲

雁　名古屋　彩鶴女史

砧の手な止めて月による夕まくれあま雲低う雁鳴きわたる

雁　河内　櫻井碧子

月影に露營の幕のほの見えて西比利亞の野は只かりの聲

寺　下總　三田はや

一本の柳にしろき古寺の夜風秋風鐘なりわたる

寺　弘前　今ちか

橡の實のまたもこぼるゝ音すなり小雨に暮るゝ山寺の庭

雁　徳島　淺田勝子

春の花見捨てゝいにし雁がねは月に來なけどせこはかへらず

山家秋　伊賀　村尾尚子

遠くともひとたび來ませ山づとに栗も拾はむ猪も狩りなむ

山家秋　神田　柴田久子

牛の聲高く聞えて窓よりみる〳〵くるゝ秋の山さと

雁　越後　坪井わか子

旅にやむ吾子のおとつれ待わびてねられぬ夜中を雁なきわたる

大阪　重村政子

かりかねのわたれるさまもさやかなり大空高く月清うして

雁　越後　小林しづね

さらはとて秋わかちし村はづれ南にいそぐ雁の聲きく

雁　長門　佐倉みれ子

夕暮の鐘のひゞきと消えて行く雁の行へを眺めつるかな

雁　伊勢　河原芳子

海樓に明日の旅路を思ひやりて母と語る夜雁なき渡る

雁　備前　木村榮

暮の空君が御船の見えずなりて川面さむく雁なき渡る

山家秋　名古屋　鷲尾米子

栗やくと子らもつどひて山里のほた火にきはふ秋の夕暮

山家秋　三重　柿本とみ子

茶の花に夕日影さす山畑の小屋の窓蜂出てゝ又入る

寺　廣島市　和知廣子

空高く榎そびゆる古寺の夕べの鐘に小雨そほふる

寺　埼玉　林若葉

折り／＼は夜鳥なきてふる寺の高塔の上に月かたぶきぬ

雁　長崎市　力久すみ

草に入る日を見かへりて野路に立つ御僧やせたり雁の一聲

寺　伊豫　石川君子

朝清めはらひきよめし寺の庭にはぎ白うさきて人かげもなし

雁　大阪市　井上良女

添乳せしち子のふしどをそといでゝ砧うつゆふべ雁なきわたる

寺　東京　佐々木和子

軒くちてとふ人もなき山寺の蜘蛛のいがきに月さやかなり

寺　四谷　渡邊しき

役僧の經よむ聲も打絶えてゆふべ淋しきみれの山寺

寺　伊勢　森本靜子

ものゝけの出るときゝし山寺の森の古杉梟のなく

山家秋　大阪　辰巳季子

このあした谷間の清水くみにきて紅葉のにしき見いでつるかな

雁　岡山市　林美都子

秋の神のみはけになりし夕ばえの空高く飛ぶ雁のひとつら

寺　京都　山崎きくゑ

讀經の聲きこゆるは何の寺塔に二十日の月落ちかゝる

山家秋　岐阜市　天野榮子

蕎麥の花咲けるかなたに庵見えて夕日靜けき秋の山里

寺　佐賀　橋口靜子

國分寺の跡ときゝにし破寺の仁王にあたる木枯の風

雁　神田　千鶴子

うぶすなの御前の銀杏色つきてさむき夕へを雁なきわたる

雁　伊勢　植木靜子

磯の邊に吾背の舟を待ちをれば沖の彼方に雁鳴き渡る

雁　神戸市　今村竹子

ちゝはゝを遠く尋ぬる順禮の行手にさむく雁なきわたる

山家秋　河内　大矢たれ子

葛を挽くうすの音やみて唄やみて山里十月晝しづかなり

寺　神戸　杉田方、鶴子

姉君をそこに埋めし夕よりなつかしときく山寺の鐘

山家秋　長門　齋藤久米子

稻刈に大かた人は出て行きて藁屋のむれに雞のなく
雁　上州　飯田かつ子
秋風にさそはれ出て來し野への尾花かすゑを雁なきわたる
鴈　園　子
宵の君のかとてにとりしうつしゑにもの思ふ夜半を鴈なき渡る
山家秋　松山市　越智信子
つれうとき友もとひきぬいが栗の笑みてこぼるゝ我が山里に
山家秋　丹後　中島みつ
山里は花のいろ/\虫の聲あきとわれとの住家なりけり
寺　筑前　太田とも
雛僧の草子ほしたる山寺の茶の花しろく小鳥なくなり
寺　安房　和田きん子
木間よりかはらはみえてつゞらをりのぼれば遠き峰の古寺
雁　備前　ふま子
幼兒をふところにして門に立つをりしも過ぐるかりのひとつら
寺　遠州　佐塚秀世子
秋晴の稻穗の中を三人四人御寺詣での人ほのかなり
雁　備中　大西政代子
辻占を賣る聲絶えし橋の上の月影寒く雁鳴きわたる
雁　信濃　竹鼻はる子
夕日匂ふくもまに消えてまたみえて湖をよこぎる雁のひとつら
雁　大阪　三宅かれ子
遠く遠く海士のいさり火かげ消えてかりかれ寒し天草の灘
雁　東京　輿津らく子
うちわたす大海原に月さえて雁鳴き渡る沖つ島山

雁　備後　酒井まち子
黃昏れて僧を迎へのかへりみち行手の蘆間雁鳴き落ちぬ
山家秋　名古屋　富田重子
ひろふべき人もまれなる山里にあはれ數そふ庭の落栗
雁　東京　春山とし子
去年の秋友うしなひし我身には一しほかなし初かりの聲
秋山家　信州　今溝ふさゆき
ゑみ栗の軒ばに落つる音のして村雨寒し秋の山里
雁　長崎　古賀秀子
すゝき原吹く秋風に波立ちてなく聲さむし雁の一つら
雁　埼玉　田島梅子
思ひわび夕べ戸に寄るしばらくを雲の絶え絶え雁鳴き渡る
山家秋　東京　牧野照子
山里は軒の懸樋の音すみてをり/\聞ゆ棹鹿の聲
寺　群馬　金谷貞雄
今日もまたことなく聞きぬ老の身のあすかの寺の入相の鐘
雁　麴町　宮内俊子
いさぎよく訣れこし身もなく雁の聲にみかへるふるさとの空
山家秋　若狭　板橋つれ子
世に遠き杣が伏屋に宿りして夜すがら榾に栗の實やきぬ
雁　東京　吉野はる子
君におくる文かきをへし窓の邊をなきつれてゆくかりの一むれ
山家秋　長門　熊谷ふさ子
稻運ぶせこと歸りの曲りみち我が家は見えて駒の嘶く
寺　淡路　廣田芙蓉

白塀に並べる楓色深し日は斜なるみゐの古寺

雁　　三河　松崎芙登利

故郷を思ひ〱てねられぬに同じ思ひか雁も鳴くなり

山家秋　　大和　楠本ゑん子

栗の實の落ちそめしより我宿はかけひの水の聲そさえゆく

山家秋　　尾張　森みよの

夜もすからせとにおちくるさゝ栗の音さへさむしあきのやま里

寺　　河内　矢寺はぎ子

紅葉はのちりしく外にちりもなしうきよはなれし山寺の庭

雁　　弘前　今ちか子

母君のいたづきおもきまくらべに今宵さびしくかりの聲きく

雁　　長野　山崎綠子

大方のあはれさに添ふ哀かなみとりする夜の初雁の聲

寺　　對馬　古川辰子

枯柳淋しくたてる古寺の朽井のほとり夕日照るなり

山家秋　　群馬　明山川みづほ

なり〱は筧の水もとぎれきて淋しきひまを鹿の聲聞く

寺　　佐賀　中島ひで子

雁の羽かぜに萩の花ちりて靜しづかなり山寺の庭

雁　　越後　小林いく

ふるさとの母と語りて笑みし夢のさめたる夜半を雁なき渡る

山家秋　　小石川　白井りき子

風にちるこのはのほかのおともなし夕さびしき山の下いほ

雁　　弘前　平山溪川女

落ちてゆく荻原十里たそがれてみかへる月にかりなきわたる

雁　　弘前　中村露子

旅に病む窓の燈火靜かにて雨降る夜半を雁なき渡る

寺　　兵庫　森星子

かたむきて朽葉おもげの山寺に訪ふひともなく秋の雨ふる

寺　　秋田　梅田くに子

木魚の音もいつしか絕えはてゝ三日月さむし峰の古寺

雁　　弘前　平山溪川

年をへし松のこずゑに月ふけてとりてのあたり雁なきわたる

雁　　下總　寺本梅子

北の國に旅する人を思ひつゝ端居しければ雁なきわたる

雁　　千葉　關谷君子

初雁のこゑを聞きにしゆふべより物思ひする身とはなりにき

山家秋　　相州　谷口澤露

荷駄馬の鈴の音遠く日はくれて時雨ふるなり秋の山里

雁　　下總　小林まさ

君を送りて返らむとすれば三日月のほのめくかたに雁なきわたる

寺　　香川　月子

片われの月おちかゝる古寺の籔のしげみに梟のなく

雁　　伊勢　中島喜子

やまひあつき友がりとひて歸るさの夕の空に雁なきくかな

雁　　京都　琦婆

月よゝし夜よしと宿を立出ておもはす聞きぬ初かりのこゑ

雁　　沖島　照子

人とはぬ柴の庵の明かたに誰がことづけか雁の一こゑ

山家秋　　大阪　吉田曉

毬栗をいれし籠をば肩にして山路をいそぐうなゐこのむれ

雁　京都　四辻きよ子
仰きみればさても戀しき故郷のそらより來しよ雁のひとつら

寺　京都　鍛　恒子
わが背子の眠る古寺荒果てゝ松風寒く日は暮にけり

寺　下谷　白井すみ子
木魚の音今しやみたる尼寺の苔の廊庭木犀のちる

山家秋　本所　佐治勢以子
聞なれてすむ心にも淋しきはなほ山里の後のゆふかせ

寺　横濱　長谷川さく子
父母のつひの御たびの道筋をわれもたどりて寺まうでする

雁　本郷　玉香女史
なつかしき父母いますふるさとのたよりきかせよ天つかりかれ

寺　福島　諏訪美豆枝
月影も御法の聲もすみにけり松風さむき秋の山寺

雁　信州　山崎さこん子
日は落ちて霧の靄立ちまよふ入江越え行く雁の一つら

寺　大阪　中角政枝
ましらなく聲ものすごく夜は更けて椎の實おつる山寺の庭

山家秋　南葛飾　春山とし子
垣つゞきうら山あたりもみぢして夕くれおそし山里の庭

雁　津田　岸田ちゑ女
行きかひの船の烟に未消えぬ志賀の海わたる雁のひとつら

寺　埼玉　小森さく子
亡き親の位牌をさめてある寺の本堂くらしひる中にして

雁　河内　巽かつら
かたわれの月はかすかにすみ染の夕山かけて雁なき渡る

山家秋　神戸　柳田のぶ子
なり〳〵はなくさを庭の聲もしていとゞ淋しき秋の山里

寺　和歌山　郡　政子
くちはてゝ苔にうろほふ倒れ木のしたくゞり開山寺の道

山家秋　美作　安藤仙子
弟と手をひきあひてけふもまた樂しく遊ぶ栗の下蔭

寺　備後　酒井まち子
朱はげし塔のとびらに夕日さし山門あたり紅葉散るなり

寺　茨城　渡邊とみ子
木下やみひろものすごき山寺にあはれを添ふるみ讀經のこゑ

雁　茨城　渡邊とみ子
風あれて村雨すごきまよなかにいつこへ行くか雁のこゑ〳〵

山家秋　河内　大矢たれ子
いれ刈ると木こりも小田に出はてゝまひるさびしき深山への里

寺　名古屋　長谷川ちやう子
あすか寺あすをたのみてぬる人のゆめおどろかす鐘の音かな

雁　麹町　廣瀬歌子
かきならす琴の手やめて大ぞらをあふげばさびしかりの一聲

山家秋　佐賀市　齋藤むら
山里は今かくこそと文の中に紅葉の一葉封じやる哉

山家秋　大阪市　酒井みよ
栗ひろふ里のわらべよはやかへれ日くるゝ門に母やまつらむ

寺　小石川　關内きよ子

あれはてし堂にましらの聲はして住む人もなし峯の古寺

山家秋　人吉　山門早苗子

朝日かけみれの紅葉にさしながらきりたちこむる山かげの里

雁　京都　山崎きくゑ

今日の御狩さち多かれと送る月に雁なき過ぎてつま笑みましぬ

雁　河内　大矢勇尾子

山影のうつりてくらき夕川に遠くまたちかくかりのこゑする

雁　下谷　外岡花子

月更けし窓へに雁の聲きゝてすずろに戀し故郷の空

雁　磐城　内山勝子

背の君は今宵相模の灘ときゝ眺むる空をかり鳴き渡る

雁　福島　金澤梅子

ふる里の空なつかしみなかむればほのかにきこゆかりがれの聲

山家秋　福島　金澤梅子

村雨にちるもみぢ葉の音づれて夕さびしき谷の一つ家

寺　相模　白つゆ女

きよめする人もあらじな此頃は落葉ちりしく山寺の庭

雁　栃木　しき子

たらちれの母につげてよ此の里を今過ぐるよと空のかりがれ

山家秋　岐阜　天野榮子

なるこひく山田のあたり暮れそめてこゑもさびしく鴫の鳴くなり

雁　人吉　山田早苗子

失ひし友をゆめ見て物思ふまくらの上をかりなき渡る

雁　福岡　宇野某女

なかき夜のねさめの床に聞ゆなり雲路を渡る初雁の聲

山家秋　和歌山　西口楽子

とひ来ませかた山里の我が宿を笹栗ゑめり柿も見のれり

山家秋　加賀　杉本やす子

一日一日森の紅葉いろあせてみる目さびしき秋の山里

雁　作州　植田玄子

ふるさとにかへると見てし夢さめてまとの戸おせは雁の鳴くなり

雁　駿河　林すぎ子

旅枕ふるさとおもふまよ中に月かけさむく雁なき渡る

雁　牛込　青柳春江

ねざめして思はすわれは聞きにけり雲路を渡るかり金の聲

雁　埼玉　林若葉

城あとの一本松に月冴えてくまなき空をかりなき渡る

寺　鳥取　君野春子

大杳のかげうすぐれて百舌鳴きてかれの音淋し山の古寺

雁　加賀　松寺みとり子

つく〴〵と身のゆく末をおもひをれはつらにおくれし雁なき渡る

寺　信州　小林春子

鐘樓にかれつきさして何となくあきの夕を歌ありげなり

雁　東部　春子

背の君の病の床にさしぬべく菊なりなれは雁啼きわたる

雁　淡路　青木柳月

妹か奥津城あたり月落ちて雲間を渡る雁の一つら

寺　仙台　佐藤ふみ子

吹風に木の葉吹きちる山寺の鐘の音さひし秋の夕暮

女學世界懸賞和歌兼題

紅葉
神樂
煤拂

（〆切十一月十五日）

（披露十二月五日）

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

女學世界懸賞文

▲消息文（二十四字詰二十行限）

▲韻文（二十句限）

▲抒情文（二十四字詰四十行限）

▲叙事文（仝上）

◎〆切　十一月十日

◎披露　十二月五日

◎賞品　以上四種中より甲、乙、丙、を選び十二名に呈す

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一稿にして数葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

甲賞

露の命

茨城縣土浦本町　山口すみ子

吹く風靜かに、月冴え渡り、千草にすだく虫の音もをかしきまゝに、そことしもなうさまよひ出てぬ。いつしか夏も夢と過ぎ、木々の梢黄ばみて、ほろ〳〵と落つる木の葉にも、秋の哀れはいと深し。停車場を左に見て、小波よする小川の邊に出づ。蛙の聲は漸く繁くなりまさり、み空の月は下行く水に清き姿を寫せり水岸には、糸柳の解けつ縺れつ狂ひに狂ひて、吹きくる風の無情を怒るか、はた何事をか囁くか、はら〳〵と下葉は落ちて流るゝ水に漂ひ行く。遙か後の方を見やれば、微なる月の光にてらされて、明神の森は遠く黒雲の裡に夢よりも幽に見ゆ。猶川岸を傳うて行き行くに、何やらん行手にうづくまりゐるが如き黑き人影、怪しき思ひにたへて、傍近う進みよりしに、未だうら若き乙女の髪ふり亂し、吐く息さへも苦しげなる樣に、妾も只ならず胸騒ぎて、如何にし給ひしぞと、顏さし覗ぞけば、答へは

なくて、只潸々と打泣くのみ。

月はます／＼冴え渡りて、蛙の鳴く音一しきり亂れ聞えぬ。さてもいぶかしき人よ、今夜一夜を月に泣き、風に咽びて、置露繁き野邊に悶えつゝ明す心にや。戀に惱みてか、浮世の運命の辛らきに泣きてか、よしや若き血潮のそが胸に騷ぐとも、哀れ風にもえたへまじき弱げなる己が身をかへり見ざるか、と他事ならず氣づかはるゝまゝ、猶も重ねて尋ね問へば、あふり落つる涙拭ひもあへず、漸々に語り出ぬ。

見給はずや、弱き／＼この妾の身は、鬼にもひとしき兄夫婦が酒の代にかへられて、紡績會社の女工とはなり侍りぬ。國には父なく病勝なる母のみぞ、明け暮れ此方のたよりを待ちわび給ふに、文字知らぬ悲しさは、今の苦しき心せつなき身をも知らすによしなく、涙に暮らし涙に明して、無間地獄の如き會社の中に軟弱き身をいましめられつゝ、今日迄は過し侍りぬ。されど、一日は一日より母戀しさの念つのりて、雨細き朝、風冷かなる夜はまして、風邪ひき給うておはさずや、重き病の床に苦しみ給ふ事はなきかと、叱咤の聲のみち渡る窓のうちよりそなたの空を見返りては眺むれど／＼、雲霧深く立込めて涙に空も見え侍らず……語尾はいとゞしうわなゝきて、屹と斗り遙かの空を見上げし時、涙は頰に瀧をなせり。

かよはき身のいかでたへらるべき。冷かなる風吹きすさびし夕べより、妾は心地常ならず遂に肺とやらむ病となり侍りぬ。されど、一ッ時だの猶豫もあたへられねば、苦さはいよゝ增りて、今は悲しや幽鬼とならん斗なるに、せめては此世の終りに、只一目なりと優しき母の顏見まほしさに、漸々會社をぬけ出て此處迄來れど、如何にせむ、胸苦しさに今は一歩もあゆみ出んは覺束なし。とまたもやよゝと泣き伏しぬ。

さてはさる身にてありけるかと、妾も同情の涙せきあへず。夜はいたく更け渡りて、無常を告ぐる鐘の音は余韻を長く地上に漂よはし、末細々と消へ行けば、風一しきりざわつきて泣く虫の音も絶え／＼なり。

「アレッ」、如何にせしぞ、乙女はあわたゞしう力なき足はげましつ、あへぎ／＼停車場の方へと走り出だしぬ。「待てッ」と遙かに聲ありて、後の方より飛が如く驅けくる黑き影は、人か鬼か。折柄月は雲に呑まれて四邊只小暗し。

妾はおのゝく手を確く組合せて、あゝ神よ 彼女の身に幸多かれな、再び惡鬼の手の中にもどらざる樣、神樣

よと祈り終れど、怪しう身内震へり。

時しも耳をつんざく怪しの滊笛、妾ははつとしてそなたを見れば、哀れ只事ならじな、けたゝましく叫び罵る人々の聲は夜の大氣を震はして、鬼火の如き角燈は忙しう宙を飛び走りぬ。

あゝ彼女の身にまがつみの下りしにはあらざるか、哀れ乙女は如何にせしぞ、と斗り見上ぐる空に、物悲しき聲を殘して闇をぬひ行く鳥の二羽三羽。

評、文は、今ひと息なれど、凄愴悲哀、よく人を動かす。（桂月）

洋行せる兄の許へ

小なみ ゆき

其後、兄様にはお變りもいらつしやいませんか。こちらは、母様も、姉様も、皆無事で。毎日兄様の御噂ばかり申してゐます。小兄様も、試驗に好結果を得たと、皆様大變御喜であります。雪はね、御祝に靴下を編んで上げたのよ。

猛さんも大變大きく、まるまる、と太つていらつしやいます。そして元氣のよい事といつたら、軍遊びが大好きで、春駒に乘つて、お座敷中かけまわるのですよ。ちやんちやん。は、いつも雪に命じて、日本男兒を大威張です。姉様が彼なですから、祖母様、祖母様つて、母様の側をはなしません。前の海を蒸氣船が通りますと、祖母様、猛、彼のおふねに乘つて、父様、所へ行きたいな、ど申しますの。猛は少さいから、伯父様位、ならなければ、と母様が、おつしやると猛お馬にのる事上手だから、父様に、見せたいわ。もう、いくつねると、伯父様のやうなるの。よー祖母様つて、母様をこまらせるのですよ。いつかもねー、雪が猛さんの父様はつて、聞きましたら、猛の父様はアメリカへ洋行、猛も今に洋行するのよ。伯母様もつれていつて、上げましようか、とまじめて申しますの。猛さん洋行つてなーに、ときゝましたらね。あら伯母様、洋行知らなくつて、洋行つて洋行するのよ。伯母様ほんとに、おかしいわ、とさもさもをかしいやうに、楓のやうな、手をたゝいて笑ひます。其様子の可愛い事つて、兄様が御覽なさつたら、どんなに御喜びかしれません。姉様の御出産は、多分來月中旬だろーと、いふ事で御座います。

今に母様の御腹から若ちやんがとびだすから、見せましやうと、御近所へ猛さんがふれあるくのですよ。

近ひ内、小兄様が御上京なさるから、御わかれに裏の山へ、家内總出て茸狩いたしました、獲物よりさわぎが

大變でしたけれども、雪は大好な兄樣もいらつしやいませんし、また小兄樣もいつておしまいなさるかと思ふと、ほんとに、悲しくて悲しくて、實に、つまらなかつたわ、例の猛さんは、獨りで喜び、此の日も例の春駒は山まで御供をした。御母樣も、姉樣もね、家の事は御心配なく御勉强遊ばすやう、くれぐれも申されました。空の月は薄衣の如き雲の間より文机の上淡くてらし、雁の聲二ッ三ッ。おゝ兄樣は、此の月をどんなに見ていらつしやるだろ！。
猛さんは、夢でも見たのか、父樣と一聲、またすやすや。

評、兄を懐ふの情切に、幼き妨の消息を傳へて、意到り、筆随ひ小兒の面目躍動す。末段、結び得て、殊に好し。（桂月）

秋の音なひ

神戸　五百枝子

目にはさやかに見えぬ程より、それぞと知らする秋の風こそ、まづあはれなれ。桐の一葉さそひそめしをはじめとして、軒端の萩におとづれては、人待つ宿をはかり、尾花が袖にかくれては、なまめかしき私語しつゝ、ほにあらはして人を招く。されど、野分となりて、おどろ〳〵しくふきいでたるは、名殘さへうたてし。

流るゝも、打寄するも、水の音は、身にしむやうに覺えて、いとをかし。谷の水の長閑なるにひきかへ、同じ小川のせゝらぎも、秋はことなり。まして月の影などやどりたらむには、玉のふるゝらむ心地す。

虫の音またあはれなり。松虫人まつらむやうにきこえて、をかし。機織ときけば、夜寒覺ゆるやうなり。螢ば、壁の中にはた賓の子になどなくが、他の虫にことなる心地ぞする。鈴虫は其名さへなつかしう、銀の鈴にか似たる、黄金のにかと、今更うちかたぶかる。轡虫名いと厳しきに、聲さへ耳かしましき心地すれど、一の谷のやどりにうちきゝたる折ぞ處からいひいでがたきあはれはおぼえたる。なほいひ續くれば、多かるめれど、とまれ、かくまれ、其聲の悲しげなるは、其折からのわびしさもあるべく、聞く人の心づからにもよるべけれど、物思はぬ身にもうら悲しきは、此虫にもつき〴〵しき怨をおひてかこつなるべしと哀なり。

笛の音も秋はことにすみまさる心地す。琴なども同じ。月明き夜ふときこえたるを、耳傾くれば、小督のしらべをいと優しうかきならすめり。心にくきすさみよと、其人からのゆかしう思はるゝも、そのいろねのよに

假ねばなるべく、はた折からのをかしさのうちそへるにもよることなからずや。笙、琵琶などゝ、かゝる折にこそ、つきぐ\しからめ。雲の上の御遊ども覺えて。

月高く風清き夜、はしゐして、來し方行末など思ふ程に、雁の列いとをかしきを見出てたるはいかに。まして其聲の三つ四つ二つと絶々に聞えたるは、いふもおろかなり。

春日の森ほのかにたそかれて、秋風はた寒きおばしまによりつゝ居るに、幽かに遠くうちなく聲のすれば、それかと思ふものから、ひが耳にやと打傾けば、思はぬかたに高く近く打なきたる鹿の聲をかしといふもよのつねにて、まことや、斯る處に宿りせしかひよとこそおぼえしか。

にるものもなき秋の哀は、砧にこそあるめれ。寢覺の枕に遠く近くしきりつゝたゆみつ、響きたる、誰が爲に、かく夜更る迄と思ふに、夜寒の風いとゞ身にしみぬ。

評、文章流麗をきはめ、秋聲をのべつくして、いとをかし。結末殊に好し。(桂月)

乙賞

雪の夜

伊勢宇治中之切町 河原芳子

板庇叩きし宵の間の村雨いつしか音なく、月なき空の僅かに明うなりたるいぶかしさに、破戸くりあけて外面見渡せば、こはそもいかに、黒き布もて覆はれたりし夜の色は、おぼろに霞む春の空の如く、ほのしろき幎もて包まれたる上を散りくる六つの花片は、花なき梢に時ならぬ風情をそへ、汚多き塵の世に清く大いなる装束を與へて造化の美妙を飾らしめたるなり、あはれ、この神秘深き夜の中には悲しみ哭く鳥の聲も歇み、野を行ふ人の足跡も途絶えて、靜かに眠る大地の聖けさ、とこしへたえぬ水のせゝらぎはいともさやけき天樂を奏でて、遠く幽に闇の海に消え行きつゝ、無限の秘密を人の子の胸に語るあるのみ、刻一刻と更け行く大氣の、いよゝ崇嚴に、いよゝ森嚴に、あらゆる汚れは只一色に其の影を隱されて、神を迎への玉の棧道は瞬一瞬に築き上げられつ、今や御衣のさやぎ聞ゆるかと思はれて、心身自らひきしめらるゝ折しも、河を隔てし彼方の畠道を、工女服着たる黒き人影のあへぎ／＼走り往く、二町ばかり後より聲かけつゝ、洋服姿の二人が韋駄天走りに、追ひ駈け來る。我は思はず「人鬼」と叫びつゝ、認め得る限り其の影を追ひて「人鬼」の手の其の躰に觸はざらむことを祈りしが、あな無慚やな、あな口惜しやな、三個の黒影は瞬時に一團と成り了りて、悲鳴、怒號の忌はしき悲曲は、この神聖なる夜の帳を破りて聞えぬ、あゝ、萬事休せり。工女は竟に鬼一口にくはれたる乎。

胸にたばしる血涙の、紅き霰とならばなれ、この痛ましき人の運命を思ひ遣りては、身の毛も悚立ち、肌凍りて、そゞろ傷なき苦悶に沈みつ

手にせるまゝの「雪夜語」を夢心地に繰返して、仄暗き燈火の下に身を投げ伏せしも、女心のかよわき故にはあらざりけるよ。

さるにても、彼の幾萬千人の痛はしき工女が「人鬼」の爲に誘拐せられ、迫害せられて、暖かき春の光明に浴せざる谷陰の草の夫れよりも慘酷に、人權とやらむを束縛せられ、あらゆる壓制の下に、言ふに忍びぬ墮落の底に陷り、其の苦悶にたえかれて遁走を企て、遂には無限の恨みを抱きて憂き身を闇き死の淵に沈むるなど、聞くも怖しきこの世の地獄に捉はれては、一人として滿足なる發育をなせるものなく、顔色蒼白く身の丈低く、肌は土の如くあれはてて見る影さへもなきくらす眼の色の艶なさ、幾萬千人の痛はしき子の親は、かゝれとて少女は生ざりけるものを、心ある人の嘆きを聞き、やつれし我が子の姿を見る度に、いかなる大苦悶をか感ずらむ、國家の安寧秩序を保つ可き法もあらむを、「人鬼」の心を罰す可き制もあらむを、あゝ、世はかくまでに濁り果しか、人はかく迄に腐り果しか。

思ひ入る程極みなき嘆きを釀して、遂には咒詛の吶喊を作りつ、今迄美の惑に打れつゝありし我が心は、瞬間の出來事にいみじき悲觀を齎り て、黒く醜き巴渦の中に沈みたりしが、「雪夜語」はなほ曇りし眼より棄てられずして、濁りし膝に原色と調色とを比較せしめつゝありたりき。あゝ、明朝の工場汽笛は、いかに忌はしき音を傳ふることぞ。あゝそろしき夜よ、あはれなる人の運命よ。

評、雪を描く、好し。神天降るかと叙し來りて、忽ち人鬼を點出する、殊によし。以下やゝ蛇尾の觀あり。筆はむしろすぐれて遒者なるも、終に「露の命」のあはれなるに如かず。（桂月）

尋虫

備後福山道三町三島內 立神政子

やゝ秋にいりたつけはひに、昨日の夕露、けさの朝風など、いとゞ身にしみぬれば、暮あへぬ程より、うしろの岡邊の野らに出で、虫さかんとそこら尋れさまよひつゝ、思へらく、すべて物の宿世はいとえさらぬ事なりけらし、其の生れ得る時と處とによりて、あはれ、取りはやさるゝも、取捨らるゝもあるならいなりけり。虫も嵯峨野、紫野などいふ所に、生れ得ぬる昔ならませば、雲の上人の手に撰みならされいろ糸の組したる籠にこめられつゝ、秋女郎花などのうち枝よそひて、さて其ふり出る音を、品定し給ひし風流もありしならまし。今此の岡邊の野らに、うるはしうよき音ならさんも、こは鈴虫、こは松虫と、聞定むる人ありやなしや、いとおぼつかんめれど、人はいざ我にはいかでなどひとりごたる。まことや一とせ、下總國に旅居しつるなり、香取郡名古屋村なる、尹大納言の配所の御舊蹟を探りて、何くれとかの卿の御宿世しのび奉りし事今目の前にうかべ出ぬ。さるは此の卿一たび叡山の行幸にかはり奉りしも、つひに笠置の御事より、千葉介貞胤うけ給はりて、かの一族大須賀胤時が館、やがてこゝの名古屋を謫處にしつらひしなりとぞ。さて其館にひそみ給ひて、思ふがまゝの誠忠も遂させ給はて、何くれと御思ひに沈み給ひし秋の頃、「いにしへは露わけわひし虫の音を尋れぬ草の枕にぞ聞」とよみ出給ひきとなんいへる。これいはゆるその宿世拙くまして、時と處とを得給はざりしにやと、其かみ思ひやり奉れば、此の岡邊にものして、閑かんとする虫より先に、われこそまづなき出にしか。

評、虫の音より師賢卿に思ひ及ぼし、首尾相顧み、文短かけれども、餘情多し。（桂月）

雪のあしたに

翠香女史

珍らしき雪、いかゞ御覧じ候や。賤が伏屋もなかしきを、況して玉の臺より㳒々とみ渡さるゝ御庭の景色、めに浮ぶ心地せられ侍る。めでたき御言の葉、雪とゝもにや積るらむ、少し洩し賜へかし。扨も此鴨は昨日宿なる人の獵得て歸りしにて、銃丸の跡も見苦しかられば、今日の御肴にもとてなむ。後園の小川の岸なる根芹なも取添へて、御厨所迄差出し候。何ならぬ物ながら、只新らしきをめて給へや。是眞の獻芹の志とも思ほしてば、面目ならむかしあなかしこ。

同かへし

初雪のふりはへたる御使、ことに御手練の御得物の鴨、御園生の芹をさへ添て賜はせたる御志のあつ物にこそ調じさせ侍らめ。此比尋常ならぬ佳品どもをいたづらにやはと、魂合へる誰彼にも人走らせ、俄に松風の音たてゝ、一會催し候へば、雪中御いとひなく、君にも御來會下されたく、庭の木毎の花に一しほの光をまして、おもしろ妙の御當座も有べくと、まちたいまつる。消ぬ先にとく〳〵とてなん車率る。

評、雅語と俗語と調和せぬ所もあり、懸詞の少し無理なる所もあれど、頗る才藻を見る。簡潔にして意つくせり。(桂月)

魚釣の翁

福岡縣三池郡上内村　原田幸子

末は流れて海に入る、　蓼の花さく河岸に、
膝折りしきて釣すなる　翁の眉の白さかな。
たばこ燻らし水底に　映る汝が影友として
何時來て見ても釣す也
岸邊の蘆は年どしに　咲きては萎れ萎れては
又花咲きて萎れけり　されど翁は替りなく
全じ河岸に膝折りて　映る汝が影友として
何時來て見ても釣す也
里の子どもは生ひ〳〵て　大人とこそはなりにけれ
子守くらしゝ賤の女も　嫁ぎて見えずなりにけり
さしも短かき人の世と　のどかにしめて今も猶
翁は全じ川岸に　何時來て見ても釣す也

評、概して新體詩は、他に比して、大に見劣りせらる。數十篇の中、やゝ見るに足るべきものは、わづかに二篇のみ也。(桂月)

丙賞

黄昏時

京都　よつじあや

秋も深うなりし此夕ぐれ、西に傾く夕日の光り淡く薄く消えて、心づからにも、何れを眺めやるだに淋しく悲しからぬはなく、遙かにさそふ秋風身にしみて、ひと染ふた染の落葉あはれに、何の趣もなき庭も、我馴れになれし此庭の、今宵限りと思ひやりては、そゞろ戀しさに、端居

近く眺め出し、あたり打見守りつれば、心はちゞに思ひ亂れ、悲しからじな、何の涙ぞ。露の白玉とゞめあへず落ち散るなり。

今更何とも感離き今日となり、などか父君母君の御許の懲しさ盜せざらむ。いよ〳〵明日はやま川をへだて遠きに嫁ぎ行く此身、この程よりは淺き心に未來の理想をうつし出し、世に勝れませる背の君よと父上母君の悦びおはすを仰き見る嬉しさに、心もそゞろなりしよ、今日となり如何に心を雄々しくすとも、懲し懷しき此家、先つ程も、母君の今更云はじ、語らじ、これ程嬉しき事やはと、眼を屢瞬き給ひし時、何と答へまつらん。云ふべき事さはにして、いひ出んとすれば、胷の葉押つまりあやしき迄に胸さがりき。

我身嫁ぎし上は心のかざりを盡し、人の契とし盡なきを心に深くちかひつれど、新たなるホームに变はりては、終始に氣を置き、悲しき日は行末多くとも忍ぶべく、やがて美しき家庭の母と呼ばれん春をこそ。されど〳〵かけへだゝりては御消息も文してわづかに聞ゆのみ、又たやすくまみえんこと習しこれ限りと思へば、心細さ、つらさ、慣れて歸らぬ我宿とは心に知りつゝも、今宵限りの御別れは、うしろ髮引かるゝ心地して、日每に妹と睦びし此部屋の慕はしく、此庭のこひしく、春は花にあくがれ月すむ秋の夜はうれしく團とまとひせし、すぎし夢のあとなつかし。我めでにし垣根の梅よ、櫻よありしまゝに咲き出て香はしきこなたのたよりを傳へてよ。我此園生の景色又いつの時に眺めん。明日よりは新たなる浮世の生活に入る此身よ。日每の夢はさらに〳〵心をとめず苦しとも思はれど、此故郷を離れ行かむは何よりも〳〵悲しきなり。

習しだに、日わし長かれと祈りつるに、いつしかにくや日影落ちて、そこら一面黑き幕引かれぬ、名殘惜しき庭も見へ別かず。夜風心ありげに頬のおくれ毛をなぶるのみ。折から駈け來りし妹の嬉しげに許りそうを思はずひしと、かい抱きて今更よゝと泣き入りぬ。

評、文は未だしき處あれど、情はつくせり。(桂月)

萩見に友を誘ふ文

兵庫　柳田のぶ子

德子樣、大變御無沙汰してすまなくつてよ。どうぞ、ゆるして頂戴。あの今度の日曜にね、須磨の、清友園に參りますの。秋の草花が、それはそれはうつくしく咲て、其の中でも、萩が一番きれいで今が見頃でありますから、ぜひお友達と御一所に居らつしやい、どつさり御馳走をして待て居ますからと、須磨の久子樣から、御案内が有りましたの。妾嬉しくつて、參る事にきめましたけれども、妾ひとりで行くのは、何だか、淋しいわ。其でお仲よしのあなたと、御一所に參らうと、思ひますの。德子樣、いらつしやいな、あなたいらつしやいますなら、妾ほんとうに嬉しい事よ。お母樣におねがひ遊ばせ。きつとお母さまゆるして下さるわ。もしゆるして下さつたら、すぐ知らせて、頂戴。妾待ていてよ。德子樣。

評、言ふ所は、何の奇もなけれども、言ひあらはし方、言文一致體の書簡として、少女口吻躍動す。但し余が初紅葉の人質に採りたる文を學べるに似たり。(桂月)

日記の一節

在北美　藤澤白百合子

西の山の端やう〳〵をぐらくなりゆきて、庭の木立のまに、みつよつ

とふ螢火のかげもみゆる頃、從兄の君に伴はれ、納涼せんとて、圓扇かたてに、そこともわかず、宿をいでゝ、そゞろありきする程に、東の空のくもまのけはひあかくなりゆきて、やがてすゞしげなる夏の夜の月、花やかにさしのぼりて、ひるにもにたる光をたよりに、なほゆくほどににぎわしき町のつくる處、蛩をやなづらんと思ふばかりの翠したたる老松のもとに、例のからめきたる門のいたくやれたる古寺の前にいでぬ。内をみいるれば、夏木立しげり合ひて、月のかげさへもれず。かたへには、昔しの名殘りを僅に殘せる鐘樓の風にさらされ、雨にうたれたるがおぼつかなげに高くたてり。庭きよめする人もなければや、思ふまゝにたけのびたる夏草さうにかきわけつゝゆけば、大きやかなる池のほとりにいでぬ。汀にはみどりこきまこも生ひ茂り、池のもには處せきまでうゑたる蓮葉のつゆに月やどりて、げにいはん方なく清げなるを、水をわたりて、いづくともなく、夏にしられぬすゞかぜそよ〳〵とみをふきてひるのあつさも忘れつべし。かたへには、鼻かけ落ちて、今は御前に石つむちごもなき地藏尊さびしげにたち給へり。まひるだにとふ人もなき古寺の夜はことさらにて、浮世の聲もきこゑず、いと物靜かなるに、うちつれてなき出したる蛙の聲々もよにしらずあはれにてすぎし古へをわれにさゝやく如く思へらる。あはれ、此寺よ、昔は名刹の中にかぞへられしも、浮世をそとにすまふこゝにも、猶變遷の風はふきすさび、今はをさむる人もなく、あるゝにまかせたるなりと、友はわれにかたる、本堂の方をみれば、持佛さびしげに、月もる御堂の蜘蛛の巣の中にざしたまふもあはれなるを、猶此寺をさへまもる人やあらん、木魚のひゞきいとさびしく、やがてつもる落葉をふみわけつゝゆくほとに、卵塔のこのもかのもにたちならびたる墓地に出でぬ。あるは人生五十年の夢を一本の卒塔婆にのこし、ゆくさきの大望をいだきつゝむなしく一基の碑に恨をとゞめてうせにし人、忠のため、義のため死して、一握の香の烟にあはれを示しゝ人もあらんを、これもかれも同じ土の下に長くねむる身となり、まして此寺のあるゝと共に、そとばはふく風にをられ、石は、むす苔にうづもれて、きざみし文字さへみえわかなくに、つたかづらはひまつはりて、雀の足あとのみあざやかに、今はその何人の碑なるをよむによしなし。天然の雨は、墓前にそゝぐあかとなり、自然の草は、たむくる花となり、詣づるものは夜毎の月と松風のみ。あたりなくすゞむしの聲もかなしげにて、所がらとてあはれにきこゆ。はるかにみゆるくさのやの螢火のかやりのけむりに掩はれて、おぼろげにみゆるも、幾多なき人のうらみのたまかと思はれて、物すごし。げに浮世の榮華にほこるも、世のかなしみになく涙も、たのしみにほゝゑむの笑も、皆ひとゝきの夢にして、さめての後はかくの如くむす苔のもとの人とならんなど考ふれば、例ながら何となうかなしく、覺えず涙にそでをぬらしぬ。折しも耳ちかくひゞく鐘の音に驚かされ、あはれはかなきそゞろなるわがさまを、さこそは月のわらひけめと、今更に耻かしうおぼえて、ふと空みあぐれば、折から月はくもがくれして、夏ながらはださむきまですゞかぜのみにしむに、いざやかへらんとて、家路をたどりぬ。

評、文中とゝのはぬ節もあれど、面白き所も多し。余の舊作「古寺」を學ぶ所あるに似たり。（桂月）

月見草

伊勢國度會郡四郷楠部五〇　神尾ひで子

流れさびしき里川の、
夕の岸にほゝ笑める、
汀の土をたよりにて、
姿やさしき月見草。

さだかに影は見えれ共、
うつす緑の葉がくれに、
朝日榮ゆるしのゝめの、
露かすかなる月かげに
若やぐ光色もなく、
昨日も今日も悄なの、
夜を限の姿にて、
俯うつす水の面に、

月の光にほのめきて、
私語く水のわびしさよ。
强き光をまたずして、
消ゆる運命やつらからむ。
水にゆらるゝ月見草、
流れに身をば任しけり。
只忘らるゝ身なれども、
深き識はつたはりぬ。

秀逸

秋窓のすさび

大阪府泉北郡北上神村井上徹方 藤井登美子

物凄かりし梟の聲やみて、西の空にのこりし月影やう〳〵薄れゆく頃朝暾はまさにいでんとして、東天一帶に淡紅を潮したる、燃ゆるが如き希望の光の、いとうすき睦雲の紗につゝまれて、あらはれ來るかと疑はれて、心いとゞ時めく。雞の聲四方にきこえて、早立ちの旅びとひたすらに道をやいそぐらん、われは窓によりて晨の歌をうたふを常とすゝなり。

朝まだきより彼方の畦道を、三たり四たり謡うた歌ひつゝ過ぐるは、栗の乙女等の栗拾ひに行くなりけり。栗の殼は早や實を吐き出して、赤く色つきたる柿は、朧ろげに其葉蔭より姿をあらはし、童らのよろこびをかはんとするに似たり。向ふの堤に育ちし柿の木の、火の玉のやうなその實たば、木の葉のかくれに狙ひし烏一羽翔り來りてふるれば、あはれ實は落ちて紅の血を流したらんやうなるを、にらむ彼のさまをかしまばらなる賤か伏屋の軒に、名もしらぬかづらそが上にのびさかへ、可愛の花の一輪、得もいはず趣あり。

かく洋々たる望ある中にも夕暮のけしきは何となく物さびし。斜さす日も森のあなたに落ちて、きこりの斧の音たえたる夕べ、烏の栖もとむとて、三つ四つもしくば六つ七つ、うちむれて飛びゆく影のやう〳〵に小さくなりゆく、又は此方の森にとびきて、杖なわらぞふにや、さわがしう鳴くも折からあはれなるを、暮ればつるまゝ猿の聲かなしげに、そがひよりもれくるましてあはれふかし。

霧わけ出づる月限なき夜、ふくるまで燈かゝげて史を讀む。その昔朝廷の仰せをうけて、花の白雲ふかくわけ入りにし人の跡をこひつゝ、心ならずも賤やしづをうたひし白拍子の、瑞好の袴ふみしだきて、花ふゞきの下にかる〳〵舞へりし扇の匂ひやいかなりし、下につけたる緋衣の白き水干の袖を透きて、うすくれなゐに見えたる、鎌倉山の星月夜にあはれ幾百の若殿ばらの腸をしぼらしゝかよ。

音

東京 志良菊

横笛、てりもせず曇りも果てぬ春の夜のころ、梅咲く宿のあたりよりひゞきたるは殊更なりや、秋の夜の月に催されて吹はたるも亦をかし。草笛、菜つむ子やすさぶらんと、らうたし。尺八、池のあやめ、さと霧りくる夕まぐれ、遠くたゞへくるは待ちゐし杜鵑の一こゑよりもうれしさはれあまり近くきゝたらんには噴しきのみにてなか〳〵興うすきものぞかし。筑、何となう、かう〳〵し、三味線、月雪共にいやしけなり、

學はずともありなん。オルガン、わか葉青葉ところせまげに生ひ茂れる中よりひびきたる心にくうこそ。按摩の笛、いと哀れなり、それも家には老いたる母やあらん、飢ゑたる子や待つらんなど思へば、一きはにこそ。琴の音の高殿よりもれたる、さらぬもめでたし。思へばこその夏の夜なりけり。風清く月面白きに浮かれて、われともなく里川のほとりになん至りけるに、いとみやびやかなる琴の音ぞ、まつはこゝもとに通ひきにけるあはれ、いづこの君のすさびにかと、すゝろしたはしうて尋ぬる程に、月は益々すみわたり、琴の音は愈々さえて高く低く、たえなんとしては幽かに續き、沈まんとしては又あがり、一ふしことに變り行くしらべに魂あくかれてたゝすめば、はたとふき消す如く打たえぬるものから、猶すかすかしき音の耳にある心地して、しはし立ち去りかたくこそ思ひしか。喇叭、遼東の雪ふみしだきつゝ、我つはものどもが吹きたるは、いかなりけむ、思ひやるだに勇まし。鐘の音。諸行無常をつぐるかと哀れなり。雷、名をきくただに怖ろしき、心地するを、雨宿などする家もあらなき廣野にて、わくらはにとゞろきたるよ、魂の緒もたえなんはかりになん。花火、月なき夜などのは一入うるはし。鶯、またとけやらぬ雪の中より、さとり顔にもなきいてたる、めづらかなり。鈴虫、すゝろにすてかたし。その他岩根に吼ゆる波の音、松が枝はらふ風の音なんど、物すこきれのいづれおかしからぬかは。

天長の佳節を祝し奉る

下谷二長町五二　嵯峨淑子

秋津洲、四方の海、波も靜に、入江の汀によばふ田鶴がれ、鴫が軒ばにさ躍る雀の聲までも、我大君の千世を壽き奉る心地して、めでたき今日はしも、久方の君とこしへに榮えゆきまさん、あやにかしこきすめらぎのあれ出まし〻好き日なりけり。あはれ、比ひなく尊き御光のさし出まし〻かしこき日なりけり。

されば御惠みの御光の下に生立つ民草は、いかで此日を祝ひ奉らざるべき。家毎に赤き心の日の御旗高くかゝげてめでたき御世の其かみをなむ仰ぎまつるなる。

そも我御國は、千早ふる神のみ代より、天津日嗣、天地と共に窮りなく、一つ御筋にてうけつがせ玉へり。さるは萬の國に比なき御國柄にして殊にかけまくもかしこけれど、英叡文武なる大君には、御徳富士が嶺よりもいや高うして、御惠澤の海よりいや深し。はしなくも、かゝる御國に生れきて、かゝるめでたき御世にあひて、今日の日を祝ひまつるうれしさ、あはれ何にかたぐへん。仰げば、九重紫雲ふかうして、大内山の常盤の松に瑞氣鬱蒼たり。いざや、我れ人もろ共に千歳の秋を契るときくの花折りて、かざしていはひまつらん。あはれさゞれ石のいはほとならん秋までも、君は千世ませ八千世ませ。

田舎の秋

山形縣高等女學生徒　高橋徳子

久方の空のけはひのみかは、今朝ふき變る風の、何となう身にしみ渡りて、日頃手馴れし團扇も打忘るゝも、さすがに秋しりそむる心からにこそ。垣にまつる朝顔の二つ三つ露に綻びしもいと哀れに、門の小川を挾みし萩は、今を盛りと咲きこぼれて、添竹ほしき風情なり。遠く田の面を見渡せば、雀は鳴子に驚きて飛び、鳥は案山子に恐れて近寄らず

穗に出でし稻葉の白露にうるほひて、さつと戰ぐさま、皆見るに堪へたるながめなり。草葉にすだく虫の音は、或は高く、或は低く、うたゝ愛に堪へざらん。まいて鎌の如き三日月の、一葉二葉ちりそめたる柳の梢にかかりたる、いと物淋しきけしきなりかし。

秋のもなかになりければ、月の光こそいとたのしきものなれ。三日月の頃より待し今宵ともなれば、童等は月眺めんとて、日の暮るゝを待つほどに、鏡を欺く一輪の明月は、いつしか嶺に棚引く霞を破りて、ほの〳〵と東の森の上を照しぬ。家内の人々は皆椽先に立ち出て、茶を酌みかはしつゝ、あゝよき月よ、光よと互にほむる聲かまびすし。あはれ嬉しきわれらまで、大空に只一つかゝれる月、已がものとして、ほしいまゝに仰き見るも、いとかしこく、今に始めぬことながら、大君の御惠の露に袂を濕しぬ。あたら夜の月吾等の如く同胞打集ひて眺めたるらんには、如何ばかりか樂しからんを、親に別れ、子に離れ、星も落ちなん頽屋に、襤褸の袖を照らさるゝ身は如何にながめん。嗚呼世の中の大半は斯かる悲觀をもて滿たさるゝ事を想へば、血あり、涙あるもの、誰かは腸をたゝざるべき。さるに錦繡に纏はれ、佳肴に飽き、たゞ月の表をのみ見て歡樂に耽り、其の裏に向て一滴の同情を濺ぐもの少なきは、げに嘆かはしきの至りぞかし。されど、大江の千里は「月見れば千々に物こそかなしけれ」と、千行の熱涙に浮世の果敢なきを嘆き、藤原の道長は「此の世をば我が世とぞ思ふ望月の」と金殿玉樓に榮華の夢を結びしとを考ふれば、人の心は昔も今も變らざるものかなと思ふ折柄、一聲さやかに落して鳴き渡る雁あり。あなやと彼方を見れば、竿なす一行鏡の如き月の眞中に横たはりぬ。

晴れつゞく日和に、老幼男女の差別なく、皆立ち出てゝ稻を刈るもの、あるは車に積むあり、馬にて運ぶあり、寢臥も忘れたらんやうに、喜び面に溢れて、あちこちとのゝしり合ひつゝ、馳せめぐるさま、さながら戰場もかくやと思ひ知られしが、夕暮告ぐる鐘の音と共に、田の人々は散り行きて、常風にやづれはてたる案山子の影のみ淋しう殘りぬ。

秋もやう〳〵深うなりゆけば、百鳥の渡る聲々勇しく聞え、木々の梢は皆霜に飽きて、亂紅を鬪はし、いぶせき賤が篇屋も、瑞閣と化せしかと疑はれ、野もせに立てる秋草の名も知らぬ花ども多く、草叢にひもときて錦を曝らすが如し。わきて籬の菊は、百花に遲れてよく晩節を保ちてにほこりて操の色をあらはし、げに秋花の、王と云はまし。遙に前山を眺むれば、滿醉朱蛇を走らせ、彩紅を吐き、尾の上の松は颯々として自然の音樂を奏し、天津乙女のあま下りしかとあやしまる。

野分吹きやみしあしたは、日頃朝寢勝なるわらべ等の鳥より早う起き出てゝ落栗拾はんと立ちわぐもをかしく、男女どもは籠を脊負ひ、熊手を携へ、枯木を集め、落葉を掻きて、冬の仕度に忙はしげなるにも、秋の眺めは中々に深うなりぬ。

秋は見るもの聞くもの皆あはれならざるはなきに、殊更に田舍のわびしき住居に、四邊寂々萬籟聲を收めて、語るべき友もなき夕べ、端座浮几に倚りて、靜に螢火を掲げば、幾多の感慨胸に逼り、讀まんとして讀むこと能はず。魂は高く天外に彷徨ひ、たゞ水車の響は靜打つ音と相和して、この寂寞界を破り、僅に歴世のせうそこをもたらすのみ。

月夜日記

東京神田區仲猿樂町九番地　佐々木和子

秋も中ば過ぎて、山田の稲は重たげに穗を垂れ、黄金の波を漲らし、田毎に浮びかふ稻雀、時に群がる鳩の數にも、豐年とこそは見えにけれ

九月拾五日。夕映の雲名殘なうなさまりて、たそがれの色蒼う、夕もや深くたちこめり。今宵むさし野のほとりにすめる方より、明日は望の夜なれば、月見のむしろ開かむとて、呼びにおこせぬ。されば、その用意なとしつ。仰けば、空かきくもりて、月代と覺しきあたり、うす赤うほのめけるのみなり。あゝあすの夜の月の光やいかならむ。

九月拾六日。まかきに咲ける夕かほの露おひて、みとりの葉かくれにうちにほへるあたり、蝙蝠のかけうす黑う、水なかすめてとひ行けり。光よわき星一つ、さきりの緣にうするゝ野末はるかに流れて、雲のゆきゝあはたゝしう月出て見るまにまたしくれぬ。あはれ、一年まちにまち渡りし今宵の月も、去年の如またも無月のうらみに泣かせんとか、雨ふりまさり、軒端にさわぐ風の音たえだえなり。やがて、夜半近き頃、雨はれて月はなやかにさし出てぬ。木の葉草の葉に置きわたす雨の雫しげく、虫ひとしきり尾花の下になき立ちぬ。近きあたりの御寺の鐘の音、余韻長うひゞきて、餘韻高き僧やおはす。讀經の聲吹く秋風に送られて、かすかに聞えぬ。をちこちにかゞやきしともし火一つ宛消えて、月の光にすみまさりゆく。夜色しつかに、玉川の水音さえて淙々たり。

秋の山ふみに友を誘ふ文

名古屋市六句町
一丁目拾二番戸　長谷川ちやう

くれゆく秋のならひとて、きのうけふしぐるゝなべに、四方の木の葉の色づきて、心もおのづとうきたつ折から、めのとの許より、物わびしき山里には侍れど、秋の景色は一入にて、殊に楓は朝な〳〵おく露霜に色そへて、いまを盛りのながめとこそなり侍れ。そをいたづらによるの錦となさんがあたらしう、落栗ひろひなどしてまち奉るなど、申しおこせつるに、折しも、あすは日曜にしあれば、かの山ぶみせまほしう思ひたち侍る。君にもよろづのさはりをよけ給ひて、かならずともにゆき給はんほど、ひとへにねぎまつるになん。されば、めのともさこそと喜び侍るべく、せちれがはしくこそ。あなかしこ。

◎虫の音

高知市
通町　小西雅子

秋の哀れなこれのみにとり集めたるかとまて悲しく覺ゆるはげに虫の音にてこそ。

老ひたる身にはあらぬとも夜さむ身にしむ寢覺のとこ近くきり〴〵すのかごとがましき音をきゝたるいとさびし。もち月のすみ渡りて清けき夜萩にすゝきにつゆふかき野べにあくがれいでし時嵐のあらしか松風かいとゆかしき琴の音のひゞきくるにくつわ虫の音をそへたるいとゞ嵯峨野の奥ぞしのばるゝ。ふるさと出てゝ學びのわざはげみ給ふ君たちかなしき秋の夕すゞむしまつむしの音をきゝて故郷やしのび給ふらむ。

秋やう〳〵更ゆきて秋の下葉のこぼるゝ頃、さしも玉の如かりし虫の聲々衰へゆく草葉と共に、かれ〳〵にほそりゆくいと〳〵心ぼそし。木の葉さそふ風のさむき夜ほろ〳〵としぐれて寂しさいやまさるに、あるかなきかの虫の音さむさにたえてや露のいのちせまりしにや今にも消えなむ聲いと哀れに心ぼそく心なき身もはらわたをたつ思ですゝるに、まして悲しきいたづきの床にきゝたらむいかなる心地やすらむ。

女學世界定期增刊冬の卷
第貳卷第拾五號
ふゆこだち

(十一月十五日發行)

朔風一陣、山はあらはに木の葉散り、滿目凄愴たるの時は來れり、窓下の曉霜は凝つて凜烈たる寒威を縱にし、屋上ノ明星は散つて煌々たる冷光を逞うす、此の時に當つて火桶を前に長夜伴侶を書中に求むる亦た快からずやは。冬木立一は女學世界の定期增刊冬の卷として來る十五日を期し發行せんとす、其の躰裁はつとめて高潔優雅を旨とし、その內容も亦た專ら趣味の饒多なるを期せり、全篇二百八頁中才媛の競爭になりたる小說十五種▲和歌貳百種▲新體詩三十種消息文二十種▲叙事抒情文各々二十種を收む誠に是れ飛雪紛々銀色燦たる漂絮の如きもの、錦繍の素を成すもの多し猶附錄として左記の九篇を收め、口繪は例により內外知名の人物、山光水色の風景嶄新奇抜なるもの十二面を添ふ。(爭)

附錄

彙報

●皇孫殿下へ獻納の犬

迪宮殿下にはいよ〳〵ます〳〵御すこやかに渡らせられ昨今は親ら御運動を望ませ給ふ程と成らせたるやに承り及ぶなるが先きつ頃御養育掛川村伯爵家にては嘗て東宮殿下御不例にて運動御不足とありし砌池田謙齋氏の意見にて狆をば御膝近く侍らせけるに殊の外御意に協はせられ其の一擧一動に御心を配らせられたるが自ら御運動の助けとなりて程なく御壯健に復し給ひけるよし豫て承はり居たればあはれ一の名犬を得て迪宮殿下に御慰みに供へばやと思ふ折しも京橋區八官町宮里總七方に優れたる犬ありて數日前七頭（内牝一頭）の兒を擧げたることを聞きしより早速照會する所ありしに同家にては面目此上もなしとて今度仔犬の内牝牡二頭を献上することに決し荷車に載せて先づ麴町内幸町なる家畜病院に伴ひ其尾を切斷したり就て見るに生後十日に過ぎざるを以て目は猶ほ開かざれども總身純白にて唯耳邊に黑點あり斯く尾を切るは斯犬を養ふ者の常なりとか又親犬は本年春英國より態々取寄せしものにて身長約四尺、高さ一尺二三寸あり牡は全身總茶色、牝は總白にて何れも英國の名犬共進會に於て三度とも賞牌を受けたる程の優物なりといふ此犬の特技は能く鼠を捕る事と道拂ひをなす事等なりとぞ

●日本赤十字社總會の模樣

豫定の如く去月廿一日午前上野公園元東四軒寺跡に於て其の第十一回總會を開き、次いで廿五年紀祝典を擧げたり、此日天氣晴朗、各地方より社員の參會するもの夥しく、無慮十萬と注せらる、式は九時卅分に始り各職員、招待員、社員一同式場に整列し、　皇后陛下の行啓を迎へ奉る、同十時卅分といふに御着輦、やがて玉座に成らせ玉ふや花房副社長は恭しく報告書及び其他の書類を上り、具に同社の現況を奏上せしに　陛下には玉音朗かに令旨を賜りたり、夫より副社長の會計決算報告、常議員の補缺選擧等あり、次て小松總裁宮殿下より有功章親授の儀あり、右了つて紀念祝典に

移るや總裁宮殿下は　兩陛下に謝恩表を奉り、皇后陛下には又た難有き令旨を下し賜はれり。次に佐野社長、來賓總代桂子、社員總代千家男等各祝詞を朗讀し、了つて社長閉會を宣告し、陛下は十一時十分還御あらせ玉ひぬ。

●日本女子大學校運動會

小石川區高田豐川町日本女子大學校にては去月十九日午前九時より同校運動場に於て運動會を催したり場內には天幕を張り來賓席をしつらひたるなど用意もおろそかならず來會者無慮數千名の內八分通りは婦人なりしを以、男子の運動會とはいたく事變りて極めて靜肅に行はれたり扨て運動の番組は總て三十二番にして午前中には女子野球競技（家政學部第二年）夜行々列（高等女學校第五年西組）夕立マーチ（家政部一年）容儀體操（大學部）自轉車毬拾ひ（同）などいづれも面白からざるなく午後はローンテニス（大學部及び高等女學校）シンパー體操（高等女學校第四年西組）現像競爭（高等女學校）與次郎兵衛人形（國文學部二年）料理競爭（家政部一年）毬の取合（英文豫備科第二及び一年）バスケツトボール（大學部）自轉車マーチ（同）等最も興ありき中に就きても與次兵衛人形のおどけたるには何人も頤を解かざるなく、自轉車マーチの宛轉滑脫なるは野邊に胡蝶の舞出しかと疑はれ何時の間に斯くは練習を積みにしかと中々に驚かるゝ節も多かりけり其外和歌組合せ霞の富士、秋草競べ、沖の鷗、花月行、紅葉狩、かざしの菊、第一虹霓舞などの遊戯運動ありて名からしてみやびたり、其のわざもまた美しかりき

●北海道土人救育會

同會は舊土人アイヌが物質的進歩の趨勢に驅られて漸次衰滅に就くの狀態あるを慨し是れを救育保護するの目的を以て朝野貴紳の同情と贊成を得て成立せるものにて會の主唱者小谷部全一郎氏は曾て米國に學び未開人敎育の事業に經驗あり、歸朝後アイヌの開發誘導を以て已れの任となし自ら進んで北海道へ移住し親しく學校を管理して敎育の實を擧げんと期し朝野貴紳に圖り救育の基本金を得てまづ事業の第一としてアイヌ部落近接の地を卜し此所に工藝、技術、農事に關する學校を起しアイヌをして就て學ぶに便せしむる事を謀れり是れ無智にして懶惰なる土人の智德を進め、等しく明治聖代の澤に浴せしむるの主旨なり、同會は特別會員、

維持會員、通常會員の三種を以て成り會頭に二條公爵評議員に大隈伯、片岡健吉、辻新次、松前子爵近衞公爵等あり

●北海道土人救育會慈善音樂會

別項の主意に由れる同會は去る十九、廿日の兩日上野音樂學校に於て催ふされたり、同會幹事坪井理學士開會の主旨を述べ、それより惠の露と題する同會の爲めに作られたる歌を管絃合奏もて演奏せられ次に三曲、能樂、狂言、長唄等前後二回各〻斯道の名手によりて奏せられたり、兩日共來會の貴婦人令孃紳士等無慮一千名、場内には坪井博士松前子爵母堂令夫人を始として今回の幹事たる佐藤博士夫人、千家男爵夫人、山脇夫人棚橋夫人等いづれも席場斡旋の勞を取られたり是等貴婦人達が平素會の爲めに同情を表し這般の慈善事業に盡力せらるゝの熱心其の同情の深きその品位の高雅なる眞に我國婦人社會の儀表といふべし

●早稻田大學開校式

同大學開校式は東京專門學校創立二十週年紀念會を兼て去十月十九日午後一時より擧行せられたり來賓一千餘名加ふるに各地より東上せる有志校友に教職員校友學生を合して式場に列なりし者實に六千名の多きに上れり先づ鳩山校長開會の辭を述べ高田學監の報告大隈伯の演說、校友總代山澤俊夫氏の祝詞あり菊池文相は旅行中に付代理を出し山本日銀總裁、加藤博士幷に伊藤侯の演說あり終つて大隈伯の庭園にて立食の饗應あり又た同夜は學生校友講師一團六隊となりて提灯行列を催し二重橋前に到り萬歲を唱へて散會せり其他當夜花火及び風船の打揚げあり附近各町は國旗提灯を揭げ出車踊屋臺を出して祝意を表したり此日朝來の好日和にて早稻田附近は未曾有の盛況なりきと

●西太后の筵宴

清國西太后が十月三日各國公使夫人及び參贊官夫人幷に譯官を招きて饗宴を張られたりしが順天時報に記せる當日の形況に曰く乘員肩輿に乘りて先づ萬壽寺に集合し小憇の後同じく官舫に坐し汽船に曳かせて萬壽山に至りしに米國公使先着し居りて代りて紹介を爲せり宮中にて承應する者は總管李蓮英外務侍郎那桐聯芳三氏にして客を引きて玉蘭殿に至り勤見の禮畢れり西太后は階を下り手を握り慰問して曰く爾好啊（御機嫌好うの意）と極めて親洽を形はせり寒溫畢りて即ち樂壽

殿の上に筵宴を張設す席を分ちて二と爲し一席は西太后、濟皇、皇后之に主たり一席は慶親王、王文韶及び那聯二氏之に主たり席間旅觥交錯して問答和親せしが宴畢りて主賓同じく舫を泛べて昆明池に游び龍王廟に小憩し復た茶菓を供したり太后は各公使夫人に御筆の山水繡本を賜ひ三時に至りて始めて退出せり云々以て西太后が中外を籠絡し人心を收攬するに巧なるの一斑を窺ひ知るに足るべし

●女學校巡視の一段落

文部視學官の女學校巡視は去月十八日を以て一先づ一段落を告げたり十月八日初て同巡視を開始したる以來日を重ぬる九日其間視察を遂げたる學校を擧ぐれば左の如しと

（十月八日）成女學校、實踐女學校（同九日）日本女學校、東京女學校、跡見女學校、淑德女學校（同十日）東京女學館、愛敬女學校、久岡女學校、三輪田女學校、女子裁縫學校（同十一日）女子大學校、正則女學校、與風女學校（同十三日）立教女學校、女子語學校、東京看護婦學校、東京英和女學校、香蘭女學校（同十四日）明治女學校、青山女學校（同十五日）頌榮女學校。普連士女學校、女子學院（同十六日）高等女子佛英和女學校、女子東京美術學校、靜修女學校（同十八日）渡邊裁縫女學校、女子美術學校、共立女子職業學校、女子高等技藝學院

東京市内に於ける女學校の數は實に幾十の多きに達し右に記載する所に止まらざれども今回の巡視は先づ此邊を以て一段落となし視察の結果に稽へて其取締方等に就き一應文部省に於ても講究する所ある筈なりといふ

●小說家ゾーラ氏の死因

ゾーラ氏死去の原因につき傳ふる所を記さんに氏夫婦は九月廿八日午後田舍の別莊より巴黎の伯律悉街なる自宅に歸りたる所氏は聊か冷氣を感じ居たれば下女に命じて寢室の煖爐に火を燒かしめたり其の時煖爐の通風不十分なりしが爲に火を燒くに困みたる由なるがゾーラ氏夫婦は夜十時頃共に寢室に入りたるまゝ翌朝九時半に至るも起き來らざれば下女共は室に至り戶を叩くに答なし怪んで早速警察署に訴へ出てたれば巡査來り戶を壞りて入らんとするに窒息せしめんばかりの惡臭室內より漏れ來れり入て見るにゾーラ氏は頭部と兩肩とを床上に橫たへ兩脚は寢床に掛けて死し居れり察するに氏は夜半眼覺め窒息に心づき床を出て窓を開かんとせしも既に氣を受けて起つこと能はず仆れて頭を打ち其儘そこに仆死したるならん夫人は寢床に在りし

も殆ど生氣なし早速醫師を呼んで手當を施せしもゾーラ氏は既に絶命し夫人は百方手を盡したる後其の日正午頃始めて蘇生したりとなり一世の文豪をして斯かる最期を遂げしめたること惜みても尚ほ餘りあり是を以ても注意すべきは寢室に於ける火氣なり大方の婦人達も是により戒むる所ありて可なり。

◎西班牙王と少女

南米アルゼンチンにセノリタ、アンナ、カムペロといふ美容麗顏の一少女あり此程サン、セパスチヤンにて西班牙の幼王アルフオンス陛下を見て非常に王を慕ひ參らせ如何にしても御傍を去りあへず戀々の情に堪へざるもの丶如し王は寧ろ少女の媚容を喜ばせ給ひしかども母后は只管に其なめげなるを怒り給ひ父のカムペロ氏を呼出して少女を引渡したりしといふさるにても差別なきは戀てふものの性なるかな

◎英國服裝夜會の一椿事

獨逸新聞の報ずる所に依れば現下倫敦の交際社會に於て支那公使が同市の服裝夜會に臨みし際起りし椿事を風說せり當夜一貴婦人は清國皇后の着玉ふ金襴もて仕立てたる美服を附けて夜會に現れ出でたるに支那公使は目敏く之を認め席に連らなりし高等官大臣に其出處を尋ね遂に貴婦人の親戚が北清戰役に與りしものなるを確めたり是に於て英國外務大臣は同婦人に向ひ退出を勸めしに彼一言の抵抗するなく直に會塲を退きたりと

◎新刊紹介

▲評釋女子文範　曾て家庭小說白薔薇をあらはして名を得たる鈴木秋子ぬしの新著にして、文材を直に德川時代國學者の隨筆ものに採り、評釋を下すこといと深切なるが上に、編を分つに春、夏、秋、冬、雜の五部類を以てしたれば、机上に備へて其折々の文詞を求むるにはこよなき良書といふべし。

▲女子普通作法書　女子として心得では協はぬ日常の行儀作法を平易の筆に說き明したる書なり、身邊の修め方より說き起して起居振舞、品物の進退、受渡し、訪問接待、手紙、贈物、饗應、儀式等の諸作法を一々繪畫を用ゐて叮嚀に說述し、加ふるに作法教授細目例をさへ添へあれば實習用、教授用共に有益の書といふべし。著者は木内たつの、谷川とくの兩女史にして後閑菊野刀自の校閲したるものなり。

女學世界第貳卷第十五號記事豫告

（十二月五日發行）

毎月一回五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）……金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二册 / 增刊四回……三、六、九、十一月價格同一）

郵税　一册　二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	四十三錢	三十五錢	三十錢
半頁卅二行	……	十三圓七十六錢	十一圓二十錢	九圓六十錢
一頁六十四行	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

明治卅五年十一月五日發行　第貳卷第十四號

編輯人　松原岩五郎
發行人　內山正如
印刷人　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

博文館雜誌發行

定價

雜誌	定價	郵稅	發行
太陽	一冊參拾錢	郵稅參錢	每月一回
少年世界	一冊拾錢	郵稅一錢五厘	每月一回
中學世界	一冊貳拾錢	郵稅貳錢	每月一回
女學世界	一冊貳拾錢	郵稅貳錢	每月一回
文藝倶樂部	一冊廿五錢	郵稅貳錢五厘	每月一回
太平洋	一冊六錢	郵稅五厘	每月曜日
圖書世界	一冊參錢	郵稅五厘	每月一回

拾壹月發兌表

太陽	第十四號	五日發行
中學世界	第十四號	十日發行
女學世界	第十四號	五日發行
文藝倶樂部	第十五號	一日發行
少年世界	第十五號	一日發行
圖書世界	第四號	廿五日發行
中學世界定期增刊 珠星璧月	第十五號	二十日發行
女學世界定期增刊 冬木立	第十五號	十五日發行
太平洋	第四十號	三日發行
	第四十一號	十日發行
	第四十二號	十七日發行
	第四十三號	廿四日發行

廣告料

雜誌		料金	字詰
太陽	一行一回	金四十五錢	五號活字十八字詰
少年世界	同	金四十錢	五號活字廿四字詰
中學世界	同	金三十錢	五號活字廿四字詰
文藝倶樂部	同	金四十錢	五號活字廿四字詰
女學世界	同	金三十錢	五號活字廿四字詰
太平洋	同	金四十錢	五號活字廿二字詰
圖書世界	同	金十五錢	五號活字廿四字詰

（後付の二）

發兌元　十月再版

版	書名	著者	冊數・體裁	正價	郵税
再版	通俗呉越漢楚軍談	博文館編輯局校訂	全壹冊 洋装上製	正價六十錢	郵税十六錢
四版	海底軍艦	押川春浪君譯述	全壹冊 紙皮小判	正價三十錢	郵税六錢
第十五版	源平盛衰記	博文館編輯局校訂	全壹冊 洋装上製	正價六十錢	郵税十六錢
第八版	累卵の東洋	大橋乙羽君著	全壹冊 洋装小判	正價十八錢	郵税四錢
再版	決志少年	櫻井鷗村君譯述	全壹冊 洋装並製	正價三十錢	郵税六錢
再版	漂流少年	櫻井鷗村君譯述	全壹冊 洋装並製	正價三十錢	郵税六錢
第十二版	維新三傑	川崎紫山君著	全壹冊 中判	正價十二錢	郵税四錢
第十版	寶の山	川上眉山君著	全壹冊 中判	正價十二錢	郵税四錢
第十四版	黄金丸	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價十二錢	郵税四錢
第五版	太閤秀吉	高橋太華君著	全壹冊 中判	正價十二錢	郵税四錢
第十一版	菅公	大和田建樹君著	全壹冊 中判	正價九錢	郵税四錢

圖書廣告　博文館

版	書名	著者	冊數・判	正價	郵税
第九版	四十七士	大和田建樹君著	全壹冊 中判	正價八錢	郵税四錢
第六版	平田篤胤	大和田建樹君著	全壹冊 中判	正價八錢	郵税四錢
第五版	七卿落	大和田建樹君著	全壹冊 中判	正價八錢	郵税四錢
第六版	城山	大和田建樹君著	全壹冊 中判	正價八錢	郵税四錢
第二十版	大江山	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價五錢	郵税二錢
第十四版	八頭の大蛇	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價五錢	郵税二錢
第十四版	浦島太郎	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價五錢	郵税二錢
第十版	猫の草紙	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價五錢	郵税二錢
第十版	玉取	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價六錢	郵税二錢
第十二版	八幡太郎	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價六錢	郵税二錢
第十版	姨捨山	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價六錢	郵税一錢

（後付の三）

發兌元　十月再版

版	書名	著者	體裁	正價	郵稅
第十一版	川中島	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價六錢	郵稅二錢
第八版	鬼童丸	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價六錢	郵稅二錢
第八版	熊本城	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價六錢	郵稅二錢
第八版	宇治川	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價六錢	郵稅二錢
第十七版	俵藤太	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價五錢	郵稅二錢
第十三版	兎と蛇	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價五錢	郵稅二錢
第十四版	一寸法師	巖谷小波君著	全壹冊 中判	正價五錢	郵稅二錢
第三版	世界格言大全	澁江保君著	全壹冊 洋裝小判	正價四十錢	郵稅四錢
第十二版	增補訂正 日本女禮式大全	坪谷善四郎君著	全壹冊 函入特製	正價壹圓	小包四百匁
第十二版	增補訂正 日本女禮式大全	坪谷善四郎君著	全壹冊 洋裝大判	正價七十錢	郵稅十六錢
第六版	學生訓	大町桂月君著	全壹冊 紙皮小判	正價二十錢	郵稅四錢

（後付の四）

圖書廣告

博文館

版	書名	著者	冊數・裝幀	正價	郵稅
第七版	明治書翰文大全	内山幻堂君著	全壹冊 洋裝並製	正價四拾五錢	郵稅十錢
第十五版	四書講義	内藤耻叟君著	下卷 洋裝並製	正價二十五錢	郵稅八錢
	平家物語	落合、小中村 萩野 先生著	全壹冊 洋裝並製	正價二十五錢	郵稅三錢
第七版	新撰小學女禮式	中島義弌君著	全壹冊 洋裝並製	正價二十五錢	郵稅六錢
第八版	圍碁入門	小林鍵太郎君編述	全壹冊 和裝大判	正價十五錢	郵稅二錢
第四版	圍碁定石	小林鍵太郎君編述	全壹冊 和裝大判	正價十五錢	郵稅二錢
再版	圍碁初步	小林鍵太郎君編述	全壹冊 和裝中判	正價十五錢	郵稅二錢
再版	圍碁布石法	小林鍵太郎君編述	全壹冊 和裝中判	正價十五錢	郵稅二錢
第十版	劍舞術教範	日比野正吉君著	全壹冊 洋裝中判	正價十八錢	郵稅四錢
第八版	畫法自在	野口小蘋女史著	全壹冊 洋裝並製	正價二十五錢	郵稅六錢
	濱松中納言物語	落合、小中村 萩野 先生著	全壹冊 洋裝並製	正價二十五錢	郵稅六錢

發兌元　十月再版

第十版 日本新地理
理學士佐藤傳藏君著
全壹冊 洋裝大判
特製五十錢 郵稅十錢
並製卅五錢 郵稅八錢

再版 ジャパニース、シーンス
東京高等商業學校教師ハドスワン氏著
全壹冊 洋裝並製
正價貳拾錢 郵稅貳錢

再版 イングリッシュ、シーンス
東京高等商業學校教師ハドスワン氏著
全壹冊 洋裝並製
正價貳拾錢 郵稅貳錢

第三版 幼年讀本 日本地理
巖谷小波君著
全壹冊 洋裝大判
正價十五錢 郵稅四錢

第廿九版 中等教育 日本歷史
文學博士萩野由之君著
上の巻 脊皮中判
正價五十五錢 郵稅八錢

第九版 校註 神皇正統記
大宮宗司君著
全壹冊 洋裝大判
正價廿五錢 郵稅六錢

第八版 通俗日本歷史
足立栗園君著
全壹冊 洋裝大判
正價廿五錢 郵稅八錢

第六版 東洋西洋 倫理學史
文學士木村鷹太郎君著
全壹冊 洋裝大判
特製五十錢 郵稅十錢
並製卅五錢 郵稅八錢

第十版 論理學
文學士蟹江義丸君著
全壹冊 洋裝大判
特製五十錢 郵稅十錢
並製卅五錢 郵稅八錢

第七版 韓非子講義
小宮山綏介君著
下の巻 洋裝中判
正價廿五錢 郵稅八錢

再版 加茂眞淵翁全集
佐々木信綱君校註
下の巻 洋裝中判
正價廿五錢 郵稅八錢

圖書廣告

博文館

版	書名	著者	冊數・體裁	正價・郵稅
第七版	肥料學	農學士 木下義直君著	全壹冊 洋裝大判	特製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢
第六版	初等 作物通論	農學博士稻垣乙丙君著	全壹冊 洋裝大判	正價五十錢 郵稅八錢
第五版	獸醫編	獸醫學士內村兵藏君著	全貳冊 洋裝大判	正價各十五錢 郵稅各六錢
第九版	味噌醬油編	農學士西村榮十郎君著	全壹冊 洋裝中判	正價十五錢 郵稅六錢
第四版	提要造林學	農學博士 本多靜六君著	全壹冊 洋裝大判	特製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢
第廿一版	農學入門	農學博士稻垣乙丙君著	全壹冊 洋裝大判	正價卅五錢 郵稅八錢
再版	農學大全	農學博士橫井時敬君著	全壹冊 脊皮大判	正價二圓五十錢 小包六百匁
再版	增訂補正 植物學汎論	理學士安田篤君著	全壹冊 脊皮大判	正價一圓五十錢 郵稅十六錢
第八版	中等教育 日本地圖	理學士佐藤傳藏君著	全壹冊 洋裝大判	正價四十五錢 郵稅八錢
再版	英文 極東の光	ハワードスワン氏著	全壹冊 洋裝上製	正價五十五錢 郵稅六錢
第三版	米國渡航案內	飯島榮太郎君著	全壹冊 紙皮中判	正價四十錢 郵稅六錢

(後付の七)

十月再版圖書

版	書名	著者	冊數・體裁	價格
第十三版	普通算術	片山清謙、三田暉信合著	全壹冊 洋裝中判	正價三十錢 郵稅六錢
第五版	寫眞と幻燈	藥學得業士 金澤巖君著	全壹冊 洋裝大判	正價廿五錢 郵稅六錢
第十版	秘術傳法	文學博士高山林次郎君著	全壹冊 洋裝大判	特製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢
第三版	新風船	石井研堂君著	全壹冊 洋裝大判	正價十錢 郵稅四錢
第四版	近世美學	文學博士高山林次郎君著	全壹冊 洋裝大判	特製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢
再版	新撰微分積分學	理學士松村定次郎君著	全壹冊 洋裝大判	特製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢
第四版	詠歌の栞	下田歌子女史著	全壹冊 和裝大判	正價卅五錢 郵稅八錢
第十三版	西國立志編	文學博士中村正直君著	全壹冊 洋裝中判	正價廿七錢 郵稅八錢
第九版	釋迦	文學博士高山林次郎君著	全壹冊 洋裝大判	正價十三錢 郵稅四錢
第三版	續法螺先生	巖谷小波君著	全壹冊 小中判	正價七錢 郵稅二錢
第十四版	帝國史畧	法學博士有賀長雄君著	全壹冊 洋裝上製	正價一圓三十五錢 小包四百匁

（後付の八）

笠原製本

女學世界
毎月壹回五日發行
第貳卷第拾四號
明治參拾參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可
明治三十五年十一月五日發行

東京秀英舍印刷

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑮
明治35年10月（第2巻第13号）、11月（第2巻第14号）

2006年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2961-8　C3321